

大禮記念

昭和漢文叢書

孝經新釋

文學博士 鹽谷溫著



孝經新釋目次

孝經新釋目次終

孝經新釋

文學博士　鹽谷溫　著

解題

【名義】支那の文字は元來象形といつて物象の形を模寫したものである。從つて綴音符と異つて、字共ものに意義を有つて居るのである。今試に孝といふ字を考へて見ると、老といふ字の省ける體と、子といふ字から成り立つて居る。卽ち字義から申せば、子が親を負ふ義で、子として父を敬し、母を愛し、眞心を以て兩親に事ふる道を孝といふのである。經とは常又は綱といふ意で、萬世不易の大綱をいふのである。卽ち聖人の書は天人の道、萬世に亙り易はらざる宇宙人間の大道を說いたものであるから、後世より尊んで經といふのである。五經といひ、十三經といふのがそれである。「孝經」も孔夫子が孝の大道を說かれたものであるから、之を經に列して「孝經」といふのである。

【作者】　孝經の作者については古來色々の說があつて一定して居らぬ。然し多くは孔夫子がその門人の曾子（曾參）の爲に孝道を說かれたものとして居る。これは曾參が多くの門人中に於て、特に孝を以て稱せられた故である。卽ち史記の仲尼弟子列傳に左の通り述べてある。

曾參ハ南武城ノ人。字ハ子輿、孔子ヨリ少キコト四十六歲ナリ。孔子オモヘラク能ク孝道ニ通ズト。故ニ之ニ業ヲ授ケ、孝經ヲ作ル。

「漢書藝文志」・「隋書經籍志」・「釋文敍錄」・「白虎通」等の書皆その通りで、「孝經注疏」の序にも

夫レ孝經ハ孔子ノ述作スル所ナリ。蓋シ曾子ハ七十弟子中ニ在リテ、孝行最モ著ハル。孔子乃チ假リニ曾子ヲ立テテ、益ヲ請ヒ問答スル人トナシ、以テ廣ク孝道ヲ明ニシ、既ニ之ヲ說ケル後、乃チ曾子ニ屬與ス。

といつて居る。又曾子の作とする說（古文孝經孔安國の序の如き）もあるが、「孝經」の首に「仲尼居シ曾子侍ス」といひ、經文中に自分のことを曾子といふのは、この說の疑はしき點である。されば宋の司馬光の作と傳へらるゝ「孝經指解」の序に、

孔子曾參ト孝ヲ論ズ。而シテ門人之ヲ書シ、之ヲ孝經トイフ。

と述べてあるが、頗る要を得たもので、その後この說に從ふものが多い。「四庫全書提要」に「七十子ノ徒ノ遺書」といへるも亦一の見方である。朱子の「孝經刊誤」に、後人の僞作であるといふ說は從ふことは出來ない。要之曾子の門人の編纂說が一番穩當である。作者が旣に一定しないのであるから、その製作の年代を知ることは出來ないけれども、魏の文侯に「孝經傳」があつたといふことであるから、周の末、卽ち春秋時代の終り頃に出來て、戰國時代の初頃には世に行はれて居たものであらう。

【傳來】「孝經」には「今文孝經」と「古文孝經」との別がある。文とは文字のことで、今文とは漢代の文字、古文とは周代の文字をいふのである。卽ち「孝經」は秦の始皇帝の時に、有名な焚書の厄に遭つて一時世に迹を絕つに至つたのであるが、河間の顏芝といふ人が私に之を藏し、漢になつてから芝の子貞がこれを河間の獻王に獻じたので始めて世に出で、文帝の時に大學の敎課に用ひられ、博士を置かれた。その書は當時通行の文字で書かれてあつた故に之を「今文孝經」といふのである。その後武帝の末に魯の共王(一に恭王に作る)がその宮を廣めんが爲に、孔子の舊宅を毀つた處、壁の中から「尙書」・「論語」・「孝經」等凡そ數十篇を得た。その書は皆蝌蚪の文字で書いてあつた故に之を

「古文孝經」といふのである。「今文」と「古文」とは多少經文に異同があるのみならず、章の別ち、順序も不同である。「今文孝經」は後に講ずる通り、十八章であるのに「古文孝經」は二十二章になつて居る。卽ち「今文」の「庶人章」を「古文」の方では分けて別に「孝平章」を立て、「聖治章」を「聖治」・「父母生績」・「孝優劣」の三章に分ち、外に「閨門章」があつて總て二十二章になつて居るのである。

その注解に關しては「今文孝經」には所謂鄭氏の注がある。或は大儒鄭玄であるといふ說もあるが、鄭玄の他書の注と合はぬといふので之を疑ふものが多い。故に鄭玄の注といはず鄭氏の注といふのである。その後諸家の注が踵を逐うて出たけれども、槪ね南北朝の戰亂に亡びてしまつた。「古文孝經」の方には、夙に孔安國の傳があつたといはれるが久しく顯はれず、梁の時に鄭注と並び行はれたけれども久しからずして亡びた。隋の時に王劭が之を京師の市に得て劉炫に送つたので劉炫は之を公にした。然し或は劉炫の僞作であるといふ說もある。是より孔傳と劉注が並び行はれた。唐になつて「今文」と「古文」との說が紛々として定らなかつた。玄宗皇帝は開元の七年に諸儒を集めて、「孔傳」と「鄭注」との是非を問うた處、劉知幾は「孔傳」を是とし、司馬貞は之を非とし、議論が容易

に決しなかつた。そこで帝自ら「今文」を主とし、汎く諸家の注解の長を採り、孔鄭二注を參酌して注を作り、元行沖に命じて之が疏を作らしめ、之を天下に頒たれた。是が有名な「御注孝經」である。時に開元十年であつた。天寶二年に至り帝は重ねて孝經に注し、三年天下に命じて家毎に孝經を藏せしめ、四年之を石に勒した。之を「石臺孝經」といふのである。余は嘗て長安に遊んだ時、そこの碑林で親しくこの石經を拜し、支那の道德の基礎がこゝに奠められた如くに感じ、帝の名教上に於ける功績の大なるを思ひ、敬虔の念に堪へなかつたのである。宋の眞宗の咸平中、邢昺等が勅を奉じて、「孝經正義」を作つた。これ亦「御注」を本とし、「元疏」に據り、旁々諸書を引用したのであつた。是れが即ち今日行はれて居る十三經注疏本である。今この新釋も注疏を底本としたのである。

【本朝に於ける孝經の傳來】 翻つて本朝に於ける孝經の傳來について見るに、古いことはいざ知らず晩くも聖德太子の頃には渡來して居つた樣である。その後は「大寶令」にも記載されて居る。孝謙天皇の天平寶字元年天下に詔して家毎に孝經一本を藏せしめられたといふことは極めて有名な話である。これは前に述べた唐の玄宗のことを學ばせられたことゝ思ふ。天寶三年（皇紀一四〇四）と天平寶字元年（一四一七）とはその差僅々十三年に過ぎない。當時は萬事唐を御手本とし、遣唐使や留學

生の往來が頻繁であり、天平勝寶四年には藤原清河・大伴古麿・吉備眞備等が唐に使し、同六年に古麿と眞備は先に歸朝した例もある位であるから、孝經家藏のことなど、極めて上代の盛事であるから、存外早く學ばれたのであらう。但し上代のことであるから、その實行の程度は明ではないが、全然之を史官の空文とするのは不當である。これは實に我が國體の淵源であるから、特に注意して置く次第である、降つて淳和天皇の天長十年には、始めて皇太子の讀書始に孝經を用ひられ、以後はそれが例となり、宮中の諸儀式にも本書が用ひられる樣になり、鎌倉時代武弁の世となつても將軍の讀書始には亦孝經を用ひられ、江戸時代にも大名の若君が漢籍の習ひ始めはやはり孝經を用ひ、民間に於ても先づ孝經から習ひ始めたものである。畏れ多い話であるが今日に於ても澄宮樣が落合侍從に就いて、親しく孝經を御習ひあそばされたことも、皇太后陛下の深き思召に出たのであると洩れ承るだに畏き極みである。何卒各小學校や各家庭に於ても、その難有き御趣旨を奉體して、孝經一本を子弟に持たして素讀を授けたいものである。國民道德を振興し、國體の精華を發揮する上にこれ程結構なことはあるまいと思ふ。

さて我が國には早くから所謂孔・鄭の二注が行はれて居たが、清和天皇の貞觀二年から玄宗の御注

が用ひらるゝに至つた。然るに後世新注の渡來と共に、支那の本土に於けるが如く、四書が盛に行はれて、孝經は漸く衰へた。然し先儒の孝經に關する著書は擧げて數ふべからざる程、多數に上つて居る次第であるから決して全く廢れた譯ではない。元來鄭注は我が國に刻本なく、孔傳は敕版以來刊行があつたけれども、享保中に大宰春臺が「古文孝經」を刊行するに及んで、始めて博く行はれる樣になつた。又世に所謂逍遙院本の「御注孝經」は開元本に據つたものであるといはれて居るが遽に信じ難い。そこで今回は比較的無難なる注疏本に據ることにしたのであるから、一般に通行して居る「古文孝經」とは相違して居る點が少くないのである。

明治天皇御製

國民はひとつ心にまもりけりとほつみおやの神の敎へを

たらちねの庭の敎へはせはけれと廣き世にたつもとゐとはなれ

ひとりたつ身になりぬともおほしたてし親の惠をわすれさらなむ

開宗明義章第一

叙説　「今文孝經」では、今篇を十八章に分ち、「古文孝經」では二十二章に分け、その各章に「開宗明義」とか、「天子」とか「諸侯」とか、種々の題名を附けてあるが、この分け方や、題名などは、元からあつたのではなく、後の學者が便宜上設けたものに過ぎぬ。そこでこの開宗といふのは、此の書の本旨を開き示すこと、明義とは孝道の大體の義理を顯はし明かすることで、孔子が孝道の大綱を開き示す爲に、曾子との問答によつて其の端緒を啓かれたのである。

仲尼居、曾子侍。子曰、先王有至德要道。以順天下、民用和睦、上下無怨。汝知之乎。曾子避席曰、參不敏、何足以知之。子曰、夫孝德之本也。敎之所由生也。復坐、吾語汝。身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。夫孝始於事親、中於事君、終於立身。大雅云、無念爾祖、聿脩厥德。

【訓讀】仲尼居し、曾子侍す。子曰く、「先王至德要道あり。以て天下を順へ、民用て和睦し、上下怨み無し。汝之を知れりや」。曾子席を避けて曰はく、「參不敏、何ぞ以て之を知るに足らん」。子曰はく、「夫れ孝は德の本なり、敎の由て生ずる所なり。復坐せよ、吾汝に語らん。身體髮膚、之を父母に受く、敢て毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯はすは、孝の終りなり。夫れ孝は親に事ふるに始まり、君に事ふるに中し、身を立つるに終る。大雅に云ふ、「爾の祖を念ふことなからんや。厥の德を聿べ脩む』と。

【通釋】孔夫子がお閑暇で家に居られた時、お弟子中の德行家として名高い曾子が、そのお側にかしこまつて坐つてゐた。やがて夫子は、個人的に敎育を施すによい機會とばかりに、曾子に對つて徐ろに口を開かれた。「古昔の立派な君主たちは、極めて優れた御德を身に備へ、最も肝要な道を始終履み行はせられて、常に實踐躬行によつて、天下の人々を敎へ導き給ひ、人民はそのお陰に依つて、互に和らぎ樂しみ、睦じくし合ふことが出來たので、上は天子諸侯より、下は一般の人民に至るまで、皆相敬し相愛して、各々その身分に安んじ、天命を樂んで、人を怨み己を喞つやうな者は少しも無かつたといふことであるが、一體さういふ泰平の象を現出した源をなすところの、至德要道とは、其

體的にいへばどんなものであるかを、お前は知つてゐるか」とお尋ねになつた。曾子は、さては又ありがたい御啓發を享けることができることゝ、直に立ち上り、今まで坐つてゐた席から少し退いて、「私、參の如き生來の愚鈍な者は、どうしてそのやうな高尙深遠な道德などを心得て居りませうか」と恭しく御答へ申し上げて、是非共御敎示を賜はりたいものでございますといふ熱心な態度を示した。夫子は、その謙虛な而かも摯實な態度が、益々お氣に召されたかのやうに、愈々一歩を進めて、詳細な御說明を試みられようとしたが、先づ第一に、この問題の根本義であるところの孝といふ字に就いて、特に說き起された。「およそこの孝といふものは、あらゆる德と稱せらるゝものゝ根本義をなすものであつて、前に述べた至德といふのも、畢竟は孝に外ならぬものである。故にこの至德の根本が確立して後に始めて人の履み行ふ道も生じて來て、從つてすべての敎化といふものも、是から起つて來るのである。卽ち至德といひ、要道といふも、皆この孝といふこと以外には無いのである。まあ原の席にお坐り、ゆつくりとくはしくお前に說きかせて上げようから。」と仰せられて、最初には、人の一生中を通じた、孝道の大綱を擧げられ、順次にその一部一部の細かい說明に入らせられるのであつた。先づ一ばん手近の所を捉へて語を續けられるやう、「さればといつて孝といふものは、必ずし

もそんな高尙深遠なものと思ひ込むには及ばないのである。現に吾々が此處に保持してゐるところの一身四體の大部から、毛髮皮膚の細部に至るまで、これ悉く父母から賜はり受けたものである。言ひ換へれば、父母の身體髮膚の延長を御あづかり申してゐるやうなものである。故に苟も人の子たる者は日常不斷、注意に注意を重ねて、之を完全に保護し維持して行く事を心掛けねばならぬ。かの飮食物等の不攝生に本づく疾病や、行動の無分別に因る毀損傷害の如きは、取りも直さず、わが親を病まし傷けるのと同樣であるから、最も深く警むべきことである。而して又實際に、この事がそのまま孝道の第一步に外ならぬのである。孝道は誠に廣大なものであるといふのも事實であるが、同時に又極めて卑近なものであるといふのも亦事實である。この卑近な第一步から踏み出して、社會に進み立ち、個人としても國民としても、圓滿完全な人格を備へ、業務に精勵して、寔に隣里鄕黨の模範と稱へらるゝのみならず、千載の後までもその名を青史に耀かすと同時に、自らその父母の名をも傳へ顯はすやうになれば、我が身と共に父母の名譽も此上無いことで、斯してこそ孝道も十分に成就したものといつて宜しいのである。更に之を取纏めて言つて見ると、孝道といふものは、先づ第一に家庭に在つて日夕兩親に忠實に奉養することから始まり、進んでは外に在つて天子の忠良なる臣民とし

て、善く身分に應じて職責を盡し、國家の進運に貢獻することに懸命となり、かくて忠孝兩全の道を遂げた申分の無い人物となつて、茲に完了を告げるものである。」と仰せられ、尙ほこの道理を一層深く理會させんが爲に、詩經の大雅の一節を引いて示された。その詩の意味は、「およそ健全なる良心を有つてゐる人々は、誰しも必ず我が家を興し傳へてくれた父祖の偉業を思慕しないものがあらうか。そして其の追憶の念を動機として、自分もまた之に對して愧ぢないやうに、家名を揚げねばならぬとの自覺を强め、やがて我が身の德を修め、人格をも高めて行くことゝなるのである。」といふので矢張り父祖に對する孝心が本となつて立派な人物となる所以を述べたものである。

【語釋】仲尼（孔子の字、孔は姓、子は男子の美稱、貴んで孔丘と申された。孔丘といはず、仲尼と字を以て申し上げたのは敬意を表する所以である。）　○居（閒居とか、燕居とかいふ意味の居で、別にこれといふ用事もなく、暇で家に居られることゝ）　○侍（尊者の側に坐してゐること。）　○子（前に述べた通り、男子の美稱であるが、師の稱に用ひられる。其處では卽ち孔子を指して申すのである。）　○曾子（曾は姓、子は同じく美稱。孔子の弟子で、名は參、字は子輿といひ、孔子と同じく魯の人。孔子より少きこと四十六歲。責任觀念に富み、よく親の道を傳へ、特に孝道を以て聞えた。）　○先王（古く昔の聖德ある君主をいふ。一般に帝堯、帝舜、殷の湯王、周の文王、武王などを指す。）　○至德要道（德は得で、道を行ひて之を自分の身に備へ得るといふ意味、道は路で人が處世上必ず踐み行はねばならぬ道理をいふ。至は至極、要は切要の意である。德又は道の中で、最も切要至極なるは卽ち孝道であるから、孝道のことを稱して至德要道といつたのである。）　○順（したがふ。なつき從はせること、訓ふる義である。）　○以（モツテと訓む、それによつて。）　○參（曾子の名、音シンと讀む。）　○不敏（不才に同じ、謙遜の詞。）　○復（再びもとの座へもどる。）　○毀傷（怪我あやまちなどして、そこなひ傷つけること。）　○大雅（詩經の中、國風・雅・頌の三類があり、其の中、又大雅、小雅の別がある。その大雅に屬する「文王」一篇、卽ち周の文王の德を頌へた詩の中に此語がある。）　○厥（其に同じ。）　○聿（發語。）　○脩（修に同じ。）

【餘論】「仲尼居し、曾子侍す。」は古文孝經には、「仲尼閒居し、曾子侍坐す」となつて居る。何でもないこの二語ではあるが、而も心から和らぎ樂しんでゐる大德の老先生と、其先生に心服し切つてゐる謹直の少年弟子がちやんとつゝましやかに其お側にかしこまつてゐる有樣とが、あり〳〵と目の前に浮んで來る。「曾子席を避けて曰く」、「復坐せよ、吾汝に語らん」等といふ言葉も、今日の情誼と思ひ比べて、譬へ樣もないなつかしさを覺えしめる。かくあつてこそ眞に徹底した教育が出來ると思ふ。

「身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり。身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯はすは孝の終なり。」の二句は、昔から廣く傳稱せられてゐる有名なものであるから、少しでも孝經に目を觸れた人は、せめてもの記念に、この兩語だけでも諳誦するやうにしたいものである。而して曾子は實にこの言を實行した人である。論語の「泰伯篇」に下の一章がある。「曾子疾あり、門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云ふ、戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄冰を履むが如しと。而今而後、吾免るゝを知るかな、小子」と。即ち曾子の死に臨んで、門人に命じて、その衾を開かせて己れの手足を示し、身體髮膚、之を父母より受けて、少しも毀傷しなかつたことを視しめたのである。これ實に曾子の大孝なる所以である。又禮記の「祭義篇」に樂正子

春といふ人が足を傷けて大に心配をしたといふ話が載せてあり、その言に、「吾これを曾子に聞き、曾子はこれを夫子に聞けり、曰く、天の生ずる所、地の養ふ所のものは、人より大なるはなし。父全うして之を生み、子全うして之を歸へすは孝といふべし。その體を虧かず、その身を辱めざるは全うすといふべしと」とある。その「全うして歸へす」とは卽ちこゝに謂ふ身體髮膚を毀傷せざる意である。余が先考青山先生は晩年にその讀書の廬を全歸庵と申され、曾て全歸庵の銘を作り、門人小野華陽の寫した畫像に左の通り題せられた。

全生全歸奉二父母之遺體一

啓手啓足仰二賢哲之餘風一

全生全歸は禮記の語を取り、啓手啓足は論語の語を取られたのであるが、何れも孝經の首に掲げられた孝道の第一義を述べられたのである。而して先君は不幸にして一昨年二月二日、七十一歲の天壽を全うして亡くなられたが、この語を實行して範を天下に示されたのであつた。抑〻馬革屍を裹むは丈夫の本懷であり、君國の爲に生を捐つることは、元より忠孝の兩全ではあるが、身を立て道を行ひ父祖の志を繼ぎ、父母の遺體を全うして終るといふことは、亦眞の大孝の人でなければ出來ないの

である。今この稿を草するに當り、幼少の折先君の膝下に侍して、親しく孝經の素讀を授けられたことを思ひ泛べ、音容髣髴として顔前に拜するがごとく、思慕の情誠に痛切である。匆々既に四十餘年、頭髪漸く疏に、堂構の業を墜さんことを懼れ、轉風樹の歎に堪へない。春秋に富み、元氣旺盛なる青年等は、よく恐懼戒愼して身體を大切にし、發憤勵精して學業を勉強し、有爲の材となつて國家に御奉公をして、立派に孝道の始終を成就する樣に心懸けねばならぬ。

天子章第二

叙説 前章に述べた所は一般論で、貴賤上下に共通して居るが、その迹がまだ十分明でない。そこで本章以下五章に、天子・諸侯・卿大夫・士・庶人に就て各々その孝道を分說してゐる。之を五等の孝と謂ふのである。而して天子は至尊の位に居り、臣民の上に立ち、衆庶の儀表であるから、最も大切である。故に先づ天子の孝を述べ、以下順に各階級の孝を說いたのである。

子曰、愛親者、不敢惡於人、敬親者、不敢慢於人。愛敬盡於事親、而德教加於百姓、刑於四海。蓋天子之孝也。甫刑云、一人有慶、兆民賴之。

【訓讀】子曰はく、「親を愛する者は敢て人を惡まず、親を敬する者は、敢て人を慢らず。愛敬親に事ふるに盡くして、德敎百姓に加はり、四海に刑す。蓋し天子の孝なり。甫刑に云ふ。『一人慶あれば、兆民之に賴る』」と。

【通釋】孔夫子は更に語を改めて申さるゝやう、「およそ人の子として、眞によく其兩親を愛し慈しむ心のある人ならば、必ず其心を他人の上にも推し及ぼして、之を愛し慈しみ、決して惡んだり嫌つたりなどするものではない。又眞心から其父母を敬ひ尊ぶ程の人ならば、きつと其情を推し擴めて、すべての人をも同樣に尊敬するもので、他人に對して驕慢の態度を示すとか、輕侮の念を起すとかいふのは、決して有り得ないものである。言ひ換へて見れば、他人に對して無暗に憎惡の情を起したり、輕蔑するやうな振舞をしたりする者は、畢竟自分の心が荒んでゐるか、塞がれてゐるかで、萬人通有であるべき父母敬愛の至情が發揮されない爲である。靜かに胸に手を當てゝ自分といふものが今日の存在を得るまでに被つた父母の大恩を思ひめぐらす時には、きつと之に對して、限りなき情愛と、切なる崇敬の念とが、泉の如くに湧き、潮の如くに寄せ來るに相違ない。そしてこの敬愛の心は、ただに我が兩親に對してだけでなく、やがて時を同じくし所を同じくして生れ來たつた、すべての人々

にも同樣に推し及ぼされるやうになるものである。まして萬民の上に位し給ふ天子樣の場合などは、その影響する所は實に莫大なものである。卽ち天子樣が御自身率先して、愛敬の誠を盡くして御兩親に御奉養なさると同樣に、その御表情を以て世の萬民に臨ませられたならば、所謂至德の敎たる孝道は、恰も風が草木を靡かす如く、忽ちの間に全國民の間に行き渡り、津々浦々に至るまで、齊しく之に刑つて、國を擧げて相愛相敬の美風薫る君子國となるであらう。惟ふに帝王の行ふべき道は、固より一つ二つではないけれども、この孝道といふことが最も肝要なものであることを忘れてはならぬ。かの書經の甫刑といふ篇にも『上御一人たる天子樣に於て、よろこぶべき立派な善き御行があらせられたならば、下國民全體が其お蔭を被つて、至極仕合せになるものだ。』といふ意味の言葉が載せられてあるが、全く今述べた通り、天子樣の御孝行が、何よりも大切であることを說いたものである。

語釋　子（前章の子と同じく、孔子を指す。特に語を改めて說き出だされたから復た子曰くと云ふのである。）　○愛（いとしく思ふ。かはゆがる。）　○惡（愛の反對、憎に同じ。この意味の場合には音ヲ也）　○敬（うやまふ、つつしむ。つつしみの敬に在るを恭、心に在るを敬といふ。）　○慢（あなどる、ほこる、敬の反對。）　○盡（十分に行きとどくこと。）　○德敎（卽至德要道、道德の敎。）　○百姓（多くの民草、すべての國民。）　○四海（四方の津々浦々の意で、天下又は全國のこと。）　○刑（のつとる。手本とする。）　○蓋（けだし、おしはかること。）　○天子（君主の敬稱、天の子、天の命を受けて一國の君たる人。）　○甫刑（一に呂刑といひ、書經の中の一つの篇の名。）　○一人（天子を稱す。）　○慶（よし、よろこぶ。善事、善行をいふ。）　○兆民（兆は億の十倍。天子の民を兆民といひ、諸侯の民を萬民といふ。いづれも大數を擧げて全國民を指す。億兆といふに同じ。）　○賴

（よろ、たよろ、よりたのむ。）

【餘論】天子は實に德敎の源流、下萬民の齊しく仰ぎ見る中心であるから、善惡の何れにも、下民に及ぼす影響の大なることは、石を池水に投じて一波動いて萬波の隨ふ如くである。故に天子にして、先王の至德要道である所の孝道を體得して、以て天下を順へ、萬民を導かれたならば、民は和睦し、上下怨なく、眞に太平を致すことが出來る。所謂垂拱して治め、無爲にして化すとは、このことである。若し然らずして、專ら法律を以て世を治めんとするならば、如何に嚴しくしても、法が愈々整つて世が愈々亂るゝばかりである。その本を正さずして末を禁じても到底治まるものではない。抑々天孫の降臨に際し、天照大神は神鏡を賜はりて此の鏡を視ること吾を視る如くせよと仰せられしかば、神武天皇の橿原宮に即位したまふや、畤を鳥見山に作りて皇祖天神を祭られ、崇神天皇に至り劍鏡を大和の笠縫邑に奉安して天照大神を祭りたまひ、垂仁天皇の時に伊勢の內宮に遷され、天下の太平を致されたのは、如實に「愛敬親に事ふるに盡くして、德敎百姓に加はり、四海に刑する」天子の孝を盡されたのである。かく列聖が孝道を以て天下を順へられた故に、國本が愈々鞏く、終に世界に無比なる國體を確立するに至つたのである。明治天皇が敎育勅語の中に、「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億

兆心ヲ一ニシテ、世々厥ノ美ヲ濟セルハ是レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」と宣はせられたるは誠に畏き極で、教育の大方針は實に忠と孝とに外ならないのである。然るに近來學校が愈〻盛になつて、人情風俗が愈〻衰ふる觀があるは何故ぞ、是れ實に教育の局に當るものがこの教育の大方針を誤れる爲ではあるまいか。行き詰つた歐米の物質文明の弊を救ふには、優秀なる東洋の精神文化を以てするに如くはない。吾人は宜しく歷代の聖天子が奉じて以て治國の要道となし給ひたる孝道を振興し、國體の精華を發揚して、人類の幸福、世界の平和の爲に盡さねばならぬ。是れ實に我が大和民族の尊き使命である。

諸侯章第三

敍說 この章は諸侯の孝道に就いて述べられたものである。諸侯とは恰も我が江戶幕府時代の大名の如きものである。支那の上代にも封建制度が行はれ、周の時には公・侯・伯・子・男といふ五等の爵が設けられ、諸侯には一定の領土を賜はり、其領內の人民を支配する權利を與へられた。其所領の廣さは公・侯の大國で方百里、伯爵の中國で方七十里、子男の小國は方五十里、五十里未滿のものは附庸

としてあつたのである。當時の一里は今の何程であるかは明でないが、故那珂博士の支那通史に據れば百里は僅に我十里内外に過ぎないといふ事であるから、方百里の大國と雖どもさして廣大な土地ではない。ざつと我が十萬石の大名といふ位のものであらうか。而して其領内から兵車百乘を出だすに過ぎない。然るに後世は王權が衰へ、諸侯の間に大小併併が行はれ、兵車千乘を出だす樣な大國が出來て、大夫でさへ百乘の家と稱するに至つたのである。因に本章の首には「子曰」の二字はないが「天子章」より以下「庶人章」まで通じて孔子の語である。

在上不驕、高而不危。制節謹度、滿而不溢。高而不危、所以長守貴也。滿而不溢、所以長守富也。富貴不離其身、然後能保其社稷、而和其民人。蓋諸侯之孝也。詩曰、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷。

釋　上に在りて驕らざれば、高くして危からず。節を制し度を謹めば、滿ちて溢れず。高くして危からざるは長く貴を守る所以なり。滿ちて溢れざるは、長く富を守る所以なり。富貴其の身を離れず、然る後、能く其の社稷を保ちて其の民人を和す。蓋し諸侯の孝なり。詩に曰く、『戰戰兢兢とし

て、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し』と。

通釋 すべて高い處に在るものは、注意をしてゐないと、すぐに墜ちかゝる樣になるのが自然の勢である。又、諺にも「滿つれば虧ける」とある通り、物が一杯になると、早くも一方からこぼれ出す樣になるものである。そしてこの事は、唯物質上に於ける法理法則だけではなくて、一般に人倫上の諸問題にも、其のまゝ適用することが出來るのである。天子は先づ別として、之に次いで高い位、貴い身分に居るのは、言ふまでもなく諸大名である。この普通人民よりも遥かに高い地位に居る諸大名が、若しも其の高い地位を鼻にかけて氣を緩め、勝手我儘ばかり振舞はうものなら、きつと其の位から墜ちて、大きな禍を招くことは必定であらう。同樣に其の所有する財産が、富み且つ豐かであるのをよい事にして、むやみに無益の事どもに、浪費してしまへば、何時の間にか窮しく貧しくなつて、取り返しのつかぬ不幸に陷るであらう。けれどもいかに位が高くとも、ひたすらに我が身の行ひを愼み、恭敬謙遜の態度を持ち續けて行くならば、いつまでも安全に其の地位を保つてゐることが出來る。又どんなに身代が澤山あつても、之に氣を許すことなく、日常の生活萬端の上に、程合を守つて過分を避け、收支の途を明かにして兩者の調節を計る。卽ち質實を主として放漫を戒めて居りさへす

れば、みだりにこぼれ出てしまふ心配は決して無い筈である。人として一度び高貴な地位を占め、富裕な財産を得た以上は、なるべく長い間、かなふことならば永久にでも、其の地位其の財産を維持して行きたいのは、申す迄もない事であるから、諸大名の如く、現實に此の兩者を贏ち得てゐる人々はどんなにかこの願望に燃えてゐることであらうが、この願望を達成させる爲には、是非とも上述の原則を辨へて、堅く實行するより外に方法はないのである。若しも此の理を十分に心得、嚴重に履行して、高い地位に居り、滿ちた財産を有つてゐても、決して墜ちたりこぼれたりする懸念が無いやうになれば、やがて其の富貴が、ぴつたりと我が身にくつついて、いつまでも離れないやうになるのである。そして此の域に達すればもう安全なもので、ひとり其の地位財産を長く維持して行くのみならず、其の所領する國土をも永久に保有して滅亡等の心配もなく、國民の心情をも和らげ樂ませて、落ち着いて各自の業務に勉勵させることも出來るので、隨て國運は益々隆盛になるのである。斯うなれば、一方では、我が先祖たちが遺された功績の上にも、一段と光を添へることになり、一方では子孫後生の爲に最大の福祿を與へることになつて、大名たる者の孝道は先づ以て、申し分が無いといつてよい。詩經の中に、愼み深い人のことを形容して、「戰戰兢兢として、いかにも怖さうあぶな相にして

ゐる風は、恰も其の身が深い淵の縁に立つて居るか、又は薄い氷の上をでも渡り歩いてゐるかのやうに見える」と言つてあるが、萬民の上に立ち、廣い國土を有つてゐる者の態度こそ、常にかういふ心持を失はずにゐて欲しいものである。

語釋　上（一國民の上をいふ。）　○驕（おごり高ぶつて、他の人に對して無禮のふるまひをすること。）　○危（今にも墜ちさうで、不安心なこと。）　○制節（制はほど、程度の意。節はもと竹の節といふ字で竹節が丁度良い所々で堅く引き締つてゐるところから、物事のきまりをととのへる、しまりをよくするといふ意味に用ひる。節ちここに節制といふのは日常の費用をつとめて儉約することである。）　○謹度（度はどあひ、程合ひ、謹は愼むに同じ。日常の行に注意して、先賢が遺し示したノリに遵ひ守ること。）　○滿（水が器に一ぱいになること。ここでは財物が豐富に具つてゐること。）　○溢（こぼれ出ること。分に過ぎること。）　○所以（「ゆゑん」と訓むのは、「ゆゑ」の音便であるから、下の方から「何何するゆゑんなり」と讀むかはりに、「ゆゑ」に何何なりと讀んでよい。）　○貴（位の高いことをいふ。ここでは諸侯の位。）　○富（財の十分なことをいふ。ここでは諸侯一國の富をさす。）　○社稷（社は土地を主る神、稷は五穀を主る神。昔の諸侯が、天子から國土を賜はる場合には、必ず此の二つの神を國中に祀つて、その國民の生活が豐かになるやうにと祈つた。若しも社稷が無ければ、國家を成さないものとした。故に社稷をば、直に國家の異稱のやうに用ひるのである。）　○民人（一般の國民の意に用ふ。）　○詩（詩經の小雅の小旻といふ篇中に在る句を引く。）　○戰戰（恐れをののくこと、つつしみおそれる意。）　○兢兢（注意に注意を重ねてゐる有樣。）

餘論　此の章は、前の天子章に次いで、諸侯の孝に就て述べられたものであるが、決して支那の當時の諸侯といふ特殊階級の者にだけ限らるべきではなくして、日本の現在の何人もが、心から傾聽し實踐すべき金玉の名言であることは、他の各章の場合と同樣である、殊に章末に引いてある此の詩は、曾子が平素の修養の上に、最も尙んでゐたもので、同じ言葉が、論語の中にも載せられてある。後世

になつては、特に此の詩を傳孝心法と稱して、尊重するやうになつた。

卿大夫章第四

【叙説】この章は卿・大夫の孝道に就いて述べられたものである。卿・大夫は諸侯に次ぐ尊位である。蓋し王に三公・九卿及び大夫・士があり、諸侯にも亦卿・大夫・士があつた。但し公・侯爵にのみ卿があつて、伯・子・男には卿はなかつたのである。所謂王畿千里は王宮の采邑に充てられ、王の公・卿は地を受くること公・侯に視ひ、大夫は伯に視ひ、元士（上士）は子・男に視へられた故に、畿内諸侯とも稱せられた。されば王の卿・大夫の諸侯に於けるは、恰も我が舊幕時代の公卿と大名との如くである。

非先王之法服、不敢服。非先王之法言、不敢道。非先王之德行、不敢行。是故非法不言。非道不行。口無擇言、身無擇行。言滿天下無口過、行滿天下無怨惡。三者備矣、然後能守其宗廟。蓋卿大夫之孝也。詩云、夙夜匪懈、以事一人。

口譯 先王の法服に非ざれば敢て服せず。先王の法言に非ざれば敢て道はず。先王の徳行に非ざれば敢て行はず。是の故に法に非ざれば言はず。道に非ざれば行はず。口に擇言無く、身に擇行無し。言天下に滿ちて口過なく、行天下に滿ちて怨惡無し。三の者備はり、然る後能く其の宗廟を守る。蓋し卿大夫の孝なり。詩に云ふ『夙夜懈らず、以て一人に事ふ』と。

通釋 衣服は、人の肉體的生活即ち保健上になくてはならぬものであるが、同時に、人の精神的生活即ち禮儀上にも缺くべからざるものである。故に古往の聖賢たちは、此の事に關しても亦た甚深な注意を用ひられ、簡易にして品位あり、質實にして少費で足りる服裝を、それ〲に作り示されたのであるが、別して一國の大臣とか家老とかいふ役目の人々の上には、その身分と職責とに最もふさはしい一定の服制を定め遺して置かれてある。即ちそれは衣服着用の二大目的に最もよく適つたものであるから、後世その地位に立つ大臣家老たちは、此の先代の聖天子が制定せられた禮儀に合ふ服裝でなければ、濫りに着用しないやうに心懸くべきである。而して先づ外觀の服裝が、禮法に適つたものになつたならば、同時にその言葉遣ひの上にも、最大の注意を拂つて、同樣に先代の聖天子が示し置かれた、禮法によく適ふ言葉でなくては、むやみに口に上せないやうに努め、更に進んで、口

常の行爲に就ても、これ又先代の聖天子が定められた、禮法に適つた有德の行爲でなければ、容易には行はないやうに愼まねばならぬ。然るに以上三者の中では、服裝のことが一番目につき易いのであるが、大切の點からいへば、寧ろ言葉と行爲の方が重いのであるから、その地位に立つ人々は、彌が上にも愼んで、禮法に戻る妄言は決してわが口には上せぬやうにし、道德に背く非行は斷じてわが身に行はぬといふふうにしなければならない。さうすれば、その人の言ふ所は總べて世人を益する善言であつて、擇び分けて取り棄てねばならぬやうな冗言は少しも無いことになり、其人の行ふ所は悉く天下を導く規範であつて、擇び分けて取り消さねばならぬやうな非行は一つも無くなる。さてさうなつて來れば、その人は取りも直さず、その禮法を制定した先代の聖天子そのものに、一歩一歩近づいて來るのであるから、いかに多くの言葉を費しても、卽ち天下の隅々までも行き亙る程に多く語つても、それが悉く天下を裨益するものであつて、固より言ひ過なひなどのあるべき筈が無い。同樣にどんなに樣々の事を實行しても、卽ち國家の到る所に普く影響するやうな大きい仕事をしても、常に萬人から喜ばれ尊ばれこそすれ、怨まれたり、憎まれたりするやうなことは夢にも無い筈である。故に人が世に處して行く上には、この言と行とが最も大切であることは右の通りであるが、而かも

人と人とが最初に會つた時の感じ、いはゆる第一印象は、對手の人の容色態度に由つて左右することが、甚だ大きいから、服裝に對する注意のゆるがせに出來ないことは、殆どこの二者に劣らぬことになる。況してや上には天子樣や諸侯を戴いて、その尊貴の側近く奉仕する機會が多く、下には全國の國民が、皆絶えず目を見張つてゐる、即ち萬人仰視の焦點に當る地位に居る人にあつては猶更のことで、是非ともこの服と言と行との三つを、十分にその身に備へて居なくてはならぬ。十分にこの三つが備つて、闕けるところが無いやうになつた上で、始めて上下全般の人々から、天晴一國の大臣だ家老だと認められ慕はれて、多年に亙り、或は終身、更に世襲と、其の地位を保つことが出來て、自分をして今日あらしめてくれた祖先の身分や聲望を墜すこともなく、又その精靈には、十分に手厚い祭祀をも營み續けて行けるのである。惟ふに大臣や家老たる人人の孝道は、此所に到つて全きものといはねばならぬ。詩經の大雅に屬する詩の一節に、「朝は早くから起き出で、夜は夜半に到るまで休まず、終日寸分の怠りもなく、全心全力を盡して天子樣に御奉公申し上げる」といふ意味の句があるが誠に一國の國運をその兩肩に擔ふ卿大夫たるものは、宜しくかくあるべきで、是を爲すには、前述の服と言と行との三者を愼むのが唯一の途である。右は主として天子の卿大夫に就いて述べたのであ

るが、固より諸侯の卿大夫にも通ずること勿論である。

語釋 法服（法とは禮法、即ち禮儀作法で、服はきものである、故に法服とは、よく禮法に適つた服裝。）○不二敢服一（この服は動詞で、着る、身につける。）○法言（禮法に適つた言葉。）○道（いふ、言ふに同じ。）○德行（道德に合ふ行爲。）○無二擇言一（擇はよりわける、擇言は拾ひ出すべき言葉。全部が法言であるから、その中から惡言詭言などと拾ひ出すものがない。）○口過（口舌による過失、言ひそこなひ。筆禍などと考へ合せて見るべし。）○怨惡（人からうらまれ憎まれること。）○三者（上述の法服、法言、德行の三つ。）○宗廟（祖先のおたまや。宗はたふとぶこと、廟は貌で、祖先の容貌が髣髴とする意。祭祀の際に髣髴するから、その神靈を安置して之を祭る。支那の古い制度では、天子は七廟、諸侯は五廟、大夫は三廟を設けることになつてゐて、一番の先祖と、餘に現主に一ばん近いものから溯つてその數づつ取るのである。）○卿大夫（卿と大夫とは尊卑の別はあるが、共に支那古代の官名で、王侯を扶けて國の政治を行ふもの、即ち、朝廷ならば大臣、諸侯では家老といふところである。兩者に於ては勿論卿が上位で大夫が之に次ぐものであるが、其職責は殆んど同じく、或は上大夫のことを卿といつたこともあるから、通例卿大夫と併稱するのである。）○詩（詩經の大雅の部、烝民の篇で、周の宣王を補佐した賢宰相仲山甫の事蹟を述べた長い詩の中の二句を引いたもの。）○匪（あらじ、非に同じ。）○夙夜（夙はつとに又はあしたと同じ、早朝の意、夜はよなか。夙夜で朝早く起き、夜遅く寢ること。）○懈（おこたる、怠に同じ。）○一人（天子をいふ。從來天子の場合には特に一ジンと讀みならはした例である。）

餘說 特に卿大夫たるものゝ孝道に就て述べられたのであるが、之を直にお互ひの身にとつて反省し深思すべき好文字たることは例の通りである。決して當時の卿大夫といふ特種の階級の人々に限られたことではないのである。而してその法言に非ればば言はず、德行に非れば行はざることの學ぶべきは申すまでもないことであるが、法服に非れば服せずといふ語も、大に味ふべきことである。凡そ人が衣服を着用するのには、前にも述べた通り二つの主なる目的がある。一つは體溫を保ち、寒氣を防

ぐ爲で、他は社交的生活を營む上から禮儀を守る爲である。若しも純然たる實用上の立場からして前者だけに限るならば、別に問題も無いが、苟くも社會的生存を遂げて行かうとする者には、どうしても後者を無視する譯にはゆかぬ。否寧ろ大に之を尊重し注意する必要がある。故にお互ひの個人的生活に於ても、なるべく時勢に應じ、習俗に順ふやうな服裝をして、かの徒に奇を衒ひ陋に陷るやうなことがあつてはならぬが、特に尊貴の人に接し、多數の者に交はる場合に一層の注意を要する。古來、官吏や軍人や學生等には、おの〱制服の定めがあるのも、かういふ點に因るもので、これらの制服は、第一に品位を保ち、第二に衛生に注意し、第三に質素を旨とし、最も適切なるものを擇んだものであるから、之が適用を受くべき人々は、最も嚴肅に服從し着用すべきである。而して服裝に關して切に戒むべきことは、質實と粗野、整齊と華侈との混同である。近來の書生中には兎角禮儀を輕んじ、服裝に注意せざるもの多きは頗る遺憾である。禮は固より心に重を置くべきであるが、決して外貌を輕んじてはならない。威儀を正すことは、やがて心を正うする所以である。古の教育は貌を以て人を導くのであるから、最も儀容に注意したのである。今日に於ても、古典的な英國の教育に於てはさすがに禮儀を重じて居る。故に英國紳士は一見何となく氣品の高きを感ずる。到底黄金萬能

米國成金輩の及ぶ所ではない。人の修養を貴ぶは實にこゝに在る。故に學生は最も服裝に注意し、常に制服制帽を用ひ、和服の時は必ず袴を着け、威儀を正すべきである。然る時は自ら心が緊り、言語動作をも愼む樣になる。是が修養上最も大切なことであるから、御互に注意したきものである。

士章第五

【敍說】前章に引き續いて、五等の項の第四、即ち士の階級に屬する人々の孝道を說き示されたものである。士といふ字には時代により、色々の意味が有るけれども、こゝでは無論官吏を指してゐる。支那では卿大夫の次に位するものをすべて士と稱するので、之を今日の我が國で云ふならば、卿・大夫は親任官・勅任官にあたり、士は奏任以下の官吏とでもいふべきであらう。

資於事父以事母而愛同。資於事父以事君而敬同。故母取其愛、而君取其敬。兼之者父也。故以孝事君則忠。以敬事長則順。忠順不失、以事其上、然後能保其祿位、而守其祭祀。蓋士之孝也。詩云夙興夜寐、無忝爾所生。

訓讀　父に事ふるに資りて以て母に事へて、愛同じ、父に事ふるに資りて以て君に事へて、敬同じ。故に母には其の愛を取りて、君には其の敬を取る、之を兼ぬるものは父なり。故に孝を以て君に事ふれば、則ち忠、敬を以て長に事ふれば、則ち順、忠順失はず、以て其の上に事へ、然る後、能く其の祿位を保ちて、其の祭祀を守る。蓋し士の孝なり。詩に云ふ『夙に興き、夜に寐ね、爾の所生を忝しむること無かれ』と。

通釋　およそ心すなほに生ひ立つた人々には、殆んど本能的に、その父に對して愛と敬との眞心をつくして奉仕するはたらきが有るものであるが、その父に對する愛の道を取り用ひて、之を推し及ぼして母に奉仕したならば、その母を愛することは、丁度父を愛すると同様に、至純至情なものとなるであらう。母にも敬意を捧ぐべきことは勿論であるが、母子の間に於ては、特別に慈愛溫情といふものが主となるので、自ら嚴肅な義理を尙ぶ父子の間の關係とは、相違する點があるのである。又父に對する敬の道を取り用ひて、之を推し及ぼして君に奉仕したならば、其の君を敬することは、丁度父を敬すると同様に、至誠至道なものとなるであらう。君にも愛慕の情を以て對すべきことは勿論であるが、君臣の間に於ては、恩愛の情にも勝つて、義理の辨別が明らかでなければならぬものであるか

ら、骨肉の情誼の伴ふ父子の間の關係とは、全然同様であり得ない。故に母に事へるには、特にその愛情の方面を擇び取り、君に事へるには、特にその敬愼の態度に留意するならば、母にも君にもおのおの宜しきに適つて、君の忠臣、母の孝子となることが出來るであらう。而してこの母に對する愛慕の情と、君に對する敬虔の念とを、偏頗輕重なく、同時に捧げて事ふべきものは即ち父である。故に父に對する孝といふものは、凡ての德行の基礎となるべきものであつて、斯の孝さへ完全に出來れば誰に事へるにしても、決して難い事はないのである。たとへば、父に事へる孝を體得して、之に加ふるに愛慕の情誼を強めて事へれば、母に對して申分のない孝となり、又之に反し他方、敬虔の義理を強めて事へれば、即ち君に對して立派な忠義といふことになる。故に或は忠といひ、或は孝といふのも、唯その君に對すると、父母に對するとの場合によりて、敬と愛との分量に多少の輕重があるだけで、成分の本質に相違がある譯ではないのである。忠孝一本といふ言葉の有るのも、極めて當然な次第である。さてこの忠と孝との主要成分の一たる敬愼の態度を以て、すべてのわが長上者に事へるならば、その外形は極めて從順であり、內心は至つて安寧で、苟も忤ひ悶えるやうの事はない。而してこの己のまごころを盡す忠と、飽くまで信頼して從ふ順との二者を、固く把り守つて失ふ事なく、

主君又は他の長上者に事へたならば、獨りわが身に大過なきに庶幾いのみならず、その至誠に本づく忠順は、必ずや主君又は他の長上者の感應するところとなつて、益〻信任を厚うし、祖先より傳へられた俸祿や位階を、いつまでも保持することが出來、また我が積善の餘慶によつて、子々孫々までが無事安穩な生活を送り得て、永く祖先の諸靈位のお祭りも營み續けて行けるであらう。かくてこそ士たるものの孝道は完うせられたといふことが出來るのである。詩經に載せられてある詩の一句に人の子たる者は、朝は勉めて早く起き、夜はなるべく遲く寢るやうにして各自の業務に精勵し、君長の信任に背くことなく、以て我が身を生んでくれた親の名譽を汚さないやうにしなければならないといふ意味を述べてあるが、この句などに就いて見ても、君長に純忠を致すことによつて、やがてわが父母にも孝行を遂げる事になり、又わが父母に最善の孝行を致すことがとりもなほさず君長に精忠を盡すことにもなる　畢竟忠孝一本の大道を、切實に說示されてゐるものに外ならぬのである。

【語釋】資（トルと訓む。取り用ひること。）○事（つかへる、心をつくして君父に奉仕するをいふ。）○愛（いつくしむ、したしむ、かはゆがる。）○敬（うやまふ、つつしむ、我が心につつしみ、他をうやまふ。）○忠（まこと、まごころ、己のまごころを盡すこと。君に仕へて二心なきをいふ。）○長（長上、長者の義で、目上としかさの人。）○順（したがふ、つきしたがふ、やすんじしたがふ。）○祿（官吏の俸給、扶持。）○位（身分、位階。）○祭祀（祖先の靈魂を祀り守ること。）○詩（詩經の小雅の小宛といふ篇にある句。）○夙。夜（卿大夫章第四に述べてある。）○爾（ナンヂ、汝に同じ。）○所生（自分を生んでくれた人、父母のこと）

○忝（はづかしむ、けがす、辱に同じ。）○於。而（共に助字であつて、讀まなくてもよい、於はニに當り、而はテに當る。）

【餘論】叙說に一言したやうに、本章は、支那に於ける當時周代の一般官吏たる人々の踐み行ふべき孝道を述べたものであるが、必ずしも官吏には限らぬ。一般にも頗る適切な孝道たるを失はぬ。抑〻士といふ詞の解釋は時代によつて異り、王朝の王官、武家の武士にあたり、その詞の内容如何によりてその時代の世相を知る事が出來る。まづ今日の我が國でいへば、一般官吏の外、教養ある人士とか知識階級の人々とかいふ意味に解するのが極めて妥當と思はれる。從つて既述の諸侯や卿大夫に比べて、一層吾人の觀念にしつくり合ふのは當然といはねばならぬ。殊に忠孝一本といふ事に至つては、今日我が國の國民道德の最も重要なる特色の一つとして、盛に力說せられてゐる問題であるから、深甚なる注意を拂つて、反復熟慮するところが無くてはならぬ。吉田松陰の士規七則中の一則に、

凡ソ皇國ニ生レテハ宜シク吾ガ宇内ニ尊キ所以ヲ知ルベシ。蓋シ皇朝ハ萬葉一統ニシテ邦國ノ士夫世〻祿位ヲ襲ギ、人君ハ民ヲ養ヒテ以テ祖業ヲ續ギタマヒ、臣民ハ君ニ忠ニシテ以テ父ノ志ヲ繼グ。君臣一體、忠孝一致ハ、唯吾ガ國ヲ然リトナスノミ。

と說いてある通り、君臣一體、忠孝一致は實に我が國體の精華である。我國に於ては、皇室は畏くも百姓の總本家にあたらせらるゝのである。故に忠孝一本と申しても、「孝を以て君に事ふれば則ち忠、忠を以て父に事ふれば則ち孝」といふ樣な二次的のものでなく、直接である。卽ち「君に忠なる事が卽孝、父に孝なる事が卽忠となるのである。君臣の關係は大なる意味の父子の關係に外ならない。之を松陰が說明して君臣一體、忠孝一致と申したのである。每々申す通り我が國は宇內に冠絕せる難有き國體を有つて居るのであるから、國民たるものは深く國家の成立を考へ、外來の過激思想などに惑ふことなく、肝腎な道德の大本を充分よく明に心得て居らねばならぬ。

庶人章第六

叙說　いよ〳〵五等の項の第五、庶人の孝を說き示されたものである。庶人とは卽ちもろ〳〵の民で、農、工、商の總稱、一般人民である。階級の上から見れば、いはゆる第五階級で、最下級に屬するものであるが、數に於ては實に最大を占むるものである。從て此の章に於て直接啓發を受ける者が最も多い譯である。この庶民と同じ內容を有つ語に百姓といふのがある。而してこの百姓、一般人民

の中では、農を生業と爲す者が最も多數なところから、今日では農業者だけが、百姓といふ名稱を獨占してゐるやうにも見える。本章に於ても、農民を主として述べてゐるのは、かういふ關係に因るものであるが、併し本來から言へば、工業者も商人も、すべて百姓の中に加はるべきもので、隨て、本章はこの廣義の百姓に屬する。すべての人々が、おの〳〵我が身に反省し適用して、遺憾なきやう心懸くべきである。

用天之道、分地之利、謹身節用、以養父母。此庶人之孝也。故自天子至於庶人、孝無終始、而患不及者、未之有也。

【訓讀】天の道を用ひ、地の利を分ち、身を謹み、用を節して、以て父母を養ふ。此れ庶人の孝なり。故に天子より庶人に至るまで、孝に終始なくして、患及ばざる者は、未だこれ有らざるなり。」

【通釋】これまでに述べた天子・諸侯・及び卿大夫・士が、直接の相手として、日夜心を用ふべきものは、先づその下民庶人、並に上長君主であつて、いづれも人類に屬するものであつたが、今度此所に述べる庶人、卽ち一般國民の中でも、最も大部を占める農民になると、頗る趣きを異にして、その

主なる對象は、天地の自然であり、四時の運行である。故にその身農事の勞作に從事するものは、言ふまでも無いことではあるが、春は萬物を發生せしめ夏は成長せしめ、秋は結實せしむる所の季節と相俟て、春には耕作播種し、夏には草を除き肥料を施し、秋には收穫整理、冬になれば又來年の準備といふ風に、間斷なく意を配つて、決して時令を失ふことのないやうにし、同時に又一方に於ては、土質の硬軟、地味の肥瘠、さては高低、乾濕等の特質を心得て、或は五穀を、或は桑麻を、或は樹木を、或は牧畜をと各〻その栽培、養殖の宜しきに適ふやうに工夫を凝らさなければならぬ。斯くの如くにして天の時に違ふことなく、地の利を失ふことが無ければ、年と共に衣食足つて生計自ら裕福となるであらう。此の時に當つて、一層我が身の分限を謹み守り、放縱を戒めて禍患に遠ざかり、物資を節約して冗費を省き、以て我が父母になるべく暖衣を進め、甘味を供して奉養を怠らぬやうにし、父母の心身をして常に安穩快樂に保たしめるやうにして上げるのが、即ち普通の人民たるものゝ當然爲すべき孝道である。

前の諸章に於て、天子より士に至るまでの孝道を述べられた時には、必ず蓋し何々の孝なりと、多少推量の口調を用ひられてゐたが、本章では明かに此れ庶人の孝なりと明言してあるのは、士以上の

孝は、ただよくその親を奉養するのみでなく、或は身を立て名を揚げ、或はその一家一國を保持して行くといふやうな、甚だ廣大な範圍に亙るものを、極めて簡單な數語で說き述べられたから、「蓋し云々」と申されたのであるけれども、庶人の孝は先づ本章に示された數語に盡きてゐるから、特に斷定的に明言されたものである。

以上で五等の項に亙り、一通りの說明を濟まされたので、孔夫子は、茲に之を引き纏めて、更に一言を附け加へらるるやう、「此の樣な次第であるから、上は天子より下は庶人に至るまで、各〻の身分に應じて、夫〻の孝道を踐み行はねばならぬものであるが、要するに孝といふのは、親に事へることに始まり、身を立てることに終るのである。若しも人の子と生れて居りながら、これだけの孝道が實行出來ぬやうでは、其の人の前途は寒心に堪へぬことで、必ず種々の災難を招き、憂患に迫られて、終には國を失ひ、家を滅ぼし、身を亡ぼすやうになつてしまふもので、僥倖にも此の例に漏れるといふやうなことは、古今に照して見ても、決して有りはせぬ」ものであると、さすがに周到なる聖人の教言、いかにも深切の至りといはねばならぬ。

【語釋】天之道（天道の運行、卽ち陰陽四時の循環をいふ。地上の萬物の生成發育に至大の關係がある。）○用（利用すること。十分に考察して、最も有功に利用する。）○地之利（おの〳〵の土地特有の長所をいふ。）

○分（それ〴〵の土地の特質に、最も適應するやうに、方法を部分的に講ずること。）○謹レ身（健康に留意し、危險に遠ざかりて、一身を無事ならしめること。庶民階級のは、主として肉體の勞働によつて生計を營むが故に、特に此の語がある。）○節レ用（用は費用で、節は節約すること。これ又庶人には一定の俸祿が無いから、特に此の注意が必要である。）○庶人（もろ〴〵のたみ、即ち百姓である。百姓とは本來は多くの民人草を總稱したものであるが、中にも農業者が絕對多數を占めるところから、遂に農民だけを特に百姓といひ、本章などでも主として農民に就いて述べてある。）○終始（第一章にあつた「夫れ孝は親に事ふるに始まり……身を立つるに終る」を指す。）○患（うれひ、やまひ、わざはひ、くるしみ等の意味がある。一身の災禍艱難をいふ。）

餘論 稼穡の道に勤勞することは、庶民の當然なすべき所であるが、勤勞に因つて產を作り、生活に餘裕が出來ると、兎角油斷が生じ、安逸に流れ易い。安逸に流れると、酒色に耽溺して、一身の修養はおろか、父母の孝養までも顧みない樣になる。そこを本章では特に注意して、「謹レ身節レ用、以養二父母一、此庶人之孝也」と說かれたのである、勤儉は實に孝をなすの本であることに、平生よく留意して吾身を三省しなければならない。宋の司馬溫公といへば、その幼年時代に、大きな水甕を破り、將に溺れんとした遊び友達を救つた逸事によつて、吾等が子供時代から或る親しみを有つて居る人であるが、後日宋朝の大宰相となられた時、一日鄉里に歸つて餘慶寺といふ菩提寺に墓參したところ、土地の父老たちが、喜び慕ひながら、手に〴〵自作の野菜類を持參して溫公に獻上を願ひ出で、且つ特に鄉民の爲に、一席の御講釋を煩したい趣きを申し込んだ。溫公は欣然として之を聽き入れ、直に筆紙を取り出して、此の庶人章を書き示し、且つ卽座に懇々と講義をなされたといふ。溫公は曾て孝

經を深く研究して、孝經指解といふ書物さへ著はされた人であるが、身を立て道を行ひ、眞に孝經を實行した人である。

三才章第七

叙説　三才といふのは、天・地・人の三者を併稱した言葉で、萬物を制裁する意味に取つたので、易經に出てゐる語である。此の章が、天・地・人の三者の關係を以て孝道を說いたから、三才章と名づけたものであらう。けれども、三者が對等に述べられてあるのではなくて、中心をなすものは人であり、人が（萬民の上に立つ人、卽ち君主）天地の大自然に則つて、人心民情に悖らはぬやうにして、治め導いて行かねばならぬことを、反復して說き示されたものである。

曾子曰、甚哉、孝之大也。子曰、夫孝、天之經也、地之義也、民之行也。天地之經、而民是則之。則天之明、因地之利、以順天下。是以其教不肅而成、其政不嚴而治。先王見教之可以化民也。是故先之以博愛、而民莫遺其親。陳

之以徳義而民興行。先之以敬讓而民不爭。導之以禮樂而民和睦。示之以好惡而民知禁。詩云赫赫師尹、民具爾瞻。

訓讀 曾子曰く、「甚しい哉、孝の大なるや。」子曰く、「夫れ孝は天の經なり、地の義なり、民の行なり。天地の經にして民是れ之に則る。天の明に則り、地の利に因り、以て天下を順ふ。是を以て其の教肅ならずして成り、其の政嚴ならずして治まる。先王、教の以て民を化すべきを見るなり。是の故に之に先んずるに博愛を以てして、民其の親を遺つる莫し。之に陳くに徳義を以てして、民興り行ふ。之に先んずるに敬讓を以てして、民爭はず。之を導くに禮樂を以てして、民和睦す。之に示すに好惡を以てして、民禁を知る。詩に云ふ、『赫赫たる師尹、民具に爾を瞻る』と。

通釋 三千の孔門中屈指の篤行家、別して孝道に於て最も長じてゐると稱せられたる曾子も、今し直接その師君より諄々と、また滔々と、孝道の本質及び作用の廣大窮り無きを說き示されて、今更のやうに驚歎の聲を發して、「さてもさても孝道といふものは、實に偉大なものでござりまする。」と叫んだ。顧ふに曾子の考へてゐた孝は、今日に於ても大多數の人が考へてゐるのと同樣に、父母を手厚

く養ふことだけであつて、よもやそれが治國平天下にまで、直接至大の關係を有つてゐようとは思はなかつたのである。然るに今や夫子から、五等の孝の各々に亙つて、その體と用とを、いとも詳細に聞承したのであるから、さすがに先づ此の驚歎の聲が口を衝いて出たのは、いかにも尤もな事といはねばならぬ。そこで孔夫子は、最愛なる高弟の、この純眞なる感銘に乘じて、更に一段の啓發を加へられようとの思召で、重ねて語り出され、一層の熱心を以て說き進められた「抑々是の孝道といふものは、先づ之を天上界に就いて譬へて見れば、恰も日月を始め、天體の諸星が、永劫に亙つて不滅の光輝を放つてゐると同樣に、過去現在未來を通じて一定不變なものである。又地球上の水陸が、それぞれに適宜た條件を提供して、萬物の生々發育を助けてくれると同樣に、吾々人間の日常萬端の行動に盡く關與し、又之に價値づけて行くものである。更に又これら天地の中間に生を享けてゐる吾々人類に就て言ふならば、孝道は全く文字通りに百行の本であつて、苟も人としての言動は、必ず之に立脚して居らねばならず、一擧手一投足と雖も、決して此の軌轍を脫出することの出來ない眞に絕對的の大道である。之を要するに孝道の根本義は、實に天地の間に存在する一定不變の眞理であり、萬物共通の原則であつて、其の中間に生息する吾々人類は、常にその眞理を規範とし、原則を遵守して

行動すべきものであるから、よく〳〵之を體得して行きさへすれば、先づ人としての常軌を蹈み外すことはない譯である。そこで聖人が現はれて、上に述べた孝道の根本義を、自身體得實行して示さうと思召され、先づ天界に於ける日月星辰が、普遍的に且恒久的に輝いてゐる光明正大な德を手本として倣はせられ、地上にありては山川水土が、萬物に各々適當な資料を與へて、その生息功用を遂げさせる廣大無邊な德に因り鑑みられて、大きく正しき孝道を行はせられ、之に由て天下の人々を訓へ導いて行かれるならば、萬人をして盡く親睦和順ならしめ、藹々として泰平無事の理想境を現出することが出來るであらう。而して此の人道の根本義さへ徹底すれば其の他の百事は極めて容易に取り運ばれる筈で、たとへば敎育を施すにしても、殊更に恐怖を感じさせる程におごそかな訓戒を用ひなくとも、十分に目的は達せられようし、又政治を行ふにしても、別段に畏懼せしめるやうな嚴しい命令を出さなくとも國は立派に治まつて行くのである。幸にも先代の聖天子は、此の孝道の敎が、人民敎化の上に、最も肝要であり、最も效果の著るしいことをお認めになり、萬民に率先して御自身から此の孝道を實踐せられた。乃ち先づ第一に親に事へて敬愛を盡し、次第に近親より博く一般の者に至るまで、その敬愛の誠意を以て接し近づいて行けば、萬民も亦其の德に感化せられて、各自孝道を踐み

行ひ、苟も自分の親を顧みないで我儘を振舞ふといふやうな不都合な者は無くなつて仕舞ふ。更に又國民に對して、御自身の德行を磨き、義理を履み行く姿を、實際に布き示すと、下民は皆感奮興起して、幾くも無いうちに美風良俗を成す樣になる。又御自身で率先して、恭敬謙讓の範を示されると國民も亦之に感化せられて、濫りに人と爭ひ他を凌ぐやうな亂暴者は無くなる。又禮儀を正しくし音樂を盛んにして、優しい美しい情操を養ふやうに誘ひ導いて行くと、萬民は皆心から和らぎ樂んで、お互に打ちくつろいで親しく睦み合ふやうになる。上天子樣が、前以て公然と、善事だけが好きで、惡事はすべて嫌ひであるといふことを、一般に說き示して置かれると、國民は皆之を仰ぎ見て、一樣に我が君の愛好せられる善事に勵み、嫌忌せられる惡事を避けるやうに心得て、特別に嚴重な申し渡しが無くとも、爲すべき事及び爲すべからざる事を自然に了解して、誰一人として國法國禁を犯す者が無くなつて來る樣になる。詩經の節南山の篇に、「赫々と輝きわたる太師の位に在る尹氏の一擧一動に就いて、下々の人民が皆目を丸くして仰ぎ見てゐるから、細心の注意を拂つて、失敗の無いやうにせねばならぬぞ。」とあるが、すべて上位に立つ人々は、常に庶民の標準となり規範となるものであるから、くれぐれも愼まねばならぬ。

語釋　甚哉（甚しい常度を超えた讃め表はす。哉は感嘆の言葉。）　○大也（也も又た哉と同じく感嘆の語。）　○天之經（經は永遠不變の道理をいふ。天體の諸星、たとへば日月星辰の類か、殆んど永劫に不滅の光を放つてゐるのにたとへたのである。）　○地之義（義は宜に通じて、事物をとりさばき、それ〴〵のものを、それ〴〵の場合に、宜しからしめることである。地界の水陸がそれ〴〵適當な條件を供給して、萬物を安泰に生息せしむるにたとへる。）　○民之行（民は此處では人と同じ意味、行といふ字には、一字でゆく、おこなふ、みち等の字義がある。而かも人が正しくあゆみおこなふところが即ち道である。道を正しくゆくことが即ち人としての行ひなのであるから、結局同一義に歸着するのである。）　○則（ノツトルと訓む。手本としてならふこと。）　○天之明（前述、天體の諸星、即ち日月星辰の發する光輝。）　○地之利（地上の山川が萬物に都合好き資料を與へて、各々の功用を遂げしむるはたらき。）　○順（おしふる義。第一章に出づ。古文孝經には訓に作る。）　○肅（おごそかきびし。）　○嚴（おごそか、からくきびし。）　○化レ民（人民を教へ導いて、よい方に移し易へること。）　○見（心で見る意味で、考へる、又は思ふこと）　○先レ之（之は民を指す。自分から率先して。）　○博愛（ひろく衆人を愛すること。）　○遺（すてる、見棄てる。）　⊙陳レ之（陳は布く、つらぬる、ならべる意。）　○興行（感激して奮起實行すること。）　○敬讓（つつしみてゆづること。）　○禮樂（禮儀と音樂。禮儀は人の行を愼ましめ、社會の秩序を定める。樂は人心を和げる上に大功がある。）　○好惡（このむとにくむと、即ち善を好み、惡をにくむこと。）　○知レ禁（禁は禁制、禁令 規則。）　○詩云（詩經の小雅、節南山の篇。）　○赫赫（かがやきあらはれて盛んなる貌。）　○師尹（師は太師で、周の朝廷に於ける三公の一、日本の太政大臣に當る。尹はその太師の職に居る人の姓。）　○具（ともに、倶に通ず。）　○瞻（みる、仰ぎ視ること。）

餘論　曩に開宗明義章に於て、曾子を以て語を起し、次に天子以下五等の孝に亙つて分説詳論し、而して今此所に來て、又曾子を以て一先づ總括するところ、內容の上には勿論のこと、形式上、文の構成から見ても、整然たるものと言はねばならぬ。且三才に託して約說した點は正に萬鈞の重きを加へたものである。本章の先王より以下は前の天子章と互に發明する所が多いから、彼此參照して、十

分に眞意を得られんことを切望する。又論語の中にも「君子は本を務む。本立ちて道生ず。」（學而）といひ、「終りを愼み遠きを追へば、民の德厚きに歸す。」（學而）といひ、「政を爲すに德を以てすれば、譬へば北辰の其の所に居て、衆星の之に共ふが如し。」（爲政）といひ、「其の身正しければ、令せずして行はれ、其の身正しからざれば、令すと雖も從はず。」（子路）といひ、さては「君子の德は風小人の德は草、草之に風を上ふれば必ず偃す。」といふが如き諸章は、皆最もよく本章と表裏するところが多い。

孝經中の諸章は、多くは人の上に在つて、衆人を支配し統治する者の爲に說かれてあるのであるが決して人君にばかり限るものではなく、今日の吾々普通人に於ても、身を修め家を治め、弟妹を誘ひ、後進を導く上に、盡く取り用ひて活用することの出來るものばかりである。古來本書を稱して、徹上徹下之書となし、上にも通り下にも通る重寶至極の書と、定評ある所以である。

孝治章第八

叙說 孝治の二字が章の首にあるのを取つて、其のまゝ章の名とした。孝治とは卽ち孝道に本づい

て天下國家を治めるといふ意味である。上に立つ者が孝道を實踐躬行することによつて、下々の者も亦之に倣ひ、以て天下和平の理想郷が實現せられる所以を說き示したのである。

子曰、昔者明王之以孝治天下也、不敢遺小國之臣、而況於公侯伯子男乎。故得萬國之懽心、以事其先王。治國者不敢侮於鰥寡、而況於士民乎。故得百姓之懽心、以事其先君。治家者不敢失於臣妾、而況於妻子乎。故得人之懽心、以事其親。夫然、故生則親安之、祭則鬼享之。是以天下和平、災害不生、禍亂不作。故明王之以孝治天下也、如此。詩云有覺德行、四國順之。

通釋 子曰く、「昔者明王の孝を以て天下を治むるや、敢て小國の臣を遺れず、而るを況んや公侯伯子男に於てをや。故に萬國の懽心を得て以て其の先王に事ふ。國を治むる者は敢て鰥寡を侮らず、而るを況んや士民に於てをや。故に百姓の懽心を得て、以て其の先君に事ふ。家を治むる者は、敢て臣妾

に失はず、而るを況や妻子に於てをや、故に人の懽心を得て、以て其の親に事ふ。夫れ然り、故に生けるには則ち親之に安んじ、祭には則ち鬼之を享く。是を以て天下和平、災害生ぜず、禍亂作らず。故に明王の孝を以て天下を治むるや、此の如し。詩に云ふ『覺たる徳行あれば、四國之に順ふ』と。

〔通釋〕孔夫子が又語を改めて、次の如くお說きになつた。昔、聖明の天子が、孝道を以て天下を安らかに治められた御治績に就て觀ると、先づ其の父母を敬愛する心を以て根本精神となし、之を直に下々にまで推し及ぼされたもので、彼の五等の班には加へられない程の小國の君主をさへ、決して忘れて顧みないやうなことはしなかつたから、況してそれらよりも大國の諸侯、即ち公侯伯子男といふやうな立派な階級にゐる者に對して、一層の敬愛を致されたのは申すまでも無いことである。隨て自然に天下中の大小諸侯全部の懽心を得、やがて自分も益々敬愛を受け、國家は益々發展を遂げ、先代の天子、即ち父王に對しても、遺憾なきまでの孝道を盡すことが出來たのである。上に在る天子が既に斯のやうな活模範を示されるものだから、其の下に立つ諸侯も亦此の孝道に本づく敬愛の精神を以て各々の領國を治め、鰥とか寡とかいふ賴り少い不遇の人々に至るまで、決して之を輕んじたり侮つたりするやうな事はしない。況して立派にそれ〴〵の生活を營んでゐる士民たちには、十分なる敬愛

の意を用ひたに相違ない。随て又自分でも國民全體の懽心を得て、上下交々睦み合ひ親しみ合つて、その領國は日に月に繁盛の域に進むので、先代父祖の君たちに對しても、最大の面目を施し得る譯である。已に天子にして斯くの如く、諸侯亦斯くの如くであるから、其の下位に在る卿・大夫・士・庶人に至るまで、孰れも皆之に傚つて、各々の家を治めるに常に敬愛の精神を以てしたので、比較的卑賤な身分に在る臣妾の輩に對しても、決して無理な事を仕向けて失望させたり、怨まれたりするやうな事は無い。況して彼等よりも遙に貴く親しい妻子に對しては、深切なる敬愛の情を注ぐことは勿論である。故に能く一家中の人々の懽心を得て、和氣藹々のうちに家運は愈々隆盛に赴き、物質的に手厚い奉養を遂げ得るのみならず、精神的にも、家名を揚げ、父母を顯はすことが出來て、最大の孝道を完うする譯になるのである。さて上述の如く、上には聖天子が在し、各地には名諸侯が居り、天下の士民は悉く忠誠の精神に富んで、各々適切なる孝道に基づいて、それ／＼天下を、國を、家を治めて行くやうになれば、現に存命の父母たちは皆我が子から十二分の奉養を享けて、一點の懸念もなく餘生を樂むことが出來、既に鬼籍に入られた親たちは、皆鄭重な魂祭りを營んでもらふことが出來て、心ゆくばかりそのお供物を享けられであらう。斯うなれば天上天下を通じて、盡く孝道といふ大

德を以て一貫する譯で、君臣上下の間は常に相和し相樂しみ、天下國家は昌平安泰となり、天の作す災害も、人の招く爭亂も、すべて自然に消滅してしまふ。故に明哲の聖天子が、率先して孝道の實踐によつて天下を治められる時には、其の效果、其の薫化の偉大なることは、實に斯程までに著しいものである。詩經に「上御一人たる天子に高く、大きい德行が有れば、四方萬國は皆之に順つて德行を修めるやうになるものである」と述べてあるが、此の孝道の如きは、誠にその好適の例ではあるまいか。

語釋　昔者（ムカシと訓む。者は語助。）○明王（明哲な聖天子。）○遺（ワスル、忘る、見棄てる）○小國之臣（周代の制度では、天下の諸侯を、その國の大小によつて五等に分けた。即ち地百里四方を保つものを公又は侯、七十里四方のものを伯、五十里四方のものを子又は男と稱した。方五十里以下の小國は、之を附庸といつて、諸侯へ附屬させて置いた。こゝに小國之臣といふのはこれ等諸小國の者を指したもので、君といつても大でなければ臣に過ぎないのである）○萬國（天下中の大小諸侯の國全部を指す。）○懽心（懽は歡に同じ。喜んで滿足する心、心の底からなつき從ふ）○先王（先代の天子、父王、天子が即位の後には、その父の王を先王と申すのである。先王の用例には二種類あることに注意すべし。）○士民（御大夫以下庶民に至るまでをすべて指す。）○治レ國者（ここの國といふのは諸侯の領地をいふ。故に治國者は諸侯を指す。）○鰥寡（鰥は音クワン、ヤモヲ、老いて妻無き男。寡は音クワ、ヤモメ、夫を失つた女。但鰥寡孤獨を窮民として、世間の弱者と見做されてゐた。）○百姓（國中の人々、農業者に限らず。）○先君（天子がその父王を先王といふのに準じて、諸侯がその父の後を襲いで立つた時に、父を先君といふ。）○治レ家者（前にある士民を指していふ。）○臣妾（男の家來と女の召使。家族中でも、比較的賤しく且疎遠なものとされてゐる。）○妻子（家族中、最も親しく且貴い者である。禮記の書に孔夫子の言はれたものとして、「昔三代の明王の政は必ず妻子を敬した。妻なるものは親の爲に主となつて祭をする者であるから敬せねばならぬ。子なるものは親の後を繼ぐ者であるから敬せねばならぬ。」といふ意味の文が載せてある。）○人（一家族の人々を指す。）○生（父母の生存中。）○鬼（死後の魂魄。）○災害（わざはひ、自然的にお

こる凶事。いはゆる天災〕　○禍亂〔わざはひ。人爲的に生ずる禍亂、爭亂等。〕　○作〔おこる、生ずる。〕　○詩〔詩經、大雅、抑の篇「無競ふ無からんや維の人。四方其れ之を訓とす。覺たる德行あれば四國之に順ふ。」云々の詩から引いた。〕
○覺〔高く且つ大きい貌、又明らかなるさま。〕　○四國〔四方の國。〕

餘論　此の章は、開宗明義章第一章の「先王至德要道あり。以て天下を順へ、民用て和睦し、上下怨無し」の義を敷衍し詳述したものである。彼此參酌して再讀するときは、一層發明するところがあるであらう。尚本章百四十餘字頗る秩序立てゝ明瞭に說き示されてあるが、窮極のところは引用の詩の句、「覺たる德行あれば四國之に順ふ」の八字に歸着してしまふのである。要は上なる人の率先躬行が大切である。

聖治章第九

敍說　聖治といふ章の名は、章の一句に、聖人之政不レ嚴而治とあるのから取つたのである。從前の說く所を更に進めて、孝の德の至高至大なることを力說し、聖人の敎の本づく所を知らしめ、更に孝の敎の進展して行く次第を示し、實施上の注意をまで、懇切に述べられてゐる。

曾子曰、敢問聖人之德、無以加於孝乎。子曰、天地之性人爲貴。人之行莫大於孝、孝莫大於嚴父、嚴父莫大於配天。則周公其人也。昔者、周公郊祀后稷以配天、宗祀文王於明堂以配上帝。是以四海之內、各以其職來祭。夫聖人之德、又何以加於孝乎。

訓讀　曾子曰く、「敢て問ふ、聖人の德、以て孝に加ふること無きか。」子曰く、「天地の性、人を貴しと爲す。人の行は孝より大なるは莫く、孝は父を嚴にするより大なるは莫く、父を嚴にするは天に配するより大なるは莫し。則ち周公其の人なり。昔者周公后稷を郊祀して、以て天に配し、文王を明堂に宗祀して以て上帝に配す。是を以て四海の內、各〻其の職を以て來り祭れり。夫れ聖人の德、又何を以てか孝に加へむや。

通釋　曾子は、これまでに孔夫子から敎へられたことによつて、孝といふ德の全體は、至大至高のもであつてもうこれ以上のものは無からうと思つたけれども、まだ多少了會しないところがあつたものだから、思ひ切つて卒直にお尋ねした。「先刻からのお導きによつて、孝の德が至つて大きく、至つ

て貴いものだといふことは、大體承知致しましたが、さて又、聖人とも申される方の御德は、天地と合して、天下に能く之を載せ得るものは無い程に最高至大なものと伺つて居りまするから、若しや孝德以上に何か立派な御德を、お有ちになるものではございませんでせうか。」と。之に對する孔夫子のお答は、次のやうなものであつた。「凡そ天地間の生物は、盡く天地の性を享けて生れ出でたものであつて、其の數に於ては、限り無く多いけれども、中にも其の精粹を享けて生れた者は人類で、人間以上に貴いものは、斷じて無い。而して人間の百行百德の本は、卽ち孝であつて、これ以上に大切な者は無い。又孝道の實際は、極めて多い。けれども而かも我が父を崇め嚴ぶこと程に大切なものは、他に無い。我が父を崇め尊ぶの道も、多種多樣にあるけれども、天に事へる時に捧げる至誠を以て、直に父に事へる。卽ち我が父を天帝と同樣に考へて、之を配べ祀ることの出來る程に、眞心を捧げることより、其の道に叶ふものは、他に無い。而して此の嚴父配天の孝を、實行し得た人は、周公が其の人である。昔周公が孝道を盡された跡を見ると、先づ周の第一の祖先たる后稷をば、高く天と同樣に配べ奉つて、冬至に天を祀る郊の祭には、必ず一しよにお祀をなされた。又其の建國の聖王たる文王をも、亦同樣に上帝に配べ祀つて、天子が政事を御覽じ給ふ明堂の中で、百世の後々までも續き行

ふべき重大な祭に、常に一しよに祀り給うた。斯くの如く、周公が其の先王に盡くされた孝道が、最上至極のものであつたからして、之に感化せられた天下四方の諸侯は、皆各自の土地に産する種々の貢ぎ物を進めて、お祭の御供物とし、諸侯自身も來會して、そのお祭に與りお手傳ひするやうになつた。周公のこのやうな聖德も、畢竟孝道が其の根本をなし、中心をなすのであるから、聖人の德、いかに高大であるといつても、必ず孝德の擴大充實に過ぎないので、どうして孝德以外の何物をも有ち得る譯のものであらうか。」と。

【語釋】加於孝（孝の更に上に出るもの、孝より以上のもの。）　○天地之性（天地間に生息してゐる萬物、あらゆる生物。性は性を稟けて生れ出でた者。）　○嚴父（嚴はたつとぶこと。父を尊ぶ、我が父を尊嚴なる方として崇び事へること。）　○配天（配はならべる、たぐふ。王者が天を祀る時其の祖先を之に配して祭る。）　○周公（名は旦、周の文王の子、武王の弟、成王の叔父に當る人。周といふ處に采邑を賜つたから、周公といふ。兄武王を助けて天下を定め、又幼主成王を輔けて、制度禮樂を制作した大聖人である。）　○郊祀（都の郊外に於て天をまつることを郊といふ。郊祀は、この郊の祭に合せて祀ること。）　○后稷（古農事を掌る官の名であつたが、堯舜の時この官にゐて、大に農業を興した棄といふ人、即ち周の始祖となつた人の別名となつた。）　○文王（周の武王の父、名を昌といふ。周の王業を建てられた人である。）　○宗祀（宗は尊ぶこと、たつとびまつる。始祖の廟以外に於て、特別に尊崇して祀して、萬世の後にまで及ぼすもの。）　○明堂（天子が政を聽く所で、其の中で天帝を祀ることも出來るやうになつてゐる。）　○上帝（天の神、天帝、最高最尊の神。）　○職（みつぎもの、各々の土地に産する貢物、及び天子の祭祀をお手傳ひする奉仕をいふ。）

故親生之膝下、以養父母日嚴。聖人因嚴以敎敬、因親以敎愛。聖人之敎不肅而成、其政不嚴而治、其所因者本也。父子之道天性也、君臣之義也。

父母生之、續莫大焉。君親臨之、厚莫重焉。故不愛其親而愛他人者、謂之悖德、不敬其親而敬他人者、謂之悖禮。以順則逆、民無則焉。不在於善而皆在於凶德。雖得之、君子不貴也。君子則不然。言思可道、行思可樂、德義可尊、作事可法、容止可觀、進退可度。以臨其民。是以其民畏而愛之、則而象之。故能成其德教而行其政令。詩云、淑人君子、其儀不忒。

訓讀 故に親は之を膝下に生じ、以て父母を養ひて日に嚴なり。聖人嚴に因て以て敬を敎へ、親に因て以て愛を敎ふ。聖人の敎、肅ならずして成り、其の政嚴ならずして治まるは、其の因る所の者本なればなり。父子の道は天性なり、君臣の義なり。父母之を生む、續ぐこと焉より大なるは莫し。君親として之に臨む、厚きこと焉より重きは莫し。故に其の親を愛せずして他人を愛する者は之を悖德と謂ひ、其の親を敬せずして他人を敬する者は之を悖禮と謂ふ。以て順ふれば則ち逆にして、民則ること無く、善に在らずして皆凶德に在り。之を得と雖も、君子は貴ばざるなり。君子は則ち然らず。

言は道ふ可きを思ひ、行は樂むべきを思ひ、德義尊ぶ可く、作事法る可く、容止觀る可く、進退度とす可し。以て其の民に臨む。是を以て其の民畏れて之を愛し、則りて之に象る。故に能く其の德教を成して、其の政令を行ふ。詩に云ふ、『淑人君子、其の義忒はず』と。

〔通釋〕さて孝の德の大きいこと、貴いことは、前に述べた通りであるが、然らばその教は如何なる筋道によつて、進め成されるものであらうかといふことを、考へ察るに、子が其の父母に對する親愛の情は、幼時兩親の膝下に在つて、乳を哺まされてゐる頃から已に芽生えて來るもので、其の身心の發育成長につれて、父母に奉養する道を知り其の間に自ら父母を敬愛し、尊崇するの念が日に日に新たになつてくるものである。昔の教を立てられた聖人は、此の人間本來の特性に着眼して、孝道教育の出發點とせられ、先づ其の親を畏れ瞻ぶ心を基として、之を進めて正しき敬といふものを教へ其の親に親しみ昵く心を本として、之を推して淸き愛といふものに導いた。彼の聖人の淸く正しい教育や政事が、格別に嚴肅な手段や方法を講じないのに、見事に成功し、立派に治まつて行く道理は其の政事教育の立脚點が、人間固有の本性であつて、自然に發生しようとする傾向のあるものを、適當に誘ひ導くからである。

およそ父子の間の慈愛敬愛といふ關係は、自然的の性質のものであるが、同時に又、君臣の關係をも兼ねてゐるものである。卽ち父が尊く、子が卑いのは、君が尊く臣が卑いといふ象であり、父が子を慈愛し、子が父に孝養を盡すのは、君が仁を以て臣を使ひ、臣が忠義を以て君に事へるのと同一である。又父母が子供を生み育てるといふ事は、系統相續の上に、最も大切なものであつて、從つて此の點に於ても、子たるものの責務は、忽せに出來ないものである。倘又、天下の至尊としては、人君以上のものはなく、天下の至親としては父母以上のものはないのであるが、此の至尊と至親とを兼ねてゐるものは、矢張り父母である。故に天下最大の恩義を兼ねて、其の子を養育するのであるから、仁愛の廣大なることは、此れに越すものは無いのである。斯樣な譯で、父子卽ち親子の關係は、一切の人倫關係の根幹をなすものであるから、未だ我が親を十分に愛敬し得ないで、徒に他人を愛敬するが如き者は、本を捨て末に趨るもの、卽ち道德に逆らひ、禮儀を紊すものであつて、之を稱して悖德漢となし、悖禮者といふのである。若しもこんな氣まぐれ者が、其の僞善的行爲を以て、世人を指導しようとするならば、却て世の禮儀道德を崩壞する、惡むべき叛逆的行爲であつて、恐らくは天下の人民も、殆んど之を顧みて、則り學ばうとする者とては無かるべく、其の結果は、固より善德など

の現はるゝ筈は無く、不吉不良な事の續出に終るであらう。萬一の僥倖によつて、一時の權勢富貴を身に獲得するやうな事があつても、決して道を知る君子は、之を卑みこそすれ、貴びはしない。君子の爲すところは、こんな悖德悖禮の言行など、決して無い。其の言語は、必ず先づ嚴父配天の德を心に備へ、言ふべき時に、言ふべき事のみを言ひ、之を爲して、衆人が悅服する時にのみ事を爲すから、民皆之を信じ、之を悅ぶのである。斯くてこそ、其の德義人格は萬民に尊信せられ、其の創作事業は萬世の法則となり、其の禮容威儀は望み瞻る人をして畏敬せしめ、其の出處進退は天下後世の模範となるに至る。斯ういふ人格態度を以て、上から人民に臨むから、人民は之を神明の如くに畏敬し、父母の如くに親愛して、君子の德を學び、行ひを模倣して、不知不識の間に、善德善行を積むに至るのである。斯くして、能く其の至德の敎、卽ち孝道の敎を完成させ、政事命令の施行にも、立派に成功することになるのである。詩經の一句に、「善人君子たる方は、其の言行の標準が、常に一定して、不斷の動搖が無い。」といふ意味を言つたものがあるが、今述べたことに、よく當つてゐる。

語釋　親（したしみの情。）○膝下（父母のひざもと、父母のひざもとに居る時。幼時。）○日嚴（子が父母に對して、日増しに尊嚴の念を加へてくること。）○肅（おごそか、きびし。）○本（本性
生れつき、天性。）○續（相續。）○君親（君となり親となつて。）○厚（恩義の深厚なること。）○悖德（ハイトク。德義にそむきもとる、背德。）○順（したがふ。道理にしたがひてさからはず、逆
悖と同じ。）

對）〇逆（順の對。さかふ、道理にしたがはず。）〇則（ノットル、手本として傚ふ。）〇在ニ於善ニ（心を嚴父配天の至善に措くこと。）〇凶德（前述の悖德悖禮をいふ。）〇得レ之（自分が希望してゐる勢位、富貴などを得ること。）〇君子（才德高き人の稱。聖賢とほゞ同じ。）〇道（イフ、言ふに同じ。）〇作事（創作の事業。）〇法（ノットル、手本としてならふ。）〇容止（容貌動止かたちづくり、たちゐふるまひ。）〇度（のり、法度、規則。）〇象（かたどる。のつとる。）〇政令（政事命令、まつりごとのおきて。）〇詩（詩經の曹風、鳲鳩の篇。）〇淑人（シユクジン、善人に同じ。善良の德ある人。）〇儀（ぎやうぎ、威儀、容儀。）〇不レ忒（タガハズ、たがはぬ。忒は差ふ。）

餘論　本章は、其の文字の數に於ては、孝經十八章中、最も多く、最も長い章であるが、其の內容は、詮ずる所、孝道の高調力說に歸するので終始一貫の實に違はぬものである。而して之を文章法の上から見れば、或は漸層法を用ひ、或は並列法を用ひ、或は對句法を用ひ、或は對比法を用ひて、修辭上に於ても、見るべきものが多く、如何に力を入れて說かれたか、いかに言ひ表はし方に心を用ひられたかが、十分に推察されて、讀む上にも、自ら一種の尊嚴さが感じられて來る。故に讀むものは反復熟讀してその妙味を了得するを要する。

紀孝章第十

敍說　紀といふ字は記に通じて、しるすといふ意味であるが、殊に事のすぢみちを立てて記す場合

に用ひる。卽ち此の章には、孝道の實踐に就いて、孔夫子が說き示された、大切なる心得數箇條を記錄してあるから、から名づけたのである。便宜上之を二段落に分けて見ると、前の半分では五つの善事を擧げて、積極的に之を勸められてあり、後の半分では、三つの不善の事を擧げて、消極的に之を戒められてある。

子曰、孝子之事親也、居則致其敬、養則致其樂、病則致其憂、喪則致其哀、祭則致其嚴。五者備矣、然後能事親。

訓讀 子曰く、孝子の親に事ふるや、居には則ち其の敬を致し、養ひには則ち其の樂みを致し、病には則ち其の憂ひを致し、喪には則ち其の哀みを致し、祭には則ち其の嚴を致す。五つの者備はり、然る後能く親に事ふ。

通釋 孔夫子が申されました。すべて孝子ともあるべき者が、父母に事へ奉るには、次に述べるやうな數箇條を、絕えず心掛けて居らねばならぬ。先づ第一には父母の平生無事の場合で、此の時には、別段に異つた仕方とて無いが、唯不斷に我が恭敬の心を十分に盡すべきである。無事であるだけ

に、どうかすると其の心が緩み、親しみに狎れて、思はぬ不敬の振舞を敢てするやうになり易いものであるから、呉々もこれを戒めて、朝起きてから夜寢るまでの間、常に敬事を一貫して、ゆめゆるがせにしてはならぬ。次には奉養の態度であるが、子たる者が朝夕の奉伺をなし、寒暖身に適ふやうな衣類調度を進め、毎日の飮食物を捧げる際には、必ず誠意欣慕の表現たる溫顏愛語を以て終始し、かりそめにも懶げた物言ひや、義務的の素振りがあつてはならぬ。例の至孝の先哲曾子も、「孝子の深愛なる者は必ず和氣（おだやかな氣分）あり、和氣ある者は必ず愉色（うれしさうな顏つき）あり、愉色ある者は必ず婉容（やさしい身振り）あり。嚴威（いかめしくつよさうにしてゐること）、嚴恪（おごそかに堅苦しくしてゐる事）は親に事ふる所以にあらず」と述べられてゐるが、さすがによく孔夫子の心を得られたものと思ふ。更に言ひ換へれば、「爲さねばならぬからする」といふ考へからではなく、「嬉しくて嬉しくて、どうしてもさうせずには居られぬ」といふ態度にまでならなければ、孝に徹底したとは言ひ得ないのである。次には父母の身の上に事故の生じた場合、即ち父母が病氣に罹られた時であるが、此の際には、其の病魔の爲めに惱ませられてゐる父母の苦痛をば、直に我が身の上に引き當てて、一刻も早く治療を加へ、死亡の危險を避けることに全力を注ぎ、最善を盡さねばなら

ぬ。病氣の時には、他人が親切に見舞つてくれてさへ感激せざるを得ないものである。まして我が子が心身を碎いて日夜の別なく看護してくれることは、どんなにか親の心を喜ばせ、滿足させることであらう。平生よりも大事の場合であるだけに、父母への感應も平生に倍するものがあるに違ひない。して見れば、子たるものは、「此處が孝行の致し所」の念を特に深めて、勵み行はねばならぬ。尙進んで父母の身に大變の起つた場合、卽ち不幸にして父母の病氣が遂に癒らなかつた時には如何にすべきか。いはゆる喪中の際には、その形式的方面に於ても、納棺とか、葬送とか、服喪とかの大切な事が色々あつて、かうした外面上に力の適ふ限りを致すのは勿論であるが、畢竟此等の事は寧ろ枝葉の問題に過ぎぬので、すべてが根本に於ける痛切なる哀痛の念、切實なる思慕の情の發露であつてこそはじめて肯定せられ、價値を認められるのであるから、人の子たる者は、深くこの點を辨へねばならぬ。又、父母逝きました後の日夕の供養や、忌日命日などのお祭りに於ても、前の場合と同樣に、鬼神に通ずる誠敬と、天地も爲に感動する精明嚴肅の念とが根柢をなしてゐるのでなければ、いくら立派な祭器を列べ立てたところで、靈魂に感應ある筈は無く、一切が無意義な虛禮に流れて了ふ。故に飽くまでも、「死に事ふること生に事ふるが如し」といふ先聖の訓を體して、今日の前に父母が在ます

ものと思つて、心の底から敬意を捧げる。これが御靈祭の主眼である。以上の五箇條、即ち五つの場合に於けるそれ〴〵の心得が、遺憾なく體得實行出來るならば、其の生死を通じて、眞によく親に事へることの出來た者と謂ふべきである。かの朱文公が「若し孝を爲さむと欲すれば、當に孝を爲す所以の道を知るべし。獨り夫の孝の一字を守りて得べきにあらざるなり。」と申されたのも、全く此の意味に外ならぬ。

語釋 居（ふだん、平生。平居、居常。） ○致（つくす、きはめる。十分に極め盡くすこと。） ○其敬（孝子の敬。其は孝子を指す、他の三つの其の字も皆同じ。） ○喪（人の死を悲みて、或る期間内服を著けて、うれひにこもり居る禮。） ○嚴（つゝしみ、恭敬、嚴肅。）

事親者、居上不驕、爲下不亂、在醜不爭。居上而驕則亡、爲下而亂則刑、在醜而爭則兵。三者不除、雖日用三牲之養、猶爲不孝也。

訓讀 「親に事ふる者は、上に居て驕らず、下と爲りて亂れず、醜に在りて爭はず、上に居て驕れば則ち亡び、下と爲りて亂れば則ち刑せられ、醜に在りて爭へば則ち兵せらる；三つの者除かずんば、日に三牲の養を用ふと雖も、猶不孝と爲すなり。」

通釋　已に前述五箇條の心得を十分に了解し實行してゐる者、卽ち申分なく親に事へることの出來る人であるならば、其の志は必ず誠實であり、其の態度は必ず恭敬を失はぬから、たとひ其の身分が高くあつても、徒に自らおごり人に高ぶるやうなことはなく、又其の地位境遇が卑いにしても、よく我が分に安んじ、天命を樂んでゐるから、妄りに上を犯して不都合な振舞をなすことは無く、又同類同輩の間にあつても、互によく節度を守つて讓り合ひ、毫も陵ぎ輕んじ侵し爭ふやうなことは爲さないであらう。然るに若しも之に反した行ひがあるならば、其の結果は實に言ふに忍びないやうな恐しいものとなつてしまふのである。卽ち他のものより少しく高い地位に在るからといつて、妄りに傲り高ぶる時には、忽ちにして顚覆の厄に遇ひ、破滅の淵に陷つてしまひ、身分が卑いからといつて、分別もなく、自暴自棄して狂亂の行爲を遂げるならば、直ちに國法に問はれて刑戮に遭ひ、仲間同士で喧嘩騷動に血迷ふならば、その無謀の刄傷沙汰によつて、お互ひに價値なき殺害を敢てするであらう。此の驕りと亂れと爭ひとの三つの禍根を、根本的に除き去らぬ限りは、その恐るべき害惡を我が一身に招き寄せるのみならず、延いては我が身にまで禍根を及ぼすもので、不孝の罪も亦大きいのである。果して斯ういふ風があるならば、假令日日父母の前に、立派な三牲の供物を致す、卽ち最上級

の御馳走をして父母の口體に奉養をつとめたにしても、親は我が子の惡德を案ずるの餘、そんな御馳走などを賞味する心の餘裕などはあり得ない。從つて其の子は、遂に不孝の兒といふことを免れることは出來ぬ。

語釋 上、下（位高く年老いて才德の長じてゐるのを上といひ、之に反するものを下といふ。上は必ずしも天子諸侯、下は必ずしも庶人の義ではない。）○醜（衆又は類の義。位や年や才德の相類して、高下の別の無い連中をいふ。）○兵（つはもので兵器の總稱であるが、ここでは刄傷殺戮することをいふ。）○三牲（牛・羊・豕の三種のいけにへ、羊・豕の二牲を供へるのを少牢といふに對して、太牢といひ、最も鄭重な祭祀の時だけ、この三種の犧牲を用ひるのである。）

餘論 孝といふ高大なる德を、今假に我國の靈峰富士山に譬へ、その實踐を登山になぞらへて見る。富士山の麓から頂上まで、悉く踏破した達人から、まだ見ぬ名山に關するいろ〳〵の說明を聞かされたので、どうしても自身に登山を試みないでは居られなくなつて來た。そこでいろ〳〵決心して駿河路指して御殿場にたどり着いた。此の時に當つて、例の達人から、實際登山に關する一層切實な注意を與へられたのである。靈山の特色として、是非見逃がすべからざる五項、危險につき特に避くべきこと三項を指示せられた。いざやこの懇切無比なる大聖先達の導くところを服膺して、希望の峯を仰ぎつゝ、一步一步の運びを進めんとする若人の心ほど勇ましく賴もしきものはない。不屈不撓の元氣を奮つて、勇往邁進しなければならないのである。

五刑章第十一

叙說 前章の「下となりて亂れば則ち刑せらる。」及び「猶ほ不孝と爲すなり。」といふ句を受けて、之を敷衍して說かれたものである。五刑といふ字義に就ては、語釋の條に讓る。

子曰、五刑之屬三千、而罪莫大於不孝。要君者無上、非聖人者無法、非孝者無親。此大亂之道也。

讀 子曰く、「五刑の屬三千、而して罪不孝より大なるは莫し。君を要する者は上を無し、聖人を非る者は法を無し、孝を非る者は親を無す。此れ大亂の道なり。」

通釋 孔夫子が申されるには、世の中に五等の刑罰の適用を受くべき罪惡の種類は、數限りが無いほどに澤山あるが、それほどに數多い中にも、親に對して不孝をなすこと以上の大罪は無い。前に繰り返して述べたやうに、孝は百行の本で、あらゆる善行美德の根柢は孝に在ると同樣に、すべての惡事罪科の根源は、皆不孝から發してゐるのである。凡そ一國の國民たる者は、必ず其の君主を尊敬し

信奉して、忠誠を盡くすのが當然であるのに、時としては其の君主に對して、不敬の言を弄し、不穏の行を爲して、自分の放埒な欲望を遂げようとする不忠漢が出て來るのであるが、かういふ不忠義者は、我が戴いてゐる君主の恩德とか、特殊的地位などを、全然無視する非道のものであつて、實に一日も許すことのできない國家の大逆人である。又卓越せる理智と、崇高なる人格とを備へて、人間生活の安全と幸福とを、保障し增進する方法を、教へ定めてくれた聖人に對しては、常に最大の尊敬を拂ふべきであるのに、ことさらに其の人格を非難し、其の作り上げた規範を破壞する沒分曉漢も、稀には出るのであるが、こんな者は、固より聖人が定め示してくれた禮儀法則といふやうなものの存在を認めない我儘者で、實に健全なる社會を毒する極惡人であるから、これ又一日も早く除去してしまはねばならぬ。更に又甚だしいのは、この人倫の大本であるところの孝道に對して、自分が愛と敬との純眞な心を失つた悲しさに、之を信じ之を修めないのみならず、樣樣の惡口や非難を放ち、其の體得者や實行者をさへ、侮蔑嘲笑して、直接間接に家庭を破り、社會を亂す者も尠くないことであるが、こんな者は、自分と至近最大の關係に在る父母をも父母と思はず、從て之に對して感謝を捧げたり、誠意を盡して事へたりすることの出來ぬ人非人であつて、禽獸にも劣る動物といはねばならぬ。

すべてこれらの君を脅し、聖人を誹り、親を親とも思はぬ者共は、これ皆人類社會の秩序を害し、風俗を紊す憎むべき黴菌であつて、百害あるとも一利無い物であるから、一日も早く適當なる制裁を加へて、改心させるか、或はどうしても致方のないものは、速に驅除撲滅する方法を考へねばならぬのである。本章にいはゆる五刑之屬三千といふのも、畢竟するに之が爲に設けられたものに外ならぬ。そしてあらゆる不法者を見ても、源をただせば、必ず親不孝といふ不德が其の始まりであり、且つ終りであるから、結局不孝にまさる罪は無いといふことになるのである。

語釋　五刑（古の支那で行はれた五種類の肉體的刑罰で、墨・劓・剕・宮・大辟である。墨といふのは額のところに入れ墨をすること。劓は鼻を切ること。剕は足の筋をきること。宮といふのは生殖を禁じる刑で、男子ならば男根を切り取り、女子は一室に幽閉して、一切外出させぬやうにするのである。大辟は最も重い刑でいはゆる死刑のこと。）○屬（仲間。部類。）○三千（書經の呂刑篇といふところに、墨罰之屬千、劓罰之屬千、剕罰之屬五百、宮罰之屬三百、大辟之罰其屬二百、五刑之屬三千とある。元來、支那人はこの三千といふ數字を、よく用ゐるけれどもそれは必ずしも正確の數を示すといふよりは、寧ろ非常に多いといふ概念を與へるために用ひたものと見る方が解り易い場合が多い。）○於（より、比較を表はす助字。）○要（おびやかす、威力を以て人をおどすこと。）○無（無視する、輕蔑する、その存在を認めないこと。）○非（そしる、誹に同じ。侮り惡しざまにいふこと。）○法（のり、おきて、禮法、制度。）

餘論　本章の首にある「五刑の屬三千、而して罪不孝より大なるはなし。」といふ語を誦しては、實に人をして悚然として毛髪を竪てしめる。世に孝より尊き美德はなく、又不孝より重い罪惡はない。人にして背德の行あるものを罵りて人面獸心といふ。鴉でさへ反哺の孝ありといふ。まして人にし

て烏に及ばずしてはならない。卽ち前に學んだ聖治章第九の「天地の性、人を貴しと爲す。人の行は孝より大なるは莫し。」の句を反復熟讀せんことを望む。

廣要道章第十二

叙說 此の章より以下の三章は、其の內容に於て、皆關聯あり、共に聖人の敎を立てられた本旨を申べ明したものであるが、これらはとりもなほさず、第一章に見えた至德・要道・揚名の意味を推し廣めて說かれたものであるから、何れも皆章の名に廣の字を添へてある。本章は先づ要道に就いて述べられたのである。

子曰、敎民親愛、莫善於孝。敎民禮順、莫善於悌。移風易俗、莫善於樂。安上治民、莫善於禮。禮者、敬而已矣。故敬其父則子悅、敬其兄則弟悅、敬其君則臣悅。敬一人而千萬人悅。所敬者寡、而悅者衆。此之謂要道也。

通釋 子曰く、「民に親愛を敎ふるは孝より善きは莫し。民に禮順を敎ふるは悌より善きは莫し。風

を移し俗を易ふるは樂より善きは莫し。上を安んじ民を治むるは禮より善きは莫し。禮は敬のみ。故に其の父を敬すれば則ち子悅び、其の兄を敬すれば則ち弟悅び、其の君を敬すれば則ち臣悅ぶ。一人を敬して千萬人悅ぶ。敬する所の者寡くして、悅ぶ者衆し、此を之れ要道と謂ふなり。」

通釋　孔夫子が申されるには、人民に、互に相親み相愛するの道を教へようとするには、先づ百行の本であり、萬人共通の天性に因るところの活きた孝道を以て諭し導くより善い方法は無い。何となれば父母に對する敬愛の心が發達すれば、自然に父母以外の人々に對しても、相親しみ相愛するやうになるからである。又、人民に、互に禮儀正しく和順であるやうにさせようとするには、先づ其の本づくところの恭敬と秩序との正しき表現である悌の道に由るのが最善である。悌とは申すまでもなく其の兄に事へて能く溫順なことであるが、兄に事へてよく溫順であるならば、他のすべての長上に對しても、よく恭敬の誠をもつて和ぎ順ふことが出來るからである。次に社會の不良なる風俗習慣を移し易へて、之を純良敦厚に導かうとするには、音樂を利用するのが一ばん宜しい。音樂は最も深く人心を鼓舞し感動せしめるものであるから、其の種目の選擇に若干の注意を加へれば、粗暴なる者をも溫柔に、野卑なる者をも高雅に導くことが出來る。殊に音樂は人の內面に於ける感情を緩和する

兩者の調和を計る上にも、大に有功なものである。更に又、國家にあつて、君臣上下の名分正しく、君は上に安んじて危いことなく、民は下に治まつて亂れることのないやうにするには、矢張り禮といふものの力に賴るのが一番善い。則ち禮は上下の別を辨じ、尊卑の分を定め、苟も凌ぎ犯すことが許されてない。故に上下各〻其の分を守つて、之に安んじ之に治まつて行くことが出來るのである。ところが、此の禮といふものは、外面上には種々樣々の形式となつて現れるものであるが、一歩立入つて之を究むれば、すべては唯一つの敬といふ心の活らきに歸着するので、若しも眞心から出た敬の一念が無いならば、三千の威儀、三百の禮儀が備つたとしても、それらは盡く死禮であり非禮である。之に反して心の中に一つの純眞なる恭敬の意があるならば、之が萬般の禮儀作法となつて、實生活の上に、天地四方に亙つて、有利な作用をなすものである。そこで先づ萬民の上に立つ君が、率先して其の父に、心からなる敬意を捧げて事へたならば、下に居る人々の子たる者は、皆之に倣ひ、安んじて悅んで、自分達の父に愛敬の誠意を盡して事へるであらう。又、上に立つ君が、先づ其の兄を眞に敬したならば、下々の人の弟たる者は、悅んで之に見倣つて、各〻の兄に敬事し、尚又、上に立つ人君が、其の

親を敬すると共に、天下の他の人君に對して、衷心の敬意を表するならば、天下の人臣たるものは、悉く悦服して、忠敬の風は勃然として興るであらう。斯くの如くに、上に居る君が、唯一人の我が父我が兄、又は我が君を敬することによつて、天下幾千萬の人々が、皆その感化を受けて、悦んで善行美德を學ぶやうになるのである。即ち上に立つ人の敬する所は、單に一人ぐらゐの極めて寡い數であるのに、之が影響により、薫化を俟つて、善行美德の實踐に、一切の喜悦滿足を感ずる者が、非常に衆い譯で、國民敎化の上に、此れ程簡單であり、効果の多いことは無い。譬へて見れば、扇子の要を操つて、全體を開閉させる樣なもので、第一章に要道と言つてあるのは、まさしく此の樣なものを指すのである。

語釋　親愛（親しみ愛するといふことは、もと人が生れると共に知るところの親子本然の情緒であつて、この情緒に本づいて、親子以外の關係の人々をも親しみ愛する心が生ずるのである。故に親愛の道を敎へるには、先づその親に盡す愛敬の念、即ち孝を以てするのが第一でなければならぬ。）○禮順（禮儀相順。即ち禮儀を重んじ、長上に從順なること。）○悌（弟が兄を敬愛する。善く兄長に順ひつかへる。）○移レ風易レ俗（風俗を移し易へる。即ち、其の惡俗を變じ去つて、善風に遷り就くこと。）○一人（上に立つ君の敬愛する父、又は兄、又は君を指す。）○千萬人（天下の群子弟、衆民。）

餘論　東西古今に亙り、志士仁人は相呼號して、博愛といひ、相愛と叫んで居る。愛の德たるや廣汎に過ぎて、一見着手し難い樣に思はれるが、而かも其の出るところ、「孝より善きはなし」と孔子は

申述べられた。この聖訓によつて進めば、萬事は容易に解決されてしまふ。問題は直に各自の實行にかかつてゐる。而かも上一人の敬の實行によつて、悦ぶ者千萬人といふ。偉いなるかな實行の力。貴い哉敬の德。

敬といふ字は最も大切なる字である。これをウヤマフと讀めば、廣く他人を尊敬する意味となり、ツツシムと讀めば、專ら我が身を愼み守ることとなる。一人を敬して千萬人悦ぶのも、亦當然のことである。而かも此の一人を敬するものは、强ち國君のみに限るものではない。國家・社會・團體の大より、官廳・會社・家庭の小に至るまで、各々その地位に在る者の直に取り學んで、其の實効を揚ぐべきである。

廣至德章第十三

敍說 前章の意を承けて、第一章に說いた至德の意味を、申ねて述べ廣めたものである。

子曰、君子之教以孝也、非家至而日見之也。教以孝、所以敬天下之爲人

父者也。教以悌、所以敬天下之爲人兄者也。教以臣、所以敬天下之爲人君者也。詩云、愷悌君子、民之父母。非至德其孰能順民、如此其大者乎。

【訓讀】子曰く、「君子の教ふるに孝を以てするや、家ごとに至りて日ごとに之を見るに非ざるなり。教ふるに孝を以てするは、天下の人の父たる者を敬する所以なり。教ふるに悌を以てするは、天下の人の兄たる者を敬する所以なり。教ふるに臣を以てするは、天下の人の君たる者を敬する所以なり。詩に云ふ、『愷悌の君子は民の父母』と、至德に非ずんば、其れ孰れか能く民を順にすること、此の如く其れ大なる者ならんや。」

【通釋】孔夫子が申さるるやう、君子が人民に孝道を教へる方法は、必ずしも家ごとに出張して、一々直接に說き聽かせ、毎日々々顏を合して諭し示すといふやうな煩はしいことをする譯のものでは無い。而かも其の樣な迂遠なやり方をするよりも、遙かに徹底した効果を擧げられるものである。其れは外ではない、君子自身に於て、率先して、敬誠に本づく孝道を實行すれば、下々の者は、皆之に倣つて、其の親に孝養を盡すやうになつて、孝道教育の目的は、遺憾なく達せられることになる。君

子が此のやうにして、孝道教育の爲に力を注がれるのは何故かといふに、凡そ世の多くの人の父たる者は、當然その子弟から敬愛せらるべきであり、その子弟は之を敬愛すべきであるところの正しき道理が、あるがままに實現實行せられることを希ふ仁慈の心の發露に外ならぬ。尙之に教ふるに孝道卽ち恭順の德を以てし、臣道卽ち忠義の道を以てするのも、皆同樣である。君子自ら人の子となり人の弟となり、人の臣となつて、それ〴〵その父を敬し、兄を敬し、君を敬するところの至誠を盡して、世の多くの父、兄、君が當然享くべき孝養、悌愛、忠誠を捧げ致すときは、君子の德は風なり小人は草なりで、多くの民草は、其の風の向ふがまゝに靡き從ふものであるから、自然に感化が普く及んで、やがては世の人の子たるものは、皆君子に倣つておの〳〵其の父を敬し、弟たるものは其の兄を敬し、臣下たるものは其の君を敬することとなつて、やがては君父臣子の悉くが、敬しない者も無く、敬せられない者も無いといふ盛況を呈するのである。有德の君子人の感化力の偉大なることは實に驚くべきではないか。詩經の中に、道の至極を體得せられ、樂しく和らいでゐる心の持主である有德の方が、上の位に居て下さるのは、恰も萬民にとつては父母を戴いてゐるやうに慕はしく嬉しいものであるといふ意味の句があるが、之は萬民が皆其の恩惠に浴し、大德に感化せられて行く感激

を賛へたもので、人徳の極致を身に備へ得られた者でなくては、どうしてかほどまでに宏大無邊の徳化を、萬民の上に徹底させられようぞ。

語釋　家、日（家毎、日毎、或は家々、日々の意である。）○悌（弟に同じ。弟が兄に事へる從順の道。）○臣（臣下たるの道、即ち忠義。）○詩（大雅泂酌の篇に出てゐる。）○愷悌（やはらぎたのしむこと。愷はやはらぐ、又樂しむ。悌も和らぎよろこぶこと。）

餘論　先づ孝を以て說き起し、中ごろ孝・悌・忠（臣）と並列して述べ、再び孝（至德）に於て歸結す。文義共に廣至德の實を得たものといふべきである。

廣揚名章第十四

敍說　此の章は、第一章にある「揚ニ名於後世ニ」の意味を推し廣めたもので、また前に述べた士章第五とも、互に關聯してゐるから、兩方を參照する要がある。

子曰、君子之事レ親孝。故忠可レ移ニ於君ニ。事レ兄悌。故順可レ移ニ於長ニ。居レ家理。故治可レ移ニ於官ニ。是以行成ニ於內ニ而名立ニ於後世ニ矣。

訓讀 子曰く、「君子の親に事ふるや孝なり。故に忠、君に移すべし。兄に事ふるや悌なり。故に順長に移すべし。家に居るや理す。故に治、官に移すべし。是を以て行、内に成り、而して名、後世に立つ。」

通釋 孔夫子が申さるゝには、およそ有德の人が親に事へられるには、必ず孝道に協つて居られるのであるから、其の心を以て君に事へたならば、直に立派な忠臣となることが出來る。何となれば、忠と孝とは、もともと同じい道であつて、たゞ其の事へる對象の違ふために、其の名が異るだけのものであるから。故に昔から求二忠臣于孝子之門一とも言はれてゐるのである。又、有德の人は、内にあつて其の兄に事へられるのには、必ず恭敬溫順、卽ちよく孝の道にかなつて居られるのであるから、外に出て他の長上の者に事へる場合にも、矢張り其の兄に事へた心を、其の儘に用ひさへすれば、十分に恭順の道を盡すことが出來るのである。何となれば悌と順とは、もともと同一の德であつて、たゞ其の對象が內外の相違あるによつて、名前が違ふだけであり、殊に有德の人には、その間の變通が自由であるからである。尙又、自分の家に在つて、能く孝悌の道を踐み行ひ、我が身が修まると共に、よく一家を治め齊へて行く程である以上、其の道を以て官政にたづさはるならば、必ずよく其の

職責を完うして、立派な成績を擧ぐるであらう。何となれば、大賢孟子は、天下の本は國に在り、國の本は家に在り、家の本は身に在りといひ、大學には修身・齊家・治國・平天下の道は、皆脈絡貫通してゐるものであるとも述べられてあるから、かういふやうに、內に在つて孝悌の行ひが遺憾なく遂げられる以上、外、國家社會に立つても、完全に忠順の道を達することが出來て、兄弟親戚の者が、其の孝悌を喜び稱へると共に、僚友君長も亦其の忠順を嘉し賞めて、衆人の模範と爲し、顯位に推輓して、其の名聲一時に揚がるのみならず、やがては其の渾然たる大德と、赫々たる功績とは、永く後世にまで不朽となり、第一章にいはゆる名を後世に揚げ、以て父母を顯はすといふことが、さながらに實現せられて來るであらう。

語釋　移（とりかへる、立場をかへる。）○理（治に同じ、をさめる。）○行（孝悌の二者を指す。）○內（家の內家庭。）

餘論　虛名は固より君子の顧みる所ではない。否假令それが其の實を伴ふものであつても、名聲そのものは君子の希ふところではない。けれども多くの場合に於いて、名は實の賓であり、形に添ふ影の如きものである。其の實があれば、必然的に其の名も伴ふものであることは、形のあるに隨つて影があるやうなものである。卽ち其の人が世を去つた後に、其の名が稱せられないといふことは、恐ら

くはこれ其の人の生涯に於て、語り傳へるに足る善美を成さなかつたといふことになりはしないか。聖人が君子疾沒世而名不稱焉と戒められたのも勿論是の意味に外ならぬ。而して後の君子が、孜孜として勉め勵んで求め願ふところも、固より此の名であり、其の實であることを辨へなくてはならぬ。彼の晋の桓温が、「既に芳を後世に流す能はずんば、復臭を萬歳に遺すに足らざらんや」と、豪語したる如きは、誠に謬つた量見である。男子の揚ぐべきは芳名であつて、惡名ではない。惡名を遺すは、父母を辱めるもので、父母を顯はす所以ではない。豪傑の士は、名譽に捕はれて、やゝもするとかゝる大それた考を起すものがあるのは、實に名教の罪人である。最も愼しまねばならぬ。

諫諍章第十五

叙説 諫・諍の二字には、共にいさめる、いさめ正す、忠告する等の意味がある。即ち此の章は、君父に事へる者は、若しも其の君父に不義不善のことがあつた場合には、忌憚なく之を諫めて、正義善行に還すだけの心得と決心とが無くてはならぬ。寧ろ其れが眞の臣子たる者の本分であることを說かれたのである。

曾子曰、若夫慈愛恭敬、安親揚名則聞命矣。敢問、子從父之令、可謂孝乎、子曰、是何言與。是何言與。昔者天子有爭臣七人。雖無道不失其天下。諸侯有爭臣五人。雖無道不失其國。大夫有爭臣三人。雖無道不失其家。士有爭友、則身不離於令名。父有爭子、則身不陷於不義。故當不義、則子不可以不爭於父。臣不可以不爭於君。故當不義、則爭之。從父之令、又焉得爲孝乎。

訓讀 曾子曰く、「夫の慈愛、恭敬、親を安んじ、名を揚ぐるが若きは、則ち命を聞けり。敢て問ふ子父の令に從ふは孝と謂ふべきか。」子曰く、「是れ何の言ぞや。是れ何の言ぞや。昔は天子に爭臣七人あり。無道と雖も其の天下を失はず。諸侯に爭臣五人あり。無道と雖も其の國を失はず。大夫に爭臣三人あり。無道と雖も其の家を失はず。士に爭友あれば、則ち身令名に離れず。父に爭子あれば、則ち身不義に陷らず。故に不義に當りては、則ち子以て父に爭はざるべからず。臣以て君に爭はざるべ

からず。故に不義に當りては則ち之を爭ふ。父の令に從ふ、又焉んぞ孝と爲すを得んや。」

通解 曾子は孝道に關する孔夫子の御示教を拜聽して、初には其の德のあまりに偉大なるを嘆じ、次に進んで其の德の細目に就いて熱心に質問したところが、或は慈愛、或は恭敬、或は親を安心させ或は名を後世に揚げる等に亙つて、孔夫子はいとも懇切に說き諭して下さつたので、殆どすべてのことを理會したやうには思はれたが、尙一つ氷解しない大きな疑問が殘つてゐたので、いよ〳〵思ひ切つて、之をお尋ねすることにした。曰く、「今までにお敎へ下さいました御訓諭の條々は、謹んで拜承いたしましたが、尙此の上に、强ひてもう一言お尋ねいたしたうございます。それは前に敎へていただきました數々のお言葉によつて推し考へまして、つまるところ、子たる者は、何時如何なる場合にも、たゞもう親の言ひ附け通りに從つて行きさへすれば、それで申分の無い孝といふことになりませうか。」と言ひ終つて恩師の顏を仰ぎ見た曾子が全く意外なことには、「今更お前の口からそんな質問が出ようとは思ひも寄らなかつた。さてさて何とした言葉であるか。何とした言葉であるか。」といとも心外らしい口調で二度までも繰り返されたことであつた。併し大德の孔夫子には、直に御納得になられたと見え、顏を和らげ聲を正しくして、徐に諭し示されるやう、「これまでに說き告げたところは、

すべて順調の場合に於ける一般的の孝道である。然るに人の身體が健康の狀態を普通とするけれども、時には變態に陷つて病氣を招くことがあるやうに、孝道に於ても亦變調の場合に於ける特殊的の心得が必要である。さうだ、まだそれを話して無かつたから、今此に述べよう。人が最も尊敬し、最も親愛する君父の身の上にも、萬々そのやうなことが無いやうに祈つて止まないところではあるけれども、矢張り人間である以上、時に其の本性に變態を來して、善言善行を陳べる代りに、惡言惡行を恣にすることが無いとも限らぬ。此の樣な場合には、倘君父の命令に絕對的服從をするのは、これ君父の惡を助けて成就させることになるから、斷じて避けねばならぬ。されば昔の天子樣には、其の過失非行ある場合に極力お諫め申す臣下が七人も就いて居られたものである。故に君が一時どんな無道となられても、これらの爭臣の力によつて、天下を失つて滅亡するまでには行かずに濟んだ。又諸侯の下にも、同樣に強く諫める臣下が五人程も居たものであるから、たとひ一時無道の振舞があつても、其の國を失ふまでにはならずに濟んだのである。それより降つて大夫即ち家老などになつても斯ういふ爭臣が三人位居つたので、よしんば一時無道の行があつたとしても、この爭臣の爲に匡し救はれて、その家格を失ふこともたく濟んだのである。更に降つて士の階級の人達になると、臣下を

養ふ餘裕がない。從て爭臣といふものはあり得ないが、其の代りに爭友ともいふべき益友があつて、我が過惡に對しては心を盡して忠告してくれるから、再び改心して善に遷ることが出來て、從來受けて來た名譽を失墜せずに、益〻其の成功の道に進み入ることが出來る。更に又一般人民の父たる者にあつては、成德の子があつて、父の言行に少しでも不義無道なることがある場合には、時には父の機嫌に忤つてまでも、極力之を諫め止めてくれるならば、不義の淵に陷ち溺れることもなくて、再び心を正し身を修めることが出來るのである。斯樣な譯であるからして、平生無事の場合には、つとめて父の意を迎へ志に從ふのが、子たる者の義務であるけれども、前に述べたやうに不幸にして父の意志言動が變調に陷つた場合、卽ち若しや誤つて正義人道に背叛する傾きのある時、而して之が直に父の面目、一家の興廢にも關するやうな重大な問題であるならば、寸分の猶豫も無く、我が誠意を盡して之を諫め奉らねばならぬ。君臣の間柄にあつても全く同樣である。固い信念の下には一死以て君父の非行を諫め奉るといふだけの覺悟と手段とを、平素から心の奧底には藏して置く必要がある。之を要するに、人の子たり臣たる者が、その父たり君たる者に對するの道は、其の最も普通の場合には、固より恭敬從順でなくてはならぬし、又それで十分であるが、萬一不幸にして君父の言行の上

に變調を生じた時には、臣子たる者は飽くまでも毅然とした決心をなし、猛然と奮ひ起つて、我が至誠の力で其の非違不義を救ひ匡す方法を講じなければならぬ。何時如何なる場合に於ても、たゞ一樣に親の言ひ附けに盲從するといふことだけでは、どうして完全の孝道といふことが出來ようぞ。と說き諭された。

【語釋】　矣（或物を指し示していふ語、此處では至德、卽ち孝道を指す。）　○聞命（命は敎のこと、聞は理會すること。）　○令（命令、卽ち言ひ附け。）　○與（ヤ又はカと讀む、疑問を表はす助字。）　○昔者（二字でムカシと讀んでも、昔ハと讀んでもよい。）　○爭臣（君の不善を諫むる臣、爭といふ字には相手の心を犯す意がある。）　○七人。五人。三人（七五三の數に就いては、いろ／＼の說があるが、先づ數人と心得て居ればよい。）　○無道（道義の軌範を踏み外づす。心得違ひをする。必ずしも惡逆無道の意味ではない。）　○令名（令は善であつて、令名はよい評判、名聲。）　○焉（イヅクンゾ、どうして。）

【餘論】　凡そ天に陰晴のある如く、物には原則と變則とがあり、事に尋常と非常とがある。尋常の原則を知るといふことが最も肝要であるには相違ないが、ただ此の一面だけを辨へて、他の一面には非常の變則あることを知らない者は、圓滿完全の智を備へた者といふことが出來ぬ。われらが今專ら學びつゝある孝道の上にも、亦此の心得が極めて大切であることを、例の曾子の質問によつて、懇切に說き示されたのが本章である。前の數章に亙つて述べられた慈愛・恭敬・安親・揚名等、此處にいはゆる尋常孝道の原則と共に、此の章に說かれてある非常孝道の變則、卽ち諫諍の道を理會し體得してこそ

眞に圓滿完全の孝道に徹した者といふべきである。

さはさりながら、諫諍の孝といふことは、孝道の變則なる丈一層六ケ敷しい。第一に今已れが諫めんとする所が果して道理に間違ひなきや否やを充分に研究しなければならぬ。研究し盡した結果、道理に間違ひなしとせば、第二に之が實行に移る。何しろ親の意にさからひ、親に意見を述べるのであるから、平常の場合よりは一層顏色を和げ、言語を謹み、眞心を披瀝して、親の怒に觸れぬ樣に致さねばならぬ。若も怒に觸れたならば、なほ一層恐懼し、再三再四已れの考の誤なきや否やを熟慮し、親の機嫌の直るのを待ち、又倍舊の恭敬と至誠を以て、委曲を盡し、涕を流して諫める。精誠は天に通ずともいひ、苟しくも子たるもの丶熱誠が十二分にあるならば、鬼神も感ぜしめることが出來る。況や人をや。どんなに頑固な親でも、遂にはわが子の至情に動かされて悔い改めるに至るであらう。その時は又なほ一層氣をつけねばならぬ。親を改心させたのは誠に喜ぶべきであるが、親の意見に從ふことの出來なかつたのは如何にも悲むべきことである。決して親を屈伏させたといふ樣な考をしてはならぬ。親をして滿足せしむる樣に致さねばならぬ。論語の「子路」篇に、直躬の話が出てゐる。即ちその父が羊を攘んだのを子が之を證明したので直躬の名を得たといふのであるが、孔夫

子は之に贊成せられないで、「我が黨の直なるものは是に異なり父は子の爲に隱し、子は父の爲に隱す直其の中に在り」と述べられた。親の不正を證明したといふことは、文字通りに解釋すれば直には相違ないが、父子の間に行はるべき道ではない。父子の間は互にその非をかばふのが人情である。一時の非をかばひ、その中に子の親を思ふ愛情を以て父を正しき道に導き再び惡事をしない樣にしむけてゆかねばならぬ。卽ち父が子の爲に隱し、子が父の爲に隱すこと、それ自體は決して正直とはいへない。然し父子の相かばふ中に正直の筋合があるのである、さすがに聖人の言だけあつて意味が深重である。又左傳には「大義親を滅す」といふ語もあるが、それ等は非常な場合であつて、容易に人の口にすべき語ではない。小松內大臣重盛がその父淸盛に向つて「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず。重盛の進退こゝに窮まる」と。泣いて諫言を進めて、淸盛を改心せしめられたことは歷史に有名なことで、重盛の如きは實に忠孝兩全の人と謂ふべきである。しかし之も畢竟重盛の如き忠孝の人で始めて出來ることで、一般のものが重盛を學んでやたらに兩親に意見をいふ樣なことをしてはならない。今の若い人は兎角老人を敬はないで、直に時代が違ふなど稱して、親の言ふことを聽かず、却て意見をいふもの等があるのは、誠に心得違ひである。本章の意味をよく熟讀玩味

して、決して取り違へる様なことがあつてはならぬ。

應感章第十六

叙説 應感といふのは、心が物に應じてうごくことをいふので、やがて又信心の誠が神佛に通ずることをいふ。普通に感應といふのと同じである。此の章も古い本には感應となつてゐるのもあるが、一般に應感としてあるからそれに從つておく。大意は、孝心の極致といふものは、天地鬼神にまでも、あらたかなる感應を及ぼすものであることを述べて、其の力の偉大なることを嘆美せられたものである。

子曰、昔者明王事父孝、故事天明。事母孝、故事地察。長幼順、故上下治。天地明察、神明彰矣。故雖天子必有尊也。言有父也。必有先也、言有兄也。宗廟致敬、不忘親也。脩身愼行、恐辱先也。宗廟致敬、鬼神著矣。孝悌之至、通於神明、光于四海、無所不通。詩云、自西自東、自南自北、無思不服。

【訓讀】子曰く、「昔明王父に事へて孝なり、故に天に事へて明なり。母に事へて孝なり、故に地に事へて察なり。長幼順なり、故に上下治まる。天地明察にして神明彰はる。故に天子と雖も必ず尊ぶことありとは、父有るを言ふなり。必ず先にすることありとは、兄有るを言ふなり。宗廟に敬を致すは親を忘れざるなり。身を脩め行を愼むは、先を辱めんことを恐るるなり。宗廟に敬を致せば、鬼神著はる。孝悌の至、神明に通じ、四海に光き、通ぜざる所なし。詩に云ふ、『西より東より、南より北より、思ひて服せざる無し』」と。

【通釋】孔夫子の申さるるには、昔の明德ある天子が、其の父に事へる場合には、ただもう誠意を盡して敬愛を捧げられたものであるが、其の心を以て、上は彼の自彊息まざる天日運行の道を手本として、與へられた天職、即ち生民愛撫の爲に日夜精勵せられたので、從つて其の至誠の德は天下に光り輝いて、萬民の齊しく仰ぎ望むところとなつた。又其の母に事へられるにも、同様に至誠を以て敬愛を盡されると共に、下は彼の萬物を載せて生々化育休むことのない大地の道に法つて、授けられたる本務、即ち人類養護の爲に、晝夜の別なく盡瘁せられたもので、由て其の至誠の德は地上至らぬ隈なく行き亙り、萬物悉く懷き親んだものである。(以上は殊更に父と母、天と地とを別々に分けて說か

れたけれども、之は例の言葉の上の文といふもので、要するに至德を明かにして父母に事へる爲に、自分の心と父母の心とが、ぴつたりと一致して、全く一つのものになつてしまふまでになり、萬民の上に無限の感化を及ぼすことを、天地と其の德を共にし、日月と其の明を合せて、天地明察の妙用と一致融會すると說き述べられたのである)。かくの如く孝道に於て廣大なる德を發揚せられると共に、又悌道に於ても、よく其の至誠を盡して、自分よりも尊長者は之を敬し、卑幼者は之を慈んで、孰れにも和睦親愛の實を遂げられたものであるから、社會の上下を通じて、皆其の分に滿足し、秩序を正しく守り、國家が泰平に治つて行つたのである。いつたい天地が萬物を生育して行くのと、父母が吾吾を生育してくれるのとは、全く同一の道と見てよい。それで吾々が誠意を以て父母を敬愛すれば、必ず父母が滿足して下さるやうに、萬民の慈父と仰ぐ天子が、一面に於て天の子として、滿身の至誠を捧げて天地の神明に事へるならば、卽ち天地の大道に適つた行をばかり重ねて行かれるならば、其の人民も國家も、乃至は禽獸草木に至るまでが、皆其の聖明の餘澤を蒙つて、悉く繁榮幸福に赴くことが、殆んど必然的の歸結となつて來るのである。これ卽ち天地神明の靈妙なる作用の顯現として此の喜ぶべき結果が惠まれたもの、言へ換へれば、上御一人の至極に達した孝道が、能く天地を動か

し、神明を感ぜしめた反應として、かういふ有難い効果を齎らすものと見るべきである。斯樣な譯で天下の至尊と仰がれる天子にあつても、尙心から尊敬奉事せられるお方が嚴存するものであるが、それは外ではない、其の御父上であらせられる。又推先敬事せられるお方もお有りになるといふのは、其の御兄上であらせられる。それは天下中で最も重く貴い孝悌の道を、御自ら實行遊ばされるが爲である。且此の事は啻に其の御父兄の御存命中だけに止まるのではなく、旣にお亡くなりになつた後にも、否遠い御祖先にまでも遡つて、代々の御靈廟に對して、御追遠の至誠と敬虔とを以て、嚴肅なるお祭祀を執り行はせられるといふことは、とりもなほさず、代々の御親の御恩德を忘れ給はぬ御孝心の發露である。又平素の御動作が、一々天下の正義に違はぬやう、日常の御振舞が、すべて中庸の大道に適ふやうにと、御注意を加へさせられるのも、萬一にも父母先祖から與へられた身體髮膚幷に其の德業を毀傷して、汚辱を父母先祖にまで及ぼすやうなことがあつては相濟まぬとの大孝心の發揮に外ならぬのである。かういふやうに誠敬を盡して、父母先祖の神靈に對しても奉仕を怠らない爲に父母祖先の靈魂もまた其の至誠に感動して、いはゆる髣髴として來り、滿足して之を享けられ、やがては冥々のうちに御加護を垂れ給ふといふことにもなるのである。之を要するに、孝悌といふ大德の

至極に達せられると、其の結果として、目に見えぬ處では天地の鬼神にまでも感通し、目に見える處では山の奥海の涯までも耀き渡つて、到る處に其の偉大なる作用の顯現を認めることが出來るものである。かの詩經の中に「西からも東からも、又南からも北からも、天下の萬民が悉く王の大德を思慕して、信頼歸服して來ない者は無い。」といふ句があるが、孝悌の德の普く行き亙つた明天子に對しては、まさしく其の通りであるに違ひない。

語釋 明察（共にあきらかなことであるが、明は廣く大きく照しわたり、察は細かにくはしく行きわたる意味である。中江藤樹先生は「明は光明四通、照さざる所なきの意。察は著なり。照著掩ふべからざるの意。明察本と一貫なり。只天地に於て分屬異なるあるのみ。」といつて居られる。）○神明彰（神明は天神地祇をいふ。彰ははつきりと現れて、よく認めることができること。此處では、天地の神々の德が、聖人の善行に感應して、はつきりと現はれて來る。即ち幸福が來されること。）○鬼神著（鬼神は父母先祖の靈魂をいふ。その鬼神が集つて來て、當主が誠敬をつくして祭祀する孝心を享け認めること。）○光于四海（光は耀に同じ。天地四方にかがやきわたること。）○詩（詩經大雅の文王有聲といふ篇にある。）○服（信賴服從して來ること。）

餘論 敬天畏命は文化の開けない上代人の信仰である。すべて凶年饑歲は、時の爲政者の不德に對して、天地鬼神が、或は反省を促し、或は懲罰を課せる意味で降し給ふものであると、堅く信じてる る者多い上代にあつては、かうした說明は至つて爲し易くもあり、又效果の大きいことは當然であるが、併し之は昔の人なるが故に、智識が低級なるが故にといふ理由だけで片附けて仕舞ふべき問題で

はなく、現代の吾々に於ても、もつともつと深く考察する價値のあることで、寧ろ一つの信念として將た信仰として、かういふ形式の下に修省を積んで行くといふことが、極めて有益であり又必要であることと思ふ。大正癸亥の關東大震災の如きも、畏くも明治天皇の神怒に觸れたのであるといふ人もある。誠に文恬武熙、驕奢淫逸に流れ、上下交々利を征りて國危しといふ樣な今日に在つては、かく觀ずるのも無理はない。決して固陋の見として黜くべきでない。國民たるもの猛省して、勤儉の風を起し、明治天皇の聖旨を奉體して、興國の氣運を振作せねばならぬ。

事君章第十七

叙説　第一章に「夫孝始於事親、中於事君」と述べられた語に基いて、君に事へる者の心得を說かれたのである。

子曰、君子之事上也、進思盡忠、退思補過。將順其美、匡救其惡。故上下能相親也。詩云、心乎愛矣、遐不謂矣。中心藏之、何日忘之。

【訓讀】子曰く、「君子の上に事ふるや、進んでは忠を盡さんことを思ひ、退いては過を補はんことを思ふ。其の美を將順し、其の惡を匡救す。故に上下能く相親しむなり。詩に云ふ。『心に愛す、遐ぞ謂はざらん。中心に之を藏す、何の日か之を忘れん。』」

【通釋】孔夫子が申さるるやう、有徳の君子が其の君に事へる場合にも、其の父に事へるのと同樣の心掛けを有たれるもので、先づ進んで君のお側近く奉仕するときには、有らん限りの忠誠を盡して、少しでもより多く君の御爲になるやうにといふ事にのみ心を注ぎ、既に退いて我が私宅に歸つた時には、如何にして我が君の過失缺點（大なり小なりの）をば補ひ奉るべきかといふ事に就いて、只管心を碎かれるのである。かくて君の善心善行に對しては、專ら之を勸め之を助け、或は之に從ひ之に和するやうにして、其の益々發展擴大に及ばんことを希ひ、不幸にして惡心暴行のある時には、一日一刻も早く其の惡心を矯正し、暴行を諫止することに努力すべきであつて、之が爲には、至誠に本づき禮儀を失はない程度に於ては、或は忌憚遠慮の無い言動さへも許さるべきである。斯くあつてこそ本當に君臣上下の間柄が始めて能く一致し、心を同じくし德を同じくして、國家の進運といふことが一途に望まれるのである。詩經の中に、「心の底から我が君を愛敬してゐるのだもの、苟も君の御爲

になる事であるならば、何うして申し上げずに居られようぞ。我が君大事の一念が、絶えず心の奥に貯へてあるのだもの、何時如何なる場合にも、ゆめ君の事が忘れられようぞ。」といふ意味の句があるが、如何にもよくお側近くに仕へる忠臣の心情を述べ表はしてゐるではないかと。

語釋 上（君を指す。）○進（參内して君に進見する時。）○退（退朝して私宅に起臥する時。）○將順（將は助ける。順は從ふ。君の心を承けて、之を助け之に從ふ。）○匡（ただし救つて惡事を止めること。）○詩（小雅の隰桑といふ篇。）○心乎愛矣（「愛を心にす」といふ讀み方もあるが、心といふ字の意味を強めるために、倒語法の形をとつて心を上に出したのであるといふ説に從つて「心に愛す」と讀んで差支ない。）○遐（何といふ字と同音のため、古は相通じて、なんぞ、又はいづくんぞと讀む。）

餘論 高位高官に在つて、大君の側近に奉事してゐる者が、日夕服膺すべき至言であることは言ふまでもないが、倘之を世のすべての人が熟讀玩味するならば、今日の所謂家庭の不和も、學校騷動も、將た勞働爭議も、其の他多くの内訌紛擾は、自然に消滅し、未然に防遏し得るであらう。上下相愛し相親むことは最も大切である。親愛の情あれば源泉滾々として流れ出で、萬事が圓滿に解決せられる。下に在るものは勿論のこと、上に在るものゝよく心掛くべきことである。

喪親章第十八

【叙説】以上十數章に亙り、人としてあらゆる地位境遇に於ける者の孝道を、それ〴〵最も丁寧懇切に説き盡されたのであるが、最後に及んで其の最も特別にして、而かも最も大切なる場合、即ち親の死に事へる道を教へ示されたのが本章である。

子曰、孝子之喪レ親也、哭不レ偯、禮無レ容、言不レ文、服レ美不レ安、聞レ樂不レ樂、食レ旨不レ甘。此哀戚之情也。三日而食、教レ民無下以レ死傷レ生、毀不上レ滅レ性。此聖人之政也。喪不レ過二三年一、示二民有一レ終也。

【訓讀】子曰く、「孝子の親を喪ふや、哭して偯せず、禮に容なし、言は文らず、美を服して安からず、樂を聞きて樂まず、旨を食ひて甘からず。此れ哀戚の情なり。三日にして食す、民に死を以て生を傷つくることなく、毀して性を滅せざるを教ふ。此れ聖人の政なり。喪三年に過ぎざるは、民に終有るを示すなり。」

【通釋】孔夫子が申されるやう、まことの孝子が、不幸にして其の父母を亡くした時には、歎き悲みの餘り、勿論泣く。而かも其の泣くのは、大聲あげて激しく哭くので、息も聲も絶え〴〵になる程だ

から、他人の死んだ時に、落ち着き拂つて、餘聲を長引かせる形式的の泣き方のやうなものでは無い。喪中とり行ふところの様々の禮法にしても、一々の動作に修飾したしなかたちなどをするものではない。言葉にしても必要な用事を足すだけで、あやを添へたり飾り附けたりなどしない。立派な着物などを著て好い氣持ちになつて居れるものではない。平素好きな音樂を聞けば、却て哀みの心をそそるやうなものであるから、隨つて聞きたくもない。いつもおいしいと思ふ御馳走に對しても、胸のふさがりの爲に、よくは喉にも通らないので、食べたいとさへ思はぬ。此等の事はすべて父母の死に對する悲み歎き憂ひ痛みの眞心の發露であつて、いはゆる自然の人情である。（今日心ある人々が親の喪中にはなるべく粗衣粗食をなし、會衆の席へ出ることを差控へ、歌舞其の他娯樂的機關に遠ざかつて、只管謹愼遠慮を守つてゐるのは、何か特別の規則禮法に遵つてゐるもののやうに考へる向きもあるが、いかにも禮記といふやうな書物には、此等に關する様々の事柄が定め示されてあるけれども、それは決してそんな形式を、無理に編み出したり作り上げたりしたのではなくて、もともと孝子のかうした自然の人情に本づいての事であることが了解せられるであらう。）さりながら、いかに親を思ひ慕ふ眞情とはいへ、餘りに哀しみの度を過ごすことはよろしくないから、そこで聖人が禮法の上に制

限を設けて、親が死なれた後三日目からは粥を食べるやうにと定められてゐる。これといふのも親の死んだ當初の二三日間は、誰しも悲しさ痛ましさの餘り、物が喉へは通らないのが普通であり、又通常の人は二三日位は絶食しても、さして健康を害する程の影響を及ぼすものではないが、それ以上長くなると、身體に故障を生じ易い。さうなつては又一大事で、親の死を哀しむがために、生き殘つた我が身を害し、悲しみのため瘠せやつれが嵩じて、遂に自分の壽命をまで縮めてしまふやうな事があつては、貴ぶべき父母の遺體を傷り滅ぼすといふ譯になつて、却て思ひもよらぬ不幸の罪に陥ることになるから、之を戒め救ふ爲に、特に三日目からは飲食するがよいといふことを教へ制められたのである。斯のやうな教は、實に聖人が、萬民の人情に本づき、中庸を失はないやうにして、よく孝道を全うし得るやうにとの思召による、大きな政の一つである。同様に、亡き親を追ひ慕ふ孝子の心根は、何時になれば止み果てるといふことは無いけれども、かくては際限のないことで、いつまでもいつまでも、生業を怠り、交際を缺くといふことも、また親の本意に背くことにもならうから、專ら屋内に閉ぢ籠つて、遠慮謹愼の生活も、先づ足掛け三年（普通二十五ケ月といふ）位で切り上げるがよいといふことにして、限り制められたのも、聖人の有難い心遣ひに出るのである。

語釋　喪（うしなふ。なくすること。）○哭（なくこと、細聲にて涕あるを泣といふに對して、大聲あげてなくことをいふ。やがて又、人の死を悲みて泣きさけぶ禮をも哭といふ。）○偯（泣く聲の餘音を長くすること。形式的の泣き聲。）○禮無レ容（容はかたち、すがた、身心共にあわただしいために、身なり身づくろひなどして居られぬ。）○言不レ文（文はかざる。修めととのへること。言葉は實用だけに止まる。）○聞レ樂不レ樂（上の樂は音樂、下の樂は樂しむ意。）○服レ美不レ安（美は美衣美服。服は著る。身につける。）○食レ旨不レ甘（旨はうまいもの、美味。甘はうましとする。）○哀戚之情（哀はかなしむ。戚はいたむ。うれへる。一本には戚又、慼の字を用ひてあるが、全く同義。）○以レ死傷レ生（死は親の死、生は自分の生命、傷はやぶる、そこなふ。）○毀不レ滅レ性（毀は悲しみて瘠せること。性は生命、壽命。）

爲二之棺椁衣衾一而擧レ之、陳二其簠簋一而哀二戚之一、擗踊哭泣、哀以送レ之、卜二其宅兆一而安二措之一、爲二之宗廟一以レ鬼享レ之、春秋祭祀、以レ時思レ之。生事二愛敬一、死事二哀戚一。生民之本盡矣。死生之義備矣。孝子之事レ親終矣。

通讀　之が棺椁衣衾を爲りて之を擧げ、其の簠簋を陳ねて之を哀戚し、擗踊哭泣、哀んで以て之を送り、其の宅兆を卜して之を安措し、之が宗廟を爲り鬼を以て之を享し、春秋祭祀、時を以て之を思ふ。生けるに事ふるに愛敬し死せるに事ふるに哀戚す。生民の本盡く。死生の義備はる。孝子の親に事ふること終る。」

通釋　（以下葬送及び祭祀に就いて、詳しく述べられたのである。）やがて此の死んだ親の爲に、棺・

外棺から、肌着や被ひ布き物まで、一切手落ちの無いやうに整へて之を棺の中に納め、其の靈柩の前には、角や圓や樣々の器に、それ〴〵米や黍などを盛り列べて供物をなし、心ゆくばかり戚み哀みいよ〳〵野邊への送葬に當つては、ます〳〵悲痛の情も高まつて來るがままに、或は胸うちたたき、或は地團駄踏み、或は聲を張り上げて泣き、或は涙を流して泣くなど、心の限り精限りに、哀しみを盡すのである。又其の墓地や塚穴に就いては、前以て其の吉凶を卜つて視て、土質其の他の條件の最も勝れた所を選び定め、之ならば何等禍害の及ぶ心配の無いといふまでにして、安置し埋葬を濟ませ次には之が爲に宗廟を建て（平民階級の者は、其の家の內に適當な祭壇を設ける）此所に改めて之を鬼神として祭り鎭め、四季の折々には必ず祭祀を執り行ひ、多くの年月が經て後も尙、命日其の他の時々に、御生前の事どもを思ひ出し偲び合つて、いつまでもいつまでも忘れないやうにすることである。さて前から段々に述べて來たやうに、父母の御存命中には、專ら愛敬の至誠を捧げて事へ奉り、不幸にして御死去に際したならば、今述べたやうに哀戚の至情を致して事へ奉るならば、玆にすべての人類が履み行くべき根本の道・卽ち孝德は遺憾なく盡くされた事になるのである。同時に父母の生死を通じて・終始一貫至誠奉仕の義理も、悉皆完全に成し遂げられた事になるのである。眞の孝子た

る者の爲すべき孝行も、もうこれ以上には何もある譯のものではない。

語釋　棺槨（棺は、屍をぢかに斂めるはこ、くわんをけ、うちくわん。槨は、棺を入れる外ばこ、うはひつぎ、そとくわん。）○衣衾（衣は屍に着せるもの。衾は尸の上を覆ひ、又下に布く衣類。）○擧（屍を擧げて棺の中に納めること。）○簠簋（神に供へる黍稷（きび、穀類）を盛る器、木又は瓦などにてつくる。外が四角く内が圓いのを簠といひ、外が圓く、内の四角なのを簋といふ。）○陳（つらねる、ならべる。）○擗踊（擗は手を以て胸をうつこと、（主に女がする。）踊は足で大地を踏みつけること、（男の所作。）哀慕しながら野邊の送りをするときの表情。）○宅兆（はか、墓所。宅は墓穴。兆は墓場の區域。）○卜（うらなひ。龜の甲を灼き、その縱横のわれ目を見て、吉凶を判斷する。又、うらなひて定めるところから、えらぶ、選定するの意味に用ゐる。）○安措（安らかに置くこと。一本には厝といふ字を用ひてある、措に同しい。）○宗廟（祖先のおたまや。廟は貌で、祖先の容貌を髣髴する所以。）○以レ鬼享レ之（鬼神に事へるの禮を以て之を祭ること。享は物を神佛に供へてまつる。）○以レ時思レ之（死後年月を經ても、毎命日其の他の折にふれては思ひ出し、追ひ偲ぶこと。）

餘論　生事愛敬より以下、最終に至る五句は、勿論本章の結語ともなつてゐるが、同時に、否寧ろ孝經全篇の結語である。篇中先生といひ、明王といひ、聖人といひ、君子と稱して來た者を、最後に孝子といふ語によつて歸結させたのも、聖人の尊い妙旨の存する所だと、先哲は深い注意を拂つてゐる。

孝經の首に、孔夫子は「それ孝は德の本なり」と宣はせられ、論語には有子の語を載せて、「孝弟は仁を爲すの本か」と述べてある。百行の本は實に孝に在り、人の行、孝より先なるものはない。古人も「忠臣を求むるは必ず孝子の門に於てす」と申された。諸君、御同樣に幸に皇國に生れたから

には、遠くは孝謙天皇の孝經家藏の聖旨を畏み、近くは明治天皇の下したまへる教育勅語の「汝臣民父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ」の御趣旨を奉體し奉り、國民道德の根柢たる孝道に勇往邁進して、父母に孝、君に忠を盡し、忠孝一本の大義を明にして、天壤無窮の皇運を扶翼し奉り、進んで孝道を世界に敷いて、世界平和の基礎を堅めなければならぬことと思ふ。是れ實に孝經の大義であり、日本民族の尊き使命である。

昭和二年九月廿二日、菁莪書院の無逸堂中に識す

節山學人

昭和二丁卯元旦書㆑感

守㆓得一經㆒遺㆓子孫㆒　黃金萬鎰詎須㆑尊

人生五十知㆓天命㆒　只願文章報㆓國恩㆒

孝經新釋終

大學新釋

文學博士　諸橋轍次著



大學新釋目次

大學新釋目次終

大學新釋

文學博士　諸橋轍次著

解題

大學といふ名前が、どういふ意味で附けられたかと云ふことに就いて、昔からいろ〳〵の學者が說を立てたが、漢の鄭玄といふ學者は、大學といふのは、之れを學べば、廣く事物の理を知つて政事をすることが出來ると云ふことに、解釋をして居る。又隋の學者の劉炫といふ人も、略々それと同一の考を持つて居る。此の二つの說に據れば、大學といふ名前は、大人の學問、卽ち政を爲す人の學問であるといふ意味に解さなければならぬ。然るに朱子になつて來ると、大學といふものは　昔の大學で、敎育した方法を書いたものであると云ふことに說いて居るのである。斯う云ふやうに名前に就ては幾多の說明があつて明瞭ではないが、今暫く朱子の說に從ひたいと思ふ。

大學を著した人が何人であるかといふ事も、昔から今日に至るまで未だ明瞭になつては居ない。宋の程子は、大學は孔氏の遺した所の書物であるといつて居る。朱子も、同じく其の說を奉じて、大學は孔子の遺書である。併しそれは全體に就いて云ふのではない。最初にある經の一章だけが孔子の考で、あとの傳の十章は門人の曾子の筆であると云つて居るのである。何故に作者として曾子が加はつて來たかと云ふことは明瞭ではないが、學統から言へば、孔子・曾子・子思・孟子、これが所謂學問の傳統であるから、孔子に論語あり、子思に中庸あり、孟子に孟子がある點から、其の中間の曾子に大學を加へるといふことは、都合が好いといふ爲にやつたのかも知れない。又或は大學の中に書いて居るものは、孔子の語以外には、曾子の語丈が出されて居る。これが又曾子の作であるといふ說の起つた原因であらうかとも思はれる。

又一方賈逵の言葉であると云つて、大學は子思の作なりと主張するものもあるが、併し此の說に就いては幾多の反對があるから、到底行はれることは出來ない。日本の伊藤仁齋は、齊の國、魯の國あたりの學者で、詩經、書經といふやうな古典に熟して居つた人が作つたのであらうといふ說を述べて居る。斯の如く大學の作者に就いては、幾多の說があつて明瞭ではないが、大體朱子に從つて、經を

孔子の意、傳を曾子の作とする方が最も多くの人の信奉する所であるから、やはり其れに從ひたいと思ふ。近時になつて幾多の考證學が發達して來て、或は大學は漢代以後の作であらうといふことを云ふ者もあるが、是尙以て定說とする譯に行かぬと思ふ。

大學はもと禮記の中にあつた篇の名前であつて、單行の書名ではない。然るに宋の時代に至つて、之が別に行はれる樣になつたのである。仁宗皇帝の時分に、進士の試驗のあつた場合には、及第した者に大學中庸儒行といふ書物を、それ〴〵の者に吳れてやつたと云ふ事實があるから、當時既に大學・中庸といふものは別行して居つたと云ふことが分る。尤も中庸は六朝頃から別行して居つたらしい。司馬溫公は大學廣義といふ書物を書いて居るが、是もやはり當時大學の書物の別行して居つた證據とすることが出來る。其の後になつて二程子が此の書物の世に益あるといふことを考へて、論語・孟子と併せて世に出したと云ふことが宋史道學傳に載つて居る。而して此の學庸論孟の四つは共に道を敎へるの書であると云ふので、後の人は四書と云ひ、又四子と云つて尊奉して、我が國に於ても大いに讀まれ且尊重せられたのである。

叙説

大學は明德を明かにする、民を親にする、至善に止まると云ふ事を三綱領として擧げて居る。而して又格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國平天下を八條目として述べて居る。尤も此の三綱領八條目といふ名前は、朱子の註の中に出た言葉である。大學の書物は此の三綱領八條目を身に行つて行くといふ事を以て、本來の目的と考へて居るのである。朱子の說明によると、八條目の中、格物・致知・誠意・正心・修身、これは明德を明かにすると云ふ事を說明したものであり、齊家・治國・平天下これは民を新にすると云ふ事を說明したものであると云つてゐる。結局此の二つの事を以て大學の目的と考へたのである。至善に止まるといふ事は、唯其處に進む各々の一歩々々に全力を盡すといふ事を教へたものである。是が朱子の八條目三綱領に關する說明である。程子は大學の事を稱して、初學德に入るの門だと云つて居る。斯う云ふ點から考へて見ると、明德を明かにする。民を親にすると云ふ二つの事が、學問終局の目的であると云ふことになるのである。明德を明かにすると云ふ事は、自分の事は自分の心の内に天から授かつた、自然の德を行つて居るから、其の德を明かにする意味であ

る。これは後世になつて來ると、人間の修養といふ事を意味することになる。民を親にすると云ふ事は、先づ自分の明德を明かにする事に依つて、其の修養を推擴めて他の人々をして日々に新たに德に進ましむるといふ意味である。其の事を推究めて行けば自然國治まり天下平かなりと云ふことが出來るのである。して見ると、三綱領八條目の歸する所は、要するに自分の修養を完全にして、終には國家天下を治むる所に至りたいと云ふことを述べたものと見ることが出來る。

孔子が或場合に君子の資格を說明して「己を脩めて以て人を安んず、己を脩めて以て百姓を安んず」と述べたことがある。此の精神は論語を一貫した考であつて、孔子が人生究竟の目的を此の身を修め、人を治むる二つの點に認めて居つたと見ることが出來る。孔子の云つた己を治めるといふことは修養の意味である。人を安んじて百姓を安んずると云ふことは、國を治め天下を平かにするといふ道である。して見ると、孔子の君子に望んだものと、大學の三綱領八條目の敎へる所と合致するものと考へて宜しい。

六經の目的が何處に在るかと云ふことは、古人の既に論じた如く、是亦脩己治人に在るといふことを認めなければならぬ。此の事は孔子の六經を筆刪した本來の精神に鑑みて言ふことが出來るわけで

存する。儒家の生命とする所は、六經を修めて其の中に教へる所の教訓を體得し實行することに存する。六經の精神が既に脩己治人に存するとするならば、之に依つて教を得たる所の儒家の期する所も亦脩己治人に存しなければならぬ。斯う云ふやうに考へて來ると、己を脩め而して人を治めると云ふ事は、孔子の君子に期する所、孔子の六經に期する所、而して亦孔子の後世の儒家に期待する所である。然るに大學の三綱領八條目なるものが、偶々期する所脩己治人の道に存するとすれば、此の大學の教と云ふものは、正に是れ孔子の理想とする所の教であつて、同時に孔子を尊崇する儒家の必ず期して以て終局の目的としなければならない所のものである。であるからして、程子が、初學德に入るの門と云つたのは、甚だ意味の深いものと思ふ。日本の學者の中に、荻生徂徠といふ傑物があつたが、この徂徠が子供の時分に、父の手筥の中に大學諺解の一冊が在るといふことを知つて、毎日之を讀み、それが基礎となつて、遂に講義も說明もなく、總ての書物に通ずることが出來たといふ話が傳はつて居るが、之に依つて考へても、此の書物の値打は自ら了解せらるゝ譯であらうと思ふ。

大學章句序

大學之書、古之大學、所以教人之法也。蓋自天降生民、則既莫不與之以仁義禮智之性矣。然其氣質之稟、或不能齊。是以不能皆有以知其性之所有、以全之也。

大學章句序。

大學の書は、古の大學、人を教ふる所以の法なり。蓋し天生民を降すより、則ち既に之に與ふるに仁義禮智の性を以てせずと云ふこと莫し。然れども其の氣質の稟、或は齊しきこと能はず。是を以て皆以て其の性の有する所を知つて、之を全くすること有る能はず。

【通釋】此の大學章句序と云ふのは、宋の有名なる學者朱子の作つたもので、大學の成立效用及び朱子が此の書物に章句を施した理由を說明したものである。

大學の書物といふのは、昔の大學に於て人を教へた方法を其の儘に傳へた書物である。想ふに、天の神が人間を此の世の中に降し來れば、其の時既にこの人間に、仁義禮智と云ふ美しき性質を與へて居るべきである。斯の如く總ての人間は、皆仁義禮智の性を天から頂戴はして居るが、併し人間は亦

別に氣質と云ふものを稟けて居る。この氣質の稟け方が、或は高尙なるもの、低いもの、强いもの、弱いもの、總て同一と云ふことは出來ない。それであるからして總ての人が總て皆自分の天から授かつた性、卽ち仁義禮智と云ふものを詳く知つて、且つ此のものを全くして行くと云ふことは、其は何人にも皆出來るといふ譯には行かない。

【語釋】生民（人民と云ふことと同一である。）○仁義禮智（儒家の考では、人間には生れながらに仁義禮智といふ四つの麗しい天性があるものである。これは人に依つて差別の有ることの出來ないものであると考へてゐる。）○氣質之稟（稟と云ふことは天から享けたと云ふ意味である。氣質と云ふは形而下のものであつて、宋の儒者の考では、天の氣質の差別によつて人間の高尙、下品・强弱といふものが別れるものであると考へたのである。）

一有聰明睿智能盡其性者、出於其間、則天必命之以爲億兆之君師、使之治而敎之、以復其性。此伏羲神農黃帝堯舜所以繼天立極、而司徒之職、典樂之官所由設也。

【訓讀】一も聰明睿智にして、能く其の性を盡くす者の、其の間に出づること有れば、則ち天必ず之に命じて以て億兆の君師と爲し、之をして治めて之を敎へ、以て其の性に復らしむ。此れ伏羲・神農・

黄帝・堯・舜の天に繼ぎ極を立てし所以にして、而して司徒の職、典樂の官の由て設けられし所なり。

通釋 人間の性質は様々あるが、其の様々ある人の間に、唯一人でも非常に悧巧な優れた方が出て自分の天から稟けた性質を完全に盡くす者が出て來れば、其の時には天の神は必ず其の人に命じて其の人を天下萬民の君とも爲し、師とも爲して、其の君師をして天下萬民を治め、萬民を教へて、本來の性質卽ち仁義禮智の完全なる性質に復らしむる様にするに違ひない。昔、伏羲・神農・黄帝・堯・舜と云ふやうな聰明睿智の方が天に繼いで立派な大中の道を立てて天子の位に登つたといふ事柄は卽ち之に由るのである。又司徒の職務、典樂の官と云ふやうなものの設けられて其の天子を助けて風教に任じて居つたと云ふのも亦之が爲である。

語釋 聰明睿智（聰と云ふのは耳の敏いこと、明といふのは目の明かなこと、睿智と云ふのは智德の優れたこと。） ○億兆之君師（億兆と云ふのは數の多いことで、萬民と云ふ意味である。支那の上代の人の思想では、最も優れた人が天の命によつて君となり師となると考へて居たのである。） ○復其性（本來人間は仁義禮智の性を備へてゐるが、氣質の變化によつて時として失ふことが有るから、また其の性に復らしむると云ふことが卽ち人を敎へる敎育の目的である。） ○伏羲・神農・黄帝・堯・舜（いづれも昔の聖天子の名前である。） ○立極（極と云ふのは大中と云ふ意味で、大中の道を立てると云ふことである。） ○司徒（敎育を司る官の名前である。） ○典樂（音樂を司る者で、昔は音樂が禮と相待つて敎育の中心となつて居つたものである。）

三代之隆、其法寖備。然後王宮國都、以及閭巷、莫不有學。人生八歲、則自

王公以下、至於庶人之子弟、皆入小學、而教之以灑掃應對進退之節、禮樂射御書數之文。

訓讀 三代の隆なる、其の法寖備はれり。然して後王宮國都より以て閭巷に及ぶまで學有らざる莫し。人生れて八歳にして、則ち王公より以下、庶人の子弟に至るまで、皆小學に入り、而して之に教ふるに灑掃應對進退の節、禮・樂・射・御・書・數の文を以てす。

通釋 三代の隆なる御代に於ては、教育の法といふものは餘程善く備はつて居つたものである。そこで天子の居らるゝ處、地方の都、更に田舍に至るまで學校の無い處は一つもない。人が生れて八歳になると、王様や殿様から下普通の人民の子弟に至るまで皆小學に入つて來る。而して是等の人々に教へるのには、掃除の仕方、人に對する挨拶の仕方、それから出入進退の細かな事柄、さういふ事を教へ、更に一面又禮・樂・射・御・書・數といふ所謂普通の意味の學問をも教へて居るのである。

語釋 三代（夏・殷・周を指すので、支那で最も盛であつた時代である。） ○王宮國都（王宮といふのは天子の居らるゝ處、國都は地方々々の中心都會を云ふので、凡て宗廟の在る所を都といふので、必ずしも帝都の意味ではない。） ○閭巷（田舍の町と云ふ意味である。閭は里門、巷はチマタのこと。） ○庶人（官位のない人の意味である。） ○灑掃應對進退之節（灑掃は掃除をする事。應對は人に應接する事、進退は出入進退の事、節といふの

はそれぞれの節度の意味である。）　○禮・樂・射・御・書・數之文（これは昔、六藝といつて、教育の中心となつたものである。文といふのは學問の意味である。）

及其十有五、則自天子之元子衆子、以至公卿大夫元士之適子、與凡民之俊秀、皆入大學、而教之以窮理正心脩己治人之道。此又學校之教、大小之節、所以分也。

【訓讀】其の十有五年に及びては、則ち天子の元子衆子より以て公卿大夫元士の適子と、凡民の俊秀なるものとに至るまで、皆大學に入り、而して之に教ふるに、理を窮め、心を正くし、己を脩め人を治むるの道を以てす。此れ又學校の教、大小の節の分れたる所以なり。

【通釋】さて十五歳になつて來ると、天子の嫡男及び其の他の御子供衆を始めとし、公卿大夫及び士の一番の長男及び一般庶民の優れたる者、さういふ者は皆誰も彼も大學に入つて來る。さうして是等の人には、少し程度を高めて、物事の理を窮め、人間の心を正うし、自己を脩むる事、延いては人を治むる所以の道を教へると云ふ事になるのである。此の樣に、小學には小學の教、大學には大學の教

があるので、學校教育、それに於ける所の大いなる教、小さな教と云ふものが自然に分れて來るわけである。

【語釋】元子（天子の嫡子のことである。）○衆子（嫡子以外の子供のことである。）○元士（上士の意である。昔は士に上士中士下士の區別があつた。）

夫以學校之設、其廣如此、教之之術、其次第節目之詳又如此。而其所以爲教、則又皆本之人君躬行心得之餘、不待求之民生日用彝倫之外。

【讀】夫れ以みれば學校の設、其の廣きこと此の如し。之を教ふるの術、其の次第節目の詳かなる、又此の如し。而して其の教を爲す所以は、則ち又皆之を人君の躬に行ひ心に得るの餘に本づけ、之を民生日用彝倫の外に求むることを待たず。

【通釋】考へて見るのに、昔は廣く學校を設けて居り、又之を教ふる順序方法の詳細に分れて居つたことは此の通りであつたが、併し此の教といふものも、何もむつかしい事をやつたのではなくして、皆是れ人君の實際身に行ひ心に會得した所の其の事柄を本として教を立てたのであつて、又これは一般人民の常に用ひて居る所の倫常の道の外に求むる要は全然なかつたのである。

【語釋】　彝倫（彝は常と云ふことで、彝倫とはつまり倫常と云ふことである。）

是以當世之人、無不學。其學焉者、無不有以知其性分之所固有、職分之所當爲、而各俛焉以盡其力。此古昔盛時、所以治隆於上、俗美於下、而非後世之所能及也。

【訓讀】　是を以て當世の人、學ばずと云ふこと無し。其焉を學ぶ者、以て其の性分の固より有する所、職分の當に爲すべき所を知つて、各々俛焉として以て其の力を盡すこと有らずと云ふこと無し。此れ古昔の盛なりし時、治、上に隆に、俗、下に美にして、後世の能く及ぶ所に非ざりし所以なり。

【通釋】　さういふ狀態であつたから、昔の人といふものは何れも皆學問をしない人は無かつたわけである。其の學問をした者は、何れも亦自分の性質といふものに固有的に有つて居る所のものは何ものであるか、即ち其は仁義禮智と云ふ尊い者であるといふことを知らない者は無かつた。それを知ると同時に、人間としての職分が何う云ふ事を爲さなければならぬかと云ふことを會得しない者も無かつ

たわけである。此の如くにして、其等の人々は各々一生懸命になつて自分の力を盡したものである。それであるから昔の盛であつた三代の時代といふものは、上に於て、政治が立派に行屆き、下に於ては風俗が麗しく成立つて、後世の時代の到底及ぶことは出來ないやうな成績を顯はしたのである。

【語釋】性分之所ニ固有一(即ち仁義禮智を指す。)　○俛焉(一生懸命に力を盡くす形容)　○治(治道の意味である。)　○俗(風俗の意味である。)

及ニ周之衰一、賢聖之君不レ作、學校之政不レ脩、教化陵夷、風俗頽敗。時則有レ若ニ孔子之聖一、而不レ得ニ君師之位一以行ニ其政教一。於レ是獨取ニ先王之法一、誦而傳レ之、以詔ニ後世一。

【訓讀】周の衰ふるに及んで、賢聖の君作らず、學校の政脩まらず、教化陵夷し風俗頽敗す。時に則ち孔子の聖の若き有れども、而も君師の位を得て以て其の政教を行はず。是に於て獨り先王の法を取り、誦して之を傳へて以て後世に詔ぐ。

【通釋】周の時代が衰へるに及んで賢聖の君が久しい間起つて來なかつた。學校の成績といふものも十分に脩まらなかつた。其の爲に教化といふものは自然々々に衰へ、風俗といふものも自然々々に頽

れて來たのである。其の中間に孔子の如き聖者が出なかつた譯ではないけれども、併し惜しい事には此の孔子なる人も、君たることを得ず師たることを得ず、君師の位を得て自分の理想とする所の政治教育を施すことが出來なかつたのである。そこで已むを得ず、孔子は先王の履み行うた教といふものを取つて來て、それを誦み傳へて、さうして後世に遺し傳へようとした。是が即ち孔子の教育で、大學の書は即ち其の教育の爲に書かれたものである。

【語釋】陵夷（丘の自然々々に平かになる如く世の衰へて行くこと。）○頽敗（くづれ、やぶれること。）○先王之法（昔の偉い王者の履み行うた道。）○詔（告ぐると云ふ意味。）

若曲禮・少儀・內則・弟子職諸篇。固小學之支流餘裔。而此篇者、則因小學之成功、以著大學之明法。外有以極其規模之大、而內有以盡其節目之詳者也。

【訓讀】曲禮・少儀・內則・弟子職の諸篇の若きは固より小學の支流餘裔なり。而るに此の篇は則ち小學の成功に因つて以て大學の明法を著はす。外には以て其の規模の大なるを極むる有り、內には以て其の節目の詳かなるを盡くすこと有る者なり。

【通釋】禮記の中にある所の曲禮・少儀・內則・弟子職と云つたやうな、斯う云ふ色々の篇は、是は固に細かな教であつた、謂はゞ小學の流、其の末の端くれと云つたやうなものであるが、此の大學の篇になつて來ると、同じ禮記の中の一篇とは云ふもの丶、最早小學の教育を十分に卒つた者に對して更に一歩進んだ大學の明かなる法則を教へ著はして居るものである。であるからして此の大學といふ書物は、之に依つて規模の大なる事を極め、之に依つて節目條理の詳かなる事を盡くすことの出來るものである。

【語釋】曲禮・少儀・內則・弟子職（これは皆禮記の中の名前である。）○支流餘裔（分れた末のものと云ふ意味である。裔と云ふ字は衣の裾といふ意味で、或は子孫の意味になることもある。）

三千之徒、蓋莫レ不レ聞二其說一。而曾氏之傳、獨得二其宗一。於レ是作二爲傳義一、以發二其意一。及二孟子沒一、而其傳泯焉。則其書雖レ存、而知者鮮矣。

【訓讀】三千の徒、蓋し其の說を聞かずと云ふこと莫し。而して曾氏の傳、獨り其の宗を得たり。是に於て傳義を作爲し、以て其の意を發す。孟子沒するに及んで其の傳泯びたり。則ち其の書存せりと雖ども、知る者鮮し。

通釋 孔子の門人三千の人々が有つたが、此等の三千の門人は何れも皆孔子に就いて其の說明を聞いた者ばかりである、併しながら其の中で曾子の傳へた所だけが最も其の根本要領を得たものである。であるからして曾子は大學に就いて特に解釋を作つて、孔子の言はれた心持を十分に發揮したのである。曾子の後に子思有り、子思の後に孟子が有つて、相傳へて此の大學を後世に遺したのであるが、孟子が沒くなつてからと云ふものは、此の學問を傳へた者は全く泯びてしまつたので、此の書物だけは遺つて居つたけれども、其の書物に著はれてゐる內容を知つて居る者は誠に鮮いことになつてしまつた。

語釋 三千の徒（孔子の門下三千人の人が有つたといふ事である。）○曾子（曾參と云つた人で、孔子よりは四十六歲若い門人である。性質魯と云はれて居つたが、併ながら遂に孔子の本當の學統を傳へた人である。）○宗（本家といふ意味。或は根本といふ意味である。）○傳義（解釋といふ意味である。）

自是以來、俗儒記誦詞章之習、其功倍於小學而無用。異端虛無寂滅之教、其高過於大學而無實。其他權謀術數、一切以就功名之說、與夫百家衆技之流、所以惑世誣民、充塞仁義者、又紛然雜出乎其間。

【訓讀】是より以來、俗儒記誦詞章の習、其の功小學に倍すれども用無し。異端虛無、寂滅の教、其の高きこと大學に過ぐれども實無し。其の他權謀、術數、一切以て功名を就すの説と、夫の百家衆技の流と、世を惑はし民を誣ひ、仁義を充塞する所以の者、又紛然として其の間に雜り出づ。

【通釋】孟子が歿くなつてから以來といふものは學問界の形勢が餘程變つて來て、詰らない學者が、或は書物を暗記する。文章を作るといふやうな事だけに力を用ひて居つて、其の骨折は古の小學で學ぶ事柄の倍も二倍も努力はして居るが、何の役にも立たない。一方また楊氏、墨子、或は老子、佛氏といふやうな、教は誠に高尚な事を説明して、其の高尚さに於ては古の大學の教に較べて遙に過ぎて居るものはあるけれども、併し是亦何等の實質を有たない教であつたのである。此の記誦詞章の學問、異端虛無寂滅の教、それ以外に別に權謀術數、唯功名を爲しさへすれば宜いといふやうな學説も起つて來れば、又一方に諸子百家さま〴〵の技能を以て世に立つ所の學説といふやうなものも起つて來た。是等のものが相共に〳〵世を惑はし、民を欺むいて大切な仁義禮智の教を塞ぎ妨げて來て居つた。さういふ者共がいろ〳〵入り亂れて此の時代に紛出して來たわけである。

【語釋】記誦詞章（記誦といふのは書物などを唯暗誦して居ること。詞章といふのは文章などを練ること、これは本當の學問とは謂へないものである。否眞の儒者から見れば玩物喪志と云つて寧ろ退く可きものであつた。）○異端（正しい教でな

いもの。昔の異端と云はれたものは即ち楊氏、墨氏の説の如きものである。後世になると佛老をも指すことになつた。）　○虚無寂滅之敎（老子、莊子の敎は虚無と云ふ事を主として居るから之を虚無の敎といひ、佛氏の敎は寂滅爲樂といふ事を主として居るから之を寂滅の敎と云つたものである。此の二つの者は儒家の方面からは正しい敎とは認めないのである。）　○權謀術數（正しい敎でなしに、一時の謀によつて世の中を渡らうといふ敎、例へば昔の兵家法家などを指したものである。）　○衆技之流（いろいろの技を有つて居る人。昔有つた方術の人々などを指したものである。）　○誣レ民（民を欺くの意である。）　○充塞（ふさぎ妨げる、）

使ム其ノ君子不シテ幸而不レ得レ聞ニ大道之要ヲ、其ノ小人不シテ幸而不ヨ得レ蒙ルコト至治之澤ヲ。晦盲否塞、反覆沈痼シテ、以テ及ンデ五季之衰フルニ而壞亂極マレリ矣。

訓讀　其の君子をして不幸にして大道の要を聞くを得ず、其の小人をして不幸にして至治の澤を蒙ることを得ざらしむ。晦盲否塞反覆沈痼して、以て五季の衰ふるに及んで、壞亂極まれり。

通釋　斯くの如く正しい敎が行はれず、誤れる敎が世の中に蔓つたが爲に、政治を行ふ人々は、不幸にして大いなる道の要領が何處に存するかと云ふ事を聞くことが出來なかつたし、治めらるゝ所の民百姓は、不幸にして治まれる御代の恩澤を蒙ることが出來ない樣になつたのである。斯う云ふ樣にして世の中は闇暗となり、八方塞りとなり、それが幾度も幾度も繰返し、斯して世の中の痼疾となつて、それが遂に五代亂離の世の中の衰へることになつて、極點まで破壞を實現して來たのである。

【語釋】君子（徳の備はれる者にも使ふが、此處などでは治者のことを云つて居るのである。）○小人（徳の薄い者についても云ふが、此處などでは被治者を云つて居るのである。）○晦盲否塞（晦は暗いこと、盲は目のしひてゐること、否は泰の反對で世の中の治まらざること、塞は開の反對で、やはり世の中の塞がつてゐること。）○五季（唐末の五代の世の中、支那史の中で最も亂離を極めた時代である。）

天運循環、無往不復。宋德隆盛、治教休明。於是河南程氏兩夫子出、而有以接乎孟氏之傳。實始尊信此篇而表章之。既又爲之次其簡編、發其歸趣。然後古者大學教人之法、聖經賢傳之指、粲然復明於世。

【訓讀】天運循環して往いて復らざること無し。宋の德隆盛にして治教休明なり。是に於て河南の程氏兩夫子出で以て孟子の傳を接ぐこと有り。實に始めて此の篇を尊信して之を表章す。既に之が爲に其の簡編を次し、其の歸趣を發す。然る後に古者の大學人を教ふるの法、聖經賢傳の指、粲然として復た世に明かなり。

【通釋】併しながら、天運循環、盛なるものゝ衰へ、衰ふるものゝまた盛なるは自然の理である。前述の樣な衰へ果てた世の趨勢も、宋の興るに及んで再び政治の大本が立派に立つ樣になつた。卽ち河南の程明道、程伊川の兩先生が世の中に出てから、始めて今まで絶えて居つた孟子以來の教といふ

ものを接いで來て、是に始めて此の大學の篇の値打の有るといふことを尊信して、之を禮記の中から取表はして世の中に表章した。單に表章したのみならず、又之が爲に其の書物の編の順序といふものを明瞭に正して、さうして此の書物に書いてある目的の終局が何處に在るかといふ意味を發揮して呉れた。斯う云ふ事に依つて、古の大學、人を敎ふる所以の方法、それから聖人の手を經た所の經、賢人の手を經た所の傳、其の說明の意味といふものが始めて世の中に明かになつて來たのである。

語釋 治敎（政治の根本となる敎）○休明（立派に明かになつて來た（休はよいといふこと。））○河南之程氏（程明道、程伊川は兄弟であつて共に河南に生れた人である。宋哲學の先輩として最も有力な人である。）○表章之（解題の所に說明した譯に、大學を禮記の中から取つて別に表章したのは程子與かつて力有る事である。）○次簡編（書物の篇の前後を整へること。大學の書物は、昔錯簡が多かつたので讀めなかつたものであるが程子がそれに手を施し、順序を整へたのである。簡といふのは竹札の意味であつて、昔は竹札に文字を書いて、それを革で綴ぢて、書物としたものである。）○歸趣（書物に書いてある意味の終局の意味といふこと。）○聖經賢傳（大學の經一章は孔子の意、傳の十章は曾子の筆と云つて居るから、之を聖經賢傳と云つたのである。昔は聖人の手に成つたものを經と云ひ、賢人の手に成つたものを傳と云つた。だから聖人の述作を經と云ひ、聖人の述作を傳と云ふと云ふ言葉も起つたのである。）○粲然（明かなる形容。）

雖以熹之不敏、亦幸私淑而與有聞焉。顧其爲書、猶頗放失。是以忘其固陋、采而輯之。間亦竊附己意、補其闕略、以俟後之君子。

通釋 熹の不敏を以てすと雖も、亦幸に私かに淑して聞くこと有るに與かれり。顧ふに其の書た

る猶ほ頗る放失せり。是を以て其の固陋を忘れ、采つて之を輯む。閒亦竊に己の意を附けて、其の闕略を補ひ、以て後の君子を俟つ。

通釋 そこで私の樣な愚かなる者ではあるが、幸に遠く先輩の教を慕つて蔭ながら其の教の說明を聞くことが出來たのである。一面此の大學の書物が如何なる狀態であるかと云ふことを考へて見るに、或部分は失はれ、或部分は散佚し、頗る未整理の狀態に在るのである。であるから、自分の學問の淺はかなこと見識の低いと云ふことなどは一切打忘れて、此の書物を采つて色々に輯めて見る、處々には自分の意見をも附加へて、多分此處が闕けて居るであらうと云ふ點があれば之を補つた譯である。その善惡是非に就ての判斷は勿論後の學者を俟つ者であつたのである。

語釋 不敏（愚かさと云ふこと）　○私淑（直接教を受けず、人を藉つて自分の身を修めて行くこと。私かに之を人に淑くすといふ意。）　○補其闕略（大學には處々闕文があるからそれを補つたのである。）
○後之君子（こゝで云ふ君子は學者といふ意味である。）

極知僭踰無所逃罪。然於國家化民成俗之意、學者脩己治人之方、則未必無小補云。淳熙己酉二月甲子新安朱熹序。

讀解 極めて僭踰にして、罪を逃るゝ所なきを知る。然れども國家民を化し俗を成すの意、學者己を脩め人を治むるの方に於ては、則ち未だ必ずしも小補無くんばあらずと云ふ。淳熙己酉二月甲子新安の朱熹序す。

通解 斯の如く自ら大學に就いて或は闕略を補ひ或は自分の意見を附加へたと云ふことであるから、自分の身分を踰えて爲すまじき事をやつたといふ事に就いての罪は到底逃るゝ所が無い。其は自分と雖も疾に知つて居るわけである。併しながら此の私の大學の解釋なるものは、幾分の効驗を獲らすものと自ら信じてゐる。卽ち國家民を感化し風俗を成すといふ其の點に於て、或は又學者が己を脩め人を治むるといふ其の方法に於て、必ずしも何等の助にならないといふ筈はあるまいと、少しは自ら信ずる所がある。淳熙己酉二月甲子新安の朱熹序す。

語釋 僭踰(僭越。身分を踰みぬこと。)　○淳熙(宋の孝宗の年號。己酉は其の十六年である。)

餘論 此の序は前に述べた通り、朱子の大學に就いての說明並に之を解釋した意味、及び其の解釋に依つて趣旨の歸するを明かにしたものである。大學の要領は當に此の序の中に盡きて居る譯であるから、讀者は是から大學を讀まんとする前に先づ此の序を反復する必要が有るであらう。

大學

子程子曰、大學孔氏之遺書。而初學入德之門也。於今可見古人爲學次第者、獨賴此篇之存。而論孟次之。學者必由是而學焉、則庶乎其不差矣。

訓讀 子程子曰く、大學は孔子の遺書にして、初學德に入るの門なり。今に於て古人學を爲すの次第を見るべき者は、獨り此の篇の存するに賴る。而して論孟之に次ぐ。學者必ず是に由つて學べば則ち其の差はざるに庶からんか。

通釋 此の一節は大學の本文ではない。朱熹の章句に引いて居る程子の說明の言葉である。子程子が曰はれるには、此の大學といふ書物は孔子の遺して置かれた書物であつて、初めて學問に携はる人が德に進まんとして必ず由るべき入門の書である。今日に於て昔の人が學問をし

た遺方方法を見るべきものは、唯獨り此の書物の存して居るのに賴るものである。而して學を爲さんとする者は、此の次に論語孟子を讀むべきである。學問を爲すべき人々が斯くの如く大學を基礎として進んで學んで行つたならば、恐らくは學問の眞の目的に差はぬことが出來るであらう。

語釋 子程子（程明道のこと、子と云ふのは敬稱である。）○遺書（遺して居つた書物といふこと。）○論孟（論語と孟子。）○庶乎其不差矣（恐らくは道に違はざることを得るであらうと云ふ意味。）

餘論 朱子が程子の此の語を引いたのは、是から大學を學ばんとする者の道行、心得を示す爲のものであつて、吾々が今日大學を學ぶとしても、やはり此の程子の云はれた語に從つて行く方が最も間違のない事と思ふ。

大學之道、在明明德。在親民。在止於至善。

訓讀 大學の道は明德を明かにするに在り。民を親にするに在り。至善に止まるに在り。

通釋 是は大學の大綱を示したものであつて、朱子は此の明明德、親民、止至善を以て大學の三綱

領と名づけて居る。大學の道といふものは此の三綱領を明かにし實現する事に存すると云ふのである。

今暫く其の三綱領に就いて說明して見よう。

「明德を明かにすると云ふ事は、天から授かつた自然の德卽ち人間の性を明かにし、其の性を正しき方向に修養するといふ意味である。民を親にすると云ふ事は、民百姓をして己と共に各々其の明德を明かならしめ、今日は昨日よりも、明日は今日よりも、更に新たなる新生涯に入らしむると云ふ意味である。」此の二つの事を別の言で云へば、明明德と云ふ事は、我を脩むるといふ事、卽ち脩己といふ事に歸着する。親民といふ事は、天下の民をして向上發展せしむる事であつて、前に序說の場合に述べた言葉によれば、治人の道に由つて民を新生涯に導くと謂ふことである。此の二つは大學の主なる目的である。至善に止まると云ふ事は其の各々の項目に就いて其の最善を盡すといふ意味である。論者中には、止まるといふ語が消極であると主張する者もあるが、併し至高至善の點は唯一つでなければならぬ。其處に止まらずして一歩を動けば至高至善の地から一歩を下ることになる。故に至善に止まると云ふ事は、何時でも至善を得ると云ふ事になる譯である。從來大學中には色々の言葉も說明もあるが、要するに此の三箇條を以て最も眼目と爲すべきものである。

語釋 明德（天から授けられた完全なる人間の德。授ける方面から云へば命と云ひ、授けられた方面から云へば德と云ふ。中庸に「天の命之を性と謂ふ」とあるが、其の性は即ち爰に謂ふ明德に當るものである。）○親民（親と云ふ文字をシタシムと讀む讀方もあるが、朱子は程子の說に從つて新しいと云ふ文字と同一であると解釋して居る。つまり民をして日に新に日々に新たに新生涯に入らしむる事である。）

知止而后有定。定而后能靜。靜而后能安。安而后能慮。慮而后能得。

訓讀 止まることを知りて而る后に定まること有り。定まりて而る后に能く靜かなり。靜かにして而る後に能く安し。安くして而る后に能く慮る。慮つて而る后に能く得。

通解 此の項目は修養の階段を說明したものである。止まることを知ると云ふ事は、至善に止まる事が學問の大切なものであることを知る意味であつて、謂はば學問の標準を悟ると云ふ意味である。斯くの如く學問の標準を先づ悟つて來れば、そこで人間の考が定つて來る。定まつて來れば動搖しない。即ち靜になつて來る。動搖しなければ爰に安んずると云ふ事が出來る。安んずると云ふ事になれば爰に熟慮と云ふものが生じて來る。熟慮が生じて來れば爰に望む所のものを得る。其の望む所のものと云ふのは、言ふ迄もなく至善に止まるといふ境遇である。

物有本末。事有終始。知所先後。則近道矣。

【訓讀】物本末あり。事終始あり。先後する所を知れば則ち道に近し。

【通釋】是亦修養の順序方法を他の言葉に依つて說明したものである。何物に就いても本と末とがある。何事に就いても始と終とがある。そこで本末終始を究めんとする者は、先づ何を先にすべきか、先づ何を後にすべきかと云ふことを十分に知らなければならぬ。其を知る事が即ち道に近づく唯一の方法となるのである。今此の一段を此處に挿入した譯は、要するに前に擧げた三綱領を得んとする爲に、人間は如何なる方法、如何なる順序に依つて學問をすべきかと云ふことを覺らしめんが爲である。

古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。

【訓讀】古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其の國を治む。其の國を治めんと欲する者は、先づ其の家を齊ふ。其の家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を脩む。其の身を脩めんと欲する者は、先づ其の心を正うす。其の心を正うせんと欲する者は、先づ其の意を誠にす。其の意を誠にせ

んと欲する者は、先づ其の知を致す。知を致すは物に格るに在り。

通解 此の一節は、先づ自己の明徳を明かにし、然る後其の明明徳を推擴げて天下中の人々をして明徳を明かならしめんと欲すること、換言すれば三綱領に述べた明明徳、親民の二箇條を得んと欲する者は、如何なる順序に依るべきであるかと云ふ事を細說したものである。而して其の說明の仕方は恰も只今述べた物有二本末一、事有二終始一といふ敎に從つて論じて居る。つまり明德を天下に明かにすると云ふ樣な非常な大いなる仕事も、其の本を質せば極めて手近な處に在るといふことを順序立てゝ敎へたものである。

古の聖人が、自己の明德を明かにすると同時に天下の人々の明德を明かならしめようとすれば――つまり天下を平かならしめようとする結果を得るのであるが――先づ自分の國を治めると云ふ事から始める。自分の國を治めようとする者は先づ自分の一家を齊へると云ふ事から始める。自分の一家を齊へようとする者は先づ自分の一身を脩むると云ふ事から始める。自分の一身を脩めようとする者は先づ自分の心を正しくすると云ふ事から始める。自分の心を正しうしようとする者は先づ自分の心の向きを誠にすると云ふ事から始める。其の心の向きを誠にしようとする者は先づ自分の知を盡くすと

云ふ事から始める。自分の知を盡さうとする者は、外物の各々に就いて其の一つ〳〵の道理を窮めると云ふ事から始めなければならぬ。

【語釋】正二其心一（自分の考を誤らしめない事。）○誠二其意一（意と云ふのは心が趨き、働く事である。つまり心の先に起るべき所の心的現象を謂ふのである。）○致二其知一（知と云ふのは人間が自然に具へてゐる理性の事である。）○在レ格レ物（外の事物に一つ〳〵當つて、其の中に含まれてゐる理を窮めると云ふ意味である。）

【餘論】此の章の中で最後に述べてゐる格物致知の二つは幾多の學説の別れる處で、むづかしい問題である。天地間に隈なく流れてゐる理といふものが存する。其の理といふものが人間の體内に宿つたときに之を性と云ふ。此の理は萬物の中にもやはり同一に流れて居る。之を物の性又は物の理と云ふ。此二つのものは、もと〳〵源を同じうする同一のものであるから、若し人の性を推窮めて行けば、同時に物の理と云ふものが分らなければならない。又物の理を窮めて行けば同時に人の性と云ふものが分らなければならない。譬へて見れば、水は大地の中に隈なく流れてゐる。甲の地に出てゐる泉も乙の地に湧いてゐる小川も共に地下の水たるに變りはない。故に甲の泉の性質が分れば同時に乙の小川の性質も分らなければならない。反對に乙の小川の性質が分れば同時に甲の泉の性質も分らなければならない。何となれば此の二つのものは、もと〳〵同一のものであるからである。人の性と物の理

との關係も正に此の例に由つて說明せらるべきものである。今大學で知を致すと云ふ、其は我の性を知る事である。物に格ると云ふ。其は物の理を究めるといふ事である。此の兩つはもと〳〵同一のものゝ二つの方面でなければならない。であるからして大學では治國齊家等に就ては其の國を治めんと欲する者は先づ其の家を齊ふ。其の家を齊くんと欲する者は先づ其の身を治むと云ふやうな書振になつて居るが、此處丈は特別の筆法で知を致すは物に格るに在りと云つて此の二者を同格に論じて居るのである。

格物と致知との關係は今述べた通りであるが、學問を爲す人には性質或は修養の相違もあるものだから、或者は致知に重きを置き、或者は格物に重きを置くに至つて、遂には此の兩つの者が別れて相爭ふと云ふやうな現象さへ起るに至つた。宋の時代の學者に就いて見れば、朱子の流を汲んだ人々は格物に重きを置くといふ傾向がある。陸象山の流を汲んだ者は致知に重きを置くといふ傾向がある。若し物の理を究むるといふ事を主として論じて行けば、物理もやらなければならない。化學もやらなければならない。植物もやらなければならない。斯の如くにして萬物の中に存する理といふものを推究め、由つて以て人の性を探らうと云ふことになる。若し致知に重きを置くことになれば、今述べた

やうな多くの學問に頭を亂すよりは、寧ろ心を靜かにして、或は靜坐、或は澄心、斯の如き方法で自己の性を徐かに觀察すれば宜い事になる。此の二つの方法は動もすれば相分離して學派を形成することになる。西洋の哲學倫理學では良心の起源について經驗派と直覺派とが相爭うて居るが、若し今の場合に譬を取るならば、致知を主とする者は直覺派に近く、格物を主とする者は經驗派に近い。さりながら斯の如く二つを別にするのは、もと／＼學問の眞面目ではない。中庸に「尊二德性一而道二問學一」といふ語がある。德性を尊ぶと云ふことは我の性或は我の知を尊ぶと云ふ事であつて、大學の致知に近い。問學に道ると云ふことは、學問に依つて修養すると云ふ事で、大學の格物に近い。而して此の二つが寄つて初めて完全なる修養を得るのである。又中庸に「自レ誠明」と云つて居ると同時に「自レ明誠」といふことを云つて居る。此の「誠なるより明かなる」と云ふことは、自己の誠を盡くす事に由つて事物の道理を明かにすると云ふ事で、致知の方法に由つて格物を得ると云ふ事である。「明かなるより誠なる」と云ふことは、事物の理を明かにする事に依つて自己の誠を得ると云ふ事で、大學の格物に依つて致知を得ると云ふ事に當るのである。而して中庸に於ても此の兩つの者が共に修養上必要と云ふ事になつて居る。斯の如く論じて來れば、格物致知と云ふ事は共に一方を廢すことの出來な

い大切な修養である。而して此の格物致知と云ふ事が十分に爲遂げ得れば、それが誠意を得、正心を得、修身を得、齊家を得、遂には治國を得、平天平を得るといふ譯である。尚ほ此の論を詳細に論じつめれば陽明學と朱子學との相違にも及ぶのであるが、今は省略する。

物格而后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。心正而后身脩。身脩而后家齊。家齊而后國治。國治而后天下平。

【訓讀】物格つて而る后に知至る。知至つて而る后に意誠なり。意誠にして而る后に心正し。心正うして而る后に身脩まる。身脩まつて而る后に家齊ふ。家齊ひて而る后に國治る。國治つて而る后に天下平かなり。

【通釋】此の一節は前の節の反對の說方であつて、別に說明を要さぬと思ふ。

自天子以至於庶人。壹是皆以脩身爲本。

其本亂而末治者否矣。其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。

【訓讀】天子より以て庶人に至るまで壹に是れ皆身を脩むるを以て本と爲す。其の本亂れて末治まる者は否らず、其の厚くする所の者薄くして、而して其の薄くする所の者厚きは未だ之れ有らざるなり。

【通釋】此の一節は、前の節を承けて、總べて治國平天下を得る道が、手近な一身を脩め心を正しうする事に存するといふ事を述べたものである。而して其の修養の方法としては又事の本末終始を考へなければならぬ。然らざれば前に擧げた大いなる事業は成遂げ得ないと云ふ事を說明したものである。

上天子より下庶人に至るまで皆自分の身を脩むるといふ事を以て根本として居る。若し其の根本たるものが亂れて來れば其の末の能く治まらう筈はないのである。身が治まらなければ治國平天下と云ふ事は望み得るものでない。一家を治むるの道に於て不十分なる者が、國家を治むるの道に於て十分に行く道理は決して有り得ない。孟子は此の語から思ひ付いて「世間、厚くする所のものに於て薄くすれば、薄からざるなし。」と云つてゐる。

【語釋】壹（壹といふのは專らと云ふ意味である。）○所レ厚者（これは國に對して家を云つたものである。國と家と孰れか厚きか薄きかと云ふことは見方に依る事であるが、支那社會の普通一人情から論ずるならば、家を厚しとし國を薄しと見るのが自然であらう。）○所レ薄者（これは家に對して國若くは天下を指したものである。）

右經一章、蓋孔子之言、而曾子述之。其傳十章、則曾子之意、而門人記之也。舊本頗有錯簡、今因程子所定、而更考經文、別爲序次如左。

【訓讀】右經の一章は、蓋し孔子の言にして、曾子之を述ぶ。其の傳の十章は、則ち曾子の意にして、門人之を記せるなり。舊本頗る錯簡有り。今程子の定むる所に因つて、更に經文を考へ、別に序次を爲すこと左の如し。

【通釋】これは大學の本文ではない。朱子が大學の說明として挿入した語である。今まで述べて來た文章が卽ち大學の經の文章であつて、此の一章だけが孔子の直接に言はれた語で、其の孔子の語を曾子が述べたと云ふのである。此の後に傳十章が書き記されて居るが、それは曾子の考であつて而して曾子の門人が之を記したと云ふのである。尤も此の事に就いては朱子と意見を異にする學者の有り得ることは無論であるが、暫く此の說を奉ずる。以前の本には、只今の大學と違つて、頗る文章の順序に相違があるのであるが、只今は程子

の定めた所の順次に從つて、更に經文を考へて、別に左の如く順次をしたと朱子が云つて居るのである。

語釋 經（孔子の述べられた語を曾子が經として居るのである。）○傳（經の註脚を傳と云つて居るのである。歐陽脩は傳は經を述ぶる所以なりと言つてゐる）○錯簡（文章の順序の入亂れて居ること。昔は竹の札に文字を書いて韋革を以て之を編し居つたのであるが、其の竹札の順序が亂れて居るから之を錯簡と云ふ。）

康誥曰、克明德。

大甲曰、顧諟天之明命。

帝典曰、克明峻德。

皆自明也。

右傳之首章、釋明明德。

訓讀 康誥に曰く、克く德を明かにす。

大甲に曰く、諟の天の明命を顧みる。

帝典に曰く、克く峻德を明かにす。と、
皆自ら明かにするなり。
右傳の首章は、明德を明かにすることを釋す。

通釋 此の一節は朱子が最後に述べて居る通り、大學の經文の「明德を明かにす」と云ふ部分を說明したものである。傳の書方は、多く傳者自らの語を用ひず、古書の語をかり來つて其の古書の說明に依つて直に經文の解釋を試みようとして居るのである。今前に述べた各項に就いて簡略に說明を加へたいと思ふ。

康誥曰、克明レ德。

康誥といふのは書經の篇の名前である。其の康誥の中に「克明レ德」といふ文句が出て居る。これは周の文王が御自分の明德を明かにしたと云ふことを說明した語である。今此處に引いて來た譯は、明德を明かにすると云ふことを文王自らが既に實例を示して居ると云ふ事實を以て、大學の明明德の意味を說明せんとしてゐるのである。

大甲曰、顧二諟天之明命一。

太甲といふのは同じく書經の篇名である。これは伊尹と云ふ人が湯王の德を述べて曰はれた語である。即ち殷の湯王は、天から授かつた命と云ふもの――受けた者から之を言へば我の明德である――其の明德を朝に夕に顧みて之を明にする事を努めたといふ意味で、此の文句を此處に引いて來た理由は、同じく大學の明明德が古の聖人に依つて既に實行せられたと云ふことを說明するものである。

語釋　諟（是と同じ意味である或はツマビラカニスルと解釋して「天の明命を顧み諟かにする」と讀む人もあるが、恐らくは前の解釋が正しいのであらう。）

帝典曰、克明峻德。

帝典と云ふのは、やはり書經の篇名で、只今は堯典と云ふ文字に改められて居る。峻德と云ふことは大いなる德と云ふ意味である。これは堯が自分の大なる德を明かにしたと云ふ事を述べたものである。此も同じく明明德と云ふ事が古の聖人に依つて既に實現せられたといふことを示すものである。

皆自明也。

此の一句は上の三つの例を引いて來て、最後に曾子が、斯の如き例は何れも昔古人が明德を明かにした實證であると斷言を添へたのである。

語釋　峻德（大きい德と云ふ意味である。）

湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。

訓讀 湯の盤の銘に曰く、苟に日に新たに、日日に新たに、又日に新たなり。

通釋 是から數項目の間は、後に曾子が「釋ス新民ヲ」と說明して居る通り、民を新たにすると云ふ事の說明である。而して其の說明の仕方は、前と同樣、曾子自らの語を用ひずして、古の聖人の語若くは書いた記錄と云ふものの語を其の儘に引用して居るのである。

殷の湯王の盥に彫付けてある銘に、誠に一日每に新たにして行く。一日々々に新たにして、又更に一日々々に新たにするといふ意味の文句が書かれてゐる。これは修養と云ふものは、今日は昨日より昨日は一昨日よりと進步して行くを要すると云ふことを誡めたものである。

語釋 湯（殷の湯王で、有名なる聖君である。）〇盤銘（盤といふのは盥である、銘といふものは自らを誡むる爲めの語である。昔は自ら誡むる爲の語を或は盤に彫付け或は冊に彫付けて日夕自己を誡むるの用に供したものである。）

康誥曰、作新民。

訓讀 康誥に曰く、新民を作す。

通釋 是亦新民と云ふ事の解釋である。康誥と云ふのは書經の篇の名前であることは前に述べた通

りである。新民と云ふのは、一日々々に新たに進んで行く民といふ意味である。作すと云ふことは、更に其の民の心を鼓舞作興する意味である。武王が弟の康叔と云ふ人を諸侯に封じた時に、其の國の人民が從來惡い風俗に染まつて本心を失つて居つたが爲に、それを直して行くには、一日々々毎に新たにする樣に鼓舞振興して行かなければならないと云つて敎へたのが卽ち此の語である。今此處に引いて來たのは、新民と云ふ語があるから、其の語が古聖賢の理想の標準に適つて居ると云ふ事を示さんが爲である。

詩曰、周雖舊邦、其命維新。

【訓讀】詩に曰く、周は舊邦なりと雖も其の命維れ新たなり。

【通釋】是は詩經の大雅文王の篇の文句を引いて來て、やはり新民といふ事を說明したものである。周の邦は歷史を探ぬれば舊い邦である。併しながら其の國運は常に新たであつて少しも衰へる所がない。其の命とは、天の命ずる所と云ふ意味で、天の命ずる所が新たであると云ふことは、取りも直さず天命が其の邦から去らないと云ふ意味である。是亦民を新たにするといふ、新たと云ふ事と相關

係するの故を以て此處に引用したものである。

語釋 維新（維といふのは意味の無い語である。明治維新といふ語も此の語から取つたものであつて、我國の國運が永久新たに繼續するといふ意に取つたものである。）

是故君子、無所不用其極。

右傳之二章、釋新民。

訓讀 是の故に君子は其の極を用ひざる所無し。

右傳の二章は新民を釋す。

通釋 此の一句は、曾子が前に引用した湯之盤銘、康誥及び詩經の文句を綜べ括つて、斯の如く湯王も文王も皆民を新たにすると云ふ事を心懸けて居る。だから古の君子は皆其の新民と云ふ事に就て、或は又自己の德を明かにするといふ點に於て至上至善を盡くして居つたと云ふ事を論結したのである。

右に擧げた二章は曾子が大要を述べた語である。

語釋 其極（至極の處といふ意味である。卽ち至善といふ意味である。至善を用ふると云ふ事は、至善に止まると云ふ三綱領の語と相應するものである。）

詩云、邦畿千里、惟民所止。

〔讀譯〕詩に云く、邦畿千里、惟れ民の止まる所。

〔通釋〕是から後數節は、曾子が後に「釋止於至善」と云つて居る通り、止至善といふ事を說明したものである。而して其の說明の方法は、前の二章と同樣、詩經或は孔子等の語を引いて說明したものである。

此の一節は詩經の「玄鳥」と云ふ篇の文句である。邦畿と云ふのは王者の都であつて、古、王都は方千里から出來て居るものであつた。其の千里の邦畿は民の悅んで集まる所であるといふ意味である。今此處に引いたのは、王都が四方の極たることは丁度至善が萬理の極たるが如きものであるから、民は此の邦畿に止るが如く、又此の人間の道としての止まるべき所に止まつて居らねばならぬといふ事を云はんが爲の引用である。

〔語釋〕邦畿（王者の都と云ふこと。畿とは今日用ひる畿内の畿と同一である。）

詩云、緡蠻黃鳥、止于丘隅。子曰、於止、知其所止。可以人而不如鳥乎。

訓讀 詩に云く、緡蠻たる黄鳥丘隅に止まると。子曰く、止まるに於て其の止まる所を知る。人を以てして鳥に如かざるべけんや。

通釋 是は詩經の「緡蠻」の篇を引き、其れに對する孔子の批判を引いて、而してやはり止まる者は止まる所を知らなければならないと云ふ事を敎へたのである。緡蠻と云ふのは鶯の啼聲である。其の美しい聲を出して啼く鶯は山の小峯の茂つて居る所に止まる。つまり鶯は鶯なりに止まる所を知つて居ると云ふのである。それ故に此の詩に就いて孔子が批評して、止まるといふ點に就いて止まるべき場所を知つて居る。若し人が自ら止まる所を知らず、放縱自恣な振舞をするならば、それは取りも直さず止まる所を知らないのであるから、萬物の靈と云はるる人間にして鳥に及ばないと云ふ事になる。其の樣な始末に陷つて宜からうかと云つて、深く學者を誡めた語である。

語釋 緡蠻（鶯の啼聲である。）○丘隅（峰の茂つてゐる所といふ意味である。古人は岑蔚と云ふ字で說明をしてゐる。）

詩云、穆穆文王、於緝熙敬止。爲人君、止於仁、爲人臣、止於敬、爲人子、止於孝、爲人父、止於慈、與國人交、止於信。

【訓讀】詩に云く、穆穆たる文王、於緝き熙かにして敬して止まると。人君と爲りては仁に止まり、人臣と爲りては敬に止まり、人子と爲りては孝に止まり、人父と爲りては慈に止まり、國人と交はりては信に止まる。

【通釋】是亦詩經の文句を引いて、これに就いての曾子の説明を附記し、以て、止まる所を知るといふ教を述べたものである、

詩經は文王の篇である。奥床しき文王は自己の明德を間斷することなく常に光を添へ明かにして敬しみを以て其の地位から動かずに居ると云ふのが、詩の文句である。つまり文王は自己の明德を常に間斷なく繼ぎ明かにして、敬といふ點に身を處して他に動かなかつたと云ふ意味である。

此の詩から判斷して見ると、人の君たる者は仁に止まるが宜しい。人の臣たる者は敬に止まるが宜しい。人の子たる者は孝に止まるが宜しい。一般の國人と交はる場合には信に止まるが宜しい。斯くの如くこれ〳〵止まる所を知れよといふ事を敎へたものである。

【語釋】穆穆（奥床しいと云ふこと）〇於（嗚呼と云ふ）〇緝熙（緝とは續ぐと云ふこと。熙とは光かと云ふこと。文王が自己の明德を間斷なく明かにして更にそれを一段美しくしたと云ふ意味である。）〇敬止（敬と云ふことを忘れず、其の止まる所に安んずること、）

詩云、瞻彼淇澳菉竹猗猗。有斐君子。如切如磋、如琢如磨。瑟兮。僩兮。赫兮喧兮。有斐君子。終不可諠兮。如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自脩也。瑟兮僩兮者、恂慄也。赫兮喧兮者。威儀也。有斐君子、終不可諠兮者道盛德至善、民之不能忘也。

【訓讀】詩に云く、彼の淇澳を瞻れば菉竹猗猗たり。斐たる有る君子、切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如し。瑟たり、僩たり、赫たり、喧たり。斐たる有る君子、終に諠る可からず。切するが如く、磋するが如しとは學を道ふなり。琢するが如く磨するが如しとは自ら脩むるなり。瑟たり僩たりとは恂慄なり。赫たり喧たりとは威儀なり。斐たる有る君子、終に諠る可からずとは、盛德至善、民の忘るゝ能はざるを道ふなり。

【通釋】此の一節は、詩經の衛風淇澳の篇を引いて來て前に述べた至善に止まると云ふ事が出來上れば、其の人は此處に述ぶるが如き立派な人になり得ると云ふことを示したものである。
詩經の文句は「瞻彼淇澳」と云ふ所から「有斐君子終不可諠」と云ふ所までの九節である。其

の後は詩經の文句の解釋である。

淇水の邊りを眺めると、綠の竹が美しく茂つて居る。其の美しき竹を見て美しき君子を聯想したのである。そこで云ふには、あの美しき文章有る君子は、切磋琢磨の功を積んで、瑟、僴、赫、喧の麗はしき威儀を備へて居る。此の文章有る君子は永久吾々が忘れんと欲して忘るゝことが出來ない所であると云ふのが詩の文句である。そこで大學の作者が說明して、此の詩の中に切するが如く磋するが如しと云つて居るのは、其の美しき君子が學問を勉强して居ることを云つたものである。琢するが如く磨するが如しと詩經に云つて居るのは、此の美しき君子が自ら自分の身を脩めて居るといふ事を述べたものである。又瑟たり僴たりと云つて居るのは、此の美しき君子が、修養の途中、常に身を愼んで、畏るゝが如き狀態に戒めて居ると云ふことを云つたものである。又詩經に、赫たり喧たりと云つて居るのは、此の美しき君子が、修養の結果、麗しき威儀を備へるに至つたといふ事を述べたものである。斐たる有る君子終に諠る可からずと此の詩に云つて居るのは、此の美しき君子が盛德と至善とを備へて、それが爲めに民は後に至るまでも其の德容を忘るゝことが出來ないといふ事を云つたものであると。斯の如く大學の作者は說明したものである。

語釋 洪澳（淇水といふ河の畔といふ意味。）○瞻（普通の見るに同じ。）○菉竹（緑の竹といふこと。）○猗猗（美しく茂つてゐる形容。）○有斐（美しき文を備へて居ると云ふ意味である。文章學問の有ること。）○切磋琢磨（切磋といふことは、骨や角を段々磋きを掛けること。琢磨といふことは玉や石を段々に磨きを掛けること。此の四つのものは人の學問を彌が上にも磨き上る事に喩へたものである。）○瑟。僩（瑟といふ字の本來の意味は嚴肅といふ意味である。僩といふ字の本當の意味は猛しいといふ意味である。併し此處では瑟たり僩たりと云つて、身を愼む意味に解釋したものである。）○赫兮喧兮（これは輝き且つ盛になつて居るといふ意味で、君子人の威儀の整うたことを形容した語である。）○恂慄（心の中に威敬を存して居ること。）○威儀（輝きの外に表れてゐること。）○斐（斐といふことは文章の整うて居る形容である。）○諠（忘るに同じ。）

餘論 此の一節は至善に止まるといふ事の說明ではなくして、寧ろ至善に止まるといふ境地を得た君子人の修養と其の德容とを述べたものである。

詩云、於戲、前王不忘。君子賢其賢而親其親。小人樂其樂而利其利。此以沒世不忘也。

右傳之三章、釋止於至善。

訓讀 詩に云く、於戲前王忘られずと。君子は其の賢を賢として其の親を親とす。小人は其の樂みを樂んで其の利を利とす。此を以つて世を沒するまで忘られず。

右傳の三章は至善に止まるを釋す。

通解 此の一節は詩經の周頌烈文の篇を引いて來て、前の節と同樣、至善に止まるといふ境地を得た君子人が何時までも人々から慕はれて居るといふ事を述べたものである。詩經の文句は、前の一句「於戲前王不ㇾ忘」と云ふに止まつて居る。これは周の文王武王を指して前王と云つたもので、此の文王は誠に賢しい君子人であつたから、後々までも忘れんと欲して忘るゝことが出來ないと詩人が歌つたものである。其の詩に就いて大學の作者は說明して、何故に文王武王は忘れられないかと云ふと、後代の賢者は何時迄も其の前王の賢なる所を賢として認め、其の親しむべき所を親しむべきものとして認めて居るし、又後代の小人は、君子人の樣に前王の賢なる點を認める事は出來ないが、唯前王の遺して吳れた樂みを、眞に樂しむべきものとして樂しみ、前王の遺した所の利を、眞に利すべきものとして其の恩澤を享けて居る。斯う云ふやうに、君子も小人も皆其の前王のお蔭を蒙つて居るから、そこで世を沒するまで忘れることが出來ないと之を慕つたものである。

右に擧げた三章は大學の作者が前の數節を約して結局是だけのものは皆三綱領の止ニ於至善一と云ふ事の說明に用ひたものである。

語釋 於戲（普通に嗚呼といふ歎息の語である。） ○前王（こゝでは文王武王を指したものである。） ○君子（文武の後に出た賢人を指したものである。） ○賢ニ其賢一（前王の賢なる所を賢なりとして

認める意味である。）

○小人（前王の後に出て居る一般の民といふ意味である。前の君子に對して云ふ。）

子曰、聽訟、吾猶人也。必也使無訟乎。無情者、不得盡其辭。大畏民志。此謂知本。

右傳之四章、釋本末。

〔訓讀〕子曰はく、訟を聽く、吾猶人の如きなり。必ずや訟無からしめんかと。情無き者は其の辭を盡すを得ず。大いに民の志を畏れしむ。此れを本を知ると謂ふ。

右傳の四章は本末を釋す。

〔通解〕此の章は後に「釋本末」と說明して居る如く、物事の本を正して行けば自ら末は治まるものであると云ふことを說明したものである。その例として孔子の言を引いて居る譯である。孔子の曰はるゝには、訴訟事の裁きをする遣方に就いては自分も尋常の人間と何等違ふ所はない。唯自分の期する所は、訴訟を巧く裁判すると云ふ事に非ずして、寧ろ訴訟其ものを無からしめようといふことを考へて居ると。此の孔子の語に就いて、大學の作者が更に語を附けて、訴訟無からしむる迄に

行くといふ事になる爲には、訟を聽く人が自分の明德を明かにして、訴訟すべき人に對する場合に、先方の心を十分に看拔いてやる。我が心既に明鏡を持して居れば其の僞に實際の實のない人間をして僞の辭を盡すことの出來ない樣にならしむ。斯くの如くすれば、自然に人民の志をして畏れしむる事になつて、竟には僞の訴訟をする事が世上に無くなる譯である。斯う云ふやうな裁判の遣方、是は無論一例であるが、即ちこれが本を知ると云ふ事になる。我の明德を明かにする事に出つて遂には人の明德を明かならしむるのである。

右に擧げた四章は前に述べた通り物事に本末の存すると云ふことを說明したものである。

「此謂レ知レ本。」

此謂レ知之至也。

訓讀 此れを本を知ると謂ふ。此れを知の至と謂ふ。

通釋 此の一節は、程子が既に言つて居る樣に、いろ〳〵間違つた文が入り、又足らざる部分が有る譯である。程子の考では、「此謂レ知レ本」といふ一句は要らない文句である。つまり前の章にあつ

た文句が此處に重複して來たと云ふのである。「此謂知之至也」といふ文句は、其の前に「知之至」と云ふ事を說明した他の文句が無ければならぬと云ふのである。其の不足の部分といふのが次に補はれて居るから其は大學の本文ではないが、假りに本文同樣に考へて說明して行きたいと思ふ。

右傳之五章、蓋釋格物致知之義。而今亡矣。閒嘗竊取程子之意以補之曰、所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在卽物而窮其理也。蓋人心之靈、莫不有知。而天下之物、莫不有理。惟於理有未窮。故其知有不盡也。是以大學始敎、必使學者卽凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉則衆物之表裏精粗、無不到、而吾心之全體大用、無不明矣。此謂物格。此謂知之至也。

訓讀 右傳の五章は蓋し物に格り知を致すの義を釋す。而して今亡びたり。

このごろ嘗て竊に程子の意を取り、以て之を補ひて曰く、謂ゆる知を致すは物に格るに在りとは、言ふこゝろは、吾の知を致さんと欲すれば物に即いて其の理を窮むるに在り。蓋し人心の靈、知有らざること莫し。而して天下の物、理有らざること莫し。惟理に於て未だ窮めざる有り。故に其の知盡さざるところ有るなり。是を以て大學の始教、必ず學者をして凡そ天下の物に即き其の已に知るの理に因つて益々之を窮め以て其の極に至るを求めざること莫からしむ。力を用ふるの久しうして一旦豁然として貫通するに至れば、則ち衆物の表裏精粗、到らざる無くして、吾が心の全體大用、明かならざるは無し。此を物格ると謂ふ。此れを知の至ると謂ふ。

[illegible] 右に擧げた傳の五章といふものは、蓋し格物致知と云ふ意味を説明したものであるが、前に述べた通り今日は亡びて居るのである。そこで朱子が此頃竊かに程子の考を酌取つて、さうして之を補つて下の如く曰つたのである。

所謂知を致すには物に格るに由らなければならないと、斯う大學で教へて居るのは、其の意味は、自分の持つて居る明徳を十分に明かにして行かうとするならば、外物に即いて一々其の

外物に含まれて居る道理を推究めなければならぬ。といふのは、人間の心の靈即ち明德、是は何事に就いても盡く覺り知ることが出來ない筈はないのである。而して天下の物には又一物一事盡く其の中に理といふものを含有して居らないものはないのである。此の理と云ふものと人間の心の明德といふものは實は同一物の形を異にしたものであるからして、若し明德を明かにすれば則ち理は明かになり、理を明かにすれば則ち明德は明かになる譯である。それであるから、物に卽いて其の道理に尙ほ窮め足りない所が有れば、其の結果は必ず吾の知に就いて十分盡さざる所が出て來るものである。つまり事物に卽いて理の研究が足らない爲めに、吾の明德は明かになり得ない結果を來すのである。であるから大學の第一の教としては、先づ學者をして、凡て天下の物に卽いて自己の良心で過去に知つて居る其の道理を本として、益々それを推究めて、其の極點まで推究め、それに因て終に吾の明德を十分に明かならしむると云ふ事をやつて居るのである。斯くの如くにして自己の力を用ひること久しきに亘つて居つて、さて或時期に豁然として道理の奧底に通ずるやうな事になつて來ると、其の時こそは、宇宙間總ての物の表も裏も、精も粗も、盡く明かになつて來る譯である。而して事物の理を明かにするのみ

ならず、其の事が亦吾が心の全體の體も用も皆明かになつて來る譯である。これが大學に謂ふ所の物格るといふ意味である。これが大學に謂ふ所の知の至るといふ意味である。つまり物格ると云ふことは事物に卽いて理を窮めるの意味であるし、知の至ると云ふことは、因つて以て吾の明德を明かにするといふ意味である。而して此の二者が終局同一地點に到達することは前に屢〻論じた通りである。

右に擧げた丈の事が多分大學の本文として存在して居つたものであらうといふのが朱子の說である。此の後に「此謂知之至也」といふ所の最初の語が附いて、それで前の數章の體裁と同一になる譯である。

語釋 間(コノゴロと訓む。) ○人心之靈(心の靈妙なるものと云ふ意味であるが、つまり吾の明德と云ふことである。) ○一旦豁然貫通(豁然といふことは、俄かに明るくなつて來ることである。すべて學問の進歩といふものは、長い間力を用ひて居つて其の途中は何等の効のない樣であるが、其の平當の積重りに依つて一時豁然として悟りを得ることが往々にしてあるものである。) ○心之全體大用(すべて體と用と二面について說明をするのが宋儒の學風である。吾が心の體、それの働き、之を全體と云ひ大用と云つたのである。)

所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色。此之謂自謙。故君子必愼

其ノ獨ヲ也。

訓讀 所謂其の意を誠にすとは、自ら欺くこと毋きなり。惡臭を惡むが如く、好色を好むが如くす。此をこれ自ら謙すと謂ふ。故に君子は必ず其の獨を愼む。

通釋 是から數節の間は、何れも誠意といふ事の說明をしたものであるが、最初の此の一句は、誠意といふものは如何なるものであるか、其の誠意を得るには更に如何なる工夫に依るべきかと云ふ事を說明したものである。

大學の前の章に「誠ニス其ノ意ヲ」といふ語を出して居るが、それは如何なる意味かといふと、自分で自分を欺くなと云ふ意味である。誠を得ると云ふ事は、自分を欺かないと云ふことより近道はない譯である。昔司馬溫公と云ふ人が、一生涯守るべき語として劉安世といふ門人に敎へた語に、誠の一字、之が一生涯守つても差支ない言葉であると敎へて居る。時に劉安世が質問を發して、然らば其の誠を得るには如何なる方法に依りますかと問ふたところが溫公は言下に、妄語せざるより始まると言つて居る。妄語といふことは僞りといふことである。僞りといふことは何の爲めに僞る必要があるかと云

へば、我自らが我を欺いて居るが爲にそれを糊塗する必要上其處に僞りと云ふものが生じて來るのである。今大學では、其の意を誠にすると云ふことは、自ら欺く勿れと教へて居る。つまり司馬溫公の妄語せざるより始まると云ふ事の更に根源を說明したものと謂つて宜からうと思ふ。

其の欺くことのない所の誠、之に就いては、欺くことを甚しく嫌ひ、欺かざることを甚しく好むと云ふ習慣を着けなければならぬ。欺く事を嫌ふことは、惡い臭を惡む樣に、又欺かざる事を好むことは好色を好むが樣にして行く。斯くの如くすれば、何時でも人間と云ふものは、自分自らは滿足し、自分自らは愉快を感ずる譯である。それを大學に「此之謂㆓自謙㆒」と云つて居る。謙とは慊しといふ意味である。斯くの如く誠といふものは必要にして且つ人間を愉快ならしむる所の道である。之を得るが爲めには、人の知ると知らざるとを問はず、其の獨を愼まなければならぬ。故に君子は必ず其の獨を愼むといふことを云つて居る。獨を愼むといふ意味は、つまり前に述べた所の自ら欺かないといふ所の反面の說明である。知る人の有ると無しとを問はずに自分で自らを愼むことである。昔漢に楊震と云ふ人があつた。或る時楊震のところへ暮夜人が訪ねて贈物をしたものがあつた。さて其の贈物をした人がいふには、今暗夜の事であるから知る者もない。どうぞ取納めて貰ひたいと言つた。

さうすると楊震は、お前は知る者が無いと云ふけれども、天知る、地知る、君知る、我知る。して見れば知る者が無いと言ふことは出來ないと言つたといふ話が傳つて居る。斯くの如きは、實に其の獨を愼むといふ事の最も典型的の例として宜からうと思ふ。

語釋 如レ惡二惡臭一（不正の事を嫌ふことは惡き臭を惡む樣にするといふ意味で、甚だしく誠ならざるを惡むの意である。）○謙（慊と同一である。つまり心持のよいと云ふ意味である。今日アキタラナイと云ふときに慊焉といふ文字を用ひて居ると同一の意である。）○愼二其獨一（人の居らない場合でも我自らが我を愼むと云ふ意味である。獨愼といふ事は修養上最も大切なる事である。中庸の初にも獨愼といふ文字が示されてゐる。）

小人閒居爲二不善一。無レ所レ不レ至。見二君子一而後厭然揜二其不善一而著二其善一。人之視レ己、如レ見二其肺肝一然。則何益矣。此謂下誠二於中一、形中於外上。故君子必愼二其獨一也。

訓讀 小人閒居すれば不善を爲す。至らざる所無し、君子を見て而る后厭然として其の不善を揜ふて其の善を著はさんとす。人の己を視ること、其の肺肝を見るが如く然り。則ち何の益かあらんや。此れを中に誠あれば、外に形ると謂ふ。故に君子は必ず其の獨を愼む。

通釋 此の一節はやはり前の節を承けて誠意といふ事を說明したものであるが、其の誠意を得んが爲には、前の節に云つた如く獨を愼むといふ工夫に賴らなければならぬ。故に此の節は更に獨愼とい

ふ事の必要を論じたものである。

小人共は獨で居る場合には必ずや正しからざる事を行つて、然も如何なる不善の事でも爲し兼ねないと云ふ事になつて居る。斯の如き小人でも、扨立派な君子の前に出て來ると、流石に自分の行が愧づかしいものと見えて、切りに我が正しからざる所を掩ひ隱して而して我の正しい部分だけを著はさうと努めて居る。其の點は小人と雖も同じく天から天の明德を享けて居る證據である。たゞ私慾私利の爲に一時其の明德が曇つて斯の如き結果になるわけである。此の樣に閒居不善を爲すといふ事は自ら欺くの大なるものであつて、誠意ならざることは無論である。小人は此の樣に閒居不善を爲して以て自分の利を得自分の功を成すと考へるかも知れないが、それは皮相の考である。すべて識者から我を見れば其は心の奧底までも見拔かれて行くものである。如何に掩ひ隱さうとした所で、それは掩ひ隱し果たせるものではない。若し掩ひ隱し得ないものとすれば、斯の如く小人が苦心を重ねて我の不善を掩ふといふ事に努力することは何の役にも立つものでない。中に誠ある者は假令著はすまいとしても必ず著はれて來る。其の點は、不善を抱いて居る者が掩ひ隱さうとして掩ひ隱すことの出來ないのと正に正反對である。斯う云ふ關係のものであるから、要するに技巧を弄して不善を掩ふといふ

様なことは何にもならない。寧ろそれよりも其の根本、獨を愼んで自ら欺かないといふ工夫が必要である。それが君子必ず其の獨を愼むといふ一句を出された譯である。

語釋 閒居（今日では、ヒマで居るといふ意味にも使つて居るが、此處などは寧ろ獨で居るといふ意味である。獨で居れば自然ヒマになるから自然右の用法にも轉じて來るわけである。）○無レ所レ不レ至（惡至らざる所無しといふ意味である。つまり如何なる惡い事でも爲し兼ねないといふ意味である。）○厭然（物を掩ひ隱す形容である）○如レ見二其肺肝一（心の奥底をも見拔くと云ふ意味である。）

曾子曰、十目所レ視、十手所レ指、其嚴乎。富潤レ屋、德潤レ身。心廣體胖。故君子必誠二其意一。

右傳之六章、釋二誠意一。

訓讀 曾子曰く、十目の視る所、十手の指さす所、其れ嚴なるかな。富は屋を潤し、德は身を潤す。心廣く體胖なり。故に君子は必ず其の意を誠にす。

右傳の六章は、誠意を釋す。

通釋 此の節は同じく前の節を承繼いで、誠といふことを積んで居れば其れは必ず著はるゝものである。其れの結果といふものは必ず美しく著はれて來るといふことを云つて、誠意を奬勵した語であ

る

曾子の曰ふには、多數の人の視、多數の人の之を指さす所のものは必ずや正しき批判を得るものである。故に小人が閑居して不善を爲し、君子が獨を愼んで誠を積むといふ事になれば、それに對して世間の人々は多數の批判と云ふものは必ず誤のあるものではない。故に不善を爲して之を掩はんとすることは愚であると云ふことを敎へたものである。

更に其の次には、德を積めば必ず其の德の著はれて來るといふ事の說明をして曰ふには、富貴の者になつて來れば自然其の家が麗はしくなつて來る。これは富が屋を潤すのである。同樣に、道德を積んで來れば必ず其の人の身といふものに潤が生じて來る。身の潤といふことは他にあらず、其の人の心が海の如く廣く、自然身體の動作も胖に暢び〳〵と感じて來る。さういふ結果を得るのである。是れ皆心を誠にする結果であるから、そこで君子は必ず其の意を誠にするといふことを云つたものである。

右に擧げた傳の六章は、要するに意を誠にすると云ふ事の說明である。

語釋　十目所レ視（大勢の人の視る所といふ意味であらう。十目といふは多勢の人の目といふ意味であらう。）○其嚴乎（其の批判が正しくして決して誤らないといふ意である。）○心廣體胖（德

よつて身を拘ほされて居る人の心、身の樣子を述べたものである。正きを行つた人は屈託心がない。故に、はいつも廣い、又身に窮屈が感じられない。これが心廣く體胖かといふ意味である。西鄕南洲に豪傑の氣分は如何なるものであるかと云ふ質問を發した人があつたとき、南洲は答へて、湯上りの身に涼風を浴びるやうな氣分であらうと言つた。これは心廣く體胖かと云ふことを具體的に說明したものである。）

所謂修身在正其心者、身(心)有所忿懥則不得其正。有所恐懼則不得其正。有所好樂則不得其正。有所憂患則不得其正。

心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。

此謂脩身在正其心。

右傳之七章、釋正心脩身。

〔訓〕謂ゆる身を脩むるは其の心を正うするに在りとは、身(心)忿懥する所あれば則ち其の正きを得ず。恐懼する所あれば則ち其の正きを得ず。好樂する所あれば則ち其の正きを得ず、憂患する所あれば則ち其の正きを得ず。心焉に在らざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らず。

此れを身を脩むるは其の心を正うするに在りと謂ふ。

右傳の七章は、心を正うし身を脩むるを釋す。

通釋 此の章は、說明にある如く正心脩身といふ事の說明である。つまり、身を脩むる者は先づ心を正うしなければならないと云ふ說明である。

大學の經文に所レ謂脩レ身在レ正二其心一と出て居るのは、吾々の心が怒りを含んで居る場合には必ず正き判斷を得ない。又恐れを懷いて居る場合にも必ず正き判斷を得ない。あまりに或ものを好み、あまりに或ものを樂しむといふ事があれば亦正き判斷を得ない。あまりに憂ふる所があれば亦正き判斷を得ない。斯う云ふやうに、七情といふものが極度に發して來ると、必ず其の心の判斷は正きを得ない。心の判斷が正きを得なければ其の身が正く脩まり得る筈はないのである。是れが即ち心を正うする事が身を脩むるの第一義であると云ふことを說明したものである。

次に又或ものを視、或ものを聽き、或ものを食ふとしても、若し餘所事を考へつゝ之を視、之を聽き、之を食ふと云ふことであれば、其の視たり聽いたり食つたりした物について、何物を視、何物を聽き、何物を食つたかと云ふことを覺らぬものである。心が此の點になければ、視たからと云つても

見えない。聽いたからと云つても聞えない。食うたからと云つても味を知らない。此の事は吾々の屢々經驗する所である。是亦其の心が正からざれば身を脩むることが出來ないと云ふことを說明する語である。

以上二つの說明によつて、身を脩むるには其の心を正うするに在るといふことが解つて來るわけである。

右傳の七章は全體として、正心脩身を說明したものである。

語釋 身有レ所ニ忿懥一（身といふ文字は、程子の說明では、恐らくは心といふ文字の誤であらうと云つて居る。今自分の解釋もそれに從つたわけである。忿懥と云ふことは、共に怒といふ意味である。朱子語類には怒の甚しきものと說明してゐる。吾々が日常怒のために身を誤り、怒のために判斷を失するやうな事は始終經驗して居る所である。）

所レ謂齊ニ其家一在レ脩ニ其身一者、人之ニ其所ニ親愛一而辟焉。之ニ其所ニ賤惡一而辟焉。之ニ其所ニ畏敬一而辟焉。之ニ其所ニ哀矜一而辟焉。之ニ其所ニ敖惰一而辟焉。故好而知ニ其惡一、惡而知ニ其美一者天下鮮矣。

訓讀 謂ゆる其の家を齊ふるは其の身を脩むるに在りとは、人は其の親愛する所に之て辟す。其の

賤惡する所に之て辟す。其の畏敬する所に之て辟す。其の哀矜する所に之て辟す。其の敖惰する所に之て辟す。故に好みて其の惡を知り　惡みて其の美を知る者は天下に鮮し。

通釋 是れは後の節と合して共に身を脩むる事が、家を齊ふることの基礎になるといふことを說明したものである。

大學の經文に「齊二其家一在レ脩二其身一」と出て居るのは、それは何う云ふ意味かといふと、人間が世の中に處する場合に、或は親み愛することが度に過ぎ、或は賤み惡むことが度に過ぎ、或は畏敬、或は哀矜、或は敖惰、各々其の度を過ぎる場合には、一方に偏した考を持つて來るものである。例へば子供を愛するといふ事になつて來ると、其の子供に對して特別の偏頗な判斷を下して來る。人を賤み惡むといふ場合になつて來ると、亦其の人について遂に正しき判斷を失つて來る。或人を非常に尊敬し畏れて居るといふ場合になると、亦一面に偏して、其の人に對する正しき判斷を失ふ。或人を甚だしく哀れみ氣の毒がるといふことになると、亦其の人に對する正しき判斷を失ふ。或もののために溺れ耽つて居るといふことになると、亦其の一方に於て偏して遂に正しき判斷を失ふ。斯う云ふ事が人情の自然である。だから愛憎の外に立つて正しき判斷を下すこと、例へば自分は此の者を好むけれど

も併し此の者には斯の如き惡があると判斷して其の間に區別をつけ、又此の者は自分は嫌ひであるが併ながら此の者には斯う云ふ美點があると云ふことを區別して之を知るといふ者は寔に天下に鮮いわけである。斯う云ふ辟する所のある者は皆其の身の脩まらざる者である。而して其の結果は到底家を齊へることは出來ぬ。故に其の身の脩まらざるものは遂に其の家を齊へることは出來ぬといふことを敎へたものである。此が此の節の主眼である。

語釋　之（オイテ。普通の於てと同じである。或は適いてと爲し、居るものもある。）○辟（偏頗といふ意味である。朱子は猶偏の如しと云つてゐる。）○哀矜（氣の毒がること。）○敖惰（或ものに溺れてオゴリ、ナマケルこと。敖は傲に通ずる。）

故諺有之、曰、人莫知其子之惡、莫知其苗之碩。

此謂身不脩、不可以齊其家。

右傳之八章、釋脩身齊家。

訓讀　故に諺に之れ有り、曰く、人其の子の惡を知ること莫く、其の苗の碩いなるを知ること莫しと。

此れを身脩まらざれば以て其の家を齊ふべからずと謂ふ。
右傳の八章は、脩身齊家を釋す。

通釋 前の節に述べた通りであるから、そこで偏頗な考があれば正しい判斷を得ないといふことを諺に敎へて居る。其の諺に曰ふ。何人も自分の子供の缺點を知つて居る者はない。是はつまり親愛する所に於て僻するが爲である。又何人も自分の植ゑてゐる苗の大きくなつてゐると云ふことに氣の着く者はない。つまり自分の苗となれば其處に慾心が生じて、如何に大きくなつて居つても、更に大きくなれと希望する其の僻する考があるからである。この色々の例を擧げた說明は、要するに七情の爲に身の脩まらないことを說明し、身の脩まらざることが遂に災して一家に於ては一家の齊はざる結果となるといふ事を敎へたのである。
右の一節は脩身齊家を說明したものである。

所謂治國必先齊其家者、其家不可敎、而能敎人者無之。故君子不出家而成敎於國。孝者所以事君也。弟者所以事長也。慈者所以使衆也。

【訓讀】謂ゆる國を治めんとすれば必ず先づ其の家を齊ふとは、其の家教ふべからずして、能く人を教ふる者は之れ無し。故に君子は家を出でずして教を國に成す。孝は君に事ふる所以なり。弟は長に事ふる所以なり。慈は衆を使ふ所以なり。

【通釋】是から後の數節は、家を齊へ國を治むるといふ事の解釋に當るのである。つまり國を治めんと欲する者は先づ其の家を齊へて行かなければならないと云ふことを說明したものと見ることが出來る。

大學の經文の中に、國を治めようとすれば必ず先づ其の家を齊へよといふことが出て居る。といふのは、家庭內に於て教が立たない樣な人であれば、其の人にして他の人を教へるといふ事は絕對に出來ない事である。反對に又家庭內に於て教の屆く人であるならば、其の人は直に以て國、天下を治むる事が出來るわけである。そこで傳の方で、君子は家を出でずして教を國に成すと云つて居るのである。家庭內に於ける孝といふ事は、國に出づれば則ちそれが取りも直さず君に事ふる所以となる。家庭內に於ける弟といふ事は、國に出づれば則ちそれが取りも直さず長に事ふる所以となる。家庭內に於ける親の慈といふものは、之が社會に出づれば取りも直さず直に其が一般民衆民を使ふ所以となつ

て來る。斯の如くなると、家庭内の孝、弟、慈の如き德目は直に國家社會に取つて十分君に事へ、長に事へ、衆を使ふ道となるのである。故に其の家庭内に於て十分齊ふ者であれば必ず其の國を治むることが出來る道理になるのである。

語釋 弟（弟の兄に事ふる道、同時に少者が長者に事ふるの道である。）○慈（イツクシミといふ意味であるが、親の子に對する所の慈愛を云つたものである。）

康誥曰、如保赤子。心誠求之、雖不中不遠矣。未有學養子而后嫁者也。

訓讀 康誥に曰く。赤子を保んずるが如しと。心誠に之を求むれば、中らずと雖も遠からず。未だ子を養ふことを學びて而る後に嫁する者は有らざるなり。

通釋 此の一節は誠心誠意事に當れば如何なる事と雖も成し遂げ得ないものは無い。家庭を治むるの道に專心一意なれば、それが即ち國を治むるの道に役立つものであるといふ事を默々に教へたものである。

書經の康誥篇の中に下の樣なことが曰はれて居る。赤子を保んずるが如し――赤子を保育する樣なものであると其の意味は、何人も愛らしい赤子を保育する場合には專心一意力を用ひる。斯の如く心

誠に或ものを求むると云ふならば、其の求むる方法が、縦しや外れて居ることが有つたとしても甚だしく外づれると云ふやうなことは有り得ない。人は子供を養ふ道を學んで其の後にお嫁入するといふ者は一人も無い。お嫁入した後に子供が生れて來れば、其の子供を養はんとする誠の心が有るが爲に教を受けなくとも子供を養ふの方法を得るのである。是が即ち心誠に之を求むれば中らずと雖も遠からずと云ふ意味である。

語釋 保二赤子一（赤子を保育するの意味） ○雖レ不レ中不レ遠（若し道に中らないとしても、道を距ることが遠くない。大略は中るといふ意味である。）

一家仁一國興レ仁、一家讓一國興レ讓。一人貪戾、一國作レ亂。其機如レ此。此謂二一言僨レ事、一人定一レ國。

訓讀 一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興る。一人貪戾なれば一國亂を作す。其の機此の如し。此れを一言事を僨り、一人國を定むと謂ふ。

通釋 此の一節は亦一家の治まると治まらざるとが直ちに一國の興廢に關係するものであると云ふことを述べたもので、要するに最初にあつた國を治めんとするものは必ず先づ其の家を齊ふと云ふ事

の關係を說明したものである。

一家の人にして仁を行ふといふ事になれば、一國の者は必ず之に感奮興起して仁の風俗が興つて來る。又一家の人人が謙讓の德を有つて居るといふことになれば、一國の者も亦其の風を聞いて必ず謙讓の風を興して來る。此の樣に美しい點が直に國、社會に響くのみならず、惡い場合も同樣であつて若し一人が貪慾な、道に戾つた人間が有りとすれば、それの影響感化を受けて一國必ず亂を作す者が生じて來るのである。其の一家の治まると治まらざるとが一國の治亂興廢に關係するといふ機は是程微妙なものである。昔の人が、一言にして事を僨り又一人の力にして一國を定むると謂つて居るのは、つまり此の樣な事である。一言は僅かな事の樣である、一人は僅かな人間の樣であるが、其の影響する所は極めて大きいといふ事を云つたものである。

語釋 興レ仁（仁といふ風に興起して來る） ○讓（謙讓なること） ○貪戾（貪はムサボルと云ふことで、暗に仁の反對の意味を含んで居るものである。戾はモトルといふ文字であつて、これは亦暗に讓といふこととの反對の意味を含めたものである。） ○其機如レ此（機といふのはハヅミといふ意味である。僅かなハズミに因つて大いなる結果を起す。ちよつとのハズミに因つて忽ち其の結果を生ずる場合に云ふ言葉である。） ○僨（ヤブルこと。朱子は覆敗なりと說明してゐる。）

堯舜帥二天下一以レ仁、而民從レ之、桀紂帥二天下一以レ暴、而民從レ之。其所レ令反二其所一

好、而民不從。是故君子有諸己而后求諸人、無諸己而后非諸人。所藏乎身不恕、而能喩諸人者、未之有也。

故治國在齊其家。

訓讀 堯舜天下を帥ゐるに仁を以てして、民之に從ひ、桀紂天下を帥ゐるに暴を以てして、民之に從ふ。其の令する所其の好む所に反しては、民從はず。是故に君子は諸を己に有して而る後に諸を人に求め、諸を己に無くして而る后に諸を人に非る。身に藏する所恕ならずして、而して能く諸を人に喩す者は、未だ之れ有らざるなり。

故に國を治むるは其の家を齊ふるに在り。

通釋 此の一節は、一家の事が直に一國に及ぶといふ前の節の意味を承けて來て、堯舜の天下を治めた所以が家庭の治まつた事に原因し、桀紂が天下を亂した事がやはり一人一家の治まらざりし事に原因するといふ實例を擧げて來て、それから君子が世を治め天下に臨まんとするには必ず自分の一身一家を治むる事を先にしなければならない。然らざれば効果を擧げるものでないといふ事を説明した

ものである。

昔の聖王の堯とか舜とかいふ天子が天下を帥ゐて行く遣方は、仁といふ道を以てした。それ故に人民も亦之に從つて仁といふ風に興つて來たのである。桀とか紂とかいふ暴君が天下を帥ゐる場合には暴といふ道を以てしたのである。それ故に天下の民も亦之に從つて暴に感化したのである。凡て發する所の命令が自分の好む所に從つて居れば下の者は其の命令に從ふものである。反對に、其の發する所の命令が自分の好む所に反して居るとすれば人民は之に從はないものである。堯舜の好む所は仁である。若し堯舜が其の場合に不仁を爲せよと民に命令したと假定すれば、民は其の命令に從ふ筈はない。桀紂の好む所は暴虐である。然るに若し桀紂が仁義の美しき道を爲せよと命令したと假定すれば、民は其の命令には從はないのである。此の樣な譯であるからして、德有る人といふものは必ず先づ自分に履み行つて模範を示した後に、其の同樣の道を他人に要求するのである。又自分には惡事は致さないと決心し實行した其の後に始めて、若し他人に其の惡事が有つた場合に之を非るといふ事にするのである。凡て他人を責むるも又他人に求むるも、自分の實行如何と云ふことが其本の標準となつて居る。此の道を儒家では恕の道と云ふ。恕といふのはオモヒヤリの道であつて、自分の實行せざること

を以て他人に實行を責めたり、或は自ら惡事を行つて、他人の惡事を咎めだてしたりすることの無い道である。そこで若し上に立つ人が今言つた樣な恕の道と違つた行をすると假定するならば、それで以て他人を教へ諭し感化するといふ事は到底出來得ないことである。

此の樣な譯であるから、大學の經文に國を治むるは其の家を齊ふに在りと云つて居るのである。

語釋 所レ令反ニ其所一レ好（自分で命令する事柄が自分の好んでゐるものに反對する場合といふこと。例へば善を行ふ人が、惡をせよと命令する如き、惡を行うて居る人が、善をせよと命令するが如し。） ○有ニ諸己一而后求ニ諸人一（自分の行の上で實行して居つて后に初めて人に要求すること。） ○無ニ諸己一而后非ニ諸人一（我が身に行ふまじと決めて置いて、それから后に他人に其の行のあつた場合に之を非ること。例を擧げれば、不正直な事は自分が先づ行して居らない。そこで他人が不正直な事をやつた場合に初めて之を非るといふこと。） ○所レ藏ニ乎身一（自分の身に存する所といふも同じこと、我が身を處する遣方のこと。） ○恕（オモヒヤリの意味。前に擧げた諸を己に有して而ろ后に初めて諸を人に求め、諸を己に無くして而ろ后に初めて諸を人に非ると云ふ事、其の自身が即ち恕である。）

詩云、桃之夭夭、其葉蓁蓁。之子于歸、宜ニ其家人一。宜ニ其家人一、而后可ニ以教一ニ國人一。

通釋 詩に云ふ、桃の夭夭たる、其の葉蓁蓁たり。之の子于に歸ぐ、其の家人に宜しと。其の家人に宜しくして、而る后に以て國人を教ふべし。

【通釋】此の一節は詩經の文句を引いて來て、家庭の能く治まつて居る人は即ち國人を教へることが出來るといふ意味を說明したものである。

詩經の周南桃夭の篇の文句に、「桃の夭夭と咲きほこつてゐる其の桃の葉が夏になつて蓁蓁と茂つて來る。其の樣に若い娘が美しく又身も成長して來て、于に初めて他人の處に嫁ぐ。此の樣な娘子が他人に嫁いだ場合には、必ずや其の緣家先の家人に能く調和が出來るであらう」と出て居る。この詩經に其の家人に宜しと云ふ一句を用ひてあるが、此の樣に家人に宜しい人間であつてこそ、初めて一國の間に立つて國人を教へて行くことが出來るわけであると云ふのである。

【語釋】夭夭（花の美しいこと、同時に少女の若々しく美しいことを形容するのである。）○蓁蓁（桃の葉の美しく盛に茂つてゐる形容、同時に少女の身體の生長してやがて御嫁に行く位になつて居ることを形容するのである。）

【餘論】詩經の文句には興と云ふものがある。或る一つの事を述べて其れに依つて他の事を想はしむる遣方である。桃の美しいといふ事、これは直に若い娘の美しいといふ事を聯想せしむる爲、其の葉が美しく茂つて居るといふ事、これは直に、若い娘が年齢長じて身體も調うて來るといふ事を思出させる爲の興である、それであるから桃之夭夭、其葉蓁蓁といふ一句は、要するに美しい若い娘が成長してお嫁に行く時期に達したと云ふ事を表す爲の句である。

詩云、宜兄宜弟。宜兄宜弟、而后可以教國人。詩云、其儀不忒、正是四國。其爲父子兄弟足法、而后民法之也。此謂治國、在齊其家。

訓讀 詩に云ふ、兄に宜しく弟に宜しと。兄に宜しく弟に宜しくして、而る后に以て國人を敎ふべし。詩に云ふ、其の儀忒はず、是の四國を正すと。其の父子兄弟たるもの法るに足つて、而る后に民之に法る。此れを國を治むるは其の家を齊ふるに在りと謂ふ。

通釋 此の二句も同じく詩の文句を引いて來て、而して家庭內の能く齊ふ人にして初めて國民を敎ふることが出來ると云ふ意味を說明したものである。

詩經の小雅蓼蕭篇の文句に、家庭に居つて兄に對しても宜しく弟に對しても宜しく圓滿に行くことが出來るといふ語がある。此の詩に云はるゝが如く、兄に宜しく弟に宜しい人であつてこそ初めて

國人を教ふることが出來るわけである。又詩經の曹風鳲鳩篇の文句に其の儀忒はず此の四國を正すといふ語がある。つまり其の人の具へて居る威儀が道に忒はない樣な人にして初めて四方の國を正すことが出來るといふ意味である。君子が既に道に忒はない威儀を備へ其の周圍に居る父、子、兄、弟がまた皆之に感化されて模範とするに足る樣なことになつて居れば、茲に初めて其の人は國人の模範となり、國人を指導することが出來る樣になるのである。

斯う云ふ意味であるからして、そこで大學の經文には、國を治むるは其の家を齊ふるに在りといふことを謂つて居るのである。

【語釋】其爲父子兄弟足法（其の人の感化によつて、其の人の父子兄弟がまた模範となるやうになれば、其の後には其の模範となることが出來るとの意。）

右傳之九章、釋齊家治國。

【通釋】右傳の九章は家を齊へ、國を治むるを釋す。

【餘說】是は前の數項の意味を括つての語である。

所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟。上恤孤而

民不倍。是以君子有絜矩之道也。

【通解】謂ゆる天下を平かにするは其の國を治むるに在りとは、上、老を老として、民、孝に興り、上、長を長として、民、弟に興る。上、孤を恤みて、而して民、倍かず。是を以て君子に絜矩の道有り。

【通釋】是れ以下數項の間は、是亦一國を治むる事が天下を平かにする源を成すものであるといふ事を説明したものである。

大學の經文に、天下を平かにせんとすれば其の國を治めなければならないと謂つて居る。其は如何なる意味かといふと、一國の上に立つ人が、年寄を年寄として勞はると云ふ事を實現した場合に、初めて人民が之に感じて親孝行といふ風に感奮興起して來るものである。又一國の上に位する人が、年長者を年長者として尊敬して居る場合に、初めて民は孝弟の弟といふ道に興つて來るわけである。又一國の上たる者が寄邊なき孤兒を恤むといふ事を實現する場合に初めて人民が其の人情の厚きことに感化されて變に倍かないといふ行を爲して來るものである。斯う云ふ譯であるからして、德有る者

が國に臨み天下に臨むには、己れ自ら實行して、己れを尺度として他人を推すといふ其の遣方を始終怠らずに居るのである。

【語釋】老レ老（下の老は老人の意味。上の老は、其の老人を老人として勞はる意味。）○長レ長（是亦上に同し。卽ち長者を長者として尊敬すること。）○絜矩之道（一口に言へば略ぼ恕といふ事に似て居るのである。絜といふのは持上げる意、である。矩といふのは曲金といふ意味である。曲金を持上げて之を以て人を量り方正ならしむるといふこと、自分を推量つてそれを標準として他の事を推量し且正しくする意味である。故に終局恕といふ事と同一意味になるのである。）

所レ惡二於上一、毋二以使一レ下。所レ惡二於下一、毋二以事一レ上。所レ惡二於前一、毋二以先一レ後。所レ惡二於後一、毋二以從一レ前。所レ惡二於右一、毋二以交一二於左一。所レ惡二於左一、毋二以交一二於右一。此之謂二絜矩之道一。

【讀】上に惡む所、以て下を使ふこと毋れ。下に惡む所、以て上に事ふること毋れ。前に惡む所以て後に先んずること毋れ。後に惡む所、以て前に從ふこと毋れ。右に惡む所、以て左に交はること毋れ。左に惡む所、以て右に交はること毋れ、此れを之れ絜矩の道と謂ふ。

【通釋】此の一節は前節に擧げた絜矩の道といふ事を具體的に說明したものである。

絜矩の道と云ふことは、前に申した通り略ゝ忠恕といふと同一の事である。實例を以て言ふならば、

自分の目上の人の行に就て、此の事は好ましくないと思ふ點があつたならば、其の同じ道を以て、今度自分が目上となつて下を使ふ場合に其の道を用ひてはいけない。自分が使つて居る部下の遣方に付て、此の點が思はしくないと思ふ所があつたならば、其の同じ道を以て、自分が他の目上の人に事ふることをやつてはいけない。自分の前に居る人の行に就て此の點が氣に食はないと思ふならば、其の同じ行を以て自分の後から來る人に對して自分が先行者となつて之を行つてはいけない。同樣に、自分の右側に居る人に、之をやつて貰ひたくないと思ふ點があつたなら、それと同じ道を自分の左側に居る人に用ひてはいけない。左に惡む所があつたならば之を以て右の者に交はつてはいけない。斯う云ふ樣に、自分がやつて貰ひたくない事は人に對してやらない。若し積極的に言ふならば、自分の好む所は人に施し、己れの欲せざる所は人に施すこと勿れと。是れが絜矩の道である。要するに忠恕と云ふと略〻同じである。此の道を君子人は常に心得て、天下を平かにせんとするときには、先づ其の國を治めて然る後に進んだものである。

【語釋】所レ惡ニ於上一毋ニ以使レ下（自分の上官が自分に對して苛酷の要求を爲したと假定し、尙自分が其の苛酷に就いて大いに厭な感じを有つて居つたと假定する。其の時には今度自分が部下の者を使ふ身分となつても、其の同じ苛酷の道を以て下のものに對してはならないと云ふこと。）

詩云、樂只君子、民之父母。民之所好好之、民之所惡惡之。此之謂民之父母。

【訓讀】詩に云ふ、樂只の君子は、民の父母と。民の好む所は之を好み、民の惡む所は之を惡む。此れを之れ民の父母と謂ふ。

【通解】此の一節は前に擧げた絜矩の道を履み行ふ樣にして初めて天下の民の父母と仰がるゝことが出來るといふ事を云つたものである。而して之を說明するに亦詩經の文句を引いてある。

詩經の南山有臺の篇に、樂只の君子は民の父母といふ一句が出て居る。樂只と云ふことは君子の德を形容した語で、其心常に樂んで居る君子人と云ふ意味である。其の樣な君子人であれば、其の君子人こそは民の父母となる事が出來ると。是が詩經の意味である。そこで此の樣な君子人といふものは、民の好む所を自分の好みとし、民の惡む所を己れの惡みとして居る。つまり好惡共に民と共にするのである。斯う云ふ人にして初めて民の父母となることが出來ると云ふのである。つまり思遣りのある人にして初めて民の父母となることが出來るといふ意味である。而して其の思ひやりと云ふことは取

りも直さず絜矩の道である。

語釋 樂只（只といふ文字は意味のない語である。樂只といふのは、心常に樂む意味で、仁德を行ふ人の形容である）

詩云、節彼南山、維石巖巖。赫赫師尹、民具爾瞻。有國者不可以不愼。辟則爲天下僇矣。

句釋 詩に云ふ、節たる彼の南山、維れ石巖巖たり。赫赫たる師尹、民具に爾を瞻ると。國を有つ者は以て愼まざるべからず。辟すれば則ち天下の僇となる。

通釋 此の一節は、人君といふものは民の仰ぎ見る所の者である。故に其の人の行にして過つ所があるならば天下衆民の見る所となつて必ず其の過を追求せらるゝに至ると云ふことを敎へたものである。要するに、一國を治めない様な人は天下を治むることが出來ないといふ前からの語を說明したものである。

詩經の小雅節南山の篇に下の詩が歌はれて居る。彼の秀でた高い南山は石巖巖と積重なつて居る。この高い南山は天下の總ての人の仰ぎ見る所である。それと同様に、今日赫々たる地位に居る周の大

師尹氏、此の人は其の位の高く、地位の優れて居る點からして、一般の民百姓が皆誰も彼も目を瞻つて其の勢を見詰めて居ると。此の詩經の意味は、地位の高い者は衆人の仰ぎ望む所であるから、從つて其の身を持するにも殊更以て愼まなければならぬ。若し其の地位に在る人にして頗偏な誤れる考に據るならば、必ずや衆怨の赴く所遂に天下の大戮となることを免れないといふ事を云つたものである。

語釋 節彼南山（節といふのはそそり立つて高く大いな貌。南山といふのは終南山の略稱である。）○赫々師尹（赫々とは其の地位の高くていかめしいこと、師尹とは周の大師である尹氏といふ人、此は自己の姻戚などばかりを採用して遂に天下を誤つた人である。）○辟（偏頗な行をすること、絜矩の道に由らず一人の私意を用ひるが如きは即ち偏である。）○天下僇（身弑せられ、國亡びて、天下の大戮と爲ること。）

詩云、殷之未喪師、克配上帝。儀監于殷、峻命不易。道得衆則得國、失衆則失國。

訓讀 詩に云ふ、殷の未だ師を喪はざる、克く上帝に配せり。儀しく殷に監るべし。峻命易からずと。衆を得れば即ち國を得、衆を失へば則ち國を失ふを道ふ。

通釋 此の一節は、やはり王者たる者が自分の德を修むる事に因つて國家を保ち、國家を保つこと

が平天下の源であるといふ事を云つたものである。

詩經の大雅文王の篇に云ふには、殷の國がまだ人心を喪はず國民を澤山持つて居た時分には、寔に其の德は上帝の德と相並んで居つたものである。さういふ事であつたのが、後に至つて忽ち覆滅してしまふと云ふ事になつた。それであるから吾々後代の者は亦宜しく殷の國に鑑みて、自ら愼む所がなければならない。何となれば、天の命といふものは必ずしも此の人が何時迄も之を保ち得るといふことは謂ひ得ないものであるから……と。文王の篇の教へる所は斯の如きものであつた。つまり人君たる者も、衆を得て居れば國を保ち、衆を失つてしまへば國を失ふといふ事を此の詩に於て教へられたものである。斯う云ふ狀態であるから、國家を保ち或は天下を保たんとする者は其の根本に於て身を愼まなければならぬと云ふ意味である。

語釋　配二上帝一（上帝といふことは天帝といふこと。配ふるといふことは合するといふこと。前王の德が天と同一であつて天と其の德を合するといふ意味である。朱子は配は對なり、上帝に配すとは其の天下の君と爲つて、上帝に對するを言ふと說いてゐる。）

○儀（宜といふ普通の字と同一である。）　○監二于殷一（殷の國の過去の失敗について鑑る殷鑑遠からずなどと云ふ語と同じく詩經から出て居る。）　○峻命（大いなる命といふ意味であつて、つまり天の授くる所の運命といふ意味である。）

○不レ易（天命が時々變つて、今迄こちらに授かつて居つたものが向ふの方に授かる樣な事のあるもので、決して容易のものではないといふ意味である。）

是ノ故ニ君子ハ先ヅ愼二ム乎德一ヲ。有レバレ德此ニ有リレ人。有レバレ人此ニ有リレ土，有レバレ土此ニ有リレ財。有レバレ財此ニ有リレ用。

德者本也。財者末也。外本内末、爭民施奪。

【讀方】是の故に君子は先づ德を愼む。德有れば此に人有り。人有れば此に土有り。土有れば此に財有り、財有れば此に用有り。德は本なり、財は末なり。本を外にし末を內にすれば、民を爭はしめて奪ふことを施す。

【通釋】是から以下數節は、人君たる者は德を愼んで行かなければならぬと云ふ事を教へたものである。初めは德が根本であつて其の根本を修むれば必ず財用を得るといふ事を教へ、更に財用と德とを比較すれば、飽まで德は根本であつて財用は末であると云ふ事を教へたものである。而してその本末をあやまれば國亂れ民に爭が起り、互に相奪ふやうになると云ふことをも教へて居るのである。

每々述べて居る樣な次第であるからして、君子たるものは必ず先づ自己の明德を愼むことにする。若し君子人が自己の明德を明かにしてこれを愼むことが出來れば、必ず其の人は人心を得るわけである。人心を得るやうな人であれば必ず國家と云ふやうな土地を有ち得るものである。土地を有ち得るものであるとすれば必ず其の人は財と云ふものも集め得るものである。財を集め得ることがあれば、

必ず其の財を用ひる所の用途と云ふ事も出來るわけである。

斯う云ふ樣に、德を脩めれば則ち財用と云ふものは自然に集まつて來るものであるが、併しながら此の二者を同一視し、同價値のものと視るのは間違である。德と云ふものは、もと〳〵根本であつて、財と云ふものは、もともと末である、であるから君子の力むべき事は無論財に非ずして德でなければならぬ。若し之を誤つて、其の本である所の德を外にし遠ざけ、末である所の財を內にし大切にすると云ふ事になつて來ると、其の結果は必ず人民をして爭はしめ人民をして爭奪を爲さしむる樣な事になつて來る。此も畢竟絜矩の道の欠如から原因して來るものである。故に朱子は或問に於ては「絜矩の心無ければ、則ち未だ其の民を爭奪せしめ、之に施すに劫奪の敎を以てせざるものはあらず」と詳解を加へてゐる。

つまり人君の德の修まると修まらざると云ふことが、延て天下國家の太平を得るか得ぬかといふ事に至大の關係を有つて來るものである。

【語釋】有レ人（人心を得て、人民を集め得ること。）○有レ土（土地を有つと云ふことで、つまり國家を有つと云ふことである。）○外レ本內レ末（本といふのは德のことである。之を外にするとは、之を遠ざける意味である。末とは財用のことである。之を內にすると云ふことは、之を大切に考へると云ふことである。）○爭レ民施レ奪（これは德を力めずして財を力めた人の免れ難き弊を述べたものである。民を爭はしめると云ふのは、人民をして喧嘩せしむる事である。奪を施すと

云ふのは、其の結果が一般の爭奪強奪の風を助長すると云ふ事である。)

是故財聚則民散、財散則民聚。是故言悖而出者、亦悖而入。貨悖而入者、亦悖而出。

【訓讀】是の故に財聚まれば則ち民散じ、財散ずれば則ち民聚まる。是の故に言悖つて出づる者は、亦悖つて入る貨悖つて入る者は、亦悖つて出づ。

【通釋】此の一節は財用といふものと德といふものとは、中々一致し難いものであると云ふことを教へたものである。前にも述べて居つた通りに、財と云ふものを聚むることにのみ腐心すると、人民は必ず散々ばら／＼になつてしまふ。財を聚むることに腐心せずに居ると必ず民心を得て人民が聚まつて來る。つまり財と人民とは互にアベコベの聚り方をするものである。斯の如き狀態であるからして、世の中に始終云ふことであるが、こちらから道理に悖つた亂暴な言葉を出すと、向ふから亦道理に背いた暴言が必ず我が耳に入つて來る。それと稍〻似て居るが、財產と云ふものも正しからぬ事をして我が手に入つたものとすれば、其の財產は亦我が心に悖つて出て行くものである。所謂下世話に云ふ

所の惡錢身に附かずと云ふ事である。

【語釋】悖而出（道理に逆らつて無理な形で出て行く。）

康誥曰、惟命不于常。道善則得之、不善則失之矣。

楚書曰、楚國無以爲寶。惟善以爲寶。

舅犯曰、亡人無以爲寶。仁親以爲寶。

【訓讀】康誥に曰く、惟れ命常に于いてせずと。善なれば則ち之を得、不善なれば則ち之を失ふを道ふ。

楚書に曰く、楚國以て寶と爲すべきもの無し。惟善以て寶と爲すと。

舅犯が曰く、亡人以て寶と爲すべき無し。親を仁するを以て寶と爲すと。

【通釋】書經の康誥といふ篇の中に曰ふには、天の命ずる運命といふものは、決して常に此の人に存する、或は常に此の場所に在るといふ樣な定つたことは言ひ得ないものである。つまり善道を行へは必ず此の天命を得るが、不善なる事を行へば直に此の天命を失ふと云ふことを教へたものである。

それから又楚書――今日の國語の中の楚語であるが――其の中に曰ふには、楚國には格別是れぞといふ寶は一つも無いのだ。唯一つ寶として居るのは卽ち善其のものであると、斯う曰つて居る。

それから晉の文公の伯父に當るところの舅犯と云ふ人の曰つた事がある。自分は何も寶と爲すべき物を有たない。唯併ながら親むべき人に對して愛情を有つて居るといふ、尊み親むべき人を大切にして行くといふ、それを自分の寶として居ると。斯う曰つて居る。

此の數節は皆要するに人間の眞の寶といふものは財用に非ずして德である。財産に非ずして人間の道であると云ふ事を教へたものである。

【語釋】命不ㇾ于ㇾ常（天命が何時も此の人に在らぬ此の場所に在るといふ譯のものではないと云ふこと。）○楚書（楚語のこと。今日の國語の中の一つである。）○舅犯（晉の文公の舅の狐偃といふ人で、舅犯と云ふのは字である。）○亡人（これは國を亡命した人と云ふ意味である。舅犯は前に晉の文公に從つて共に國を亡命して外に居つたのである。此の語は其の亡命中の語であるが故に亡人と云つたのである。）○仁親　親むべき人を愛すること。仁は愛なりと釋すべきである。）

【餘論】楚國が善人を寶としたと云ふ話は國語にも又劉向の新序にも出て居る。其に因ると秦は楚を打たうとして使をして楚の寶器を觀しめた。然るに楚の昭奚恤と云ふ臣は對へて、寶器は賢臣に在りと云つて、令尹子西と、太宗子敖と、葉公子高と、司馬子反とを見えしめたので、秦の臣も驚いて歸

國してから秦王に「楚は賢臣多し、未だ謀る可らず」と反命したと云ふのである。此が其の故事である。又身犯の話は左傳にも又禮記の檀弓にも出て居る。

秦誓曰、若有一个臣、斷斷兮、無他技、其心休休焉、其如有容焉。人之有技、若己有之、人之彥聖、其心好之、不啻若自其口出、寔能容之。以能保我子孫。黎民尙亦有利哉。人之有技、娼疾以惡之、人之彥聖、而違之俾不通。寔不能容。以不能保我子孫。黎民亦曰殆哉。

訓讀 秦誓に曰く、若し一个の臣あらんに、斷斷として他の技なく、其の心休休焉として其れ容るゝ有るが如し。人の技有る、己れ之を有するが若く、人の彥聖なる、其の心之を好し、啻に其の口より出すが若くなるのみならず、寔に能く之を容る、以て能く我が子孫を保んず。黎民も尙はくは亦利有らん哉。人の技有る、娼疾して以て之を惡み、人の彥聖なる、之に違ひ通ぜざらしむ。寔に容るゝ能はず、以て我が子孫を保んずる能はず。黎民も亦曰に殆い哉。

通釋 此の一段は治國平天下の一つの要領として、上たる者は大勢の人間を採入れる度量の必要で

あると云ふことを述べたものである。其の趣意を說明する爲に書經の秦誓の文章を引いて來たものである。

秦誓の文章に曰ふには、譬へて見るに、爰に一人の人が有つたと假定する。其の人は誠に正直一片で、融通の利かない人間である。他に何等の技術と云ふものも無い。併しながら其の人の心は誠に大きくして、他人の言ふ所を採用ひるといふ雅量を存して居る。それで其の人は、若し他人にして技術を有する者があれば、恰も自分が其の技術を有するが如くに喜んで採り用ひて居る。又他人にして立派に正しき人間が有つたとすると、自分も衷心其の人を好み、單に其の人を好むといふことを口に出すのみならず、眞に心から其の人を採入れて行く。斯くの如くにして衆善を取入るゝの結果は其の人に他の技が無いにも拘らず、竟に我が子孫を保んずると云ふ事になる。斯くて我が子孫を保んずる結果は竟に一般の民百姓も亦其の人の利益を蒙ると云ふ事になる。是は即ち衆を容るゝといふ事が世の中に遺す所の德である。然るに又爰に正反對の人が有ると假定する。其の人は少しも衆を容るゝの雅量を有たない。他人が若し立派な技術を有つて居ると、自分は之を嫉み疾み、又他人が立派な德を備へて居るとすると、態々其の人に逆らひ違うて、以て其の人の爲さんと欲する所、往かんと欲する所を

通ぜざらしむる樣に妨げをする。これは實に衆を容るゝことの出來ない人間で、斯の如き人は竟に我が子孫を保んずることも出來ない。而して黎民も其の人に賴つて非常な禍を受けて、民百姓も殆い境遇に陷るわけである。此の樣に自分自身の技の有る無しといふ事に拘らず、他人を容るゝ容れないと云ふことの相違が、直に一方には一般人民の危殆を招き、一方には一般人民の利益を招くといふ二つの相違を起すものである。故に上たる人は何を措いても衆を容るゝ度量を要するわけである。此亦絜矩の道の有無が其の主因を爲すことは云ふまでもない。

語釋 秦誓(周書の一篇である。秦穆公が蹇叔の言を用ひず鄭を襲うて、爲に晉からさんざん敗られたので、穆公が素服して罪を師に誓つたのが即ち此の文である。) 一个臣(一人の人といふ意味である。) ○斷斷兮(眞正直であつて、餘り融通の利かない人の形容、朱子は斷々は誠一の貌と云つてゐる。) ○休休焉(他人を取入るゝ雅量のある形容。) ○若己有之(人が技術才能を有つて居ることを見るのに、恰も自分が其の技術才能を有つて居るかの樣に之を歡び迎へること。) ○彥聖(彥といふのは、立派な人といふ意味である。聖といふことは、物事に通じ明かなる人といふ意味である。聖人の聖とは些か違ふ所がある。) ○黎民(一般の民百姓といふ意味。黎といふは黒いといふ意味で、民の頭が黒いから之を黎民と云ふ。) ○媢疾(媢は嫉むと云ふこと。疾は忌み嫌ふといふこと。即ち嫉妬すること。) ○殆(アヤフイと訓む。危殆と熟す文字である。)

唯仁人、放流之、迸諸四夷。不與同中國。此謂唯仁人爲能愛人、能惡人。

通釋 唯仁人は之を放流し、諸れを四夷に迸け、與に中國を同うせず。此れを唯仁人能く人を愛し

能く人を惡むを爲すと謂ふ。

【通釋】これは前節の後に結付いた章であつて、若し前に擧げた樣な、他人の技有る者を嫉み惡み、他人の彥聖なる者に態と逆らひ遣つて通ぜざらしむる樣な人間が世の中に有りとすれば、仁人なる者は斯くの如き人を遠ざけて而して之を夷の外の邊までも逐ひ屛けて、與に同じ中國には住まはせない樣にするものである。それであるからして、昔の人が、仁人は能く人を愛し能く人を惡むと言つて居るが、斯の如き惡しき人に對しては仁者は眞に之を惡むことを爲すものである。

【語釋】放流（逐ひ放つ。遠くに島流すること。）○迸（屛に同じ。普通の退けるといふ意味である。）○四夷（東夷・西戎・南蠻・北狄、之を四夷と云ふので、中國の四方は皆夷の住居であると、支那の上代の人は考へて居つたのである）

見レ賢而不レ能レ擧、擧而不レ能レ先、命也。見二不善一而不レ能レ退、退而不レ能レ遠、過也。

【訓讀】賢を見て擧ぐる能はず、擧げて先にする能はざるは命なり。不善を見て退くる能はず、退けて遠ざくる能はざるは過なり。

【通釋】此の一節は、同じく前節を承けて、衆を容るゝが如き人は之を採用ひるが宜し、衆を容るゝこと能はずして他人の才能を嫉み惡むと云ふ樣な人は、之を退くるが宜いといふことを一般的の形に

於て論じたものである。

上に立つ人が賢人を見知つて居りながら採用ひることが出來ず、採用ひても速に採用ひることが出來ないとするならば、それは甚だ怠りであると謂はなければならない。又不善なる人を見て知つて居りながら之を退けることが出來ず、退けて而して遠ざけることが出來ないと云ふならば、それは上に立つ人の過と謂ふべきである。つまり前に擧げた、人を容るゝ才能の有る者を見たならば、速に採用ひるが宜し、人の才能を嫉視するが如き人を見たならば、速に遠ざけるが宜しいと云ふことを說明したものである。

語釋 不レ能レ先（急にする能はずと云ふのと殆ど同じ事で、人を採用ひる場合に愚圖々々して速く採用ひることが出來ないといふ意味）〇命也（命は鄭玄の說では慢（オコタル）と云ふ文字と同樣であらうと說明して居る。其は普通から考へたことである。程子はまた別說を出して怠字の誤であらうと云ふ。其は字形から考へたことである、要するに愚圖々々して居ること。）

好人之所惡、惡人之所好。是謂拂人之性、菑必逮夫身。

是故君子有大道、必忠信以得之、驕泰以失之。

通釋 人の惡む所を好み、人の好む所を惡む。是を人の性に拂ると謂ひ、菑必ず夫の身に逮ぶ。

是故に君子に大道有り。必ず忠信にして以て之を得、驕泰にして以て之を失ふ。

〔通釋〕此の一節は、上たる者は民の心を得なければならない。民の心を得たる者が國を治める場合に其がやがて治國平天下を致す道であると云ふことを述べたものである。民心を得んと欲する者は・民と好惡を同くすることが第一である。卽ち絜矩の道が第一に必要である。然るに人の厭がり好まざる所の者を、自ら好まんとし・人の好む所を態と惡まんとする。斯う云ふ人が有りとすれば、是は人間の性に拂つた者と謂はなければならぬ。斯の如く人間の性に拂つた人は、必ず其の者に菑が逮んで來るものである。つまり民と好惡を同じくせざる者は竟に其の身に禍が及ぶと云ふのである。要するに君子の世に處して行くには、一つの定まつた大いなる道行といふものが存するものである。其の道行といふのは外でもない。自ら忠信と云ふ事を守る者にして初めて之を得、驕泰なる者にして初めて之を失ふと云ふことである。其の得たり失つたりするものは人の財、天子の位、皆其の中に含め得るのである。

〔語釋〕好二人之所一レ惡（他人の厭がる所を好むこと。古の暴君の好む所は多く民の惡み嫌ふ所のものであつたのである。）○菑（普通の禍と同じこと。）○有二大道一（大いなる道筋卽ち定まつた道行といふ意味である。）○驕泰（驕といふことはオゴリタカブルこと。泰と云ふことは、我儘、恣（ホシイマヽ）と云ふ意味である。）

生財有大道。生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒、則財恆足矣。仁者以財發身、不仁者以身發財。未有上好仁而下不好義者也。未有好義其事不終者也。未有府庫財非其財者也。

訓讀 財を生ずるに大道あり。之を生ずる者衆く、之を食ふ者寡く、之を爲る者疾く、之を用ふる者舒かなれば則ち財恆に足る。
仁者は財を以て身を發し、不仁者は身を以て財を發す。
未だ上仁を好みて下義を好まざる者は有らず。未だ義を好みて其の事終らざる者は有らず。未だ府庫の財其の財に非ざる者は有らざるなり。

通釋 此の一節は、上に立つ人は財產を得る眞の道を考へて居らなければならない。又財は何の爲に必要なものであるかと云ふ根本理を知つて居らなければならぬ。其の事を眞に心得た者にして初めて治國平天下の實を擧げるといふ事を云つたものである。中にも初の一節は財を得る一般論であり、

其の次の一節は財を得んとする者は仁義に由らなければ眞の財は得難いと云ふ事を教へたものである。

財産を造り生ずるには一定の大いなる道理といふものが存する。即ち財産を造る人が多くして、其の造つた財産を食み用ひる者が寡いといふ事になれば財は生ずる。又之を生産する方が速く造つて、之を用ひ減らす方が舒かになつて居ると、是亦財産といふものが恆に足るものである。是が即ち財を得る一般論である。

仁者と不仁者といふものは、財産に對する考が根本的に相違して居る。仁者といふものは財産を利用する事に依つて我が身を起して行くものである。然るに不仁者といふものは、財産を造る事其れ自身を結局の目的として、自分の一身を犧牲にしてまでも其の財産を起さうといふことを考へて居る。是が仁者不仁者の財に對する根本的相違である。由來上の好む所、下必ず之に傚ふものであるから、上に立つ者が仁を好んで居るのに下の者が義を好まないと云ふ例は有り得ない。又義を好むと云ふ事になれば、其の義を好み仁を好む者の爲す事業が完全に終らないと云ふことは有り得ない。此の樣に事業が完全に終り得るといふ事になつたならば、其の人の持つて居る財産は全く其の人の眞の財産と

なり得るのである。然るに不仁者の爲す所は之に反して、身を犧牲にしても財を發さうとするから、其の行既に仁に非ず義に非ず、故に其の仕事の成功する者は決してない。隨つて假令不仁者が一時庫に充てる幾多の財産を持つて居つたとしても、其の財産は結局本人自身の財産となつて働くことは出來得ないのである。斯う云ふ點を考へて見ると、財を造る眞の道といふものは、必ずや仁義に賴らなければならないと云ふことを敎へたものである。

語釋 發レ身（發といふのは起すといふ意味である。財産を利用して其れに因て身を起す。例へば學資に金を用ひて身の修養をすると云ふが如きものである。） ○未レ有下府庫財非ニ其財一者上（府庫といふのは庫（クラ）と云ふ意味である。己れの庫に收めてある財産が、己れの財産にならない場合はないと云ふ意味。此の句は上を承けたのであつて、前に書いてゐる、仁を好み義を好む事に因つて、仕事を完全にやる人は、其の人の所有する財産が皆全く其の人の實の財産となり得ると云ふことを說明したものである。つまり前に述べた悖りて入るものは悖りて出づると云ふものゝ反對である。）

孟獻子曰、畜ニ馬乘一不レ察ニ於雞豚一、伐冰之家不レ畜ニ牛羊一、百乘之家不レ畜ニ聚斂之臣一。與ニ其有ニ聚斂之臣一、寧有ニ盜臣一。此謂下國不ニ以レ利爲一レ利、以レ義爲上レ利也。

訓讀 孟獻子曰く、馬乘を畜ふものは鷄豚を察せず、伐冰の家は牛羊を畜はず、百乘の家は聚斂の臣を畜はず。其の聚斂の臣有らんよりは、寧ろ盜臣有れと。此れ國は利を以て利と爲さず、義を以て

利と爲すを謂ふなり。

通釋 此の一節も亦前節と同じく、眞の財を得、利を得るといふ爲には如何なる事が必要であるかと云ふことを敎へたものである。而して魯の國の賢太夫孟獻子といふ人の語を引いて之を說明して居る。孟獻子が曰ふには、初めて太夫の位に昇つた人卽ち始めて四頭立の馬車に乘ることの出來るといふ位の身分になれば、其の人は常に鷄や豚を家に畜つて低い身分の人々の職を奪ふと云ふ事は爲すべきでない。又喪の時やお祭の場合に氷を用ひることの出來る程度の人、卽ち卿大夫以上の身分になつたならば、其の人は牛や羊などを家に畜ふべきものでない。何となれば其等の身分の人々が牛羊を畜ふといふ事になれば、下々の者は竟に其の職分を奪はれることになるからである。又一定の采地を持つて居る百乘の家、卽ち立派な大夫の家になれば、其の人としては、租稅を多く取り集める所の家來を自分の家に畜ふべきものではない。斯の如き聚斂の臣を家に畜つて置くと云ふ事になれば、民の膏血を絞り民の生命を縮むるといふ事になるから、其の害は甚だ多い。故に聚斂の臣有らんよりは寧ろ泥坊の臣を持つて居つた方が宜しい。泥坊の臣があれば、自分の庫の品物を盜むことは有るかも知れぬが、民の膏血を絞り取るのに比して其の害は遙に小なるものであると、斯う孟獻子は曰つて居る。

此の例は即ち國家を治むる者は普通の意味の利益と云ふものを以て利益なりと考ふべきものではなくて、義と云ふ事が眞の國の利であると云ふことを說明したものと見なければならぬ。

語釋 馬乘（乘と云ふのは四つと云ふことである。馬乘は四頭立の馬車を用ひる身分で即ち初めて大人になつた人の事である。）　○不ㇾ察二於鷄豚一（察すると云ふのは見ると云ふ意味であるか、それを能く注意する、即ち之を畜ひ養ふと云ふ意味になる。若し大夫位の人が雞豚を畜ふと云ふ事になれば、雞豚を養ふ事を專務とする小さい身分の人々の職を奪ふ事になるのである）　○伐冰之家（卿大夫以上の身分になると喪祭の時に冰を用ひ得るのである。だから其の冰を伐ることの出來る家といふのは、取りも直さず卿大夫以上の身分の家と云ふ事である。禮の喪大記には士は冰を用ひずと出て居る。だから冰を伐る家は卿大夫以上であることが分る。）　○聚斂之臣（民の膏血を絞り取る家來といふ意味。）

長二國家一而務二財用一者、必自二小人一矣（彼爲善之）小人之使ㇾ爲二國家一、菑害並至。雖ㇾ有二善者一、亦無ㇾ如二之何一矣。此謂下國不三以ㇾ利爲二ㇾ利、以ㇾ義爲上ㇾ利也。

訓讀 國家に長として財用を務むる者は、必ず小人に自る（彼爲善之）小人に國家を爲めしむれば菑害並びに至る。善者有りと雖も、亦之を如何ともすること無し。此れを國は利を以て利と爲さず、義を以て利と爲すと謂ふなり。

通釋 此の一節は、前の節と同樣に、眞の財を得る方法は、仁義に賴らなければならぬ。過つて小人を用ふれば、利を計らんとする事が寧ろ國を害する結果になると云ふ事を敎へたものである。

國家に長として而して財用の事を取計らふ者は、是は何と云つても小人に打任さるゝ部分の多いものである。併ながら其の場合に、小人をして全く全權を持つて國家を治めしむると云ふ事になると、其の害は屹度やつて來る。中に一二善良なる者が有つても、竟に之を如何ともする事の出來ない樣になつて來るのである、であるからして前にも言つた通り、國家としては普通の所謂利といふものを以て利と爲さず、義といふものを以て利と爲さなければならない。此の一節は其の意味を説明して居るわけである。

語釋　彼爲善之（此の一句は其の前後に必ず他の文字が闕けて居る、或はあつたものが有る筈である。是だけでは意味を通じない樣である。古人も此の句の上下、疑ふらくは闕文誤字あらんと云つてゐる。）

餘論　第十章は文章も長く且論ずる所も多岐に亙つて居るから、最後に今一度要領を摘まんで言つて見ると、下の者は上に倣ふものである。故に上に立つ者は先づ絜矩の法を守らなければならない。絜矩の法としては恕といふ道を守つて行かなければならぬ。恕といふ事は取りも直さず、民と好惡を同じくするといふ意味である。又上に立つ人は自己の德を愼まなければならぬ。德有れば財は自から生ずる。單に財のみを重んじて來れば其の人は失敗に終る。又上に立つ人は衆を容るゝの雅量を持たなければならない。衆を容るゝの雅量が有れば、自分自身は必ずしも賢ならずとも必ず世の中に功果

を貽すものである。衆を容るゝと關聯して、上に立つ人は民心を得て行かなければならぬ。民心を得るの方法は、やはり前に述べた絜矩の道より導き來る所の、人の惡む所は之を惡み、人の好む所は之を好むと云ふ事にしなければならない。又上に立つ人は德を愼むと同時に財を得るの眞の道を知らなければならぬ。財を得るには一般的の方法として、造る人が多く用ひる人が寡く、生産する事が速く用ひる事が舒かなれば財を得ることは無論であるが、更に必要なるものは、財を得るには、仁義の道に賴らなければならぬと云ふことである。彼の聚斂の臣を以て財を集めんとする如きは、甚だしく道を過つたものである。斯の如くにして眞の財を集むるの道を知り、而して前に述べた衆を容るゝ事を知り、德を愼む事を知り、絜矩を守り得ると云ふ事になれば、下の人は悉く上の好む所に倣ふが故に、是に於て天下平かなるを致すと云ふのが第十章の大意である。語が頗る多岐に亙り文章に起伏あり變化がある爲に、動もすると大意を把捉し難いから反復叮嚀に讀まなければならぬのである。

右傳之十章、釋治國平天下。

訓讀　右傳の十章は、國を治め天下を平かにすることを釋す。

通釋 右傳の十章は治國平天下の說明である。

凡傳十章。前四章、統論綱領指趣、後六章、細論條目工夫、其第五章、乃明善之要、第六章、乃誠身之本、在初學、尤爲當務之急。讀者不可以其近而忽之也。

訓讀 凡そ傳の十章、前の四章は、綱領の指趣を統論し、後の六章は條目の工夫を細論し、其の第五章は乃ち明善の要、第六章は乃ち誠身の本、初學に在つて尤も當に務むべきの急と爲す。讀者其の近きを以て之を忽せにすべからざるなり。

通釋 是は矢張り大學の本文ではないので、大學の注者が更に今一應大學全篇の大要を摘まんで讀者に注意したものである。卽ち傳が凡そ十章有るが、其の前の四章は、是は大學の綱領の本當の意味が何處に在るかと云ふことを一般的に論じたものであるし、後の六章は大學の條目の一つ〳〵の工夫を細かに論じたものである。更に其の中でも、第五章は善を明かにする道、中庸に謂ふ所の明善の要領が何に因るかと云ふ事を說明し、第六章は身に誠なるの本は何處に在るかと

云ふ事を叮嚀に反復說明したものである。斯う云ふ樣なものであるから、初めて學に進んだと云ふ樣な人々は、此の敎を以て吾々の務むべき最も急務なるものと考へて行かなければならぬ。其の論ずる所が卑近であるが故に、直に之を等閑に考へると云ふことは甚だしく誤りを生ずるものであると云ふ事を敎へたものである。

【講述者申す】大學は昔から非常に錯簡も多く隨て異本も多い。併し朱子の章句が出來てからは王陽明などの特殊の學者を除いては多くの學者は其を奉ずることゝなつた。今此の講義の本文も亦其の定本に由つた。既に其の定文を用ひてゐる以上講義も大體朱子の說に由るのが適當である。そこで此の講義は大體朱子の註に據つて其の大略を述べた。だから若し、更に進んで研究せらるゝ諸君は一應朱子章句の原本に就て御調べを望む。其の上更に研究せられようと云ふ諸君は、御手紙でも下されば、いつでも存じよりの事丈は御知らせするつもりである。

大學新釋終

大學新釋終



中庸新釋

文學博士　宇野哲人著

中庸新釋目次

中庸新釋目次終

中庸新釋

文學博士　宇野哲人著

一　作者子思の略傳

史記の孔子世家に「孔子鯉を生む、字は伯魚、伯魚年五十、孔子に先ちて死す。伯魚、伋を生む。字は子思、年六十二。嘗て宋に困んで、子思中庸を作る。」とある。即ち中庸は史記に從へば、孔子の嫡孫たる子思の作であつて、後人にも異論は少い。父の伯魚は、孔子に先つて歿したから、子思は孔子在世の時に生れたのである。然しながら、子思の生卒年代は明かでない。隨つて子思が幾歲の時、孔子が歿せられたかは詳かでないが、孔子の喪に子思が喪主となつたといふことである。孟子公孫丑篇に魯の穆公が子思を敬つた事があり、萬章篇に穆公と子思との問答があり、又、告子篇に子思が穆公の臣となつたことがあり、其他、穆公と子思との說話がある。又禮記の檀弓篇に、子思が穆公の問

に答へたことがある。穆公は孔子が歿して（皇紀一八二）から、七十年目（皇紀二五二）に即位してゐるから子思が孔子の在世中に生れて、後、魯の穆公と問答したとすれば、其の壽は少くとも、七十歳以上でなければならぬ。史記の六十二歳といふのは、解し難い。そこで子思は、父、伯魚の晩年に生れて、魯の穆公の初年に及び壽八十歳前後で歿したものであらう。

論語の季氏篇に、孔子が伯魚に詩と禮とを學ばねばならぬことを教へられたことが記してあるが、子思に教へられたことは載つて居ない。子思の學問が大成したことに就いては、遺傳庭訓もあらうけれども、又、主として就いて學んだ所があつたであらう。唐の韓愈は「王塤を送る序。」の中に「子思の學は蓋し曾子に出づ」といつてゐる。禮記の檀弓篇に曾子と子思との問答を載せて曰く、

曾子、子思に謂つて曰く、伋、吾親の喪を執りしや、水漿口に入らざりし者、七日なりきと。子思曰く、先王の禮を制するや、之に過ぐる者は俯して之れに就かしめ、至らざる者は、跂して之に及ばしむ。故に君子の親の喪を執るや、水漿口に入らざる者三日、杖して後能く起つと。

曾子が子思を呼ぶに其の名の伋を以てして居るのは、師が弟子に對する呼び方である。又、大戴禮に載つて居る曾子の著十篇と中庸とは類似の點が少くない處から見ても、子思の師は恐らく韓愈がいつ

た様に曾子であらうと思はれる。宋儒は、皆、曾子を以て子思の師として居るのも同じ理由かと思はれる。

此の他、子思の傳記に關しては說苑や孔叢子等に多くの說話があつて、孔子が子思に告げた語等もあるが、これ等は假託で信ずるに足らぬ。然しながら、子思は壯年にして衞に仕へたことがある。孟子の離婁篇に、

子思衞に居る。齊寇あり、或人曰く、寇至る、何ぞこれを去らざるやと。子思曰く、如し伋去らば、君、誰と與にか守らんと。

とある。其後、魯に仕へて頗る穆公に重んぜられ、師友を以て待遇せられた。孟子公孫丑篇に曰く、

昔者、魯の穆公、子思の側に人なければ、子思を安んずること能はざりき。

と。又、萬章篇にも左の二條の說話を載せて居る。曰く、

穆公の子思に於けるや、亟々問ひて亟々鼎肉を餽る。子思悅ばず云々。

穆公亟々子思を見る。曰く、古、千乘の國、以て士を友とすること如何と。子思悅ばず云々。

これは穆公は子思を重んじたけれども、之を重んずる所以の道を知らなかつたので、子思は之を悅ば

なかつたのである。孟子其他にも尚、種々の說話はあるが今、一々は之を舉げない。

子思が中庸を作つた年代は明かでない。史記にはたゞ「嘗て宋に困んで、子思中庸を作る。」といつて居るのみである。孔叢子には、子思年十六、宋に適き、宋の大夫樂朔と學をいひ、樂朔悅ばず、退いて、孺子我を辱むといひて憤り、樂朔の徒は子思を攻めて之を圍んだ。宋君之を聞いて駕を待たずして子思を救うた。子思既に免れて「文王は羑里に困みて周易を作り、祖君(孔子)は陳蔡に屈して春秋を作つた。吾は宋に困しむ、作るところ無かる可けんや。」といつて中庸の書四十九篇を撰んだとあるが、孔子が陳蔡に困んだことと、春秋を作つたこととは自ら其の時を異にし、又、年十六といふこと等信ずることは出來ぬ。

中庸は子思の著なることは史記の孔子世家にいふ通りであつて、異論は少いが、しかし後人或は之を疑ふ者もある。清の崔東壁は其の洙泗考信餘錄に於て、中庸と孟子との類似點を舉げ、中庸は後人が孟子の文を採りて是の書を成したとし、「必ず子思の作れる所に非ず、蓋し子思以後、子思を宗とする者の僞れる所の書。」といひ、姚際恒は佛者が多く中庸を尊重するから、中庸を僞作した者は蓋、佛老二氏の學を爲せる者であるといひ、我が伊藤仁齋は中庸には古樂經の脫簡して誤つて攙入したもの

があると論じてゐるが、皆誤つた議論である。孟子の學は子思に本づくので、「子思之を唱へ、孟軻之に和す。」とは既に荀子の非十二子篇にも見えて居る。中庸と孟子と多くの點に於て合致して居るのは當然のことで怪しむべき理由はない。崔東壁の如きは疑ふ可からざるものを疑つたものであり、姚際恒の如きは論理の推定の何物たるかを知らぬものである。

孔叢子に中庸四十九篇とあるのは何に據つたものであるかを知らぬ。今の中庸は古人分ちて三十三篇とし、朱子も亦、三十三章に分けて居るが、未だ四十九節にしたものは見ない。孔叢子は僞書であるから信ずることは出來ない。漢書藝文志によれば、禮類の中に中庸說二篇があり、別に儒家の中に子思二十三篇がある。今の中庸は漢書藝文志の子思二十三篇の中であるか、或は中庸說であるかは明かでない。多分この中庸說であらう。

二　中庸を作れる所以

孔子は仁を說いた。仁は慈愛の德であつて、孝悌忠信の如き家庭的及び社會的道德を推し擴めて、一層、廣大なる意義あり、普遍的價値あるに至らしめたものである。然しながら儒教の經典たる論

語は、廣大なる意義があるものであるけれども、孔子及び其の門人の言行を記した一種の語錄の様なもので、常識的なものである。此時、老子の一派は高遠で巧妙なる哲學說を鼓吹し、宇宙の本體から論及して、本體は無爲で自然で恬淡水の樣なものであるから、人も亦無爲で自然で恬淡でなければならぬと說き、孔子の門流のいふ所の道とは、堯・舜・夏の禹王・殷の湯王・周の文王・武王・周公等の先王が人爲的に作爲せるもので、取るに足らぬものといひ、老子一派の攻擊は儒家に取つては一敵國の觀があつた。そこで儒家にあつては、勢、孔子の常識的なる教學に一層深遠なる意義を加へて、老子の一派に對抗せねばならぬ。中庸は實に異端に對して聖道を闡明し、聖德を發揚せんが爲めに作られたものである。それ故、開卷第一に「天命之謂レ性、率レ性之謂レ道。」と云つて、儒家の道は天に本づくもので、決して先王の人爲的作爲でないといふことを明かにしたのである。朱子の中庸章句の序文に曰く、

中庸は何の爲にして作るや、子思子、道學の其の傳を失はんことを憂へて作るなり。

胡炳文の中庸通には更に之を詳說して曰く、

唐虞三代の隆んなる時斯道日の天に中するが如し。中庸作る無かるべきなり。孔子の時に至つて、

始めて異端を攻むと云ふ。然れども其の說、猶未だ敢て盛行せず。子思の時に至つて則ち憂ふべき者あり。異端の其の說を肆にするを得るを憂ふるは道學の其の傳を得ざるを憂ふる所以なり。

我が伊藤仁齋の中庸發揮の道の論にも亦曰く、

此の編は專ら道を明かにするが爲に作るなり。道とは人倫日用に存し、天下萬世に達し、而して須臾も離る可からざる者なり。當時、諸子百家、各々私說を恣にし、虛無是れ尙び、橫議是れ肆にして、能く相統一する莫し。故に首に之を揭げて曰く、天命之謂レ性、率レ性之謂レ道と。所謂性とは便ち天の我に賦する所、もと矯揉安排する所無し。之に循へば、則ち道たり、循はざれば、則ち道に非ず。異端の人倫を廢し、人事を蔑にするが若きは、豈之を性に循ふの道と謂ふ可けんや。故に子思是に於て首に性・道・敎三者の義を發明し、以て中庸の小序と爲すと云ふ。

物徂徠は、一層明快に之を論じてゐる。其の中庸解の序に曰く、

七十子既に歿し、鄒魯の學稍々其の眞を失ふ者あり。而して老氏の徒、其の間に萌蘖し廼ち天を語り、性を語り先王の道を以て僞と爲す。學者惑へり。是れ子思の中庸を作る所以なり。

又、其の辨道に曰く、

夫の子思の中庸を作るを觀るに、老氏と抗する者なり。老氏、聖人の道を僞と謂ふ。故に性に率ふ之を道と謂ひ、以て吾が道の僞に非ざるを明かにせり。

又、其の辨名に曰く、

性に率ふ之を道と謂ふとは、もと老氏の徒、先王の道を以て僞と爲すが爲なり。故に子思謂ふ、先王人性に率ひて以て道を立つ、之を强ふるに非ざるのみ。

此等の說は不易の論である。老子の一派は虛無といひ、自然といひ、恬淡といひ、高談空論して自然の理法を說く。故に知も情も意も之を否定し去らんとし、非人格的にして人性にあらざるものがある。子思は之に對して、孔子の學は中正平易、永久不變のものなる意を寓して、中庸と名づけた。中庸の第十一章に孔子の言を引用して「隱を索め怪を行ふは、後世述ぶるものあらん。吾は之を爲さず。」と云ひたる如きは、隱然老子の學派に對抗したるものなること明かである。

三　中庸の表章

中庸は大學と同じく、もと禮記中の一篇であつた。禮記は前漢の戴聖が、戴德の禮の記八十五篇あ

つたものを、刪つて四十六篇としたものに、後漢の大儒馬融が三篇を增して四十九篇としたものであつて、其の內容は孔子の門弟子等の記や、戰國から漢初に至るまでの儒家經師の論等に就いて取捨選擇したものである。中庸は宋以前にも二三の單行の本が有つたので、劉宋（南朝）の戴顒が初めて禮記中から取り出して、中庸傳二卷を撰した。又、梁の武帝が、中庸講疏一卷・私記制旨中庸義五卷を撰した。唐の李翺に至つて益々此の書を尊信し、復性書三篇を著はして中庸の趣旨を敷衍し、滅情復性の說を主張した。又、中庸說を撰したといふことである。宋に至つて司馬溫公が中庸と大學と共に廣義といふ註釋を書いたことがあり、范文正公が張橫渠の人物を識つて中庸を與へ、之を讀ましめた事があり、周茂叔以下程明道・程伊川等の宋儒は皆、中庸を尊信した。殊に明道・伊川の二程子に至つては其の論殊に精詳になり、朱子に及んで遂に舊說に據らないで自ら章句を作り、大學・論語・孟子と併せて四書として表章するに至つて大に天下に著はるるに至り、明の永樂年間、禮記大全を撰んだ時、遂に禮記の中から大學と中庸との二篇を刪り去るに至つた。

我が國でも高倉天皇の御代に、侍讀淸原賴業が禮記を讀んで大學と中庸との二篇に至る每に乃ち歎じていふ、後世達悟の人があつて別に之を表章して二經としたならば天下の至寶であらうと。淸原賴

業は大凡、朱子とその時を同じうして居る。當時、朱子の四書集註は未だ我が國に渡來しなかつたのである。豪傑の士その見る所、自ら暗合したのは奇を言はねばならぬ、

四　中庸の名義と中

中庸の名は本文の中にある語を取つたものである。老子の一派は高遠なる說をなして空言を弄し、其のいふ所は極端であつて實行することが出來ない。そこで子思は之に對して、孔子の學は中正平易で永久不變のものであるといふ意義を以て中庸と名づけた。中とは中正でかたよらず、過ぎたこともなく、足らないこともない至當の意義であり、庸とは常の道といふ意で、此の道は萬世に亘つて易はらず、又平常で何等の不可思議もないといふのである。

抑々中とは儒家に在つては堯舜以來の教であつて、堯は天下を擧げて之を舜に讓るに當つて、その訓ふる所はたゞ「允執₂其中₁。」の四字に過ぎなかつた。これは論語の堯曰篇に、

堯曰く、咨爾舜、天の曆數、爾の躬に在り、允に其の中を執れ。四海困窮せば、天祿永く終へんと。舜も亦以て禹に命ず。

とある。」舜も亦以て禹に命ず」と云へば、舜が天下を禹に讓つた時も、亦「允執其中。」の四字の訓戒を以てしたのである。彼の書經の大禹謨中の

人心惟危、道心惟微。惟精惟一、允執厥中。

の四句十六字は、この堯曰篇の句と、荀子の解蔽篇中の語とを綴り合せて作つた僞古文であるから、四句十六字全體を以て舜禹相傳の語として取る譯にはゆかぬ。

堯舜禹の三聖人が相傳の教は即ちこの中なることは明白であつて、中庸第三十章に「仲尼堯舜を祖述す。」といふ所の一は確かに此の中を重んずることで、論語二十篇の結論として堯曰の一章を載せたのは極めて深長なる意味がある。又舜の四德、皐陶の九德、洪範の皇極、及び易等は皆、中を重んじないものはない。孔子は堯舜以來相傳の中庸といふことに就いては、極めて尊重した處で、論語の中でも直接間接に「中」に關する教訓は隨分多數あるが、今直接「中」を論じた語のみを擧げて見よう。

子曰、中庸之爲レ德也、其至矣乎。民鮮久矣。（雍也篇）

子曰、過猶レ不レ及。（先進篇）

子曰、求也退、故進レ之。由也兼レ人、故退レ之。（先進篇）

子曰、不下得二中行一而與上レ之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有レ所レ不レ爲也。（子路篇）

子思は古來の教を取り、孔子の說によつて自己の學說を組織したものである。中庸に於ては至誠の人を稱して聖人といひ、至誠の域を稱して中和といつて居る第一章に曰く、

喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ。發して皆節に中る、之を和と謂ふ。中は天下の大本なり、和は天下の達道なり、中和を致して天地位し、萬物育す。

喜怒哀樂は感情である。その未だ發せざるは性である。人が未だ外物に接せざるとき、天性渾然として偏る所がないから之を「中」といふ。外物に感じ發して情となるとき、その正を失はず、皆その節に中るから之を「和」といふ。「中」は體であつて、「和」はその用である。その體が中でなければ發して和となることは出來ぬ。その用が和となるは、その體が中なるが爲めである。體用を兼ねて之を中和といふ。中和を致せば天地位し、萬物育することが出來る。而して、第二十二章に曰く

唯天下の至誠よく其の性を盡すを爲す。能く其の性を盡せば則ち能く人の性を盡す。能く人の性を盡せば則ち物の性を盡す。能く物の性を盡せば則ち以て天地の化育を贊すべし。以て天地の化育を贊す可ければ、則ち以て天地と參す可し。

と。故に至誠なれば能く天地の化育を賛け、以て天地を參することが出來る。卽ち中和を致した結果と、至誠の結果と全然同一になる。故に中和は卽ち至誠であるといふのである。換言すれば、その形式的說明として中と云ひ、その內容的說明として誠と云つたものである。

中は至誠であつて喜怒哀樂の未だ發せざる狀態である。更に「中」の解釋については第六章に、孔子が舜を評した語を引いてゐる。曰く、

舜はそれ大知なるか。舜は問ふ事を好みて、好みて邇言を察す。惡を隱して善を揚げ、其の兩端を執つて其の「中」を民に用ふ。其れ斯れ以て舜たるか。

其の兩端を執つてその「中」を民に用ふとは、數學的に二と八との「中」は、その和の半、卽ち五といふが如きではない。或は又幾何學的に圓の中心の如く、前後左右に偏倚すること無き謂でもない。幾何學や數學の中は固定的であつて、孟子の盡心篇にある所謂「執一の中。」である。人の道の「中」は時宜に適つた「中」でなければならぬ。人の環境は千態萬狀であつて、人格は進展してやまない。各人その時宜に適つた至當の道でなければならぬ。孟子は孔子を評して「聖の時なる者なり。」といつた。此の「時」こそ卽ち「中」であつて、孔子は千態萬狀の環境に處して、至當の「中」を得られたのである。卽

ち時宜に適つて過不及なきこと、所謂「時中。」を得ることでなければならぬ。故に、第四章に曰く、子曰く．道の行はれざるは我之を知る。知者は之に過ぎ、愚者は及ばざるなり。道の行はれざるは我之を知る。賢者は之に過ぎ．不肖者は及ばざるなり。人、飮食せざるなし。能く味を知る鮮し。然しながら過不及とは已發の後に就いて始めて之を論ずべきことで、過不及なしとは節に中ること、卽ち和であるから、未發の中を解釋するには德の一字を加へて．之を「過不及なき德と。」云へば至當であると思ふ。程子が中を解して不偏不倚と云つたのは．數學的、又は幾何學的中を聯想せしめる弊があるやうに思ふ。此の中の道は萬世に亘つて易はらず、又平常にして何等不可思議なることがあるのでないから、之を庸といふ。庸とは常經の謂である。

五　註　釋　書

大學には訂定を施した所謂定本は種々あるが中庸には朱子の章句本の外、別にこれといふものはない。然しながら註釋書に至つては無慮數十百種あつて、一一枚擧することが出來ない。今其の中に就いて主要なるものを擧げよう。

禮記正義六十三卷　後漢鄭玄注、唐孔穎達疏
中庸集解二卷　宋石𡼏撰
中庸章句一卷　朱　熹撰
中庸或問二卷　同
四書集編二十六卷　眞德秀撰
四書通二十六卷　元胡炳文撰
四書大全三十六卷　明胡廣等奉勅撰
中庸測一卷　湛若水撰
四書蒙引十五卷　蔡　淸撰
四書存疑十二卷　林希元撰
四書本義匯參四十五卷　清王步青撰

○

中庸發揮一卷　伊藤維楨撰

中庸解一卷　物徂徠撰
中庸釋解二卷　皆川愿撰
中庸欄外書三卷　佐藤担撰
中庸原解三卷　太田元貞撰
中庸逢原一卷　中井積德撰
四書訓蒙輯疏二十九卷　安部井褧撰
中庸說一卷　安井衡撰

就中朱子章句を以て典據とするがよいと思ふ。學者は註釋書をあさるよりも。先づ字句の大義に通じて、然る後に本文を熟讀玩味するがよい。
學者は以上記した序說の大意を一讀して然る後、本文に臨まれたならば、中庸の眞相を理解するに小補はあるであらう。

中庸章句序

叙説 章句の章は詞が首尾完結したもの。句は詞の切れるところ。朱子が章と句とを分けて、其の間に註釋をして、中庸章句と名づけたのである。序とは卷首にかかげる「はしがき」の文である。此の序は朱子が書いたものである。朱子は宋代の大儒で、學德共に古今に絶した人である。名は熹、字は元晦。又は仲晦。號は晦菴、又は晦翁。謚は文といひ、所謂朱子學の祖である。中庸を學ばんには、先づ此の序文を熟讀し了解せねばならぬ。

中庸何爲而作也。子思子憂道學之失其傳而作也。

訓讀 中庸は何の爲にして作るや。子思子、道學の其傳を失はんことを憂へて作るなり。

通釋 中庸といふ書は何の爲めに作つたのかといふに、これは子思が、儒教の學問が孔子以後今までは傳はつてゐるものの、漸次異端邪説の爲めに妨げられて、後々或はその相傳の眞相を失ふに至らんことを心配して作つたのである。傳の一字は一篇の骨子である。

語釋 子思子（下の子は男子の美稱であるが、學者が先儒を師として尊ぶ時につける。孔子・孟子の子と同じ。）○道學（道義の學問といふ意で、儒教の學問をいふ。道學の二字は王充の論衡に出てゐるが、これはたゞ汎く學問をさしていふ。宋に至

つて始めて道學の名目が出來て、三代以來の正學を指すやうになつて、特に深い意義にて盛に用ひられ、程子・朱子の學をさすやうになつた。蔡虚齋曰く、「道學は道を講ずるを以て言ひ、道統は道を傳ふるを以て言ふ。」と。これ道學と道統との別である。）

蓋自上古聖神繼天立極、而道統之傳、有自來矣。

【訓讀】蓋し上古の聖神天に繼いで極を立てしより、道統の傳自つて來る有り。

【通釋】蓋し之を推測して見るに、上古の神德を具へた聖人が天意を承け繼いで天子となり、天意を繼承して民の模範を立ててから、道の系統の傳來は由來してゐるのである。道統の二字は此の序の綱領である。

【語釋】蓋（推量するにといふ語。）○聖神（聖人の德、神妙で測られない事をいふ。上古の聖神は伏羲・神農・黃帝・堯・舜の五帝をさす。孟子に大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神とある。）○繼天立極（天命を受けて天子となり、天意を承けついで天下萬世の標準を立てるをいふ。極は模範、標準、法、等の意である。書經の洪範に、「皇建其有極」とある。）○道統（道の正系で聖賢がはるゞ世に出て、此の道を受け傳へることである。道統の說は唐の韓退之に始まつてゐる。韓退之の原道といふ文章に、堯は道を舜に傳へ、舜は夏の禹王に傳へ、禹は殷の湯王に傳へ、湯は周の文王武王周公に傳へ、文武周公は孔子に傳へ、孔子は孟子に傳へた。孟子が死んで傳へる人がなくなつたと言つてゐる。蓋し道統の說は佛者の傳燈の說に倣つたもので、宋に至つて盛に此の說が行はれた。）

【餘論】天道は流行して如何なるものにも賦與せられてゐる。衆凡人は之を知ることが出來ないが、たゞ神聖人は其の德、自然に天意と合致して、言動皆、萬世の準標となるのである。即ち天に繼いで極を立てたのである。

其見於經、則允執厥中者、堯之所以授舜也。人心惟危、道心惟微、惟精惟一允執厥中者、舜之所以授禹也。堯之一言、至矣盡矣。而舜復益之以三言者、則所以明夫堯之一言、必如是而後可庶幾也。

訓讀 其の經に見ゆるは則ち允に厥の中を執れとは堯の舜に授くる所以なり。人心惟れ危く、道心惟れ微なり、惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執れとは舜の禹に授くる所以なり、堯の一言至れり。盡せり。而して舜復た之に益すに三言を以てするは、卽ち夫の堯の一言、必ず是くの如くにして而して後、庶幾すべきを明かにする所以なり。

通釋 古の聖人、道統の傳授が經書の中に見えてゐるのを擧げていへば、則ち論語の堯曰篇にある「まことに其の中を執り守つて失ふな。」と教へたのは、堯が位を舜に讓らうとする時、授けた訓戒である。書經の大禹謨にある「人の心は、肉體あるが爲め、物欲に迷うて邪道に陷る危險があり、隨つて人が本來具へてゐる道義の心は物欲に蔽はれ微になりがちで、明かにし難い。それ故、人心と道心との區別を精密に考察して、肉體の欲から生ずる人心を雜へず、道義の心の正しきを一向に執り守つて、

失はぬやうにし、道心が常に主となり、人心はその命を聽くやうにせねばならぬ。」とは、舜が天下を禹に讓らうとする時、訓戒した語である。堯が「允執二其中一」と云つた一言で至らぬ隈なく盡さぬ所なく十分であるのに、舜が又之に「人心惟危、道心惟微、惟精惟一」の三句を增したのは堯の「允執二其中一」といふ一言は是非とも精一の工夫を用ひて始めて實現することが望まれることを明かにしたわけである。

語釋　其（道統の傳を指す。）　經（聖人の言を記した書。）　○允執二其中一（允は眞實、執は守つて、失はぬこと、厥は其と同じ、中は時の宜しきに適つて過・不及のないこと。中の意義は序說に詳しくのべておいた。）　○堯之授レ舜（堯が天下を舜に讓らうとする時の語は論語の堯曰篇にある。）　○人心惟危云々（此の四句は本文で朱子が論してゐるから講義の進むにつれて明かになる。今簡單に云へば、心は一つであるが、人心は肉欲の影響を受けた心。道心は人が本來具へてゐる道義の心である。人が外物の刺戟を受けるときは、その心は肉體の欲の爲めに迷ひ易い故、人心惟れ危しといひ、既に迷へる人が本來具へてゐる道義の心は物欲に蔽はれて昧くなり易いから、道心これ微なりといつたのである。精とは、どれが人心か道心かを、反省して精密に考察して兩者を違へぬやうにすること。一は道心の正を守つて失はぬこと。此の全文は書經の大禹謨篇にある。この四句十六字は宋學では歴世の傳心訣として尊重するものである。厥とは其の義であり、傳心訣とは心を傳へる要訣といふこと。）

餘說　朱子語錄に曰ふ。堯が舜に告げたのは只一句で、舜は十分其の心を曉つた。舜が禹に告げるに三句を添へた。此の三句は「允執厥中」にいたる工夫であつて、禹が「允執其中」だけでは曉らなからうかと思つて添へたのである。以上は論語及び大禹謨を引いて、中庸の思想の本づく所、道統の淵源を說いたのである。然しながら大禹謨の「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中」の四句十六字

は虞廷の傳心訣とて朱學で尊重する所のものであるが、これは堯曰篇の句と、荀子の解蔽篇の語とを綴り合せて作つた僞古文であるから、舜禹相傳の語として取る譯にはゆかぬ。舜禹相傳の語は、堯舜相傳の「允執其中」の一句であつたとしなければならぬことは、序說の四に說いた。朱子は此の語を僞古文と疑ひながら、學說を立てる上から取つたのである。

蓋嘗論之。心之虛靈知覺、一而已矣。而以爲有人心道心之異者、則以其或生於形氣之私、或原於性命之正、而所以爲知覺者不同。是以或危殆而不安、或微妙而難見耳。

【訓讀】蓋し嘗みに之を論ぜん。心の虛靈知覺は一のみ。而して人心道心の異ありと爲すは、則ち其の或は形氣の私に生じ、或は性命の正に原づくを以て、知覺を爲す所以の者同じからず。是を以て、或は危殆にして安からず、或は微妙にして見難きのみ。

【通釋】蓋し試みに之を論じて見よう。心の體は虛靈にして知覺の妙用あることは誰人も皆一樣でかはりはない。然るに心を分つて人心道心の二つとして夫々異つた作用をするといふのは、それは或は

形體氣血即ち吾人の肉體の個人的方面から生じ、耳目口鼻四肢の欲となつて見はれるから、之を人心といひ、或は天の命ずる吾人の本性の正しきに本づき、道義の心となつて見はれるから、之を道心といつて、其の知覺する所、人の道との同じくないものがあるから、之を二つに分けるのである。そこで耳目鼻口の欲である人心は、悪に陷る危險があつて不安であり、道義の心は完全至善なるものであるが、微妙とてかすかであつて明かにしがたく、見はれたり隱れたりして兎角見さだめ難く、偶々少し明かにならうとしても、又、忽ち暗くなり易いものである。

語釋　嘗（試と同し）　○虛靈知覺（心は影も形もないから虛と云ひ、其のはたらき靈妙にしてさとき故、靈といふ。知覺とは心の作用についていふ。程勿齋曰く、虛靈心之體、知覺心之用と。）　○形氣之私（形氣は肉體である。私とは個人的なること。耳目鼻口四肢の欲は必ずしも惡ではないが、過ぎ易いから油斷は出來ないものである。朱子曰く、形氣是耳目口鼻四肢之屬、未レ可三便謂二之私欲一。但此數件事、屬二自家一、便是私有底物、不レ比二道便公共一と。眞西山も亦曰く、私猶レ言二我之所一レ獨耳、今人言二私親私恩一之類。人心は即ち形氣の私に生ずるものである。）　○性命之正（性はうまれつき、命は天の命じて賦與する所。天の命じて賦與した人の本性はもと正にして邪なき故、性命の正といふ。道心は性命の正に原づくものである。）　○危殆（危殆とは惡といふのではない。形氣の欲をほしいまゝにすれば、いか程の致過に陷らんも知れず。人心はまさに惡に陷らんとする危險があるといふこと。これは人心についていふ。）　○微妙（微なれば明にし難く、時には少しばかり明かならんとするも、亦直ちに暗くなるものである。妙もかすかである。これは道心についていふ。朱子曰、危未レ便是不好一、只是危險在二欲レ墮未レ墮之間一、易レ流二於不好一耳。微者雖レ明有レ時發見些子、使二自家見得一、有レ時又不レ見了。）

然人莫レ不レ有二是形一。故雖二上智一不レ能レ無二人心一。亦莫レ不レ有二是性一。故雖二下愚一不レ能レ無二道心一。二者雜二於方寸之間一、而不レ知レ所二以治一レ之、則危者愈危、微者愈微、而

天理之公、卒無以勝夫人欲之私矣。

訓讀　然れども人是の形あらざる莫し。故に上智と雖ども人心なき能はず。亦是の性あらざる莫し。故に下愚と雖ども、道心なき能はず。二者方寸の間に雜つて、之を治むる所以を知らざれば、則ち危き者愈々危く、微なる者愈々微にして、天理の公、卒に以て夫の人欲の私に勝つ無し。

通釋　然しながら凡そ人たる者は誰でも此の形體の無い者はないから、たとひ上智の聖人とても、此の肉體より生ずる耳目鼻口四肢の欲、卽ち人心が無い事は出來ない。例へば饑ては食ひ、渴しては飲むことは聖人も免れる事は出來ない。又人たる以上は誰でもこの天賦の性質が無いものはないから、下愚の凡人とても天命の性に本づく道義の心、卽ち道心が無いことは出來ない。例へば赤子が將に井に陷らうとするを見れば可哀想だといふ惻隱の心は誰でも有つて居る。聖人も人心を有つてゐるが凡て其の正を得てゐるから、人欲の私に陷らない。下愚の人も道心を有つてゐるが微にして明かにし難く、人欲の私に流れ易い。此の道心・人心の二つが、心の中に雜然として混じて居るので之を治める方法を知らなければ、危き所の人心は愈々危く、微なる所の道心は益々微になつて、天理の公道は遂に彼

の人欲の私曲に勝つことが出來なくなる。

【語釋】方寸之間（心をいふ。心の臟は胸中方寸の間に在るからである。列子に、吾見子之心矣　方寸之地虛矣とある。）○天理人欲（朱子以前には多くは道心を天理とし、人心を人欲として解釋したけれども、朱子に至つては其の誤なることを認め、道心は天理であるが、人心は必ずしも人欲とは見ない。人心を治むることを知らないで耳目鼻口四肢の欲に陷り流れれば人欲となるので、之をよく治むれば人欲ではない。天理は道心の發する所であり、人欲は人心の惡に流るるものである）○天理之公、人欲之私（天理の公と人欲の私と對言し、私の字は惡の意である。前節の形氣の私は性命の正と對言してあるので、私の字未だ惡ではない。）

精則察夫二者之間、而不雜也。一則守其本心之正、而不離也。從事於斯、無少間斷、必使道心常爲一身之主、而人心每聽命焉、則危者安、微者著、而動靜云爲、自無過不及之差矣。

【訓讀】精とは則ち夫の二者の間を察して雜へざるなり。一とは則ち其の本心の正を守つて離さざるなり。事に斯に從つて少の間斷なく、必ず道心をして常に一身の主と爲り、人心をして每に命を聽かしむれば、則ち危き者安く、微なる者著はれて、動靜云爲自ら過不及の差無し。

【通釋】精とは即ち前述の人心道心の二つの間を精密に考察し二者を混雜せしめぬことである。一とは則ち我が本心の正しきものを固く執り守つて離し失はぬことである。此の精一の方法が人心道心を

治むる所以であるから、平素此の方法を行ふことを勤めて、少しの油斷も、ひま絶え間もなく、是非とも道心が常に一身の主となつて、人心はいつも道心の命令を聽くやうにすれば、危き所の人心も安らかになりて惡に陷ることなく、微かになり勝ちな道心も著明となり、その言行は自然に或は過ぎたり或は及ばなかつたりする差違がなくなり、自然に道に叶ふやうになる。

【語釋】精一（朱子曰く、精は之を精審して雜ふるなきなり。一とは首あり尾ありて專一なるなりと。道心、人心の二者を精密に識別して混雜せしめぬことが精で、專ら本心の正を守つて失はぬことが一である。）○從二事於斯一（斯は精一の方法をさす、從事は其の事を勤めること。）○動靜云爲（動靜は行爲、云爲は言行。）

【餘論】以上は大禹謨の「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。」の四句十六字を詳論したのである。

夫堯・舜・禹、天下之大聖也。以天下相傳、天下之大事也。以天下之大聖、行天下之大事、而其授受之際、丁寧告戒、不過如此、則天下之理、豈有以加於此哉。

【通釋】夫れ堯・舜・禹は天下の大聖なり。天下を以て相傳ふるは天下の大事なり。天下の大聖を以て、天下の大事を行うて、而して其の授受の際、丁寧告戒、此の如きに過ぎざれば、則ち天下の理豈

に以て此に加ふる有らんや。

【通釋】それ堯・舜・禹は天下の大聖人である、天下を以て相傳ふるは天下の大事件である。天下の大聖人が天下の大事件を行はるるに、その天下を讓り渡しの際に丁寧に告げ戒められたことは、上述のやうに中を執ることと、精一の方法とに過ぎないとして見れば、天下の道理は此の執中精一に盡て居るので、どうして之れ以上に附け加へることがあらうや。

【語釋】授受（堯が舜に、舜が禹に天下を授け、禹は舜より、舜は堯より天下を受けたこと。）〇此（二つの此の字は人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中を指す。）

【餘論】胡雲峰が曰ふ。「中の一字は聖聖が相傳へる道で、精一の二字は聖聖相傳へる學であつて此れに加へることはない。それ故、天下の理、豈、以て此れに加ふる有らんやといつたのである。」と此の一節は中庸の道と學との傳は堯・舜・禹三聖傳授の心法であることを明にし、且つ天下の理は之れ以外に出でないことを説いたのである。呉行父曰く、中庸の序、當に分つて三大節となして看るべし。章首より此に至つて一節となす　中庸道學の傳は、二聖授受の心法に本づくを推言したのであると。

自リレ是以來、聖聖相承ク。若キ二成湯・文・武之爲ルレ君、皐陶・伊・傅・周・召之爲ルガレ臣、既ニ皆以テ

此而接夫道統之傳。

【訓讀】是より以來、聖聖相承く。成・湯・文武の君たる、皐陶・伊・傅・周・召の臣たるが若き、既に皆此を以て夫の道統の傳を接す。

【通釋】堯・舜・禹の三聖人が執中精一の教を相傳へてより以來、此の教を聖人から聖人にと繼承したのである　たとへば君主としては商の湯王、周の文王・武王の如き、臣下としては皐陶・伊尹・傅說・周公旦・召公奭の如きは、皆聖人といふべき人々で、既に執中精一の教を以て相承けて、かの道統の傳をついだのである。

【語釋】成湯（商の湯王。夏の桀王の無道なりしを伐つて之を南巢に放ち、遂に天下を有ち、國を商と號して、武功成れる故成湯といふた。）○文・武（周の文王と武王。）○皐陶（舜の時の賢臣で司法官となつた。）○伊傅（成湯を助けて天下を取つた宰相の伊尹と、商の高宗を助けて中興の主たらしめた傅說。）○周召（周の賢臣、周公旦と召公奭。）○接（相續ぐことである。）

若吾夫子、則雖不得其位、而所以繼往聖、開來學、其功反有賢於堯舜者。然當是時、見而知之者、惟顏氏曾氏之傳得其宗。及曾氏之再傳、而復得夫子之孫子思。則去聖遠而異端起矣。

【訓讀】吾が夫子の若きは則ち其の位を得ずと雖ども、往聖を繼ぎ、來學を開く所以、其の功反つて堯舜より賢る者あり。然れども此の時に當つて、見て之を知る者は惟顏氏曾氏の傳其の宗を得たり。曾氏の再傳に及んで復た夫子の孫子思を得たり　則ち聖を去ること遠くして異端起る。

【通釋】吾が孔夫子の如きは、人民を治める統治者たる天子の位置を得られなかつたけれども、過去の聖人の道を受け繼ぎて、敎を萬世に垂れ、將來聖人の道を學ばんとする者を開き導いたので、その功業は却つて堯舜よりも以上のものがあるけれども、丁度その時に親しく孔夫子に接して薫陶を受け、目のあたり孔夫子の道を見て知つた者はただ顏回・曾參二子で、此の二子の傳へた道が、嫡々の正統を得てをる。曾氏が再び傳へるに及んで又孔夫子の嫡孫の子思が出た。その時には最早や聖人孔子の世を去ること遠くして、聖人の正道に背いて別に一派をなした異端の邪說が起つた。

【語釋】夫子（アナタと同じく古は貴賤尊卑に通じて用ひたが、論語に孔子を弟子等が夫子と云つてから先生を呼ぶことゝなつた。こゝでは孔子を指す。）○其位（人民を治める統治者の位。）○往聖（往は過去、過去の聖人堯舜禹湯文武等を指す。）○來學（將來の道を學ばんとする者。）○賢二於堯舜一（孟子公孫丑上篇に宰我曰く、予を以て夫子を觀れば堯舜より賢ること遠しとあるに本づいた。集註に程子の說を引いて曰く聖を語れば則ち異ならず、事功は則ち異なるあり、夫子、堯舜より賢るとは、事功を語るなり。蓋し堯舜天下を治む、夫子、又、其の道を推して以て敎を萬世に垂る。堯舜の道、孔子を得るに非ざれば則ち後世亦、何の據る所ぞと。）○見而知レ之（親炙する意で親しく其人に接して薫陶感化を受けること。）○得二其宗一（長子で家を受けつぐ者を宗子といふ。即ち嫡々の正統である。曾子が賢人の道を受け繼ぎ傳へたことは長子が家を傳へるやうに正統である。）○再傳（弟子の弟子で孫弟子のこと）○異端（聖人の正道と端緒を異にして別

に一派をなした邪說。老子・莊子・墨子・韓非子等の學派を指す。）

子思懼夫愈久而愈失其眞也。於是推本堯舜以來相傳之意、質以平日所聞父師之言、更互演繹、作爲此書、以詔後之學者。蓋其憂之也深。故其言之也切。其慮之也遠。故其說之也詳。其曰天命率性、則道心之謂也。其曰擇善固執、則精一之謂也。其曰君子時中、則執中之謂也。世之相後、千有餘年、而其言之不異、如合符節。歷選前聖之書、所以提挈綱維、開示蘊奧、未有若是之明且盡者也。

通釋 子思夫の愈〻久しうして愈〻其の眞を失はんことを懼る。是に於て堯舜より以來相傳ふる意を推し本づけて、質すに平日父師に聞ける所の言を以てし、更互演繹して此の書を作爲し、以て後の學者に詔ぐ。蓋し其の之を憂ふるや深し。故に其の之を言ふや切なり。其の之を慮るや遠し。故に其の之を說くや詳なり。其の天の命、性に率ふと曰ふは、則ち道心の謂なり。其の善を擇び固く執

ると曰ふは、則ち精一の謂なり。其の君子時に中すと曰ふは、則ち中を執るの謂なり。世の相後るること千有餘年にして、其の言の異ならざること符節を合はするが如し。前聖の書を歴選するに、綱維を提挈し、蘊奥を開示する所以、未だ是の若く明かに且つ盡くせる者あらざるなり。

通釋 子思は愈〻年久しくなつて愈〻道の眞相を失はんことを心配した。そこで堯舜より以來相傳へた意味を推し本づけて、其の是非當否を正すに、かねて父や師に聞いた言を以てし、かはるがはる演べ繹ねて此の中庸といふ書を作りて以て後の學者に告げ示したのである。蓋し子思が道の明かならぬを憂へること深き故に、その之を言ふこと親切である。久しうして復た失はんことを慮ること遠大である故、その之を說くこと詳密である。中庸の首章に天の命之を性といひ、性に率ふこれを道といふと云つたのは、則ち大禹謨の道心の事である。又中庸の第二十章に善を擇ぶといふのは即ち舜が禹に授けた辭の中の「精」のことであり、又固く執るといふのは則ち舜が禹に授けた辭の中の「一」のことである。又第二章に君子時に中すと云ふのは則ち堯舜禹の授受した「執中」のことである。堯舜の時から子思の時は千餘年も後の世であるが、その言つたことの異ならぬことは丁度符節を合はせるやうにぴつたりと合ふのである。前の聖人の書物を一わたり選び出して見るに、大綱を提げ示すと共に、

奥深い節目を開き示すこと、是の書のやうに明かで且つ盡くしてゐる者は外には無い。

語釋 質（タダスと訓む是非當否を正し證する。）○父師（父は孔子をいひ、師は曾子をいふ。）○更互演繹（かはるがはるのべたづねること。更互に父や師の言をとりつゞけること。）○符節（ワリフと訓む玉を作り、文字を彫刻して之を中分し、彼と此と各其半分を持ち、事故あれば之を合せて證據とする。）○提挈（ひつさげる。）○綱維（綱は大綱、維は網綱である。道體の大なること。）○蘊奥（蘊はおくそこ、奥は室の西南隅、でおくふかき所。借りて道の深い所をいふ。中庸の末節の中、費隱等の類をいふ。）

自是而又再傳、以得孟氏。爲能推明是書、以承先聖之統、及其沒而遂失其傳焉。則吾道之所寄、不越乎言語文字之間、而異端之說、日新月盛、以至於老佛之徒出、則彌近理而大亂眞矣。

訓讀 是よりして又再傳して以て孟氏を得たり。能く是の書を推し明めて以て先聖の統を承くる事を爲す。其沒するに及んで、遂に其傳を失ふ。則ち吾が道の寄る所、言語文字の間に越えず、而して異端の說日に新に月に盛にして、以て老佛の徒出づるに至つて、則ち彌〻理に近くして大に眞を亂る。

通釋 子思よりして又再傳の孫弟子に孟氏が出た。孟氏は能く中庸の書の主意を推し明めて昔の聖人の傳統を承け繼いだが孟氏が沒するに及で遂にその傳統を承け繼ぐ者が無くなつたので、吾が道は

ただ言語文字の間に寄つて存するに過ぎないこととなつた。而して楊子・墨子等以下種々の異端の邪說が日に新に月に盛となつて流行したが、老氏佛氏の徒が出るに至つて、老佛の主張する所は他の異端の說よりも一層道理に似よつてゐて、却つて大に眞正の道を亂すこととなつた。

【語釋】 再傳以得孟氏（再傳は重傳である。孟氏は孟軻。子思の後、又、孟子を得たり、即ち重傳である。）〇推明是書、以承先聖之統（孟子が、中庸の書の大意を推し明めて、之を行事に見はし、又孟子の書七篇を著はして聖の傳統をうけ繼いだこと。）〇異端（楊朱、墨翟以下申不害韓非の法術、鬼谷・孫武・吳起の權謀など。）〇老佛之徒（漢になつて老子の術が盛になり、晉になつて清談の俗は老子の思想に本づいてゐる。佛法は後漢の明帝の時西域より入り來り南朝になつて盛になつた老佛の徒は老子釋迦の學を學んだともがら。）〇彌近レ理而大亂レ眞矣（所謂似て而も非なるものは人が知らず識らずの中に眞の道理と思うて信ずるから却つて眞正の道理を亂すことになる）

【餘論】 佛氏は明心見性といひ甚だ吾が儒の盡心知性と似てゐる。又老氏は修心練性といひ、甚だ吾が儒の存心養性と似てゐる。これ彌々理に近いものといふべきである。然しながら、佛の明心見性は、欲を絕ち智を棄てるに在つて、吾が儒の善を擇んで道を明かにすると異り、老氏の修心練性は退嬰を主とし無智無欲ならんとするので、吾が儒の固く執つて、其の道を守ると異つてゐる。似て非なるもの故、大に眞正の道を亂すことになるのである。吳行父曰く、「自是以來、聖聖相承。」から此に至つるまでを第二節とすると。中庸の道學は聖人が承け繼ぎ傳へた心法なること。子思が異端起りて、其の眞を失はんことを懼れたこと。道統、傳を失ひ、異端盛となりて、大に眞を亂り、子思の遠慮の如

くなつたことを說いたのである。

然而尙幸此書之不泯。故程夫子兄弟者出、得有所考、以續夫千載不傳之緒、得有所據、以斥夫二家似是之非。蓋子思之功於是爲大。而微程夫子、則亦莫能因其語、而得其心也。

讀 然り而して尙ほ幸に此の書の泯びざるあり。故に程夫子兄弟なる者出で、考ふる所ありて以て夫の千載不傳の緒を續ぐことを得、據る所ありて以て夫の二家是に似たるの非を斥くることを得たり。蓋し子思の功是に於て大なりと爲す。而して程夫子微かりせば則ち亦能く其の語に因つて其の心を得る莫きなり。

通釋 所が尙ほ幸にも此の中庸の書が亡び失せないで居たので、程夫子兄弟即ち明道、伊川の二先生が世に出られて、此書について考へ、千年も傳はらずに居た道統の緒を繼ぐことが出來、又此の中庸の書を根據として彼の老佛二家の是に似て非なる教を排斥することが出來た。これから考へて見るに、子思が此の書を作つて後世に道の眞相を傳へた功は實に大なるものである。而して程夫子が無か

つたならば、亦誰も此の中庸の書中の語に因つて子思の心を得るものが無かつたのである。

語釋 程夫子兄弟（程顥、字は伯淳、明道先生といふ。程頤、字は正叔、伊川先生といふ。兄弟共に周敦頤を師とした。朱子は程子兄弟に私淑し二程子の道を承け繼いで居るので、尊んで夫子といふ。）○千載不傳（孟子以後約千四百年で宋になつて二程子が生れたが、其の間道統を承け繼いだ人が出なかつたので千載不傳といふ、載は歳と同じい。此の文は程伊川が書いた明道先生行状に、孟軻死して聖人の道傳はらず、先生千四百年の後に生れて、不傳の學を遺經に得たりとあるに本づいてゐる。）○緒（いとぐちと訓ず。）○二家（老、佛の二家。）

惜乎其所以爲說者不傳、而凡石氏之所輯錄、僅出於其門人之所記。是以大義雖明、而微言未析。至其門人所自爲說、則雖頗詳盡、而多所發明、然倍其師說而淫於老佛者亦有之矣。

訓讀 惜いかな其の說を爲す所以の者傳はらず、而して凡そ石氏の輯錄する所僅に其の門人の記する所に出づ。是を以て大義明かなりと雖ども、微言未だ析たず。其の門人の自ら說を爲す所に至つては、則ち頗る詳かに盡くして發明する所多しと雖ども、然れども其の師說に倍いて、老佛に淫する者亦之れあり。

通釋 惜しいことには二程子が中庸に就て說を立てたことが傳はつて居ない。（程明道は中庸につい

てまとまつた書を作らなかつたし、程伊川は一旦作つたが、意に滿たないとて燒き棄てたといふ。)そこで石子重が集錄した中庸集解は其の中に二程子の說としてゐるのは、僅かに二程子の門人が、平素二程子と問答した言葉を記し止めたので、二程子の自記したのでないから、大體の意味は明かであるけれども、その微妙な所ははつきりせぬ。二程子の門人が說を立てたのは餘程詳細に言ひ盡して、不明の點を發明してゐる所も多いけれども、而も先生である二程子の說に背いて、すつかり老佛二家の邪說に流れて居るものもある。

語釋 石氏(石子重、名は𡼏、會稽の人。中庸集解一篇を作る。即ち周子、二程子、張子、司馬溫公、王安石、謝上蔡、呂與叔、游定夫、楊龜山、侯仲良の說を集錄したものである。謝上蔡以下は二程子の門人である。) ○輯錄(あつめ記す。) ○微言(微は精、精微の言。) ○倍(そむく) ○淫(淫は浸漬で、老佛二家の說に浸漬し、ひたること。)

熹自蚤歲、卽嘗受讀而竊疑之。沈潛反覆、蓋亦有年。一旦恍然似有得其要者。然後乃敢會衆說而折其衷。既爲定著章句一篇、以俟後之君子。而一二同志、復取石氏書、刪其繁亂、名以輯略。且記所嘗論辯取舍之意、別爲或問、以附其後。然後此書之旨、支分節解、脈絡貫通、詳細相因、巨細畢

擧。而凡諸說之同異得失、亦得以曲暢旁通、而各極其趣。

【訓讀】 蚤歲より卽ち嘗て受け讀みて竊かに之を疑ふ。沈潛反覆蓋し亦年あり。一旦恍然として其の要を得たる者あるに似たり。然して後に乃ち敢て衆說を會して其の衷を折つ。既に爲めに定めて章句一篇を著はし、以て後の君子を俟つ。而して一二の同志復た石氏の書を取りて其の繁亂を刪り、名づくるに輯略を以てす。且つ嘗て論辯取舍する所の意を記して、別に或問を爲り以て其の後に附す。然して後此の書の旨、支分節解、脈絡貫通、詳細相因り、巨細畢く擧ぐ。而して凡そ諸說の同異得失、亦以て曲暢旁通して各〻其の趣を極むることを得たり。

【通釋】 自分は若年の頃から此の中庸の書を受け讀みて、心ひそかに之に就て疑問を抱いてゐたが、心を沈め思を潛め繰り返し繰り返して研究する事數年であつた。或る時、ふとぼんやりながら此の書の要領を會得したやうな心地がした。そこで敢て思ひ切つて衆くの說を集めて、その何れが正しいかと其の中正の所を分ち定め、その正しい說に從つて中庸章句一篇を著はして以て其の未だよくない點があつたならば後の有德の君子の修正を待つのである。而して一二の同志の人がまた石子重の輯錄し

た中庸の解釋の書を取つて、その繁雜で紛亂してゐる所を删り去つて、之を中庸輯略と名づけ、その上に自分が嘗て議論をしたり、辯明をしたり、或はその宜しきを取り、不可なるを捨てたりした意見を書き記して、別に或問といふ書を作りて以て其の後に附けたのである。そこで此の中庸の趣意が丁度肢體の如く分かれ、骨節の如く解け、各章各節とはつきり明かになり、その中を脈絡が貫き通つて居るやうに條理整然としてゐて、詳細のこと大略のこと相因り相待ち、大要と微細のこと悉く擧げて殘す所がない程となつた。凡そ諸説の同じい點や、異つた點、どれが當を得て、どれが當を失つて居るか等も、亦曲に暢べ、旁く通じて、夫れ〳〵其の趣を極めることが出來た。

語釋　熹（朱子の名。）○蚤（早と同じ、蚤歲は若年のこと。）○恍然似レ有下以得二其要領一者上（謙遜して恍然とボンヤリ要領を會得したやうだといつたのである。）○會（あつめる意。）○折衷（衷は中と同じ。過ぎたり、及ばなかつたりしてゐるのを中正の所に定めること。）○俟二後之君子一（後の君子の修正を待つといふのは謙遜の辭である。）○支分節解云々（支、節、脈絡は人體にたとへていふ。肢體の如く分れ、骨節の如く解け、その中を脈絡が貫き通つてゐる。許東陽曰く、章句、輯略、或問の三書既に備はつて、然る後中庸の書、支體の分、骨節の解の如く、而して脈絡貫穿通透と。支節よりいへば、首章性道教の如きはこれ體要を擧げて言は略である、則ち其の下十章に於て之を詳にす。第十章は費隱をいふ略なり、則ち其の下九章に於て之を詳にす。篇末は則ち是れ復た一篇の體要を擧ぐるなり。）○巨細（巨は大、即ち大要のこと。細は小、即ち微細のこと。）

雖下於二道統之傳一不中敢妄議上、然初學之士、或有レ取焉、則亦庶二乎行レ遠升レ高之

一助云ㇾ爾、淳熙己酉春三月、戊申、新安朱熹序。

【訓讀】道統の傳に於ては敢て妄りに議せずと雖ども、初學の士或は取る有らば、則ち亦遠きに行き高きに升るの一助に庶からんと爾か云ふ。淳熙己酉春三月戊申新安の朱熹序す。

【通釋】道統の傳に就いては誰が之を受け嗣いで居るかなどいふことは敢て思ひ切つて妄りに議論をしようと思はないけれども、然しながら初學の士がもし此の中庸章句を取つて學ばれるならば、譬へば遠方に行くには近い處から始め、高い處に升るには卑い處から始めるやうに、行く〳〵は聖人賢人ともなる爲の、其の手始めの一つの助けとなるに近いであらうと思ふのである。淳熙己酉の年、春三月戊申の日、新安の朱熹序す。

【語釋】不敢妄議（誰が道統を傳へて居るか等いふことを妄りに議論するのでない。即ち朱熹自身が道統の傳に與かるなどゝは毛頭考へてはゐない、これは謙遜の語。實は朱熹は心竊かに自ら道統を嗣いでゐることが窺ひ知られるのである。）○行ㇾ遠升ㇾ高（此の語は中庸第十五章に「君子の道は辟へば遠きに行くには必ず邇きよりするが如く、辟へば高きに登るには必ず卑きよりするが如し」といふに本づいたのである。中庸本文の語を引いて中庸の序文を結んだのは切實である。）○淳熙己酉（宋孝宗の淳熙十六年で、時に朱子は年六十であつた。大學の序文を書いたのと同年である。）

【餘論】以上は第三節である。程子が中庸不傳の心法を得たこと、及び自ら程子に私淑して衆説を折衷して得た道統の傳を明かにすることが出來たことを説いたのである。陳定宇曰く、謙して敢て道統

の傳に與からずと言ふと雖も、實は其の責を辭すべからざるものありと。

中庸

宋朱熹章句

子程子曰、不偏之謂中、不易之謂庸。中者天下之正道、庸者天下之定理。此篇乃孔門傳授心法。子思恐其久而差也。故筆之於書、以授孟子。其書始言一理、中散爲萬事、末復合爲一理。放之則彌六合、卷之則退藏於密。其味無窮。皆實學也。善讀者玩索而有得焉、則終身用之、有不能盡者矣。

【通釋】子程子曰く、偏らざる之を中と謂ひ、易らざるを之を庸と謂ふ。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり。此の篇は乃ち孔門傳授の心法なり。子思其の久しうして差はんこと

を恐る。故に之を書に筆し、以て孟子に授く。其の書始は一理を言ひ、中は散じて萬事と爲し、末は復合して一理と爲す。之を放てば則ち六合に彌り、之を卷けば則ち密に退藏す。其の味窮り無し。皆實學なり。善く讀む者、玩索して得るあらば、則ち終身之を用ひて盡くす能はざる者あらん。

通釋　子程子がいふ、何れにも偏らぬのを中と云ひ、萬世に亘つても易らないのを庸といふ。中は天下の正しい道理で一切を統べ、庸は一定して易はらぬ天下の定まつた理で條目を盡くしたものである。此の中庸といふ書は孔子の門流に於て聖人が門人に傳授せられた心に關する教である。子思は此の教が年を經ること久しうなつて間違を生ぜんかと心配せられた故に、之を書き記して孟子に授けられたのである。此の書は始には一理をいひ、天命之を性といふとのべ、中程は之を種々の方面に分散して三達德・五達道・九經其の他萬事に就てのべ、末には又合せて一理とし、上天の載は聲も無く、臭も無しとのべてゐる。此の書にあることを放つて押し廣むれば、上下四方宇宙の間に行き亘り、遍滿充塞して宇宙間の事一として此の書の外に漏れることなく、之を卷いて仕まひ込めば、極めて微妙で耳目の聞見する事の出來ない所に退き藏れる

のであつて、其の味は無窮無限であるが、皆實際の學問であつて、架空の議論がない。此の書を熟讀玩味してその眞意のある所を探索して之を我が身に體得したならば、一生涯之を用ひても、用ひ盡くすことが出來ないであらう。

語釋 章句（中庸はもと禮記の中にあつた一篇の文であるが、之を三十三節に分けたのは朱子である。それ故朱熹章句といふ。）○子程子（宋の程明道、程伊川兄弟をいふ。子はもと男子の通稱であつたが後尊稱にも用ひた。子程子といつて程子の上に更に子の字を加へたのは師を尊んだのである。）○不偏（どちらにも偏らぬこと、物事の本體も、その本體から出る作用も、中正を得て偏らぬことである。中の字の意義は最も識り難いのでこれは心に悟るより外ない。識り難いから種々の解釋がある。朱子は偏らず倚らず過ぎたることも及ばぬこともないことであるといつてゐる。よい解釋である。不レ偏不レ倚の四字は所謂、未發の中、卽ち中の體を說いたもので、無㆓過不及㆒の四字は所謂、君子時中の中、卽ち中の用をいつたものである。或問には朱子が委しく其の意を述べて居る。こゝには要領を得たる新安陳氏の說を引く。曰く、不偏不倚は未發の中、心を以て論ずる者なり、中の體なり。過不及なきは時中の中、事を以て論ずる者なり、中の用なりと。尙、程子の中を說明した卑近の例を擧げよう。曰く、中の字は最も識り難し。須くこれ默識心通すべし。且つ試に一廳を言へば則ち中央を中と爲す。一家なれば則ち廳は中に非ずして堂を中と爲す。一國なれば則ち堂は中に非ずして國の中を中となす。）○不易（永久にかはらぬことである。朱子は庸は平常であると解してゐる。平常であるから、常に行うて易へることはできぬ世を驚かすやうな非常のことならば、一時はよくとも常とすることはできぬ。卽ち平常なるが故に不易、不易なるが故に平常であつて其の意は同じ。）○正道定理（不偏不倚であるから正といひ、萬世不易であるから定といつた。道といひ理といつたのは文字を互にしたので輕重はないが、分けていへば道は大綱で、理はその條目と見るがよい。景星の集說に正は是れ不偏、定は是れ不易、道は是れ大綱、理は是れ細目といひ、又、大全に蒙引の說を擧げて曰く、道理の二字、對して之を論じ。亦互文のみ。若し二字の義を細分せば、則ち道は統體の全を以て言ひ理は其の中の條理を以て云ふと。）○孔門傳授心法（孔門は孔子の門流、傳授は師が弟子に傳へ授けること。天が與へた道は人々の心に具はつてゐる、聖人が人を敎へるは人々の心に具はつてゐる天の與へた道を完らせしめるので、之を心法といふ。）○始言㆓一理㆒（中庸の最初の文句の天命之謂性を指していふ。）○中散爲㆓萬事㆒（中庸に論じてゐる多くのことを指す。三達德、五達道天下を治める九經等其他皆これである。）○末復合爲㆓一理㆒（第三十三章に天之載無聲無臭を指す。）○彌㆓六合㆒（彌はワタルと訓む。宇宙にあまねく行き亘つて一切を包含し網羅してゐること。六合

は天地と四方とをいつたので、宇宙のことである。）○退藏於密（密は人間の五官を超越した精神に屬する無形のことをいふ。極めて微妙で耳目の聞見することができぬ所に退きかくれるといふ意である。陳三山曰く、其の大、際なく、其の細眹なしと。胡雲峰が曰く、之を放てば六合に彌るとは、感じて遂に天下の故に通ず、心の用なり。之を巻けば、密に退藏すとは、寂然不動、心の體なりと。）○玩索而有得（熟讀玩味して、眞意のある所を求めて之を體得して我がものとすること。）

天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。

訓讀　天の命ずる之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を教といふ。

通釋　天即ち宇宙を主宰し天地萬物を創造する神が命令して、人は固より、其の他の萬物に生れながらに與へたものを性、即ち生れつきといふ。人や萬物が各々その生れつきの自然のまゝに從つて行ふのを道といふ。宇宙の森羅萬象が調和して行はれて居るのも、人間相互の關係が圓滿に行はれて居るのも皆道であつて、前者を天道といひ、後者を人道といひ、其の名は異れども天道・人道は二つではない、皆道である。此のやうに道は天性の自然に具はつて居るものであるけれども、生れながらに得てをる聖人でなければ、その行ふ所は必ずしも道と一致しないで、或は過ぎたり或は及ばなかつたりするから、聖人は人間の行はなければならぬ道を修めて人間の法則即ち人倫とした。之を教といふのである。

語釋　天命（天については支那では凡そ四種の解釋がある。一、彼の青空を望んで天といふ。これはその形體をさすのである。第十二章の鳶飛んで天に戾るの天はこれである。二、宇宙の主宰者、天地萬物の神として見るので、これは人間の五官を超越したものとして宗教的に見るので、ここでいふ天命といふのは、これにあたつてゐる。三、天地宇宙の理法として見るので、哲學的に考へることになる。宋の學者は天を哲學的に解釋しようとしたから天は理なりといつて居るものが多い。四、天を自然として解し、天地間の森羅萬象を機械的に見ようとするもので、これは科學的の見方である。）○之謂（謂之とは異る。朱子曰く、直爲也と。天命を性と爲すといふ意で、天命を性と名づけるといふ意ではない。）○性（人ばかりでなく萬物が天にうけて生れる所の先天的の生れつきである。朱子は性卽ち理なりと解してゐるのは、宋の學者の哲學的の見方によつたものである。性については孔子は性相近しと云つたばかりで多く性のことを云つてゐない。中庸に至つて初めて性は天命であることを道破して、性は人に生れながらに具はつた完全なものであるとして暗に性は善であるとし、孟子の性善說を導いてゐる。後荀子が性惡說を唱へてから性に關する種々の議論があらはれるやうになつた。）○率（率由で、したがふ意である。）○道（宇宙の總てのものは道によつて完全に運行するから之を天道といひ、人間相互の關係は道によつて圓滿に履行せられるから之を人道といふ。天道も人道も天の命じた性に率ふのであるから二つのものではなく同一のもので、見方によつて名を異にするのである。）○修（治め整へること品節すること。）○敎（道は天命によつて自然に具はつてゐるが、生れながら知る聖人でなければ其の行爲は必ずしも道と一致せぬ故、聖人は人の行ふべき道を修めて天下人類の法とした。之を敎といふのである。）

餘論　朱子の章句にいふ。思ふに世人は自己に性のあることは知つてゐても、その性が天から出て居ることを知らない。又物事には道があることは知つてゐても、その道は性に由つてゐることを知らない。聖人の敎あることは知つてゐても、其の敎は自己に固有してゐる人性に因つてゐることを知らない、それ故子思が此の章で首として之を發明した、而して漢の董仲舒が道の大原は天から出て居るといつたものも亦之れと同樣の意であると。此の朱子の言は子思の意を十分道破したものといふべきである。又、四書輯疏に曰く、世人は性が天より出づることを知らず、故に其の易ふ可からざること

を知らず。道は性に出ることを知らず、其の離る可からざることを知らず、教の固有に因つて之を裁成することを知らず、故にこれを身に反求して之を自得すること能はず。此れ子思子が爲めに深憂切慮して中庸の書を作れる所以の本旨なりと。

陸稼書曰く、此の書、專ら中庸二字の爲めに發して口を開き、却つて即ち中庸を言はず、乃ち、中庸内に就いて、性道教の三項を分別し出し來る。蓋し、性道教に明かならざれば、則ち中庸の源委を知らず、性を知つて、然る後中庸の自て來る所を知り、道を知つて然る後、中庸の在る所を知り、教を知つて然る後、中庸の自て全き所を知ると

道也者、不可須臾離也。可離非道也。是故君子戒愼乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。莫見乎隱、莫顯乎微。故君子愼其獨也。

【通解】道は須臾も離る可からざるなり。離る可きは道に非ざるなり。是の故に君子は其の睹ざる所を戒愼し、其の聞かざる所を恐懼す。隱れたるより見はるゝは莫く、微なるより顯なるは莫し。故に君子は其の獨を愼む。

通釋 萬物に性の無いものはなく、道は天性の自然に率ふもの故、萬物道を具へて居ないものは無い。實に道は天地を貫き、古今に亙つて無い所はなく、暫くも之を離れることは出來ぬものである。若しも離れることが出來るものならば、それは道ではない。又、性に率ふものとも云ふことは出來ぬ。それ故君子は常に敬み畏れて修養を心がけ、目に見る所あつて後、初めて戒め愼むのではいけない、その未だ目に見ない時に早くも戒め愼み、耳に聞く所あつて後、初めて恐れ懼れるのではいけない、その未だ耳に聞かはい時に早くも恐れ懼れて、寸時も天性の自然を失はないことをつとめる。暗く隱れてあらはれぬ所、かすかで知り難い事は、その形跡はまだ現はれないけれども念慮が一たび發して善惡の機微が心の中に動けば、必ず、やがては外に見え顯はれないではゐない。中に思ふ所があれば必ず外に形はれるもので、他人はまだ知らなくとも、自分は獨り心中に明かに之を知るもので、天下のことこれより顯著なものはない。故に君子は常に戒愼恐懼して、他人の知らぬ所で、自分獨り知る所について尤も愼んで人欲の將に萠さうとするのを隱微の中に遏めて、道を離れないやうにする。

語釋 ○須臾（しばらく、寸時。）○隱（かくれて見えぬ暗い所。）○見（あらはれる。）○微（かすかで知り難い細事。）○獨（朱子は他人の知らない所で自分獨り知る所と解してゐる。卽ち自己の一念か發動しようとして而も未だ外の動作にあらはれぬ所を獨といふので、必ずしも獨居間居のみでなく、たとひ衆人稠座の間に在りても、自分獨り知り、人の未だ知らざる所、卽ち一念發動の所をいふ。）

【餘論】「戒愼乎其所不睹」「恐懼乎其所不聞」の二句は次の「未發」の語を起す爲め、「愼獨」は次の一節に中る。」の語を起す爲めのまへおきである。愼獨の說は大學第六章と表裏をしてゐるから倂せ見るがよい。

朱注に愼獨を解して、人欲を將に萠さうとするにとゞめて、人欲を隱微の中に潛かに長ぜしめて、道を離れること遠くならしめないことをいつたのであると說いて居るのはよい解釋である。

喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉。

【訓讀】喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ。發して節に中る、之を和と謂ふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す。

【通釋】喜怒哀樂の情は外物の刺激に應じて初めて起るものであるが、その未だ起らない時の精神狀態は渾然として中に在つて一方に偏ることがないので之を名づけて中といふ。この中の狀態は外物の刺激に感じて喜怒哀樂の情となつて見はれても、或は過ぎたり或は及ばなかつたりする缺點がなく、

皆當然の程合に適つて情の正しきを得て理に悖らないものである。故に之を和といふ。中は性の德、道の體であつて寂然として動かないけれども一切のもの皆之に具はり、天下の萬事萬物悉く此の中を根本としない者はないので、卽ち天下の大本である。和は情の正しい狀態であり道の作用であつて、物に感じて通じ、一として之に悖るものはなく、天下共に之に由る所のもので、卽ち天下の達道である。何人にも天から命ぜられ賦與せられた性がある以上は聖人凡人の區別なく、總て未發の中はあるべき筈である。但し凡愚の人は、その物に感じ、發して情となるとき、必ずしも節に適はないで、過ぎたり及ばなかつたりする缺點を生じ、中和の節を失ふから、隨つて未發の中も亦之を明かにすることができない。唯〻聖人君子はその見ざる所を戒愼し、その聞かざる所を恐懼して、喜怒哀樂の情未だ發しないうちに修養の工夫を凝らし、少しも偏ることなく、よく中を推し極めることが出來るし、又獨りを愼む工夫愈〻精密にして外物の刺激に應じて少しも謬らず、刺激に感じて、一として情の程合に適しないことがなく、よく和を推し極めることが出來る。此のやうに中和を推し極めることが出來れば、國家天下の民は皆その德に感化せられて、其の所に安んじない者はなく、人民皆その所に安んずれば、天地も亦之に應じて天災地變などの非常事變がなくなり、天地も亦其の所に安んずるので、

即ち天地位するのである。天地が位して天災地變などがなくなり、風雨も暑寒も其の時を失はなければ人も物も皆平かに安らかに、各〻その生を遂げることが出來、即ち萬物が育するのである。これが即ち學問の極效、聖人の能事である。

語釋 未レ發謂ニ之中ニ（喜怒哀樂の情は外物の刺戟に感じて初めて起るのであるが、この未だ起らざる際の精神状態は渾然として中に在つて一方に偏ることがないので中と名づける。中とは天が命して人間に賦與した性をいふのである。）○中レ節謂ニ之和ニ（物に感じて喜怒哀樂の情があらはれて、過ぎたり足らなかつたりする缺陷がなく皆當然の節度に合ふのは情が正しくて、理に悖らないものであるそれ故これを和といふ）○大本（大は總てのものを統べてゐる意、本は根本の意、天下の萬事萬物悉くこれを以て根本とするから大本といふ。）○達道（達は通じない所のない意、天下の萬事悉く之に由る故に達道といふ。）○致（推し極めること）○位（それぞれその所に安んずること）○育（各々その生を遂ぐること。）

餘論 此の章に中和を致して天地位し、萬物育すといひ、第二十二章に唯天下の至誠は天地の化育を贊け、以て天地と參することが出來るとある。故に中和は即ち至誠であると云うてもよい。形式の說明として中と云ひ、その內容の說明として誠といつたものと解するがよいと思ふ。尚、中については、序說の四を參考とせられたい。

右第一章。子思述ニ所レ傳之意ヲ以立レ言。首明下道之本原出ニ於天ニ而不レ可レ易、其實體備ニ於己ニ而不レ可レ離、次言ニ存養省察之要ヲ、終言ニ聖神功化之

極。蓋欲學者於此反求諸身而自得之以去夫外誘之私而充其本然之善。楊氏所謂一篇之體要是也。其下十章蓋子思引夫子之言以終此章之義。

訓讀 右第一章。子思傳ふる所の意を述べて以て言を立つ。首には道の本原天より出でゝ易ふ可からず、その實體己に備はりて離る可からざるを明かにし、次には存養省察の要を言ひ、終には聖神功化の極を言ふ。蓋學者此に於て諸を身に反求して之を自得し、以て夫の外誘の私を去りて、その本然の善を充てんことを欲す。楊氏の所謂一篇の體要とは是なり。その下の十章は蓋子思、夫子の言を引いて以て此の章の義を終ふ。

通解 右は第一章である。子思が堯舜以來相傳へた教の趣意を述べて言を立てたのである。首には道の大本・根原は天から出たもので、一定不易のものであり、そのまことの正體は人々自身に完備してゐて決して離れることの出來ないことを明白にし、次には君子は常に敬虔の心を存して、未だ見聞せずとも戒愼恐懼して天命の生れつきを存養し、意念が發動する際、隱微の

間を省察して、よく獨りを愼むの要旨を言ひ、終には聖神の德ある人は、よく中和を致して、其の功業化育の極致として、其の結果、天地も安らかに位し、萬物も正しく生を遂げるに至ることを言つて居る。思ふに學者が此の點に於て之を自己の身に反省し求めて、天下の大本は人人に具はつてゐる天命の性であり、天下の達道は人々の天性に率ふことであり、中和は人々が本來具へ有つてゐるものであることを自覺して、眞に之を自得し、心に深くのみこんで實踐し、以て外界の誘惑に兎角迷ひ勝ちである私欲を去つて、本來固有の善を充實せんことを望むのである。楊龜山氏が云つてゐるやうに、此の章は中庸全體の意義を總べくゝつて、中庸の大體要旨を述べたものである。此の章以下の章は思ふに子思が孔子の言を引用して此の第一章の意義を殘りなく述べたものである。

語釋　○立言（後世の敎となる立派な言を殘すこと。）　○道之本原出於天（本原は大本、根源。此の語は漢の大儒董仲舒が云つた語で、ここでは中庸の初めの命の性・道・敎の三つをさしてゐる。）　○實體備於己而不可離（此の句は道也者不可須臾離也、可離非道也の二句を指してゐる。）　○存養省察（存養は戒愼乎其所不睹、恐懼乎其所不聞の二句を指し、省察は愼獨を指す。）　○聖神功化之極（此の句は致中和天地位焉、萬物育焉の句を指す。）　○反求諸身（大本は天命の性であり、達道は性に率ふの事であるから、人々自身に本來具はつてゐる。それ故に之を反省して求めよといふのである。）　○去夫外誘之私（獨りを愼しみて人欲を去ること。）　○楊氏（程子の門人中の四先生として呂大防・謝良佐・游酢・楊時の四人あるが、楊時は字は中立、龜山先生といはれた。）　○大旨（大體の要旨）

【餘論】右第一章の中について、伊藤仁齋は喜怒哀樂から萬物育焉に至るまでの四十七字を中庸の本文でないとし、思ふに此の四十七字は古の樂經から間違つて入つて來たのであると論じてゐるが、此の說は誤まつてゐる。前にも述べたやうに不睹不聞の二句は未發の句を起す爲めのまへおき、愼獨の說は中節の句を起す爲めのまへおきであつて文章も思想も前後ぴつたりと應じて居る。若し此の四十七字を削つたならば頭ばかりで尾のないやうになる。未發の中を以て學問の根本とするのは特に此の書の著はされた大趣意である。一體當時老子の思想を主張する者が、儒者の孔子の道は聖人が人爲的に作つたものであるといつて非難したのに對抗する爲めに、儒者の道は人爲的のものではない、道の本源は天から出て居るといふ意を述べて儒道は唯に用のみを言ふにあらず、道の本體を明かにせるもので、儒者の道は根柢の深いものであることを言つて此の中庸を著はしたのである。且つ此の書を中庸と名づけた意も實にこの一節にあることを知つたならば、此の四十七字が他書から誤つて入つたので無いことは明かである

仲尼曰、君子中庸。小人反中庸。君子之中庸也、君子而時中。小人之中庸、

也、小人而無忌憚也。

訓讀 仲尼曰く、君子は中庸をす。小人は中庸に反す。君子の中庸は君子にして時に中す。小人の中庸は、小人にして忌憚なきなり。

通釋 孔子曰く、君子は偏らず、倚らず、過ぎたることも、及ばぬこともなく、平常であつて、且つ永久易らない中庸の德を己の身に體得してゐるが、小人は中庸に反してゐる。君子が中庸の德を體得してゐるのは、見えないこと聞かないことに戒愼恐懼して未發の中を失ふことなく、意念が動く時にはよく獨を愼む工夫をこらして和を得たる君子の德があるから、時に隨ひ變にあつて何時如何なる場合でもその宜しき中に叶ふのである。小人が中庸に反する故は、小人には小人の心があつて欲を縱にし、妄りに行つて、少しも忌み憚かつて愼み戒めることがないからである。

語釋 仲尼（孔子のあざな）　○中庸（かたよらず、過ぎたることも、及ばないこともない德である。庸は二つの意味がある、一は凡庸、即ち平らぬ意、平常であつて目新らしいことや、甚だしいことがないから、一定不變といふ第一の意味が生じてくるので、分けていへば二つの意味があるが合せて言へば一つのことである。第一章には中和といひ、此の章では和を變へて中庸といつてゐるのは、實は同じことで、性情の方面からいへば中和といひ、德行の方面からいへば中庸といふのである。程門四先生の一人、游定夫の說に性情を以て之を言へば則ち中和と爲し、德行を以て之を言へば則ち中庸となす、其の實は一なりと。）　○時中（人の境遇や位置は色々に變化するが。時に隨ひ、變に處して何時如何なる時でも其の場合の宜しきに叶ふことである。時とは孟子が孔子を稱して聖之時者と云つた時と同じ意。朱子が蓋し中は定體なし、時に隨つて在り、是れ乃ち平常の理といつてゐるのは、よい解釋である。）　○小人之中庸（小人の中庸に反するの意。王肅本には中庸の上に反の

字あれども、強ひて反の字を加ふるには及ばぬ。大全に雒東子の説を引いて曰く、小人之中庸とは、論語に夫子の之を求むと言ひ、孟子に伊尹、堯舜の道を以て湯に要むと言ふが如し、夫子は未だ嘗て之を求めず、伊尹は未だ嘗て之を要めず、小人は未だ嘗て中庸せず、只是れ彼を借りて、此を斷ずるの辭のみ。文字を知る者、まさに此の意を得べしと。明快の論といふべきである。一說には小人は實に中庸に反すれども、自ら其の非なるを知らず乃ち敢て自ら以て中庸と爲して之に居て疑はず、これ其の忌憚なき所以であると解して居る。意味はこれにても通ずるが、文脈語脈から考へて、反の字を加へた意味に解する方がよい。）

【餘論】此の第二章以下の十章は皆、中庸を論じて、第一章の意味を解釋したものである。孔夫子の言は一時の言ふ所に非ず、故に文章は相連つてゐない。子思が夫子の言を引いて、湊成したのであるから、意は實に相承けてゐる。讀者は先づ其の文の斷ずる所に因つて意義を求め、徐に其の意の連屬する所を考へて、全篇の旨を失はぬやうにせねばならぬ。

右第二章

子曰、中庸其至矣乎。民鮮能久矣。

【讀方】子曰く、中庸は其れ至れるかな。民能くする鮮きこと久し。

【通釋】孔子が曰はれるには、中庸の德は至極の美、至極の善であつて、これ以上のものはない。然しながら本來吾等人間の有つてゐる天賦のもので高遠行ひ難いやうなものではなく、大してむづかし

い譯は無い譯であるが、世の教育教化が衰へてきたから、民が感發奮起して中庸を行ふもの〻無いので、之を能くする者が少いことは最早久しい間である。

【語釋】 中庸（中庸之德の意） ○其至矣乎（至るとは甚だ盡し、其を極し一毫も増損すべき無きをいふ。其矣乎の三字は贊歎感慨の中、常に能くすべき願望の意を寓してゐる。）

【餘論】 鄭玄は民鮮能久矣を「能く久しきこと鮮し」と訓んで「民が中庸の道を能く久しい間守り行ふ者がない」といふ意に解き、宋儒にも同樣に說く者もあるが、これは下文の不レ能ニ期月守一の意味に解し、文體は鮮ニ能知一味と同じと見る說である。然るに朱子は之は辨じて曰く、此の章はまさに上章の小人中庸に反すの意を承けて、一般的に之を論じたので、未だ遙かに久しき能はずに論及するの暇がない。下章中庸を擇ぶ、至つて乃ち久しき能はざるを責むきべである、兩章は各〻一方面を說明したもので、彼を以て此を證言することは出來ぬと論じてゐる。案ずるに、文は中庸不レ可レ能也と同じと見れば宜いので、上に講じたやうに能くする鮮しと讀んでよい。論語雍也第六にも此の章と同じ意味の語がある。「子曰、中庸之爲レ德也、其至矣乎。民鮮久矣。」とあつて、「之爲德也」の四字があつて、能の字がない。能の一字を添へたのは、下章に多くの能の字を用ひたると思ひ合せて、子思の深意のあることを知るべしといふ胡炳文の說がある。味ふべきである。

右第三章

子曰、道之不行也、我知之矣。知者過之愚者不及也。道之不明也、我知之矣。賢者過之不肖者不及也。人莫不飲食也鮮能知味也。

訓讀 子曰く道の行はれざるや、我之を知る。知者は之に過ぎ、愚者は及ばざるなり。道の明かならざるや、我之を知る、賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばざるなり。人飲食せざる莫きなり。能く味を知る鮮きなり。

通譯 孔子が曰はれるには、中庸の道が行はれない譯は自分は之を知つてゐる。知者はその知が高過ぎて中庸の道などは平凡であるから行ふ値打がないとして行はず、愚者はその知が普通の標準にも屆かず、中庸の道を行ふべき方法をも知らないでゐる。これが道の行はれない譯である。中庸の道が明かにならぬ譯は、自分は之を知つて居る。賢者はその行、普通の程度にも及ばず、中庸の道を知るべき方法をも求めない。これが道の明かにならぬ譯である。中庸の道は天命の性に率ふもので、高遠非常なものではない。吾人が日常用ひて離れることの出來ぬものである。これをよく察せないから或

は過ぎたり及ばなかつたりするのである。譬へば飲食のやうなものである。何人も飲食しない者は無いが、眞によく其の味を知るものは殆んど無いやうなものである。

【語釋】不肖者（不肖の人をいふ、人は天の生ずる所であるのに天に似ない者を不肖といふ。肖は似るである。）○鮮能知味　或は奢侈に過ぎて、其の宜しきを失ひ、或は饑渇に傷れて其の正を失ひ、或は僻偏にして嗜む所を同じうせず、或は欲に向うて珍奇を求むるの類。

【餘論】知者の過ぐるは後文に見ゆる索隱の類、賢者の過ぐるは行怪の類である。第三章では中庸の德、民能くすること鮮きをいひ、此の章では、上を承けて、民の能くすることを鮮き所以は賢知愚不肖の過不及に出るをいつたのである。

右第四章

子曰、道其不行矣夫。

【訓讀】子曰く、道は其れ行はれざるかな。

【通釋】孔子がいはれるには中庸の道は明かでないから、容易に行はれないのであらう。

【餘論】此の章は上の章をうけて、道の行はれ難い緒をあげて下章の意を起すのである。道の行はれ

ないのは明かならざるに由る。因て下章舜の智、以て道を明かにして後、道の行はる可きを言はんとするのである。

右第五章

子曰、舜其大知也與。舜好問而好察邇言、隱惡而揚善、執其兩端用其中於民。其斯以爲舜乎。

【讀方】子曰く、舜は其れ大知なるか。舜は問ふことを好んで、邇言を察するを好み、惡を隱して善を揚げ、其の兩端を執つて、其の中を民に用ふ。其れ斯れ以て舜と爲すか。

【通釋】子曰く、舜はそれ大なる知者といふべきであらうか。舜の知はもとより人に勝れて居るが、自分の知を振り廻はすことなく、人に質問して、人の意見を聞くことが好きで、たとへ卑近な言論でも、よく其の眞意のある所を察することが好きだから、苟くも善言あれば殘る方なく、之を採用して天下の知を合せて我がものとする。若し又衆人の意見の中に惡いものがあれば之を隱して外に表はれぬやうにし、意見の中に善いものがあれば、之を發表し譽め立てゝ隱さぬやうにするから、善い者は

愈々樂しんで善言を進めるやうになり、不善なる者も、遠慮もなく其の考を述べるやうになり、ます〳〵天下の知を合せることゝなる。又衆人の論說の中に互に相反する兩極端の考があつたときは、之を比較し研究して、その中庸に適ふものを用ひて民を治める。これは舜の胸中に精確な見識があるので、よく其の時に適當な中庸に適つたものを定めることが出來るのである。以上述べた所が卽ち舜の舜たる所であらうか。舜のやうであれば道は行はれないことはないのである。

語釋 大知（眞の知。能く中道を知るをいふ。）○邇言（邇は近いといふ字。卑近なる、手近の言、尋常普通の言は人の忽にする所なるに、舜は好んで之を察して、道に關する所に遺られた言がない。）○兩端（互に相反してゐる兩々の極端、厚薄、大小、輕重等の中につき、其の說の是なるものを擇んで之を用ふるのである。）

右第六章

子曰、人皆曰予知。驅而納諸罟擭陷阱之中、而莫之知辟也。人皆曰予知。擇乎中庸、而不能期月守也。

通釋 子曰く、人皆予知ありと曰ふ。驅つて諸を罟擭陷阱の中に納れて、之を辟くることを知る莫きなり。人皆予知ありと曰ふ。中庸を擇んで期月も守ること能はざるなり。

通釋 子曰く、人々は皆自分は智慧があるといふが、果して智慧があるならば、患をまだ來ぬ以前に防がねばならぬ筈である。然るに禍の根が伏れて存在して居ても茫然して之を覺らず、たとへば無智の獸を驅り立てゝ之を網や・機檻や、おとし穴に追ひ込んでも之を避けることを知らぬやうである。人々は皆自分は智慧があるといふが果して智慧があるならば、能く中庸の道を選んで固く之を守り、我が物とせねばならぬ筈である。然るに多くはよし一時中庸を選んでも丸一と月とて之を守ることも出來ぬ。これでは智慧があるとは言ふことは出來ない。禍を知つて辟くることを知らぬとは以て能く擇んでも守ること能はざるに喩へたので、畢竟は知ることが眞でないからである。若し眞に之を知つたならば、何ぞ期月も守ることが出來ぬことがあらうや。

語釋 罟擭陷阱（罟は禽獸又は魚類を捕へる網。擭は機檻のことで禽獸を捕へる仕掛けのわな。陷阱は禽獸を捕へるおとし穴。禍機の伏する所に譬へたのである。）○辟（避と同じ、さける。）○期月（期はヒトメグリのこと期月は滿一ケ月のこと。）

餘論 論語の里仁篇には擇レ不レ處レ仁焉得レ知とある。知者ならば仁厚の風俗のある所を擇んで居らねばならぬ筈である。又孟子の離婁篇の上には知之實、知ニ斯二者一（仁義）弗レ去是也とある。知者ならば仁義を固く守つて去らない者でなければならぬ。中庸でいふ知と論語や孟子でいふ知とは其の意全く

符合してゐるし、中庸の守と、孟子の弗レ去とは其の意は同一である。

此章は上章の大知を承けて言ひ、又明かならぬ端をあげて、下章を起してゐる。

右第七章

子曰、回之爲レ人也、擇二乎中庸一、得二一善一、則拳拳服膺、而弗レ失レ之矣。

訓讀 子曰く、回の人と爲りや、中庸を擇び、一善を得れば、則ち拳拳服膺して之を失はず。

通釋 子曰く、弟子顏回の人物は事に遇ふ毎によく善と惡、過ぎたると足らないとを辨へて中庸を選び、若し一善を得れば之を大切に捧げ持ち胸に着けて之を失はぬやうにする所の人である。思ふに顏子は眞に知る所の人であるから、能く擇び能く守ること以上の通りである。能くこのやうであれば道は明かになるのである。

語釋 回（孔子の弟子、顏淵の名である。字は子淵といふから顏淵ともいふ。天資明睿で、篤にして學を好んだ人である。孔子の弟子の中で最も賢人であつて、聖人に次ぐ程の人であるから亞聖ともいはれてゐる。不幸にして三十餘歲で死んだので孔子は非常に悲歎して惜しまれた。）〇一善（即ち中庸である。）〇拳拳（まごころを以て捧げ持つさま。）〇服膺（服はつけること。膺は胸。胸につけることで、よくおぼえて片時も忘れぬこと。）

餘論 此の章は眞知を重んじて、眞に知れば、拳拳服膺して之を守つて失はざるに至るべきことを

説いたのである。

右第八章

子曰、天下國家可均也。爵祿可辭也。白刃可踏也。中庸不可能也。

訓讀 子曰く、天下國家をも均しうす可きなり、爵祿をも辭す可きなり。白刃をも踏む可きなり。中庸は能くす可からざるなり。

通釋 子曰く、天下國家は至つて大であるから治め難いものであるが、識見のある人であれば、よく之を平かに治めることが出來るものである。高位高官に登つて多くの俸給を得ることは人情の好む所であつて、之を辭することは容易なことではないが、清廉潔白な人は、辭すべき場合にはよく之を辭退することが出來るものである。命を投げ出して白刃を犯して進むことは、甚だ恐るべきことではあるが、勇氣ある人はよく白刃を踐んで恐れぬことが出來るものである。以上の三事はいづれも容易ならぬ困難なことではあるが、皆、一方に優れた器量才德を有つて居れば出來ないことも無いが、唯、中庸の德を得て、中庸の道を行ふことは、易いやうで實はむづかしく、義理に精通し、仁德の極致に

至り少しも私欲の念なきものでなければ出來ないことである。

語釋 均(平かに治める) 〇爵祿(爵は官爵、祿は俸祿で月給。) 〇白刄(シラハ。ヌキミ。) 〇蹈(践で、身を以て之に當ること。)

餘論 元の學者胡炳文の說に、齊の桓公の宰相である管仲が桓公を輔佐して覇者とし、諸侯を周室の下に一まとめにしたことは是れ天下國家を平かに治めたことである。論語にある晨門や荷篠のやうな隱者がいさぎよく世を遁れたのは是れ爵祿を辭したものである。齊の桓公がその庶兄の公子糾を殺した時、公子糾の守役であつた召忽が其の難に死んだのは是れ白刄を蹈んだ者であると云つてゐるが、如何にも尤もの考である。以上三者の如きでも猶ほ中庸の道をよくしたといはれないのである。

天下國家を均しくする、爵祿を辭する、白刄を蹈むの三者は亦、知仁勇のことで、天下の難事である。然れども、此の三者は一旦奮然として力を用ひて之を能くすることが出來るが、たゞ中庸は義精しく仁熟して一毫人欲の私無き者でなければ及ばない。三者は難きが如くにして易く、中庸は易きが如くにして難い所以である。

此の章は上章を受て下章を起すのである。上章では道の明かなる所以をいひ、此の章は之を繼いで再び能くす可からざるの端をあげて以て下章、夫子が子路に告ぐるの勇の如くにして然る後、中庸

は能くすべき意を起すのである。

右第九章

子路問强。子曰、南方之强與。北方之强與。抑而强與。寛柔以教、不報無道。南方之强也。君子居之。衽金革、死而不厭、北方之强也。而强者居之。故君子和而不流、强哉矯。中立而不倚。强哉矯。國有道不變塞焉、强哉矯。國無道、至死不變、强哉矯。

訓読 子路强を問ふ。子曰く、南方の强か。北方の强か。抑も而の强か。寛柔以て教へ、無道に報ぜざるは南方の强なり。君子之に居る。金革を衽とし死して厭はざるは北方の强なり。而して强者之に居る。故に君子は和して流せず、强なるかな矯たり。中立して倚らず、强なるかな矯たり。國道あれば塞を變ぜず、强なるかな矯たり。國道無ければ、死に至るまで變ぜず、强なるかな矯たり。

通釈 子路は孔子の門弟中で勇を好む人であつた。それ故如何なるを强といひますかと孔子に問う

た。孔子がいはれるやう、强には凡そ三種ある。汝の問ふのは、南方の强か　北方の强か、それとも汝が行ふべき强のことであるか。寛緩にして柔和、以て人の及はない者を敎へ、若し或は無道橫逆を以て我を犯す者があつても、之に對して直ちに仕返しをしないで、無道の仕向けを受けて居ることは、忍び難い所を忍ぶのであつて、之は風氣柔弱なる南方人の强とする所である。是れは其の篤實で人情の厚い處が君子の道に似てゐるから、寛厚の君子は之を我が取るべき强い態度として居る。金革を衽とし、戈を枕にして之に安んじ、たとひ戰つて死するも厭ひ悔いる意なきは人の爲し難い所を爲す者で、風氣剛强なる北方の人の强とする所である。是れは血氣の勇にほこる强者の態度である。此の二つは共に汝の務むべき强の道でない。それ故盛德の君子は人と相和するけれども和に流れて節を失ふやうなことは無い。これこそ矯として强い眞の强である。卓然と中立して何れにも偏らず、これこそ矯として强い眞の强である。國家に道が行はれて相當の位置に達しても、未だ其の志を得なかつた時、守つた節操を變じないで、富貴も其の初志を變動することの出來ない態度はこれこそ矯として强い眞の强である。國家に道が行はれず、自分も志を得なくとも、死を守つて道を善くし、たとへ死んでも平生の節操を變せず、勢威も武力も其の節操を屈することの出來ない態度こそ矯として强い眞

の强である。此の四つこそ汝の當に努むべき强の道である。

【語釋】子路（孔子の弟子、仲由で字は子路といふ人で孔子の門人中勇氣を以てすぐれた人である。）○抑（語辭。それとも。）○而（汝と同じ。）○寛柔（寛裕。柔和。）○不報無道（或人が無道横逆の仕向けをしても我は之れに仕かへしをしないことである。）○南方之强（南方は風俗氣象が柔和であるから、忍耐の力が人に勝れてゐるのを强とする。）○衽（しき物にする、しとね。席。）○金革（金は刀劍や斧戈の類、革は甲冑の類。衽金革とは戈を枕にすると同じ意である。）○北方之强（北方は風俗氣象が剛强であるから、勇敢の力が人に勝れるのを强とする。）○和而不流（人と和合の方へ行き過ぎてしまりが無くなり易い。和しても流せずして中を得ることが必要である而の字はシカレドモの意に用ひたのである。和してもしかも流する程に至らぬ意）○矯（强いさま。詩經の泮水といふ詩に矯矯たる虎臣といふ句がある。矯矯は武きさまである。）○塞（ふさがる意。立身して通達する道がふさがつてゐる意に用ひたので、立身して爵位についても、未だ立身しない塞つてゐた時守つた節操の意。）○中立而不倚（中であればかたよらぬ筈であるが、柔弱なる者は必ず何れかに倚り勝ちであるから中立して而かも倚らぬことが必要である。此の而も和而不流の而と同意味に用ひたのである。）

【餘論】君子居之の君子と、故君子和而不流の君子とは内容を異にす、前者は君子長者の謂で、後者は理想的なる君子をいうたのである。南方の强、北方の强、共に子路の學ぶべき所でない。故君子和而不流以下四者の强は子路の當につとむべき强にして此れ則ち中庸の道にかなへる强である。人欲の私に勝つにあらざれば、擇んで守ることは出來ない。孔子が子路に敎へるに血氣の勇氣を抑へて德義の勇氣、卽ち中庸の道にかなつた勇氣を以てしたのである。

右第十章

子曰、素隱行怪、後世有述焉。吾弗爲之矣。君子遵道而行、半塗而廢。吾弗

能已矣。君子依乎中庸、遯世不見知、而不悔。唯聖者能之。

訓讀 子曰く、隱れたるを索め怪しきを行ふは、後世述ぶるあらん。吾は之を爲さず。君子道に遵つて行ひ、半塗にして廢す。吾は已む能はず。君子中庸に依り、世を遯れ知られずして悔いず、唯聖者のみ之を能くす。

通釋 子曰く、暗く隱れてをつて偏つてゐる理を探し求め、人の知ることの出來ない所を知らんとし、或は怪異のことを行つて、人の行ふことの出來ぬ所を行はんことを求めるのは、世人を欺いて虛名を博することがあるから、後世或は之を本として述べる者もあるであらう。然しながら自分は斷じて之を爲ない。學んで君子とならうとする人であつて、能く善を擇ぶことが出來て、道に從つて行つても、力足らず、志堅からずして中途で道を行ふことを廢止する者があるが、自分は中途でやむことは出來ない。中途で道を行ふことを廢止する者は、知は眞の知ならず、行は眞の仁ならず、強は眞の勇ならざるを以てゞある。徳の成就した君子は中庸に依つて行ひ、決して過ぎたり又足らないことがなく、自然、世間から認められる事がなく、人に自己の才能を知られなくとも少しも怨み悔いるこ

とはない。かくの如きはたゞ聖人だけが之を能くすることが出來るものである。これ中庸の德の成就したもので、知盡き、仁至り、勇に賴らずして裕如たる者である。

語釋 素隱（朱子の說に從ふ。素の字は漢書の藝文志をしらべると索の字になつてゐる。思ふに字が似てゐるから誤つたのであらうといつてゐる。此の索は求めるである。索隱は隱暗であつてかたよつた理を探し求めることである。人の知り難いやうなことも求める者であつて知者が中庸を失つて過ぎたものである。）○行怪（怪しく事かはりたる事を行ふ事。人の行ふ事の出來ぬ所を行はんとするもので、所謂賢者のやり過ぎる事をさしていふ。）○述（祖述する意味で、其の事を本としておし廣めて稱述すること。）○君子（君子遵道の君子は學問をする人を指し、君子依乎中庸の君子は德の高い人を指す。兩者程度の異つたものとして讀まねばならぬ。）○半塗而廢（中途でよすこと。愚者や不肖者は至るべき所まで至るに及ばないで、擇んで守ることが出來ないもの。）○遯世不見知而不悔（遯は避と異る。避くる者は必ず隱れる。遯とは必ずしも隱れない。君子に中庸の德があつて世人は之と相對して居ても其の德を認めず知らず。其の君子を敬ひ親むことがない。不悔は不慍とは異る。慍は己を是として人を非とする意あり、悔は人に徇つて己を忘れる意あり。不慍は自ら反省する至極であり、不悔は自ら信ずるの至である。）○唯聖者能之（之は上二句を指していふ。能く常に中庸に依つて悔いないことである。）

餘論 子思が孔子の言を引いて、首章の意義を明かにする所は此處までゞある。思ふに此の篇の要旨は知仁勇の三達德を以て道に入るの門として說いて居る。それ故に首に於て大舜・顏淵・子路の事をいうて、之を明かにしたのである。舜は知である。顏淵は仁である。子路は勇である。三つの者の中、その一つを缺けば、道に至り、德を成就することは出來ない。詳しくは第二十章に見えて居る。

右第十一章

君子之道費而隱。夫婦之愚、可以與知焉。及其至也、雖聖人亦有所不知焉。夫婦之不肖、可以能行焉。及其至也、雖聖人亦有所不能焉。天地之大也、人猶有所憾。故君子語大、天下莫能載焉。語小天下莫能破焉。詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵。言其上下察也。君子之道、造端乎夫婦。及其至也察乎天地。

訓讀　君子の道は費にして隱なり。夫婦の愚も以て與かり知るべし。其の至れるに及んでは、聖人と雖も亦知らざる所あり。夫婦の不肖も以て能く行ふべし。其の至れるに及んでは聖人と雖も、亦能くせざる所あり。天地の大なるも、人猶憾む所あり。故に君子大を語れば、天下能く載する莫し。小を語れば天下能く破る莫し。詩に云く鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍ると。其の上下に察はるゝを言ふなり。君子の道は端を夫婦に造す。其の至れるに及んでは天地に察はる。

通釋　君子の道は其のはたらきが廣く且つ大であつて人々が日々に行つてゐる所、其の他一切のこ

と皆此の道に外ならぬのである。而も道そのものは微妙で容易には知り難く能くし難いものである。道の一端、其の手がゝりとなる手近い所は無知の夫婦でも之を知ることが出來るが、その一切を盡くすことは、たとへ聖人でも之を知らない所がある。極卑近なことは無知の夫婦でも之を實行することが出來るが、その一切を盡くすことは、たとへ聖人でも之を行ふことは出來ぬ所がある。獨り聖人ばかりでなく、天地の大なるも、時には風雨寒暑の宜しきを失ふことがあつて盡く人の望む通りにはならず、人々之を不滿に思ふこともある。即ち道は凡人とても之を知り之を行ふことが出來ると共に、聖人、天地とても之を盡くすことは出來ぬもので、道は至る所、如何なる所として存在して居らぬ所は無いことは明かであらう。故に君子の道について其の大なる方面をいへば、道より大なるものは無いから、之を載せる程のものは無く、其の小なる方面からいへば、之より小なるものは無いから、之を分解し剖析することは出來ない。道のはたらきは此のやうに廣大であるから費といつてよからう。而も微妙で知り易く無くて、見難いもの故、隱といつてよからう。詩經の大雅の旱麓篇に鳶飛んで天に戾り、魚淵に躍るといふ句がある、鳶が飛び、魚が躍るのは皆道の作用に出るので、鳶が飛ぶのは道が上天に著はるゝもの、魚が躍るのは道が下地に著はれるのである。鳶飛び魚躍るのも皆道のはたらき

で無いものはない。道の費なることは此の詩の句を見ても明かであるが、その然る譯は見聞の及ばない所もあるので、即ち隱である。之を要するに君子の道は其の端緒を無知な夫婦から始めて、之を推し極めてその全體を求めれば天地に著見するものである。

語釋 費而隱（費は費用の費、同じ意。用の廣いことである。道の作用が廣大なことで、例へば人々が日々する所のこまごましたこと其の他一切のこと皆道に外ならないといふ。隱は隱微の意、幽微の微、有様の微なることである。道のありさまは微妙で知り難い事。前にあった素隱の隱とは意味が異ってゐる。素隱の隱は隱僻で無用のこと、費隱の隱は道の微妙で知り易くないこと。朱子曰く、其の大、外なく、其の小内なし。費といふ可しと。其の大外なしとは外面の周偏を謂ひ、其の小内なしとは裏面の微密をいふのである。費而隱の而は費と相對してゐる事柄を結ぶ語でシカレドモの意である。龜井昭陽は、上に素隱と曰ひ、此に以て君子の道を稱す。是れ古文なりといってゐる。古文は文字の使ひ方が、かくの如く遠慮なく自由であるといふのである。）○夫婦之愚（愚かな夫婦の意で、世間普通の夫婦は無知なものが多いから單に夫婦といふて無知の者を指すこともある。支那では庶人とて位につかない一般人の一夫一婦即ち匹夫匹婦で無知の者が多い所から無知の者を含むやうになったのである。）○其至（至極、又は極致の意ではなくて、ここでは一切を盡す意に解するがよい。）○雖聖人亦有所不知焉、雖聖人亦有所不能焉（至妙の處を聖人が知ること能はず、能くすること能はずといふのではない。天地の間には固より緊固ならざることもあるから、それ等のことは聖人も盡くは知り盡くは行ふ能はずといふのである。）○不肖（愚と同じ。人は天の生ずる所で完全であるべき筈であるのに、其の天に似ないといふ意。肖は似てである。）○有所憾（不滿に思ふ所がある。蘇東坡の泗州僧伽塔の詩に出る。耕す者は雨を欲し、刈る者は晴を欲す。去る者は順風を得て、來る者は怨む。若し人々をして禱て輙ち遂げしめば、造物應に須らく日に千變すべしと曰ってゐる。天は公平無私であるが、萬遍なく行き届かない所無く滿足せしめることは出來ないことを言つたためので、よく憾む所有りの意を述べてある。）○君子語大莫載云々（君子の道についてその大なる方面に就いていへば、之を載せる程のもの、即ち之より大なるものはなく、又小なる方面に就いていへば、之を割することの出來ないもので、之より小なるものはない。要するに道が普遍的であって、如何なる所にも、如何なるものにも在らざるなきを言つたのである。）○察（あらはるること。著の字の意。）○詩云鳶飛戻天、魚躍于淵（此の詩の句は詩經の大雅の旱麓篇にある。此の詩を引いて道の行はるることは上にも下にも明かなもので、すべて道の作用でないものは無いことを明かにしたのである。即ち道がすべてに行きわたってゐることを痛切に、生き生きとした生命のあるものとして人に敎へる爲めに引いたのである。鳶が天に飛ぶのも、魚が淵に躍るのも道の作用であるといふのである。其の飛ぶも、其の躍るも、各々其の性に順ふのであるから、當然であり、自然であって、皆道の作用でないものはない。佛敎の方では柳は緑、花は紅といふのと同じ。柳が緑で、花が紅なのも道の作用といふのである。）

【餘論】夫婦の愚不肖も知ることが出來、行ふことが出來るといふのを朱子の註には「夫婦居レ室」と解してゐる。男女が夫婦となつて一緒に室に居ることは極めて平凡で普通の事であるが、而も夫婦の生活は自ら造化の流行發育の道が行はれるので道の作用は此中に在るのである。史伯璿は更に之を詳論して男女精を構へて形交はり氣感ず、鄙褻道ふに足らざるがごとしと雖も、然れども眞精妙合、自から是れ造化の流行、發育生々不窮の蘊奥と云つてゐる。

鳶飛魚躍は程子の說に、此の一節は子思喫緊の人の爲めにする處、活潑潑地とある。喫緊とは痛切の意、活潑潑地とは生き生きとした生命ある意、吾人の見る所の森羅萬象、一として道の表現でないものはない意である。

右第十二章。子思之言。蓋以申明首章道不可離之意也。其下八章、雜引孔子之言、以明之。

【訓讀】右第十二章。子思の言なり。蓋し以て首章の道は離る可からざるの意を申明するなり。其の下八章は孔子の言を雜引して以て之を明かにす。

通釋 右第十二章は子思が述べた言である。思ふに之れは首章の道は離るべからずと云ふ意味を重ねて明かにしたのである。其の以下八章は孔子の言を雜へ引いて以て之を明かにしたのである。

子曰、道不遠人。人之爲道而遠人、不可以爲道。詩云、伐柯伐柯、其則不遠。執柯以伐柯、睨而視之、猶以爲遠。故君子以人治人、改而止。忠恕違道不遠。施諸己而不願、亦勿施於人。

訓讀 子曰く、道は人に遠からず。人の道を爲して人に遠きは、以て道と爲す可からず。詩に云く柯を伐り柯を伐る、其の則遠からずと、柯を執つて以て柯を伐り、睨して之を視て猶以て遠しと爲す。故に君子は人を以て人を治め、改めて止む。忠恕道を違ること遠からず、諸を己に施して願はざれば、亦人に施す勿れ。

通釋 子曰く、道は天性に從ふもので、人々が日常行ふことに外ならぬ。それ故に常に人に遠からぬものである。若し道を行ふ者、道の卑近であることを厭うて爲すに足らぬとし、反つて務めて高

遠にして行ひ難いことを爲せば、それは以て道とすることは出來ぬ。詩經豳風伐柯の篇に云く「斧の柄を伐り、斧の柄を伐るには、その法則とすべきものは遠くはない、近くにある」とあるが、如何にも尤の言で、斧の柄を執り持つて、木を伐つて以て斧の柄を造るには、今伐つて造らうとする斧の柄の長短の手本は其の持つてゐる斧の柄に在る。手の内の斧の柄をながし目に見れば長短の手本は分明であるが、それでも彼と此との別があるので、矢張り遠いといはねばならぬ。それ故、君子が人を治めるには、即ち人の道を以て其人を治め、その人が改めればそのまゝやめて治めず、それ以上の高遠にして行ひ難いことをしない。蓋し、其の人を責むるに其の能く知り、能く行ふ所の手近かな道を以てし、人に遠く高いものを以て道とせんことを欲するのでない。道は決して人に遠いものではないからである。かくの如く己の眞心より發して、思ひやり深い行爲、即ち忠恕の道はまだ道そのものではないが、道を去ること遠くはないものである。己の心を以て人の心を推し度れば、大抵同じことである。そこで人若し無理な事を以て自分に對して施し行ふとき、自分は之れを願はしからぬこと、厭はしいことであると思つたならば、亦同じ無理なことを他人に對して仕向けてはならぬ。即ちこれが忠恕の道であつて、道の人に遠からざることは推して知るべきであらう。

語釋 柯（音カ、斧の柄である。）○則（法則である。）○睨（斜視であって、にらんで見當をつけること。）○忠恕（程子は、己を盡くす之を忠といひ、己を推す之を恕といふと解してゐるのは適切な語である。自己の眞心をつくすを忠といひ、己を推して人に及ぼすを恕といふのである。）○違（去るとよむ。）

餘論 朱子曰く、子曰道不遠人、人之爲道而遠人、不可以爲道の三句は是れ一章の綱、下面三節は只是れ三句を解く。然れども緊要の處、又、道不遠人の一句に在りと。まことに道不遠人の一句はこの一章の主腦であつて、道の用は費なるを申ねて明かにしたのである。伐レ柯伐レ柯、其則不レ遠とは修養法の如何を暗示したものである。何となれば人の本性は誠で、之に率へば道であるから、道の人に遠からざることは、なほ柯を伐るに其則の遠からざるが如きものであるからである。故に曰く、道不レ遠レ人、人之爲レ道而遠レ人、不レ可ニ以爲ニ道と。道は吾人の本性である。然しながら不肖にして之を知らず。故に或は學んで後始めて之を知り、或は困んで後始めて之を知るのである。其の修養法に就いては中庸は二大綱を掲げてゐる。尊德性と道問學とが即ちそれである。此二大綱は其一を缺いてはならぬ。其一方のみを主張するのは偏見である。此の二大綱の細目については第二十章に論じてゐる。

君子之道四。丘未レ能レ一焉。所レ求ニ乎子、以事レ父、未レ能也。所レ求ニ乎臣、以事レ君、未レ能也。所レ求ニ乎弟、以事レ兄、未レ能也。所レ求ニ乎朋友、先施レ之、未レ能也。庸德之行、庸

言之謹、有所不足、不敢不勉、有餘不敢盡、言顧行、行顧言、君子胡不慥慥爾。

訓讀 君子の道四、丘未だ一を能くせず。子に求むる所、以て父に事ふるは、未だ能くせざるなり。臣に求むる所、以て君に事ふるは未だ能くせざるなり、弟に求むる所、以て兄に事ふるは、未だ能くせざるなり。朋友に求むる所、先づ之を施すは、未だ能くせざるなり、庸徳を之行ひ、庸言を之謹み、足らざる所あれば、敢て勉めずんばあらず、餘あれば敢て盡さず、言は行を顧み、行は言を顧る、君子胡ぞ慥々爾たらざらん。

通釋 君子の道は四つあるが、孔丘自分は未だその一をも能くすることが出來ぬ。第一には我が子に對してかくもあつてほしいと望む所を以て、我が父に事へまつることは未だ之を能くすることが出來ぬ。第二には我が召し使ふ臣に對してかくもあつてほしいと望む所を以て我が君に事へまつることは、未だ之を能くすることが出來ぬ。第三には我が弟に對してかくもあつてほしいと望む所を以て、我が兄に事へることは、未だ之を能くすることが出來ぬ。第四には我が朋友に對してかくもあつてほ

しいと望む所を以て、自身の方から先に朋友に對して之を仕向けることは未だ之を能くすることが出來ぬ。即ち四ケ條とも之を能くすることが出來ぬが、君子たる者は別に非常なことを言ひ、又は行ふものではなく、唯日常爲すべき德を實行し、日常言ふべき事を謹みて言ひ、我が德行不十分なる所があれば、勉めて之を實行するやうにし、若し言語餘りあれば之を言ひ盡くさぬやうに成るべく口數を少くし、我が言ふことは果して實行することが出來るか否かと顧みるから、言ひ過ぎることなく、我が行は平素の言に適うてをるか否かと顧みるから、行の足らないことはない。常に此樣に努力する所の君子はどうして慥々爾として篤實でないことがあらう。

語釋 丘（孔子の名。）○求（猶ほ責むといふがごとし。）○庸德（庸は中庸の庸と同じく平常の意。何事も非常なることはなく、日常なすべき德を庸德といふ。）○庸言（平常普通で、何事も非凡のことなき詞。）○謹（言を口より出すに其の可なるものを擇ぶこと。）○所不足（德行は常に足らぬものである。）○有餘（言語は常に餘あるものだ、兎角言ひ過しがちなものであるから、餘りありといつたのである。）○顧（言と行とを見合せて、言行兩者釣り合ふやうにすることである。顧は思する意、言と行と相照する意である。人の言は常に餘あり。行は常に足らぬものである。それ故言うて行を顧みれば言の餘あるものは之を損じて口數をなくし言を謹むことになる。行うて言を顧みれば、行の足らぬ點は自ら勉めなければならぬ。）○胡不慥慥爾（慥慥爾は篤實のさま。まことあるさま。君子の言行は以上の如し、豈に慥慥爾ならざらんやと之を賛美したのである。）

餘說 道は人に遠からずとは第十二章の夫婦の愚なる者でも能くすることが出來ることをいつたのであり、丘未だ一を能くせずとは、聖人でも能くすることが出來ぬといふので、第十二章の費といふ

意である。而して其のわけは則ち隱である。

右第十三章

君子素其位而行、不願乎其外。素富貴行乎富貴、素貧賤行乎貧賤、素夷狄行乎夷狄、素患難行乎患難。君子無入而不自得焉。

訓讀 君子其の位に素して行ひ、其外を願はず。富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ふ、君子入るとして自得せざる無し。

通釋 君子とて德のある者は其の位置境遇を自分の本來の持ち前と心得て、其位置境遇に適當な行爲をなして其の外を願ふ心はないものである。若し順境にあつて、家富み位貴い時には、敢へて驕りたかぶることなく、又放縱に流れることもなく、富貴なるものゝ行ふべき道を行ひ、若し逆境に在つて家貧しく位賤しい時には、敢へて諂ふことなく、又卑屈に陷らず、貧賤の者として努力すべき道をつとめ、夷狄の未開の國に在つては、其の風俗にも隨ふとも、道を守つて改めず、患難に臨んでは恐れず憂へず、節を守つて變じないやうに、夫れ〴〵其の位置境遇に適當な行爲をするが故に、

君子は如何なる境遇に入るも少しも不平や不滿の念を起すことなく、悠々自適するものである。

【語釋】 素（素といふ字は故の字と同意で、もとより然りとする意である。游定夫の説に、其の位に素して行ふことは、其の位に因いて道其の中に行はれる事もとより然るがごとくであるといひ、又饒氏の説に君子は其の位に居り、固より之を有するがごとくに、位を出づる思の無いのが、其の位に素するのである。といふのがよいと思ふ。朱註には素は見在の如しといつてあるのは當らないやうに思ふ。） ○自得（不平不滿なく自ら適に一なつて、悠々自適すること）

在₂上位₁不ㇾ陵ㇾ下、在₂下位₁不ㇾ援ㇾ上、正ㇾ己而不ㇾ求₂於人₁則無ㇾ怨。上不ㇾ怨ㇾ天、下不ㇾ尤ㇾ人、故君子居ㇾ易以俟ㇾ命。小人行ㇾ險以徼ㇾ幸。子曰、射有ㇾ似₂乎君子₁。失₂諸正鵠₁、反求₂諸其身₁。

【訓讀】 上位に在つては下を陵かず、下位に在つては上を援かず、己を正しうして人に求めずんば則ち怨無し、上天を怨みず、下人を尤めず、故に君子は易に居て以て命を俟つ。小人は險を行うて以て幸を徼む。子曰く射は君子に似たる有り。諸を正鵠に失ひて諸を其の身に反求すと。

【通釋】 上位に在るときは下の者を陵ぎ辱しめることなく、下位に在るときは上の者によりすがつて出世を求めることなく、我身を正しうして他人に求めることが無ければ得ずとも自然に人を怨むこともない。上は天を怨む心なく、下は人を尤める心がなく、君子は胸中灑落としてさつぱりしてゐる。

即ち其の外を願ふ心がない。故に君子は平易な所に居り、其の位に相應した行爲をして以て天命の至るを待つて其の外を願はない。小人は之に反して身分不相應に無理危險なことを行ひ、如何にもして僥倖を得たいと願ひ求める。孔子のいふやう、弓を射る道は君子に似た所がある。矢を射放つて的の星を射はづしたときには、姿勢が惡るかつたか、引きが足らぬか、放れが惡るかつたか何處か惡るくて中らなかつたかと、中らぬ譯を自分に立反つて省み求める。そこが君子の己の正しくして人に求めぬ所と似て居ると。君子は如何にも此のやうに、其の位に素して行ひ、外を願はぬものでなければならぬ。

語釋　陵（シノグとよむ。陵辱すること。）○援（ヒクと讀む。よりすがつて出世を求めること。攀援の援である。陵、援ともに己を正しうせずして、人に求むるものである。）○居易俟命（易は平易である。命は天命である。易に居るは位に素して行ふこと、命を俟つは即ち外を願はぬことである。）○行險徼幸（險は險阻、無理なこと。幸は僥倖でまぐれさいはひ。得べからずして得るもの。徼は求むとよむ。險を行ふは位に素するの反對、幸を徼むるは外を願はざるの反對である。）○正鵠（的のホシの事。鄭玄の説に布に畫くを正といひ、皮に棲ましむるを鵠といふとある。布を張つて的とし、それにホシを畫いたのを正といつて大 の時之を用ひる。熊虎豹等の皮を張つて的とし、それにホシを畫いたのを鵠といひ、大射の時用ひる、正は鵶と同じく鳥の類。鵠は雉の類。共に鳥の名。中り難いから射る者之を以て的とすといふ先儒の解釋もあるけれども、古代に於て射を以て禽獸を捕へた遺風かと思はれる。然るに鳥の中で必ず正鵠の二つを取つて的とする譯は、鄭玄の説に正は正、鵠は梏に通じ、梏は直である。人正直であれば乃能く中るとある。射は以て德を觀るものであるから、このやうに正直に因んで正鵠を用ひるのである。）

餘論　第三十二章に、唯々天下の至誠、よく天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地の化育

を知ることを爲すと云つてゐる。至誠の大德ある者は必ず位を得て、天下を經綸するといふのは儒教古來の天人思想である。然しながらこれは理想であつて、實際は必ずしもこの通りにはならぬ。孔子の如き至聖もその位を得なかつたのである。それ故に此の章に於ては君子は其の位に素して行ひ、其の外を願はずと云々といつて理想の實現せざるときに當つて、安心立命すべきを說いたのである。

此の章は子思の言である。以下凡そ章のはじめに子曰の字がないものは皆子思の言である。

右第十四章

君子之道、辟如行遠必自邇、辟如登高必自卑。詩曰、妻子好合、如鼓琴瑟。兄弟既翕、和樂且耽。宜爾室家、樂爾妻帑。子曰、父母其順矣乎。

口譯 君子の道は辟へば遠きに行くに必ず邇き自りするが如く、高きに登るに必ず卑き自りするが如し。詩に曰く、妻子好合し、琴瑟を鼓するが如し。兄弟既に翕ひ、和樂して且つ耽む。爾の室家に宜しく、爾の妻帑を樂ましむと。子曰く、父母は其れ順なるかと。

【通釋】君子の行ふべき道は、之を譬へてみれば遠方に行くには必ず近い所から發足するやうなものであり、又之を譬へてみれば高い所へ登るには必ずひくい所から出發するやうなものである。其の意味をのべたものが詩經にも見えてゐる。詩經の小雅の棠棣の篇にいふには、人もし其の家庭に在つて妻子睦じく、琴と瑟とを合奏して調子がよく和合するやうなれば、兄弟の仲も亦打ち和いで樂しく、汝の家内一族悉く仲睦じく樂しく其の日、其の日を過ごすとあるが、孔子は此の詩を評して、妻子兄弟が此のやうに和合して樂しく其の日を送るならば、その家庭の父母たる人は大に滿足して樂しく思はれるであらうといはれた。即ち君子の道は近く家庭に於て妻子睦じく兄弟仲よく、父母之れを樂しむに在ることを說いたのである。

【語釋】辟（譬（音ヒ）と同じく、タトヘバと讀む。）〇邇（近と同じ。）〇琴瑟（琴はこと。瑟は琴の大きいもの。琴と瑟とは調子をあはせて合奏するものであるから、琴瑟を鼓すといへば和合の意となる。一家の和合すること。殊に夫婦の間の和合することに用ひる。）〇翕（合ふである）〇耽（たのしむ。樂よりは深いたのしみの意に用ひる。）〇室家（昔は男子三十にて室あり。女子二十歳にて家あり。室家家庭。家族。妻子の意に用ひる。）〇妻帑（妻子と同じ。帑は孥と同じく、子孫のこと。）〇順（悅樂、安樂の謂ひである。）

【餘論】詩經の大雅の思齊篇には刑二于寡妻一、至二于兄弟一、以御二于家邦一、とあつて、詩の意味は中庸に引いてあるのと同じい。妻子から始め、兄弟にいたり、父母も亦順にして、遂に天下をも平かに治める

ことが出來るといふのである。君子の道は遠きに行くには必ず手近かの所から始まるの意を明かにする爲め引いたのである。第十三章には道人に遠からず云々といひ、此章に至つて君子の道は譬へば遠きに行くに必ず邇きよりするがごとし云々といふ。こは歩一歩と漸々緊切なる述べ方といふべきである。

右第十五章

子曰、鬼神之爲レ德、其盛矣乎。視レ之而弗レ見、聽レ之而弗レ聞、體レ物而不レ可レ遺、使下天下之人、齊明盛服、以承中祭祀上、洋洋乎如レ在二其上一、如レ在二其左右一。詩曰、神之格思、不レ可レ度思、矧可レ射思。夫微之顯、誠之不レ可レ揜、如レ此夫。

【訓】子曰く、鬼神の德たる、其れ盛なるかな。之を視れども見えず、之を聽けども聞えず、物を體して遺す可からず、天下の人をして齊明盛服して、以て祭祀を承けしめ。洋洋乎として其の上に在るが如く、其の左右に在るが如し。詩に曰く、神の格る、度る可からず、矧んや射ふ可けんやと。夫

れ微の顯にして、誠の揜ふ可からざる此の如き夫。

通釋 孔子がいふやう、鬼神の德といふものは實に盛大なるものである。其の形がないから之を視ようとしても見えず、聲がないから之を聽かうとしても聞えないが、萬物は鬼神のお蔭で生れ、其の形體を得たもので、宇宙間の物、一物として然らざるものはない。天下の人をして精進潔齋して禮服を著け、畏み敬ひて以て祭祀を奉じ行はしめ、祭祀の時には鬼神が洋々と流れ動き充ち滿ちて、彷彿として人の眞上に在すがやうに、或は人の左右に在すがやうな感を抱かしめる。詩經の大雅の抑の篇にいふやう、神の來るのはいつ何時であるか、視ようとても見えず聽かうとしても聞えないから測り知ることも出來ぬ。まして況んや如何して心怠つて之を厭うて敬せないことが出來ようやと。微で隱れて居ることも顯著になり、誠の蔽ひかくすことの出來ぬことは此の通りである。即ち鬼神は見ることも聞くことも出來ぬ微なるものであるが、一切のもの現に鬼神によつて出來てゐる點からいへば、實に顯著なるものといはねばならぬ。誠は鬼神の德であるが、吾人が誠敬の心で之に事へれば、其の上に在すやうに其の左右に在すやうに感ずるのは、即ちその蔽ふことの出來ぬものといはねばならぬ。

語釋 鬼神（分けていへば天神・地祇・人鬼といふ。神はアマツカミ、祇はクニツカミ、鬼は靈魂をいふ。合せていへば凡てこれを鬼神といふ。即ち鬼神とは古人の祭る所のカミをいふのである。古今集の序文には目に見えぬおにがみをもあはれと思はせとうたつてゐるか、おにがみは即ちこの鬼神である。宋の時代の儒者は、鬼神を哲學的に解して鬼神は天のはたらきで造化の迹である（程伊川）ともいひ、或は鬼神は二氣の良能、即ち陰陽二氣の先天的能力である（張横渠）ともいうてゐるが、しかし中庸の大は宗教的の神であり、鬼神も亦當然宗教的に解せねばならぬ。宋の儒者が哲學的に解したのは大に哲學的に解した宋儒として當然のことであらうか、ここの解釋としては誤であらう。）○爲德（性情功效たるといふ意。性情は其の體をいひ、功效は其の用をいふ。鬼神のはたらきが用にあらはれることをいふ。）○體物（物は神によつて其の形體を得るものである。それ故に物を體するといつたのである。萬物皆天から生れる。萬物は皆神の生む所であるといふ意。）○不可遺（一つとして其の例に洩れぬこと。）○齊明盛服（齊は齋戒の齋と同じく、ひとしうすといふ意で、心意の齊しくないのをととのへひとしくすること。明は潔の意、盛服は禮服を着けること、四字で、ものいみして身心を清め、みなりをととのへかざること。）○洋洋乎（流動充滿のさま。廣大のさま。）○格（來るとよむ。）○矧（況と同じ。）○射（斁の假字で音はエキ、厭ふとよむ。）○思（詩の三つの思の字は何れも助辭であるから、よまないのである。）○誠（誠は天の道、鬼神の道である。朱註に眞實無妄の意味とある。）○揜（蔽ひかくす。）

餘論 此の章は凡そ五節として見ることが出來る。首節の鬼神之爲レ德其盛矣乎は一章の冒頭で、鬼神の盛なるを歎じたのである。次節の視レ之而弗レ見、聽レ之而弗レ聞、體レ物不レ可レ遺は鬼神の德の盛なるを見はした者である。三節の使天下人から如在其左右迄は鬼神の德の盛なるを驗し、祭祀の一端を擧げて證としたのである。首節の鬼神は全體からいつたのであるが、三節は鬼神の中にて祭るべき鬼神を抽出して云つたのである。蓋し、見易いものをあげて驗としたのである。天子が天地を祭り、諸侯が社稷を祭り、大夫が五祀を祭り、士が其の先祖を祭るの類で、正に祭るべき者に隨つて誠敬以て自家の精神を集めれば、彼の精神も亦來り、洋洋として動き、充滿して神の在すが如くに感ずるので

ある。四節の詩は鬼神の德の盛なるを引證したのである。末節の夫微之顯云々は之を誠に歸して其の盛なる所以を結んだのである。伊藤仁齋は此の章以下を中庸の本文でないといひ、特に此の章が鬼神を論じてゐるのは孔子の語でないといひ、又此の節は上に承ける所がなく、下を起す所がないと論じてゐるが、それには贊成が出來ない。唐の孔穎達が此の一節は鬼神の道は無形で能く顯著誠信であつて、中庸の道は鬼神の道と相似て、亦微から著に至り、言はなくとも自ら誠であることを明かにしたものであるといつてゐるのは、よく此の章の意義を明かにしたものである。又龜井昭陽が「微之顯」は第一章の文から取つたものであるし、誠は下の章で誠をいふまへおきとしていつたので其の文義が備はつてゐると論じたのは、仁齋の誤を解くに十分であるであらう。

見えず聞えずは隱であり、物を體すと在すが如きとは費である。比較的にいへば此の前の三章は費の小なるもの、此の後の三章は費の大なるものであるが、此の章は費隱小大を兼ねて言つたものと見ることが出來る。

右第十六章

子曰、舜其大孝也與。德爲聖人、尊爲天子、富有四海之内、宗廟饗之、子孫保之。

讀方 子曰く、舜は其れ大孝なるか。德は聖人たり、尊は天子たり、富は四海の內を有ち、宗廟之を饗け、子孫之を保つ。

通釋 孔子いふやう、舜はそれ大孝というてよからう。その德をいへば聖人である。乃ちよく親を顯はすことができる。その尊きことをいへば天子である。乃ちよく親を尊ぶことが出來る。其の富をいへば四海の內を有つて、天下に悉く我が所有である。乃ちよく親を養ふことが出來る。上は先祖代代の宗廟は天子としての舜のお祭を饗けて、先祖までも顯はれた。乃ち宗廟が祭を享けたのは、親の爲めに本に報いるの至りである。下は舜の子孫の虞の君思や陳の胡公の屬の如きは諸侯の祿位を保つて、永く恩澤餘慶を受けることが出來た。乃ち親の爲めに裕を垂るるの至りである。凡て善良なる子があれば親たる者は非常に滿足するのである。而して親を滿足せしめることは子としては孝である。舜の福德圓滿なことは此の通りで、親の喜悅はいかばかりであらう。舜の如きは眞に大孝といふべき

である。

【語釋】四海之內（海內といひ、天下といふと同じ。）○宗廟（先祖を祭る廟、オタマヤ。）○子孫（舜の子孫で、舜の大德の餘慶を受けて世に顯はれたものは、夏后氏の時、虞の君名は思といふ者があつて、夏后少康が出奔した時、之に妻はすに二女を以てし、後少康が帝位に復して虞の思も尊信せられた。又周の時には陳の胡公があつた。武王の長女大姬を娶つて陳に封ぜられた。）

【餘論】眞西山がいふには、舜は聖德を以て尊位に居り、其の福祿・上は宗廟に及び、下は子孫に延く、これ大孝たる所以である。舜の知る所は孝のみ・祿位名壽は天が實に命じたので、舜が之を得ようと思つたのではないと。此の說の通りで、舜は專心に大孝を行つただけである。祿位は自然の結果として大孝に作つてきたのである。舜が祿位を得んが爲めに大孝を行つたのでないことは眞西山の說の通りである。

故大德必得其位、必得其祿、必得其名、必得其壽。故天之生物、必因其材而篤焉。故栽者培之、傾者覆之。詩曰、嘉樂君子、憲憲令德。宜民宜人、受祿于天。保佑命之、自天申之。故大德者必受命。

【訓讀】故に大德は必ず其の位を得、必ず其の祿を得、必ず其の名を得、必ず其の壽を得。故に天の

物を生ずる、必ず其の材に因つて篤うす。故に栽ゑたる者は之を培ひ、傾く者は之を覆へす、詩に曰く、嘉樂の君子、憲憲たる令德あり、民に宜しく人に宜しく、祿を天に受く。保佑して之に命ず、天より之を申ぬと。故に大德は必ず命を受く。

通釋 それ故に大德ある者は必ずその位を得、必ずその祿利を得、必ずその名譽を得、必ずその壽命を得るもので、舜の如きは聖人の大德あるが故に、位は天子であり、富は四海を有ち、令名永く後世に及び、その壽命も百十歳の高年であつた。それ故天が物を生ずるのは、必ずその物の性質もちまへによつて夫れ夫れ其の性質を發揮せしめるものである。それ故に栽ゑたものは次第に生長するものであるから、之を培養し育てて生長するやうにし、又若しも傾き仆れるやうなものならば之を顚覆するやうにする。天はもと公平無私であつて、生長するものは之を培養すると、傾き仆れるものは之を顚覆するとは、その物自身で夫れ夫れ取る處の運命である。詩の大雅假樂の篇に曰く、嘉すべく樂むべき君子は盛なる美德があつて、民にも宜しく人にも宜しく、遂に天が寵愛し眷顧する所となつて天からの福祿を受ける、天は此の君子を保安し佑助し、命じて天子と爲し、又重ねて之を保佑して止まないと。それ故に大德ある者は必ず天命を受けて天子となることは爭ふことの出來ぬ事實である。

語釋 材（材質、即ちタチ、）○篤（厚きなり、加ふなり。）○栽（植ゑるである。根本完固をいふ。）○培（培養すること。つちかふ、滋養すること。）○覆（摧敗すること。）○詩（詩經の大雅の假樂の篇。）○嘉樂君子（嘉は善である。樂はたのしむ（よみすべく樂しむべき君子。）○憲憲（興盛のさま。今の詩經には顯々とある。あきらかなさま。）○令德（よき德、）○申（重ねる。）○受命（天命を受けて天子となること。）

餘論 此の章は庸行の常から之を推して其の至極の所まで及んで道の用の廣いことを示してゐる。而して其の然る譯は則ち體の微である。後の二章も亦此の意であると朱熹は說いてゐる。

右第十七章

子曰、無憂者、其惟文王乎。以王季爲父、以武王爲子、父作之、子述之。武王纘大王・王季・文王之緒、壹戎衣而有天下、身不失天下之顯名、尊爲天子、富有四海之內、宗廟饗之、子孫保之。

訓讀 子曰く、憂無き者は其れ惟だ文王か。王季を以て父と爲し、武王を以て子と爲し、父之を作し、子之を述ぶ。武王は大王・王季・文王の緒を纘ぎ、壹たび戎衣して天下を有ち、身天下の顯名を失はず、尊きことは天子爲り、富は四海の內を有ち、宗廟之を饗け、子孫之を保つ。

通釋 子曰く、堯・舜・禹・湯以下、多くの聖人もあるが、心配苦勞の無い聖人はたゞ文王だけであらう。王季のやうな立派な方を父とし、武王のやうな立派な子を持ち、祖父の大王、父の王季は王業を創始し、子の武王・周公旦兄弟は之を敷衍して王業を成したので、父も子も皆德高く、文王の心は何の不足もなく心配もない。武王は大王・王季・文王の建設した王業の緒を受け繼いで、天命を奉じ民心に順ひ、たゞ一度武裝して無道なる殷の紂を伐ち、牧野に戰つて、天下を我が有とした。武王の征誅は天命に順うて人時を行ひ、時の中を得たものであるから、諸侯は悉く歸服し、萬民は悅服し、武王の身は天下の顯著なる美名を失はず、その尊いことは天子となり、その富は四海の内を所有し、上、祖先代々の宗廟は天子の禮によつて祭祀を受け、下、成王・康王以後の子孫は永くその基を守つて天子の位を保つた。

語釋 無憂（鄭康成は「下を治める爲めに憂ひ勤めるものは文王であつて、憂無しは後世の人から文王を見て言うたのであるといつてゐる。（父賢子聖は文王は父に大賢を承けて憂がある者のやうであるが、しかし歷代の聖人の中で父は賢、子は聖であることで、文王のやうな者はない、それ故に文王のみ憂が無いと稱せられるといつてゐるが、よい說と思ふ。）○父作之（朱子は「作とは創始の意味で、つくりはじめることをいつたので、周の王業は文王の祖である大王・王季に創まつてゐる。こゝはたゞ父とあるが、父を以て祖を兼ね含んでゐるのであるといつてゐるが、よい說である。文王が王業を創めたことは詩經の魯頌閟宮の篇に「后稷の孫、實に維れ大王、岐の陽に居り、實に始めて商を翦る」とある。父を以て祖を兼ね含むといへば子を述ぶの子は武王の弟周公旦をも兼ね含むといふがよからう。）○纘（音サン、繼ぐである。）○緒（いとぐち）○戎衣（甲冑の類をさす。武裝することである。一たび戎衣すとは武王が殷を伐つて牧野に戰つたことを指す。）○不失顯名（舜を稱するには必ず其の名を得といひ、武王を稱するには顯名を失はず

といふのは、その間に德を稱するに差別がある。舜は禪讓を受けたからその名を得といひ、武王は殷の紂王を伐つたので他人ならば賊名をもやけなければなゝぬ所であるが、天命を奉じ民心に順つたので、よく名譽を失はなかつたといふのである。）

武王末受命。周公成文武之德、追王大王・王季、上祀先公以天子之禮。斯禮也達乎諸侯大夫及士庶人。父爲大夫、子爲士、葬以大夫、祭以士。父爲士、子爲大夫、葬以士、祭以大夫。期之喪、達乎大夫。三年之喪、達乎天子。父母之喪、無貴賤一也。

訓讀 武王末いて命を受く。周公文武の德を成し、大王・王季を追王し、上、先公を祀るに天子の禮を以てす。斯の禮や諸侯大夫、及び士庶人に達す。父大夫たり、子士たれば、葬るに大夫を以てし、祭るに士を以てす。父士たり、子大夫たれば、葬るに士を以てし、祭るに大夫を以てす。期の喪は大夫に達す。三年の喪は天子に達す。父母の喪は貴賤と無く一なり。

通釋 武王は八十五歲にして紂を伐ち年老いて天命を受けて天子となり、七年にして崩御せられ、未だ天下を治める禮樂を制作するの暇がなかつた。そこで周公は文王・武王の孝德を成し遂げ、大王・

王季に王號を追贈し、上、先公即ち大王の父組紺より先祖后稷までを祀るに天子の禮を以てした。この葬るには死者の爵を以てし、祭るには生者の祿を以てする禮は、諸侯や大夫及び士庶人までも之によりて行ふやうにして、天下の人をして皆その孝心を行はしめる。即ち父が大夫であつて、子が士なれば、父を葬るには大夫の資格を以てし、祭るには士の資格を以てする。又父が士であつて、子が大夫なれば父を葬るには士の資格を以てし、祭るには大夫の資格を以てする。葬るに死者の爵を用ひるは死者をして、其の分に安んずるを得しむるのであり、祭るに生者の祿を以てするのは、生者をして其の情を伸ぶることを得しむるのである。期の喪即ち一年間の喪以下は、天子諸侯は之を服せず、大夫までは期限は少し減ずるけれども、その喪に服するやうにするが、三年の喪は天子までも之を服し、特に三年の喪の中でも最も重い父母の喪は、身分の貴賤尊卑に拘はらず皆同様に之に服するのである。

語釋　末（鄭玄の註に老のごとしとある、老ユとよむ。武王が紂を伐つた時は八十五歳であつた。）○追王（死んでから王號を贈ること。）○先公（鄭玄の註によれば太公の父組紺より以上、后稷までを指す。史記周本紀によれば、后稷・不窋・鞠陶・公劉・慶節・皇僕・差弗・毀隃・公非・高圉・亞圉・公叔祖類の諸侯である。公叔祖類即ち組紺の別名である。）○斯禮（葬は死者の爵に從ひ、祭は生者の祿を以てする禮をいふ。）○達（上より下に至るまで皆然らざるなきこと。）○期之喪（一周年の喪をいふ。期の喪には二種あり。祖父母の爲めにするを正期といひ、伯叔父母、兄弟の爲めにするを旁期といふ。正期は天子諸侯でも凡てその喪に服するけれども、旁期は天子諸侯はその喪に服せず、たゞ大夫はその喪の期限を減じて之に服す。それ故に大夫に達すといふ。）○三年之喪（孔穎達の說に三年の喪、天子に達するは、正統三年喪に在るをいふ。父母及、嫡子と妻とを幷するなり。父母とはいはないで三年といふは、適子をも含むが爲めである。天子は后の爲めには期の喪に服するに、三年といふは、后卒して必ず三年を待つて然る後娶り、子の志

を成すが爲めに、三年の中に入るのであるといつてゐる。天子についていへば其通りであるが、其の外、臣が君の爲めにし、妻が夫の爲めにし、婦が舅姑の爲めにするは皆三年の喪である。三年の喪については鄭玄は二十七ケ月であるといひ、王肅は二十五ケ月であるといひ、二說各々理由があるやうであるが、鄭玄の二十七ケ月を穩當であるとするのが定論である。）

右第十八章

子曰、武王周公、其達孝矣乎。夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也。

訓讀 子曰はく武王・周公は、其れ達孝なるか。夫れ孝は、善く人の志を繼ぎ、善く人の事を述ぶる者なり。

通釋 子曰はく、武王・周公の兄弟はよく自分の親に孝なる心を推して、喪祭の禮を定め、人々をして皆その孝心を盡くすことが出來るやうにしたので、それ達孝の人といふべきであらう。夫れ孝の德とは善く父祖の志の未だ成らぬのを繼ぎ承けて之を成就し、善く父祖の事業の法るべきものは之に從ひ、之を祖述するものである。上章の武王が大王・王季・文王の王業の緒を繼いで以て天下を有ち、周公が父の文王・兄の武王の德を成就せしめ、先祖を追王したのは志を繼ぎ事を成したものゝ最大なるものであり、下文に列記する所も亦武王周公が繼述したことを述べてある。

語釋 達孝（達は通である　朱子の注には天下の人通じて之を孝といふから達孝といふと解してゐるが、それは慥かでない。饒雙峰の説に達孝は上章の二つの達の字を承けて言ふ。其の孝は特に之を家に施すばかりでなく、又よく之を天下に達すしよく吾が親を愛する心を推して、喪祭の禮を制定して、以て上下に通じ、人々をして其の孝を致すことを得しむ。故に之を達孝といふといつてゐる説がよい。徂徠は喪祭の禮を定めこれを諸侯に達す、故に達孝といふと解してゐる。）○繼（繼承する。うけつぐ。）○述（祖述する。敷衍する。）○人（父祖をさす。）

餘論 呂晩村云ふ、武王・周公の繼述については、殷の紂王を伐つたのは繼述の一つに過ぎない。然るに時人專ら殷紂を伐つたことを繼述として論を立てるのは誤りである。此の立論に從へば、たゞに周の先王を以て曹操や司馬懿に等しくするのみならず、併せて武王周公を以て曹丕や司馬炎に擬したことになる。可ならんやと。所謂繼述とは理の當然なるものを以て言うたので殷紂を討つて天下を有つたのは已むことを得ざるの事で、適々時か然るべき時であつたのである。

春秋、脩其祖廟、陳其宗器、設其裳衣、薦其時食。宗廟之禮、所以序昭穆也。序爵所以辨貴賤也。序事所以辨賢也。旅酬下爲上、所以逮賤也。燕毛、所以序齒也。

口譯 春秋に其の祖廟を脩め、其の宗器を陳ね、其の裳衣を設け、其の時食を薦む。宗廟の禮は昭

穆を序する所以なり。爵を序するは貴賤を辨ずる所以なり。事を序するは賢を辨ずる所以なり。旅酬下、上の爲にするは、賤に逮ぶ所以なり。燕毛は齒を序する所以なり。

通釋　春秋（夏冬をも含む。略して春秋といふ）には先祖の御祭をするとて、先づ祖先の廟を修理し掃き淸めて祭に用ひる俎豆等の器具を陳列し、先祖の遺物の衣裳を廟中から取り出して之を一つは尸に着用せしめ、其の他、之を廟中に陳列して神靈をして依る所あらしめ、又は祖先を偲ぶ料ともし、廟の御供物は四時その折々の品物を以てする。宗廟を祭る時の禮は、其の宗廟の順序次第をいへば、太祖の廟は南向きで正面に在り、その左を昭といひ、右を穆といふ。昭は東の方、あかるい方に在る意で名づけ、穆は西の方、くらい方に在る意で名づけたのである。父が昭なら、その子は穆、その孫は又昭といふ順序に祭られてゐる。之を祭る子孫兄弟族人には又、昭穆の順序次第があつて、先祖に對して親疏を次づる制があるから、昭の行に屬する者と穆の行に屬する者と、各〻其の昭穆の順序を正して亂雜にならぬ樣にする譯のものである。祭の時には公卿大夫士の爵位によつて其の順序を立てゝ祭祀を助けしめるのは身分の貴賤を辨別する譯のものである。祭祀の事務の輕重繁簡の次第によつて、夫れ夫れ賢者に用事を命ずるのは、人の賢不肖を辨別する譯のものである。祭祀將に終らん

とするに臨んで神様のお流れを頂戴する禮がある。主人側の人々が先づ一杯を飲んで、客に一杯を勧めるので、この時には祭祀の儀式に直接に關係しなかつた賤者も接待の御加勢をして御流れを頂戴するのは即ち恩惠が賤者にも及ぶ譯のものである。さて祭祀が愈〻終つて尸及び異姓の賓客が皆退出して後、同姓の一族皆集つて宴會が始まる。その時には頭の髪毛の色を見て、白いもの、半白のもの、黒いものを區別して長幼を定めて坐席の順序を定める。故にこれを燕毛といふ。燕毛の禮は即ち年齒を順序立てる譯のものである。

語釋　春秋（祖先の祭は春夏秋冬の四時であるが、春秋の二時を擧げて四時の祭と同じいことを示したのである。）○祖廟（祖先の廟。廟の數は天子は七廟、諸侯は五廟、大夫は三廟、士は一廟である。禮記王制篇に天子は七廟、三昭三穆と太祖の廟とにて七、諸侯は五廟、二昭二穆と太祖の廟とにて五。大夫は三廟、一昭一穆と太祖の廟とにて三。士は一廟とある。なほ廟制については此篇の條で詳説しよう。）○脩（鄭玄曰く、掃糞をいふなりと。掃除することの外修繕することをも含む。）○宗器（鄭玄曰く祭器である。祭つて陳列する簠簋・籩・豆の類をいふ。これ等の祭器を陳するは[illegible]。朱子の注に先世藏する所の重器、周の赤刀、大訓の屬と解するのは當らない。）○裳衣（先祖ののこした衣裳。衣は上衣、裳ははかま。先祖在世の時に使用した衣服は、これを廟中に藏存しておいて、祭の時に之を取り出し、一は之を尸（カタシロ）の者に授け、又其の他は、これを廟中に陳列して御祭をして居る所があるやうにし、又祖先を髣髴とするためとする。尸とは形代（カタシロ）の意で、祖先の名代となるもの。御供物なども祖先の靈が尸に憑り之を享けられるとは信じながら、實際供物が無くなられば、何となく祖先が歆饗にならぬやうにし、尸に祖先の衣を着けしめ、又供物を飲食せしめる。）○時食（春夏秋冬の四時、其の時節のものをいふ。）○昭穆（昭穆に二ある。一は死者宗廟の昭穆で、一は、生者子孫の昭穆である。宗廟の昭穆は太祖の廟は南向きで、正面に在り、その左は昭、右は穆である。昭とは明の意で、其の廟が東にあるから昭と名づけ、穆とは穆々深遠の意で、其の廟が西にあるから穆と名づけたのである。父が昭であれば子は穆であり、父が穆であれば子は昭である。子々孫々、その順序で相承けるので、昭廟が穆廟と離ることもなければ、同じ昭、又は穆の間に祖と孫と順序を亂ることもない。生者の昭穆も同様に、父は昭の行にあれば其の子は穆の行にある。尚、宗廟の制と昭穆とについては、餘論の條で詳説する。）○序爵（爵は公卿大夫

上である。その爵位によつて順序を立て、祭祀を助けしめる。）　○序事（事は祭祀の時の用事。祭祀の用事は、その輕重繁簡の順序を立て、各者にその用事を命ずるので、用事を命ぜられたことが名譽なのである。）　○旅酬（旅は衆と同じ、酬は朱注に導飲とある、旅酬の禮とは祭將に終らうとする時、神様のお流れ頂戴の意味で主人側が先づ一杯を飲んで賓客に杯を勧め、又その杯を受けて之を飲むので主人は二杯飲んで、賓客は一杯飲む。之を導飲といふ。正賓は一名であるが、陪賓は多數ある。主人側も大勢の手助けがあつて、皆それぞれ献酬をする。それ故旅酬といふ。客に酒をすすめる者は主人側であり、客は上であり、主は下である。即ち酬は下が上の爲めに勧めるのである。祭祀の事を直接に務めなかつた者等をも、この際に接待の加勢をさせ御流れを頂戴させるのは即ち恩恵が賤者にも及ぶのである。）　○燕毛（燕は饗宴のことである。祭が終つてから尸（カタシロ）が退出し、異姓の賓客皆退出して後、同姓の者即ち一族の宴會が始まる。その時には毛髪の色を以て長幼の區別を立て坐席の順序を定める故に之を燕毛といふのである。但し、これは只毛色を辨じて、全く年齒を問はないのではない。蓋し毛色は大體年齒と相應するものであるから、燕毛といつて、毛色をいつたのは其の見易いものを擧げたのである。）　○齒（ヨハヒと讀む。齢と同じ。）

餘論　宗廟の字義に就いては釋名に宗は尊なりとあり、廟は貌なり、先祖の形貌の在る所なりとある。宗廟は先祖の靈貌を彷彿して尊崇する所以である。

宗廟の數、及び昭穆については古來議論が多くて千古の聚訟とするところである。就中、鄭玄の天子七廟と、王肅の九廟とが聚訟の歸する所である。禮記王制篇に曰く、

天子七廟。三昭三穆、與二太祖之廟一而七。

諸侯以下は二つゞゝ遞減するので、諸侯は五廟、大夫は三廟、士は一廟、庶人は廟を設けないで寢に祭るのである。今、諸侯以下に就いては措いて論じない。天子七廟については鄭玄は禮記の王制篇に註して曰く、

此周制。七者、大祖及文王・武王之祧、與親廟四。大祖后稷。殷則六廟、契及湯與二昭二穆。夏則五廟。無大祖、禹與二昭二穆而已。

禮記の祭法篇に曰く、

王立七廟、曰考廟、曰王考廟、曰皇考廟、曰顯考廟、曰祖考廟、皆月祭之。遠廟爲祧、有二祧、享嘗乃止。

と。鄭玄は此の文によつて、王制篇の三昭三穆は卽ち文武の二祧と四親廟と解したのである。七廟を周制なりといふ論は、鄭玄に始まつたのでない。馬昭の說に從へば尹更始・韋玄成・石渠論・白虎通及び盧植等の共に承認する所なりといふことである。卽ち周制七廟の說は學界の定說ともいふべきである。然るに王肅は天子七廟とは高祖の父、高祖の祖廟を二祧とし、太祖及び四親廟を併せて七とするといひて聖證論（禮記王制篇疏に引いてゐる。）には鄭玄の說を難じてゐる。乃ち王肅に從へば常制では天子は七廟、諸侯は五廟にして、二つゞゝ降殺するのであるが、周制にあつては七廟の外に文王武王は受命の君であるから、特に永久に之を存して二廟とし、併せて九廟となるとするのである。陳澧の東塾讀書記には明快に之を辯じて其の非を論じてゐる。其の要旨は

天子は文武の二祧あり、諸侯は無し、此れ卽ち降殺である　何ぞ復降殺を求めん。且つ諸侯は五廟であるが、たゞ魯のみ王禮を用ひ、魯公武公の二廟ありて、文武二廟に象りて七廟と爲してゐる。卽ち周の天子七廟は亦文武二廟を幷せて數へたこと明かである。若し王肅の說く九廟とすれば諸侯は五廟だから降殺二とはいへないではないか。

陳氏の說で明ではあるが、古來廟數については議論一定せず、朱子の如きも遂に適歸する所を知らなかつたのである。蓋し書經の咸有一德篇に

嗚呼七世之廟、可ニ以觀一レ德

とあつて、此の篇は商書である。既に七世の廟といへば、天子の七廟を立つるは王者の常禮で、獨り周に至つて始めて七廟を立てたのではないとして決することが出來なかつたのであらうが、今日にあつていへば、咸有一德篇は僞古文であるから何等顧慮する必要はないのである。之を要するに王肅の說が短なることは明白である。

昭穆は（一）宗廟の位置を定める制。（二）祭をする時、族人の親疎を次づる制との二つである。周禮の春官小宗伯に辨ニ廟祧之昭穆一とあり、又、冢人に先王之葬居レ中、以ニ昭穆一爲ニ左右一。とある。これに

よつて昭穆は葬處や宗廟の位置を定める制であることが分る。

周禮の夏官司士に凡祭祀賜レ爵、呼ニ昭穆一而進レ之とあり。禮記の祭統篇には更に詳說して曰く。

凡賜レ爵、昭爲レ一、穆爲レ一。昭與レ昭齒、穆與レ穆齒。凡群有司皆以レ齒。此之謂ニ長幼有一レ序。

夫祭有ニ昭穆一。昭穆者、所下以別ニ父子遠近、長幼親疏之序一、而無上レ亂也。是故有レ事ニ於大廟一、則羣昭羣穆咸在、而不レ失ニ其倫一。此之謂ニ親疏之殺一也。

と、之によつて昭穆は祭をする時、族人の親疏を敍するものであることが分る。即ち宗廟には昭穆の順序があると同時に、之れを祀る子孫兄弟にも昭穆の順序がある。例へば宗廟についていへば、周の文王の廟は穆、其の子の武王の廟は昭、武王の子の成王の廟は穆、成王の子の康王の廟は昭である。之を生者、即ち宗廟を祀る子孫兄弟についていへば、武王・周公等の一行は文の昭、武王の諸子の一行は武の穆、成王の諸子の一行は成の昭、康王の諸子の一行は康の穆といふことになる。宗廟を祀る時の禮は、祀をする子孫兄弟族人、即ち生者の昭穆の順序を亂さぬやうにせねばならぬ。本文に「宗廟之禮、所ニ以序ニ昭穆一也。」とある昭穆は、即ち生者の昭穆いふのであつて、死者の昭穆の如きは、其の廟を立てるの時、既に定まつてゐるから、祀の時になつて、之を序するを要せぬのである。

昭穆の義に就いては決疑要注には

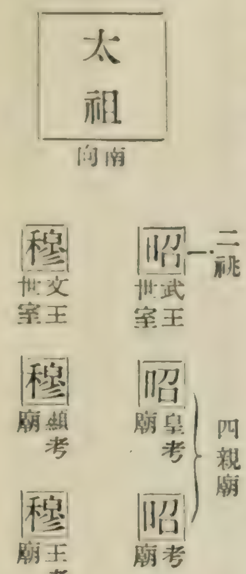
父南面、故曰レ昭、昭明也　子北面、故曰レ穆、穆順也（五禮通考）

といひ、皇侃は論語義疏にて

昭者明也、尊レ父、故曰レ明也。穆敬也、子宜レ敬ニ於父一也。

といつてゐる。然しながら、中央に太祖の廟があり、左を昭とし、右を穆とするものであつて、天皇が新に崩ぜられる毎に、父子の關係は順次に變更するものであるから、父子の關係を以て南面、北面、又は尊父、敬父と固定する譯にはいかない。文獻通考宗廟考の韋元成等の說によれば太祖の廟は北に在りて南向し、昭は東に、穆は西に在る。されば東にあるから昭、即ち陽明の義で名づけ、西に在るから穆、即ち陰幽の義で名づけたのであらう。今圖示すれば次のやうである。

第一圖



禮に五世にして親絶ゆとある。それは親廟は四つに止るのである。若し假りに現在の帝王が崩ぜられゝば、先帝が昭である場合には大行天皇は穆であり、先帝が穆であれば大行天皇は昭であるので、下圖の場合では考廟が昭であれば大行天皇は穆となる譯である。卽ち穆の廟が一つ増加する譯となる。從つて穆（顯考廟）の主を遷して祧の穆卽ち文王廟に入れる。その場合には下圖のやうになる。

第二圖

太祖			
昭	武王 世室	顯考廟	王考廟
穆	文王 世室	皇考廟	考廟

（四親廟）

次に又現在の帝王が崩ずれば、昭廟が一つ増加するので昭（顯考廟）の主を遷して祧の昭、卽ち武王廟に入れる。その場合には第一圖と同じくなる。

踐其位、行其禮、奏其樂、敬其所尊、愛其所親、事死如事生、事亡如事存、孝之至也。郊社之禮、所以事上帝也。宗廟之禮、所以祀乎其先也。明乎郊社

之禮、禘嘗之義、治國、其如示諸掌乎。

訓讀 其の位を踐み、其の禮を行ひ、其の樂を奏し、其の尊ぶ所を敬し、其の親む所を愛し、死に事ふること生に事ふるが如く、亡に事ふること存に事ふるが如きは孝の至なり。郊社の禮は、上帝に事ふる所以なり。宗廟の禮は、其の先を祀る所以なり。郊社の禮、禘嘗の義に明かなれば、國を治むること其れ諸を掌に示すが如きか。

通釋 先王と同じ天子の位を履み、先王の制した禮を行ひ、先王の作つた音樂を奏し、先王の尊んだ所の祖先や賢者を尊敬し、先王の親しんだ所の子孫臣民を親愛して、喪に居る時は死んだ者に事へること生きてゐる者に事へるやうにし、葬祭の時には亡せた者に事へること存生の人に事へるやうにし、善く先王の志を繼ぎ、その事を述べるので、此の如きは實に孝の至極である。天を祭る郊祭、地を祭る社祭は上帝后土に事へる所以である。宗廟の祭はその先祖を祭る所以である。天地を祭る所以の郊社の禮の意味、祖先を祭つて昭穆の順序を審かにする春秋の祭の意義を明かにすれば、國家を治めるのは實に容易のことで、たとへば掌中の物を示すが如きものであらう。此は周公が禮を制し

て文王武王の徳を成就したことを言ひ、以て周公が達孝であることを明かにしたのである。

語釋　踐其位（踐はふむである。其は先王を指す。其禮、其樂、其所尊、其所親の其の字は皆同じく先王を指してゐる。）○所尊所親（朱子の注には先王の祖考、子孫臣民であると說く。尊む所とは祖考で親しむ所とは子孫臣民であると解したのである。龜井昭陽曰く、大學に君子其の賢を賢として其の親を親しむとあり。賢を賢とするは亦尊を敬するなりと。朱註を補ふに足ると思ふ。次に親を親むの殺。賢を尊むの等は禮の生ずる所なりとあるのを以て補つて解くがよい。）○死亡（死は新たに死んだ者をいひ亡は葬つて後をいふ。）○郊社之禮（郊は天即ち上帝を祭り、社は地、即ち后土を祭る。詳しくいへば郊社の禮は上帝后土に事ふる所以なりといふべきに、文には唯々上帝に事ふる所以なりとある。朱註は之を解して、社は地神を祭る、后土を言はないのは文を省いたのであるといつてゐる。朱子の注も此れに從つてゐる。）○禘嘗（禘は種々の意に用ひられる。一は王者がその由つて出づる所、即ち所謂感生帝を祭るもので、王とならなければ禘の祭はせぬとこれを指していふ。其の由り所は喪服小記、大傳の諸篇である、二は宗廟の大祭である。三年の喪が終つた明年、群廟に合祭し、その後五年に一回づゝ行ふ所の祭をいふ。論語の八佾や祭法、仲尼燕居などの諸篇に見えてゐるのがこれである。三は時祭の名で、王制祭統によれば春は礿、夏は禘、秋は嘗、冬は烝といひ、周禮、爾雅によれば春は祠、夏は礿、秋は嘗、冬は烝といふとある。然るに郊特牲祭義によると春禘秋嘗とある。中庸に禘嘗を兼ね稱してあるのは、上文に春秋は其の祖廟を修むとあるのと最も切實の關係があるので、春禘秋嘗と解するのが最も穩當であらう。或る說のやうに禘を大祭と見て、嘗に四時の祭の中、其の一つをあげて禘に混合したと見るのは無理な解釋である。此の禘嘗については古今論者何れとも決しかねて居るが、獨り毛遠宗だけは明瞭に時祭であると斷言してゐるのは卓見であると思ふ。）

右第十九章

哀公問政。子曰、文武之政、布在方策。其人存、則其政擧。其人亡、則其政息。人道敏政、地道敏樹。夫政也者、蒲盧也。故爲政在人。取人以身。修身以道。修道以仁。

【訓讀】哀公政を問ふ。子曰く、文武の政、布いて方策に在り、其の人存すれば即ち其の政擧り、其の人亡すれば則ち其の政息む。人道は政に敏に、地道は樹に敏かなり。夫れ政なるものは蒲盧なり。故に政を爲すは人に在り、人を取るは身を以てし、身を修むるは道を以てし、道を修むるは仁を以てす。

【通釋】魯の哀公が政治の要を孔子に問うた。孔子對へて曰ふ。周の文王武王の行はれた政治の法は、今もなほ歴歴として方策典籍の中に敷き列ねて存して居る。さて文王武王のやうな立派な政治が行はれるか行はれぬかは全く人物があるか無いかに由るのである。よく文王武王の遺した法を運用すべき賢臣があれば其の政治はよく行はれるけれども、其の人が無ければ、其の政治は滅びて行はれない。人の道はもと善を爲すを好むものであるから、之を率ゐるによい政を以てすれば、其の化することの敏速なるとは丁度地に草木を植ゑれば敏速に發育成長するやうなものである。その政治が滅息して行はれないのは、たゞ人物がない爲めである。夫れ政治は丁度蒲盧が桑蟲の子を取つて之を變化して己の子と爲すやうに、百姓を教化して善に向はしめるものである。よい人物があつて政をすれば、其の政が擧つて百姓を善に向はしめることを蒲盧が桑蟲の子を變化するやうに易いものである。そ

れ故に政をするのはたゞ賢臣を得るに在る。而して賢臣を取るは君の身を以てするので、明君にして始めて能く賢臣を得ることが出來るのである」君の身を修めるには道を以て手本としなければならぬ。而して道を修めるには仁を以て本とする。かくて明君があれば必ず賢臣ありて、その政が擧つて治まらないことはない。

語釋　哀公（魯の君、名は蔣、哀公はその諡。）○方策（方は版、策は簡（フダ）。版は一枚の板、簡は幾枚かを綴ち合せて用ひる。方策とは周の典籍文書を指していふ。）○其人（賢臣を指す、爲政在人の人も同じ。）○息（滅ぶること。）○敏（朱子の注によつて速の意とす。敏速、敏捷の意。）○樹（草木を植ゑること。此所では名詞でない。動詞として見る。）○蒲盧（鄭玄の注に蒲盧は蜾蠃・即ち土蜂（ヂカバチ）をいふ。詩經の小雅に螟蛉子有り、蜾蠃之を負ふとある。螟蛉は桑蟲である。蒲盧は桑蟲の子を取つて、之を變化して己が子とする。政の百姓におけるは蒲盧の桑蟲に於けるがやうであると説く。此の説がよい。朱子の注には沈括の説を引いて蒲葦と解してゐるけれども從ひ難い。）○故爲政在人（孔子の家語の哀公問政篇には政在於得人に作る。語意尤も備はつてゐる。）○道（天下の達道である。即ち父子の親・君臣の義・夫婦の別・兄弟の序・朋友の信である。）

餘論　文武の政布いて方策に在り、其の人存すれば其の政擧り、其の人亡すれば其の政息むといふのは實に千古の名格言である。獨り政治上に於てさうであるばかりではない。宗教も道徳も教育も、殖産興業もあらゆる方面皆然りである。讀む者須らく沈思熟慮すべきである。

仁者人也。親親爲大。義者宜也。尊賢爲大。親親之殺、尊賢之等、禮所生也。

(在下位、不獲乎上、民不可得而治矣)故君子不可以不脩身。思脩身、不可以不事親。思事親、不可以不知人。思知人、不可以不知天。

訓讀 仁は人なり。親を親むを大なりと爲す。義は宜なり。賢を尊ぶを大なりとなす。親を親しむの殺・賢を尊ぶの等は禮の生ずる所なり。……故に君子は以て身を脩めざる可からず。身を脩めんと思はゞ、以て親に事へざる可からず。親に事へんと思はゞ、以て人を知らざる可からず、人を知らんと思はゞ、以て天を知らざるべからず。

通釋 仁といふ語の意義は人である。即ち人に對する道德である。人に對する道德の中では、我が親族を親愛することが最も重大なるものである。義といふ語の意義は宜である。事に應じて相當の處置をすることである。其の場合、其の事柄に應じて最善嚴正の處置をすることである。事に應じて相當の處置をする中では賢者を尊敬するといふことが最も重大である。さて親族を親しむにも其の親疎の程度によつて其の親しみを少しづゝ減ずること、及び賢者を尊敬するにも其の賢德の程度に應じて之を尊敬するにも等級をつけることは禮義の因て生ずる所以である。夫れ政を爲るには人の如何に

在り、人を取るには身を以てせねばならぬもの故に君子は第一に我が身を修めねばならぬ。身を修めるには道を以て修め、道を修めるには仁を以て修め、仁は親を親しむ事が最も重大であるが故に、身を修めようと思ふならば親に事へねばならぬ。親を親しむ心を盡さうと思ふならば必ず賢人を尊敬して其の人から裨益を受けねばならぬ。故に親によく事へようと思ふならば、必ず以て人を知らねばならぬ。親を親しみ賢人を尊ぶにも夫れ夫れ等級段階があるのは皆天然自然の法則である。若し之を知る事が明かでなければ、親疏賢愚の區別がむちやくちやに成つて親しむ所、尊ぶ所、其の宜しきを失ひ、禮儀に背くやうになるであらう。それ故に人を知らうと思ふならば、先づ以て天を知らねばならぬ。

語釋　仁者人也（仁といふ字の意義は人である。即ち人に對する道德である。仁は勿論自己の德でなければならぬが、しかしここでは仁慈の德の人に及ぼす結果から見て云つたものである。）○親親（下の親は名詞で親族のこと。上の親は動詞でしたしむと讀む。）○殺（サイと讀む。そぐ。等級をへらす事の意で減殺（ゲンサイ）すること。親しみの度を少しづゝ減ずること。）○等（等級）○君子（人君を指していふ。）○事親（これは親を親しむ中について其の最も重き者をあげていつたのである。）

餘論　下位に在りて上に獲られざれば、民得て治む可からずの十四字は鄭玄の註の說に從つて、下句が誤つて重ねて此に在るものと見て、訓讀も、通釋も語釋も施さないことにした。親を親むは仁か

ら生じ、賢を尊ぶは義から生じ、等殺は禮から生ずるのである。皆、人の本性に本づいてゐる。能く親めば、親より以て疏に及んで達道は擧らないことはない。能く賢を尊べば、學を講じて、以て友を會して達道は明かでないことはない。等は輕重大小の同じからざるあり、殺は隆に對していつたのである。此の等殺から禮が生ずるので、皆人の本性に本づいてゐるのである。

天下之達道五。所以行之者三。曰、君臣也。父子也。夫婦也。昆弟也。朋友之交也。五者天下之達道也。知仁勇三者天下之達德也。所以行之者一也。或生而知之、或學而知之、或困而知之。及其知之一也。或安而行之、或利而行之、或勉強而行之。及其成功一也。

訓讀 天下の達道五。之を行ふ所以の者三。曰く、君臣なり。父子なり。夫婦なり。昆弟なり。朋友の交なり。五の者は天下の達道なり。知仁勇の三の者は天下の達德なり。之を行ふ所以の者は一なり。或は生れながらにして之を知り、或は學んで之を知り、或は困んで之を知る。其の之を知るに

及んでは一なり。或は安んじて之を行ひ、或は利して之を行ひ、或は勉強して之を行ふ。其の功を成すに及んでは一なり。

通釋 天下古今の共に由るべき道に五つある。此の五つの達道を行ふ所以のものは三つある。五達道とは何をいふか。曰く、君臣の關係、父子の關係、夫婦の關係、兄弟の關係、朋友の交が之れである。此の五つは天下古今の共に由るべき達道である。此の達道を行ふ所以の德が三つある。知仁勇の三つが是れである。此の三つは天下古今共に得て德とする所の達德である。知がなければ其の道理を知ることが出來ず、仁がなければ其の事に安んずることが出來ず、勇がなければ其の行を爲果すことが出來ない。それ故三達德は五達道を行ふ所以である。而して此の三達德で五達道を行ふには種々の手段方法もあるけれども、之を行ふ所以のものは唯一つの誠である。若し誠がなかつたならば虛僞誣妄で德も眞の德ではなくなる。さて如何にして道を行ふことが出來るであらうか。知を以て之を言つたならば、或は生れながらにして此の道を知つてる者もあり、或は學んで後此の道を知る者もあり、或は學んでも容易に此の道に達せず、困んで後、始めて此の道を知る者もある。此の三等の人は道を知るには早いと晩いとはあるけれども、既に道を知るの後は卽ち相等しい。行を以て之を言つ

たならば、或は安んじて何の苦勞なしに此の道を行ふ者もある。或は此の道を行ふことの利なるを思つて之を行ふ者もある。或は力未だ足らず、勉強努力して之を行ふ者もある。此の三等の人は道を行ふには難いと易いとの別はあるけれども既に行なつて成功せる後は即ち相等しい。蓋し人の性質には此のやうな相違はあつても、努力勉強すれば何人も同じ高嶺の月を見ることが出來るのである。「之を知るに及んでは一なり。」「其の功を成すに至つては一なり。」の二句は人に說き示すこと極めて親切であるといはねばならぬ。

語釋　達道（朱子の注に天下古今共に由る所の路とある。上は天子より下は萬民に至るまで皆之に由り、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らぬ故に達道といふのである。）上文には和也者、天下の達道なりとある。五倫の道は各々相和するを以て主とする、それ故總括していへば和は天下の達道であり、分けていへば五倫は天下の達道である。朱子の注に五達道を書經の所謂五典といつてゐるのは誤である。書經の五典とは父義、母慈、兄友、弟恭、子孝であつて、五倫ではない。五倫は君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信をさしてゐる。義は宜である。親は愛である。別は區別の別である。序は次序の序である。信は實である。同じくこれ仁義禮智の道であるが、仁義禮智の道が君臣に在れば、之を義といひ、父子に在れば之を親といひ、夫婦にあれば之を別といひ、長幼に在れば之を序といひ、朋友に在れば之を信といふので、其の實は一である。）○昆弟（兄弟と同じ。昆は兄である。）○達德（天下古今を通じて同じく得て以て己が德とするもの。）○一也（一也といふ語は前後三ケ所に見えてゐるが、初めの行ふ所以のもの一といふのは即ち誠である。ここでは未だいひ破らないで、此の章の後の文に至つて初めて明言してゐる。之を知るに及んでは一、功を成すに及んでは一といふのは相等しいといふ程の意味である。入る所の途は異つてゐるが、至る所の域は則ち同じいといふので、これが中庸たる所以である。）○知之行之（之は上文の五達道をさす。）○知仁勇（上章の舜（第六章）は知であり、顏回（第八章）は仁であり、子路（第十章）は勇である。知仁勇の三者は此の舜・顏回・子路を承けて說き出したのである。而して生知、學知、困知の三知は知であり、安行、利行、勉行の三行は仁であり、之を知り、功を成すに至つては一なる所以は即ち勇である。又、其の等級をいつたならば生知安行は知である。舜の大知の如きこれである。學知利行は仁である。顏子が克己復禮仁を爲すが如きはこれである。困知勉行は勇である。勇がなければ之を遂行することは出來ない。）

【餘論】中庸の五達道とは即ち君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友の交の五つである。孟子は「父子親有り、君臣義あり、夫婦別有り、長幼序あり、朋友信有り。」といつて父子を先にし君臣を後にし又昆弟の代りに長幼といひ、且つ親・義・別・序・信の五字を加へて居る。中庸は唯だ人倫の關係を五つに分けただけであるのに、孟子が更に義務の內容を道破したのは先人の說よりも後人の說が一層精密となつたと見るべきであらう。昆弟は兄弟である、長幼といへば兄弟をも含み、範圍が一層廣くなつてゐる。禮記の王制篇の七教や、禮運篇の十義などには、兄弟長幼を并せて擧げてゐるが、孟子のやうに長幼を以て兄弟を兼ねても別に差支へはない。但し中庸には君臣、父子といひ孟子には父子・君臣といふ。朱公遷の說に「孟子は教より言ふ、故に父子を先にす、中庸は政より言ふ、故に君臣を先にす。」とあり。支那の國情に於ては一應は尤の說であるとしてもよいが、中庸の作者子思は孔子尊王の大義を遵奉するが故に君臣を第一とし、孟子の思想は幾分か民本的の傾向を帶びてゐるから、父子を先としたことは爭ふことの出來ぬことであらう。我が日本の如きに在つては、教からいつても、政からいつても君臣を先とすべきは論ずるまでもないことである。

子曰、好學近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇。知斯三者、則知所以修身。知所以修身、則知所以治人。知所以治人、則知所以治天下國家矣。

訓讀 子曰く、學を好むは知に近く、力め行ふは仁に近く、恥を知るは勇に近し。斯の三者を知れば、則ち身を修むる所以を知る。身を修むる所以を知れば則ち人を治むる所以を知る。人を治むる所以を知れば、則ち天下國家を治むる所以を知る。

通釋 學ぶことを好み、學んで厭はないのは則ち完全なる知といふことが出來ぬが、知に近いといふことが出來る。力め行うて怠らないのは之を直ちに仁といふことは出來ないが、仁に近いといふことが出來る。未だ之を知らず之を行ふことが出來ない自己は古の大舜に及ばないことを恥ぢと思ふのは勇に近いといふことが出來る。以上の三つを知つて益〻學を好み、力め行うて厭ひ怠らずして人に若かざるを恥づれば我が身を修むる所以を知ることが出來る。己を修めるのは人を治める本である。それ故我が身を修める所以を知れば、人を治める所以を知ることが出來る。人を治める所以を知れば之を推して大にし、天下國家を治める所以を知ることが出來る。

朱子曰く、此を言つて以て上文修身の意を結び、下文の九經を起すのである。

語釋　知恥（我未だ之を知ることが出來ない、又未だ之を行ふことが出來ないとして人に若かないのを恥づることを知るのは勇に近いといふ意。朱子曰く、恥を知るとは、「舜も人なり我も亦人なり、舜は法を天下に爲し、後世に傳ふ可し、我は猶ほ未だ郷人たるを免れず是れ則ち憂ふ可し。」（孔子離婁章句下）の如し。既に郷人爲るを恥づれば學に進んで安んぞ勇たらざるを得んやといつてゐる。此の論は極めて適切である。）

餘論　孔子家語には此の節の上に「公曰く、子の言は美なり矣。至れり矣。寡人實に固なり、以て之を成すに足らざるなり。」とあり。それ故「子曰」を以て答辭を起してゐる。今此の間辭なくしてなほ「子曰」とあるは當に刪り去るがよい。故に朱子は二字は衍文であるといつてゐる。

呂氏曰く、愚者は自ら是として求めず。自ら私する者は人欲に狗つて反ることを忘る、懦者は人の下たることに甘んじて辭せず。故に學を好むは未だ完全なる知ではないが、然し愚を破るに足る。力行は未だ完全なる仁ではないが、然し以て私を忘れるに足る。恥を知るは未だ完全なる勇ではないが、以て懦を起すに足ると。

凡爲天下國家有九經。曰、修身也。尊賢也。親親也。敬大臣也。體群臣也。子庶民也。來百工也。柔遠人也。懷諸侯也。

【訓讀】凡そ天下國家を爲むるに九經あり。曰く、身を修むるなり。賢を尊ぶなり。親を親しむなり。大臣を敬するなり。群臣を體するなり。庶民を子とするなり。百工を來すなり、遠人を柔ぐるなり。諸侯を懷くるなり。

【通釋】凡そ天下國家を治めるにはその典法として萬世に亙つて易らないものが九つある。第一は修身である。君主の一身は天下國家を治める本である。次には賢者を尊ぶことである。師友たるべき賢者を尊重するのは君主の心を開き導く所以である。次には親族を親しむことである。親族を親しむは本家と分家と永く其の好誼を厚うする所以である。家から朝廷に及ぶ。それ故次には大臣を敬することである。大臣は道を論じ群僚を率るる者であるから宜しく之を敬せねばならぬ。群臣を體することが之れに次ぐ。群臣は官に高下があり、祿に厚薄がある。宜しく我が身をその地に置いて其の心を察せねばならぬ。民は國の本である。故に君主は民の父母となり、庶民を子として之を愛撫せねばならぬ。次に百工を招き致して我が國に來らしめ、生活に必要なる器具の供給を潤澤ならしめ、次に遠方から其の家鄕を離れて來れる商賈旅客に恩を加へて之を柔げ、次に諸侯を懷けて我が隙を窺ふ心なからしむれば天下はよく治まつて泰平である。

語釋　九經（經は典であり常である。之を以て天下國家を治めれば常に行はれて變ずることは出來ない。必ず此の九つを典法とすべきであるから經といふ。）○尊賢（下文に大臣、群臣のことがあるから、ここに尊賢とあるのは思ふに此の賢者は臣下の賢者ではなくて、君主の師とも友ともなるべきものを指していつたのである。）○親親（上の親は親愛すること。下の親は諸父兄弟宗族の人等をさしていふ。）○體群臣（體とは我が身を其の地位において其の心を察すること。）○庶民（もろもろの民。萬民と同じ。）○百工（百とは凡そあらゆるといふ意。工は工人即ち技師のこと。）○柔（安んずること。寛以て之を待つ意。）○遠人（遠方から其の家業を離れて來たる商賈や旅客をいふ。四方の夷狄のことではない。若し四方の夷狄ならば諸侯の次に置くべきであらう。）○來（懷け來す意。）

餘論　呂藍田は天下國家の本は身にあり、故に修身を九經の本と爲す。然れども必ず師友を親しみ、然る後に修身の道進む。故に尊賢之に次ぐ。道の進む所、其の家より先なるは莫し。故に親親之に次ぐ。家よりして以て朝廷に及ぶ。故に大臣を敬し、群臣を體すること之に次ぐ。朝廷よりして以て其の國に及ぶ。故に庶民を子とし、百工を來すこと之に次ぐ。其の國よりして以て天下に及ぶ。故に遠人を柔げ諸侯を懷くること之に次ぐ。此れ九經の序なりといつてゐるが、九經を列敍した理由をよく說いて遺憾がないものと思ふ。

修レ身則道立、尊レ賢則不レ惑、親レ親則諸父昆弟不レ怨、敬二大臣一則不レ眩、體二群臣一則士之報禮重、子二庶民一則百姓勸、來二百工一則財用足、柔二遠人一則四方歸レ之、

懷諸侯則天下畏之。

訓讀 身を修むれば則ち道立ち、賢を尊べば則ち惑はず、親を親しめば則ち諸父昆弟怨みず、大臣を敬すれば則ち眩せず、群臣を體すれば則ち士の報禮重く、庶民を子とすれば則ち百姓勸み、百工を來せば則ち財用足り、遠人を柔ぐれば則ち四方之に歸し、諸侯を懷くれば則ち天下之を畏る。

通釋 此の一節は九經の效を言つたのである。君主が己の一身を修めれば天下國家を治める所以の道がこゝに確立して、民は皆仰いで之に則るやうになり、賢者を尊んで之を師友とすれば、君主はその輔弼によつて、道理を明かにし自ら疑ひ惑ふことなく、親族を親しめば一族中の叔父や庶兄や弟や從兄弟など皆悅び服して決して君主を怨むことなく、皆、睦み合ふ、大臣を敬して之を信任すること專らなれば、小臣等が之を邪魔するやうなことはなく、大臣は安んじて其の才能を盡くし、隨つて君主は事に臨んで迷ふことなく、群臣を體して其の心を以て心として之を禮遇すれば、士たる者は皆感激して其の職に盡力して敢へて怠らないのは勿論のこと、常に君主の恩に報ぜんとする念が重く、庶民を見ること我が子の如くであれば、百姓はその恩に感じて、君を愛することなほ父母の如く、農桑

のことに勉め勸み、百工を招き致して我が國に來らしめれば國內の工業は勃興して貨財器用は十分となり、遠方からの商賈旅客を柔ぐれば、天下の旅人は皆その途に出でんことを願ひ、四方の者、皆義を慕うて之に歸服し、諸侯を懷くれば、天下皆その德に感じ其の威に畏れて、悉く王室を奉戴せんことを願ふやうになる。此のやうであれば天下は泰平で、その安らかなること大盤石のやうになるであらう。これ即ち九經の效である。

語釋　道立（道とは前の五達道をいふ。君主の身が五達道を盡せば、民皆君主を儀表とする。朱子の註に道已に成りて民の儀表模範たるべきをいふので、書經の洪範の篇の語に大中が民の標準を立てるといつてゐるのは此の意であると解してゐる。此の解をよしとする。）　○不惑（道理を見ること明かにして自ら疑ひ惑ふことなきをいふ。）　○諸父昆弟（一族中の叔父や、庶兄や從兄弟などをいふ。諸父は父の從兄弟で、伯父、叔父、季父等の總稱である。）　○不眩（事に迷はないことをいふ。大臣を敬して之を信任することが專一であるから、小臣輩が之について邪魔をすることなく、從つて、君主は事に臨んで迷ふことがないのである。不惑と不眩とは君の心を指していふ。大臣が眩せずといふのは誤である。）　○報禮重（君主の禮意に報いる念の重いこと。）　○財用（財は貨財、用は器用即ち器具のこと。）

齊明盛服、非禮不動、所以修身也。去讒遠色、賤貨而貴德、所以勸賢也。尊其位、重其祿、同其好惡、所以勸親親也。官盛任使、所以勸大臣也。忠信重祿、所以勸士也。時使薄斂、所以勸百姓也。日省月試、既稟稱事、所以勸百

工也。送往迎來、嘉善而矜不能、所以柔遠人也。繼絕世、擧廢國、治亂持危、朝聘以時、厚往而薄來、所以懷諸侯也。

【訓讀】齊明盛服して禮に非ざれば動かざるは、身を修むる所以なり。讒を去り色を遠ざけ、貨を賤しみて德を貴ぶは、賢を勸むる所以なり。其の位を尊くし、其の祿を重くし、其の好惡を同じうするは親を親しむを勸むる所以なり。官盛に使ふに任ずるは、大臣を勸むる所以なり。忠信、祿を重くするは士を勸むる所以なり。時に使ひ薄く斂するは、百姓を勸むる所以なり。日に省み、月に試み、既稟事に稱ふは百工を勸むる所以なり。往を送り來を迎へ善を嘉して不能を矜れむは、遠人を柔ぐる所以なり。絕世を繼ぎ、廢國を擧げ亂を治め危きを持し、朝聘時を以てし、往を厚くして來を薄くするは、諸侯を懷くる所以なり。

【通釋】此の一節は九經を行ふ方法を述べたものである。其の思慮を齊しくし、其の心を淸明にして、其の內を一にし、其の衣冠を正しうして其の外を肅しみ、其の未だ事に接せざるに當つて、內外交く相養ひ、既に動いて事に應ずるや、苟も禮に非ざれば動かないのは身を修むる所以である。讒言を去

り女色を遠ざけ、貨財を賤しんで賢者と悖らぬやうにし、專ら有德の人を尊重すれば、賢者は皆出でて仕へ、樂んでこれが用を爲さんことを希ふので、即ち賢を勸める所以である。同姓の親族を待遇するに其の位を尊くして之をして貴からしめ、其の俸祿を重くして、之をして富ましめ彼等と同じく其の好む所を好み、その惡む所を惡みて、その情にもとらなければ、諸父兄弟皆自然に悅服するやうになる。即ち親を親しむを勸むる所以である。大臣の尊きをして、若し親しく細事までも治めしめれば大體を統率する暇がなくなる、それ故に多く屬官を置き、自由に任使せしめれば大臣は從容として國家社稷の大計を考慮することが出來るであらう。これ即ち大臣を勸める所以である。群臣を用ひるにその忠信なる者を重用して、その俸祿を重くすれば、恩に感じて報を圖り、樂んで事を勤めるであらう。即ち士を勸める所以である。民は即ち國の本、之を使役するに農隙の時を以てし、且つ租稅を少くすれば、民皆衣食が十分になつて、其の所に安んじ、上を見ること父母のやうになるであらう。是れ即ち百姓を勸める所以である。百工の技藝は或は勤め、或は怠るものがあり、其の功の大小も同じではない。若し功少くして賞厚く、勞が重くして、報が輕いやうなことがあれば、皆相ひきゐてごまかすことばかり心懸けるやうになる。それ故に日々にその仕事の勤惰を省み、月々その功課を試驗

して、之に與へる手當をその爲した仕事に相應する樣にするは、百工を勸める所以である。遠人の歸り去る者を送り、或はその來る者を迎へるには、それ〴〵相當の設備をして、旅行中、何の不安もなく、何の不足もなからしめ、或はその留まりたいと願ふ者があれば善なる者は之を嘉して其の才能に因つてこれに授けるに任を以てし、不能なる者は之を哀んで、其の欲せざる所を強ひることなどをせぬのは遠人を柔げる所以である。子孫の絶えた者はその一族を訪れ求めて本家を繼がしめ、國を失つて他邦に流浪する者には新に封土を賜うて、すたれた國を再興せしめ、亂れたものは之を治めて危くないやうにし、危きものは之を維持して亡びないやうにし、諸侯の朝覲や、丈夫の來聘は年毎に一小聘し、三年に一大聘し、五年に一朝するやうに規定の時期を以つてし、その以外に度々の朝聘を責めず、且つ朝聘の時に、朝廷からの賜物は、手厚くして、諸侯からの貢物は輕少にせしめる時は、諸侯は皆その德に感じて、忠を王室に竭さんことを思はないものはなく、即ちこれ諸侯を懷ける所以である。

語釋　齊明盛服（齊は齋戒の齋と同じで、其の思慮を齊しくして之を整へること。明は其の心を清明ならしめること。盛服は禮裝してその衣冠を正しうすること。陳北溪曰く、齊明は以て其の內を一にし、盛服は以て其外をつつしむ、內外交ごも相養ふのである。齊明盛服はこれ靜であつて、未だ事に接しない時をいふので、禮に非ざれば動かないとは是れ動いて已に事を接するの時であつて、動に於ても靜に於ても交々相養ふのであると。胡雲峯も亦曰く、齊明盛服は靜であつて敬である。即ち自齊の戒愼存養のことであつて、禮に非ざれば動かないのは動であつ

て敬である。即首章の愼獨省察のことであると。陳北溪と胡雲峯との說は互に相補ふことができる說である。）○色（女色のこと。）○同其好惡（其の情に拂らぬことで、君の好む所は之を好み、親の惡む所は之を惡むことである。）○勸（鼓舞獎勵感發の意で、人をして滿足して愈々その道に努めしめること。）○勸親親（ここは親の字を重ねて用ひてあるが、前後の文例で推せば、まさに勸親といふべく、一字は衍文であらうと思はれるが、強ひて削るにも及ぶまい。）○官盛任使（大臣に屬する多くの官を置いて、之を任使せしめること。鄭玄の註には官盛任使とは大臣皆屬官の任使する所あり、小事を親しくせざるなりとある。朱子の註はこれによつたのである。）○忠信重祿（士の忠信なる者は其の祿を重くすること。朱子の註は異つてゐる。）○斂（收めること。租稅をとること。）○省（其の勤惰を省みること。）○試（其の巧拙を試みること。）○既稟（鄭玄の註に既は讀んで餼となす。餼稟は稍食なりとある。稍食とは吏の祿俸即ち手當である。周禮に群臣の祿食を以て稍食といつてゐる。稍稍にして之を給するからである。即ち月俸である。）○稱事（稱はつり合ふこと。相當すること。功の大小によつて手當を增減すること。）○送往迎來（遠人の往來を送迎する設備に手落がないやうにすること。例へば其の歸り去らうとするときは之に護照即ち旅行券を授けて無事に立ち去らしめ、來る時は宿舍に米穀等の貯へを潤澤にして不足なからしめる類をいふ。）○繼絕世（徂徠曰く、周公が殷の紂王の庶兄の微子を殷が亡びて後、宋に封じて殷の祀を奉ぜしめたやうなことをさすと。）○擧廢國（徂徠曰く、齊の桓公が楚丘に城いて亡國の後を存したやうなのであると。）○治亂持危（治亂は禍亂を以ていひ、持危は計謀を以ていふ。）○朝聘（朝は諸侯が天子に見えるを謂ひ、聘は諸侯大夫をして來つて獻ぜしめるを謂ふ。禮記の王制篇によれば每年に小聘し、三年に一大聘し、五年に一朝するとある。）○厚往薄來（朱註に燕賜は厚うして納貢は薄きをいふとある。天子よりの賜はり物は鄭重にして諸侯からの貢物は輕少なることをいふ。）

凡爲二天下國家一有二九經一。所三以行二之者一、一也。凡事豫則立、不レ豫則廢。言前定則不レ跲、事前定則不レ困、行前定則不レ疚、道前定則不レ窮。

【訓讀】凡そ天下國家を爲むるに九經有り。之を行ふ所以の者は一なり。凡そ事豫めすれば則ち立ち、豫めせざれば則ち廢す。言前に定まれば則ち跲かず、事前に定まれば則ち困まず、行前に定

まれば則ち疚からず。道前に定まれば則ち窮せず。

通釋 凡そ天下國家を治めるには前に述べたやうに九經があるが、之を行ふ所以はたゞ一つの誠である。若し一の誠がないならば九經は凡て空文となつてしまふ。然らば如何にしたらよいか。凡そ物事は何事によらず豫め準備をすれば成立するけれども豫め用意をしなければ失敗するものである。例へば言を發せんとするとき、能く豫め考慮をめぐらして前以て定めて置けば、之を言つても決して躓づくやうなことはない。又事を爲さうとするとき、先づ豫め思考して前以て定めて置けば、事に臨んで困しむことはない。又行を爲さうとするに豫め思考して前以て定めて置けば則ち心にかへりみて正義に缺け、良心に恥づるやうなことはなくなる。又、道藝を前以て習つておけば變に應じて窮することがない。而して誠は凡てのものゝ根柢であるから、人は須らく豫め誠を以て立脚地とし誠の心を養つておかねばならぬ。

語釋 所以行之者一也（この語は上の文と照應してゐる。之を行ふ所以のものは一の誠意である。ここにては未だ誠なりと明言せずして次の節に至つて初めて誠を說くのである。）○凡事（達道、達德、九經などをさしていふ。）○立（成る意。）○廢（敗る意。）○困（通に對していふ。通達せずして窮すること。）○跲（躓くである。ツマヅクとよむ。）○疚（內に省みて疚しからずの疚しと同じ。瑕疵をいふのである。）○道（道藝である。文學の如きも道藝に屬してゐる。）

在下位不獲乎上民不可得而治矣。獲乎上有道。不信乎朋友、不獲乎上矣。信乎朋友有道。不順乎親、不信乎朋友矣。順乎親有道。反諸身不誠、不順乎親矣。誠身有道。不明乎善不誠乎身矣。

讀法 下位に在つて上に獲られざれば、民得て治む可からず。上に獲らるゝに道有り。朋友に信ぜられざれば、上に獲られず。朋友に信ぜらるゝに道有り、親に順ならざれば、朋友に信ぜられず。親に順なるに道あり。諸を身に反して誠ならざれば、親に順ならず。身を誠にするに道有り。善に明かならざれば、身に誠ならず。

通釋 己が身は下位に在つて、上の信任を得なければ、道を行ひ、民を治めることは出來ぬものである。上の信任を得るには道がある。それは朋友に信ぜられ、名聲が昇り聞えて、初めて上に信任せられるもので、朋友が未だ信じないで、君の信任を得ることは出來ぬものである。朋友に信ぜられるには道がある。我が行爲が親の心に順ひ、親を滿足せしめて、初めて朋友に信ぜられる。親にすら順なることが出來ず、滿足させることが出來なくては朋友は如何して之を信じようや。親の心に順ひ、

親を悅ばすには道がある。それは身自から反省して誠であれば親は之を悅ぶものであるが、若し誠でなければ親は之を滿足と思はぬものである。身を誠にするには道がある。善とは如何なることであるか明かであれば自然誠となるけれども、善に明でなければ身も誠とはならない。

語釋 獲（得と同じ。ここでは信任せられる意。）○誠（眞實で無妄の意である。此に至つて初めて誠の字を點じ出して、上を承けて下を起す。）○明乎善（學問思辨によつて善を明かにすることである。大學では之を格物致知といつてゐる。誠意の本である。）

餘論 此の一節は事凡て豫めすれば成立するの意を述べたのである。民を治めんには、豫め上の信任を得ねばならぬ。上の信任を得るには、豫め朋友に信ぜられねばならぬ、朋友に信ぜられるには、豫め親に順でなければならぬ。親に順であるには、豫め身に誠でなければならぬ。身に誠なるには豫め善を明かにすることがなければならぬと論じて、次々の節「誠」と「誠レ之」とを併せ論じて更に明善の法を述べてゐる。明善とは人心天命の本然を察して眞に至善のある所を知ることである。なほ明善の結果、身誠なりとは大學の格物致知の結果、意誠なりといふのと表裏をなすもので同意である。併せて參照するがよい。

誠者、天之道也。誠之者、人之道也。誠者、不勉而中、不思而得。從容中道聖人也。誠之者、擇善而固執之者也。

【訓讀】誠は天の道なり。之を誠にするは、人の道なり。誠は勉めずして中り、思はずして得。從容として道に中るは聖人なり。之を誠にするは、善を擇んで固く之を執る者なり。

【通釋】誠、即ち眞實無妄は天の道である。天道は自然に流行して、日月の代る代る明なることや、寒暑が往來することや、百物が生育するが如きことは、萬古に亘つて一息の差ひ、謬りはないものである。人はもとより天賦の誠を以て已が性としてゐる。所謂「天命之を性と謂ふ。」とは是れである。しかしながら、常人は人欲の私に蔽はれて未だ眞實無妄なることは出來ぬ。それ故に努力勉強して誠ならんことを求めるのが人の道である。天性の誠であるものは、其の行は安行であるから、勉強を用ひないで行ふ所はすべて道に中り、其の知は生知であるから思索を待たないで從容として道に中る者はこれ即ち聖人である。努力勉強して誠ならんことを求めるものは、其の知は未だ思はずして得ることは出來ず、必ず精密に善惡を識別して其の善であるものを擇び、其の行は未だ勉めずして中ることは

出來ず、必ず擇んだ善を專一に固守して失はぬやうにせねばならぬ。

語釋 誠者天之道（誠は眞實無妄の意味である。天の道とは春夏秋冬の四時が行はれ、萬物が生じ、萬古に亘つて、一息の差ひも謬りもない。それ故に誠は天の道であるといふ。此の道は人に賦與せられ、人之を受けて性とするけれども、唯々生知安行の聖人のみがよくこれを體得することが出來るのである。それ故に下文の從容として道に中るは聖人なりといつてゐるのである。）○誠之者（未だ誠なることが出來なくて、勉めて誠にならうと求むること。）○不勉而中（行を以ていふ。）○不思而得（知を以ていふ。）○從容中道（從容はゆつたりおちついてゐるさま。勉めもせず、思考をも費さずにゆつたりと餘裕を有しながら道に中ること。）○擇善固執（精密善惡の分を識別して專一に之を固守することである。）

餘論 此の節は上文の誠身を受けて、初めて中庸の極意である所の誠を論じ、之を誠とする方法に論及したのである。擇善とは上文には「擇乎中庸。」とあつたし、書經には「惟精。」とあるが、皆同じ意味である。固執は上文には拳々服膺とあつたし、書經には「惟一。」とある。皆同じ意味である。擇ぶことは知に屬し、執るは行に屬してゐるから、朱子の注には擇善は學知以下のこと、固執は利行以下のことゝ解してゐる。

陳三山がいふには、善擇ばされれば誤つて人欲を認めて天理とすることがあるであらう。執ることが固くなければ、天理、時として人欲に奪はれることがあるであらうと。尤の言である。

博學之、審問之、愼思之、明辨之、篤行之。有弗學、學之弗能弗措也。有弗問、

問之弗知弗措也。有弗思、思之弗得弗措也。有弗行、行之弗篤弗措也。人一能之、己百之、人十能之、己千之。果能此道矣、雖愚必明、雖柔必強。

訓讀　博く之を學び、審かに之を問ひ、愼んで之を思ひ、明かに之を辨じ、篤く之を行ふ。學ばざるあり、之を學んで能くせざれば措かざるなり。問はざるあり、之を問うて知らざれば措かざるなり。思はざるあり。之を思うて得ざれば措かざるなり。辨ぜざるあり。之を辨じて明かならざれば措かざるなり。行はざるあり、之を行うて篤かざれば措かざるなり。人一だびにして之を能くすれば、己之を百たびし、人十たびにして之を能くすれば、己之を千たびす。果して此の道を能くせば、愚なりと雖も必ず明かに、柔なりと雖も必ず強し。

通釋　學ばなければ、物の道理を知ることは出來ないから必ず博く學んで遺す方なく知らねばならぬ。學んで理解することが出來ぬことは、之を問はねばならぬ。故に、審かに問うて惑を解かねばならぬ。學問して之を知り、之を理解しても、自ら思索しなければ親切でない。それ故愼んで之を思ひ

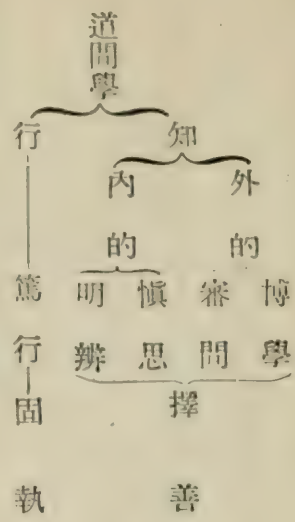
考へなければならぬ。愼んで之を思ひ、考へたならば心に自得するであらう。自得したものは其の公私・義利・是非・眞妄の區別を明かし辨別しなければならぬ。此のやうにして善を擇んだ上は之を實際日用の間に施し、篤く之を實行して失はぬやうにせねばならぬ。博學・審問・愼思・明辨・德行の五者、其の一を廢すれば眞の學でない。さて學ばなければそれまでのことであるが、然し一旦之を學ぶ以上は之を能くせざれば中止したり廢止したりはせぬ。必ず學ぶことを成し遂げる。問はなければそれまでのことであるが、然し一旦之を問ふ以上は之を知るに及ばぬうちは中止したり、廢止したりはせぬ。必ず知ることを成し遂げる。思はなければそれまでの事であるが、然し一旦思ふ以上は之を會得しなければ中止しない。必ず會得することを成し遂げる。公私・是非等を辨別しなければそれまでのことであるが、然し一旦辨別しようとする以上は明かに辨別しなければ中止はしない。必ず辨別を成し遂げる。行ふことをしなければそれまでのことであるが、然し一旦行ふ以上は篤く實行し得なければ中止はしない、必ず實行することを成し遂げるまではやまない。天質明强の他人が一たびすることを、自分は百たびし、他人が十たびすることを、自分は千たびする。例へば他人が一たび書物を讀み通したならば自分は百遍之を讀むといふやうにする。果して此のやうに努力することが出來るならば、た

とひ愚なる者もよく善を擇ぶことが出來て必ず明かとなり、柔なる者もよく固く執ることが出來て必ず強くなる。

語釋　○博（一つ事ばかりでなきこと）○審（周密にして苟もせぬこと）○愼（丁寧にして輕忽にせぬこと）○辨（事に行はんとする先きに辨別すること）○篤（誠意力を用ひて、倦怠せぬこと）○思辨（思は疑問を發表することで、辨は思ふ所のことについて、是非を判ち決めること）○弗（不と同じ）○措（さしおく。中途にして止める意）○有弗學（朱子の註に「君子の學、爲さざれば則ちやむ」とあるのがよい。學ばなければそれまでのことであるの意。有弗問・有弗思・有弗辨・有弗行の方は同じ。孟子に言はゆるなり、敢へはせず斷つと同格の文である。）○人一能之己百之（人は一度よくすることを、自分は百度する意である。他人が一度で出來ることを、自分は百度つとめると解するのは當つてゐない。）

餘說　此の節は之を誠にする方法、換言すれば「擇レ善固執レ之」の細目を述べたものである。さて中庸の修養法については第二十七章に於て「尊ニ德性一」と「道ニ問學一」との二綱を擧げてをつて修養には此の二大綱の一方を缺いてはならぬが、その中の「道ニ問學一」即ち學問に道る方法の細目は此の節にいつてゐる所の博學・審問・愼思・明辨・篤行の五箇條である。此の五つについて仔細に之を考察すると博學・審問の二つは之を人に學び、之を人に問ふものであつて外的知識である。愼思・明辨の二つは自から思ひ、自ら辨ずるもので內的知識である。而して篤行は即ち其の知る所を實行するのである。若し「誠レ之者擇レ善而固執レ之者也。」の句に就いて云ふならば博學・審問・愼思・明辨の四つは擇善であつ

て篤行は固執といふべきであらう。之を圖にすれば次のやうになる。



これによつて見れば中庸の説は先づ知つて後に行ふ所謂先知後行説であつて、同じ知の中でも外的知識が先であつて、内的知識が後である。さて學問は努力を要するものである。中庸はその法を説いて、「人一たびにして之を能くすれば、己之を百たびし、人十たびにして之を能くすれば己之を千たびす。果して此の道を能くせば愚なりと雖も必ず明かに、柔なりと雖も必ず强し。」といつてゐる。此の節の如きは實に人をして感奮興起せしむるに足るものがある。讀者宜しく三思すべきである。

朱子の注に「學（博學）問（審問）思（愼思）辨（明辨）は善を擇ぶ所以にして知と爲す、學んで知るなり。

篤行は固く執る所以にして仁となす。利して行ふなり。君子の學は爲さざれば已む。爲せば必ず其の成るを要む。故に常に其の功を百倍す。此れ困んで知り、勉めて行ふ者なり、勇の事なり」と、說いてゐるのは極めて明確の言である。

又之を大學に比すれば博學・審問は大學の格物である。愼思・明辨は大學の致知である。篤行は大學の誠意正心修身である。

第二十章全體について觀れば、敎育のことあり、修養のことあり、義務論あり、德論あり、哀公が政を問うた。政は人を正す所以である。而して孔子の之に對ふる言は多く修身のことをいふ。蓋し己を正しうして以て人を正しうせんと欲するもので、これが所謂王道である。孔子の平日の言は固より限なく多いが、子思が中庸に於て、引いて以て堯舜文武周公の緒を繼ぐものは此の第二十章に備はつてゐるといつてよい。昔、堯舜以來、惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執るの正傳であつて、哀公の爲めに言つたのであるが、其の實は萬世君師たる者の要道である。人存すれば政舉るは此の章の綱領、五達道は政を立つる本、九經は政を爲す細目、三達德は道を體し政に任ずる具であつて、用功は善を擇び固く執るにあり、其の要の歸する所は修身の二字に在り、而して其の樞紐は誠の一字にあ

る。中庸の一篇は總て誠を說いたものである。第十六章に至つて始めて誠の字を出してゐるが、これは專ら鬼神を說いたので、天道である。此の章に至つて誠を以て人道に說き入らうとしてゐる。誠は修養の目的である。而して中庸は至誠の人を稱して聖人と言つてゐる。

誠者天之道也、誠レ之者人之道也。誠者不レ勉而中、不レ思而得。從容中レ道聖人也。

と第二十章に言つてゐるのがこれである。然るに又、至誠の域を稱して之を中和といふ。第一章に曰く。

喜怒哀樂之未レ發謂二之中一。發而皆中レ節、謂二之和一。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致二中和一、天地位焉、萬物育焉。

と。喜怒哀樂は感情であり、その未だ發せざるは性である。人の未だ外物に接せざるとき、天性渾然として偏る所がないから、之を中といふ。その外物に感じて發して情となるとき、その正を失はず、皆その節に中るから、之を和といふ。中は體であつて、和はその用である。體が中でなければ發して和となることは出來ぬ。その用が和となるは、その體が中なるが爲めである。(序說の四、及び、第一章の餘論參照。)

義務論、德論として見るべきものをあぐれば、中庸は始めて五倫を併稱して之を天下の達道と稱した。第二十章に曰く、

君臣也。父子也。夫婦也。昆弟也。朋友之交也。五者天下之達道也。

と。孔子は未だ五倫を併稱しないが、暗々裡に五倫を承認して居たことは、論語に見はれた所で明に推測し得る。子思が五倫を主張したことは、儒家に於ける功績の一といふべきである。孟子は又、之を敷衍して、

父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり（滕文公上）

といつてゐる。荀子の非十二子篇には子思・孟軻を非として「往舊を案じて、說を造り、之を五行と謂ふ。」と論じてゐるが、その五行といふのは、此の五達道のことなることは明白である。荀子の楊倞注に五行は五常、仁義禮智信であると解してゐるのは、五常の語が、漢の董仲舒から始まつたことを忘れた謬である。

子思は五倫の中で、君臣を第一位に置き、父子夫婦以下を其の次に置いたことは注意すべきである。これは子思が孔子尊王の思想に本づいて、君臣の關係を最も重んじたからである。決して偶然に君臣

を第一位に置いたのではない　孟子は父子を第一位に置き、君臣を第二位に置いて居るが、これは人情の本を考へ、且は彼が平素民本主義を說く結果自然にかくの如き相違を來したものと思ふ。

五倫說は後世、儒教の定論となつたが、禮記王制篇には七教として、父子、兄弟、夫婦、君臣、長幼、朋友、賓客の七倫を擧げ、唐韓退之の原道篇には君臣、父子、師友、賓主、昆弟、夫婦の六倫を擧げてゐる。此等は社會上の關係が五倫で網羅し盡されぬことを感じた爲めであるが、後世には遂に五倫說が定說となつたのである。

智仁勇三つの者は天下の達德なり。この三達德併稱は勿論孔子に本づく」これはカントの智情意の三分法とも暗合し、又、我が邦の三種の神器にも配することは、先儒の既に說いた所である。即ち智は鏡、仁は璽、勇は劍である　この三德論は後世之をいふ者が少く、儒家に於ては德としていへば五常即ち仁義禮智信といふ樣になつた。

中庸の政治論は古來傳說的の天人思想を繼承して居る。第十七章には大德は必ずその位を得、必ずその祿を得、必ずその名を得、必ずその壽を得と云つてゐる。即ち政治に關する方面のみに就いて言へば、大德ある者は天が必ず之に命じて億兆の君師たらしむるのである。凡そ天下を治むる志ある

者は下位に在りては其の抱負を行ふ機會がない。必ず上たる者に信任せられねばならぬ。故に本章に於ては信任せらるる方法として「下位に在りて上に獲られざれば、民得て治むべからず。」と述べ、更に上に獲られる道を說き、最後に善に明にして身を誠にするに歸着してゐる。即ち誠なれば上位に立ちて民を治め、自己の經綸を行ふを得るに至るのである。故に第三十二章に「唯天下の至誠よく天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地の化育を知ることを爲す。」と述べてゐる。

更に本章に於て治國の法として九經を擧てゐるが、大體に於ては大學と同じく修身を以て政治の大本としてゐる。親レ親は齊家に當り、子二庶民一也と、來二百工一也との二は治國に當り、柔二遠人一也と懷二諸侯一也との二は平天下に當る。此外、尊レ賢也、敬二大臣一也、體二群臣一也の三者は臣下に臨む法であつて、大學には見えない。即ち中庸の議論は大學よりも一層詳細となつて居るのである。

天下の政治は制度文物がいかに完備してもこれを運用する人才がなければ徒法空文に歸する事になる。故に本章に於て「文武の政、布いて方策に在り、其人存すれば其の政擧がり、其の人亡ければ其の政息む。」といつてゐる。故に尊賢を以て修身の次に置き、且つ大臣を敬し群臣を體するの二を擧げたのである。人君が身を以て民に臨み、之を助くるに賢良の臣を以てして、下、人民に臨むに

赤子を愛するが如くならば、天下の治平は期して待つべきである。中庸の所説は簡單であるが、天下治平の大法は此外に出でない。

右第二十章

此の第二十章は孔子の言を引いて以て大舜文武周公の緒を繼ぎ、其の傳ふる所の一致してゐることを明かにしたものである。蓋し費隱を包ね小大を兼ねて以て十二章の意を終へ、此の章に至つて誠を語ること始めて詳である。所謂誠は實に中庸の樞紐である。

自誠明、謂之性。自明誠、謂之敎。誠則明矣。明則誠矣。

【直譯】誠よりして明なる之を性と謂ふ。明よりして誠なる之を敎と謂ふ。誠なれば即ち明なり。明なれば即ち誠なり。

【通釋】其の德が誠であれば、自然に其の明、照さない所のないのは聖人の德であつて、所謂天命の性であり、天道である。先づ善を明かにして、而して後に誠の德を得るのは賢人の學であつて、所謂道を修むるの敎であり、人道である。誠であれば即ち當然明であり、明であれば則ち必ず誠たるべきも

のである。性のまゝに行する所の生知安行の聖人も、教に由つて到達する所の學知利行の賢人も結局は同じく一誠に歸するもので、遂に天人の別なきに歸するものである「誠則明矣、明則誠矣」とは此の意である。

語釋 自（鄭注には自は由の意であると訓いてある）

餘論 此の章は上章の「誠者、天之道也、誠之者、人之道也」を承けていつたのである。又首章に於て「天の命ずる之を性と謂ひ性に率ふ之を道と謂ひ道を修むる之を教と謂ふ」といひ、此の章では性と教との二字で中庸の樞紐である所の誠を說くところ、よく首章と照應してゐる。

至誠よりして、善に明かなるは、聖人であつて生知安行のことである。善に明かなるより其の身を誠にするのは賢人であつて學んで之を知るのである。天人同一體や、聖人學んで至るべき論は之に本づいて起るべき筈て、その學者を鼓舞するの意切なるを知るべきである。

右第二十一章。子思承上章夫子天道人道之意、而立言也。自此以下十二章、皆子思之言、以反覆推明此章之意。

【訓讀】右第二十一章。子思上章の夫子天道人道の意を承けて言を立つるなり。此れより以下の十二章は皆子思の言にして、以て此の章を反覆推明するなり。

【通釋】右第二十一章は子思が上章の孔夫子の述べられた天道と人道との意を承け継いで言を立てたので、此の章より以下の十二章は皆子思が述べたので、此の第二十一章の意を繰り返して推し明かにしたのである。

唯天下至誠、爲能盡其性。能盡其性、則能盡人之性。能盡人之性、則能盡物之性。能盡物之性、則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育、則可以與天地參矣。

【訓讀】唯々天下の至誠、能く其の性を盡すことを爲す。能く其の性を盡せば、則ち能く人の性を盡す。能く人の性を盡せば、則ち能く物の性を盡す。能く物の性を盡せば則ち以て天地の化育を贊す可し。以て天地の化育を贊す可ければ、則ち以て天地と參す可し。

【通釋】たゞ天下にこれ以上の者はないといふ程の至誠なる聖人にして、はじめて能く其の己に賦與せられたる天命の性を察し、之れによつて細大精粗少しも盡さぬ點はない程に己の性を完全に擴充し發揮する。人も物も其の形こそは夫れ〴〵異つてゐても、性は皆物の一源で、人の性、物の性も亦我が性であるから、我が性を完全に擴大充實して之を發揮すれば、人の性を盡し、人の性を盡せば、亦物の性を盡すことが出來る。

聖人が政教を設けて天下の人をして各々其の材を達し、其の徳を成就せしめるのは、是れ即ち人の性を盡し發揮せしめるのである。又法制を修め、天下の物を擧げて其の宜しきに由つて、其の用を制するのは是れ即ち物の性を盡すのである。能く物の性を盡せば、則ちかかる聖人は天と地とが萬物を生々發育せしめる事業を贊助することが出來る。以て天地が萬物を化育する事業を贊助することが出來れば則ち天地人の三才として天と地と共に相を並べて立つことが出來るのである。これは誠よりして明なる者の事である。

【語釋】天下至誠（誠の主體であつて、天下よく之に加ふるなき聖人の徳をいふので、天下にこれ以上の者はないといふ聖人の徳。）○盡物之性（己が性を完全に盡せば、他人の性をも盡し、物の性をも盡すことが出來るとは、性は萬物の一源であつて物の性も亦我が性も悉く天命の性であるからである。盡とは完全に擴大充實すること。）○贊天地之化育（贊は助けること。化育は萬物を生々發育せしめること。至誠能く人物の性を盡せば、能く化育の及ばぬ所を助けて、大に天地に功がある。）

卽ち天地と並び立ちて三となることができる。天人の爲す所各々分がある。人の爲し得ることで、天の爲し得ざる所もある。天はよく物を生ずるが、耕耘は必ず人力を用ひる。水はよく物を潤すが灌漑は必ず人を用ひる。火はよく物を燃すが、炊爨は必ず人を用ひるごときはこれである。）

○與天地參（天地と肩を並べ立つて三つとなること。）

【餘論】此の章は誠よりして明かなる者のことで、卽ち誠を性としてゐる聖人のことを述べたのである。天地は物を生ずるけれども其の用を盡すことは出來ない。必ず聖人を待つて各々其の性を盡すことが出來るので、これ卽ち聖人が天地の化育を贊助するので、其の德は天地と並び立つて三才といはれる譯である。聖人が天地の化育を贊すとは首章の「天地位焉。萬物育焉。」を承けて末章の「知ニ天地之化育一。」を喚び起してゐるのである。

「盡ニ物之性一。」といふことについて尙、一言附記しよう。天下の物をして各々其の生を遂げて其の用を極めしめることで、之を生ずるには地あり、之を居くには處あり、之を取るには時あり、之を用ふるには節あることで、物をして各々其の性を擴充し發揮せしめることである。例ば牛馬の性を盡して牛には重きものを牽かしめ、馬に乘つて遠きに致したり、又木の性を盡して舟や車を造り、梁や柱を作るが如きこれである。

右第二十二章

其次致曲。曲能有誠。誠則形、形則著、著則明、明則動、動則變、變則化。唯天下至誠爲能化。

【訓讀】其の次は曲を致す。曲なれば能く誠あり。誠あれば則ち形はれ、形はるれば則ち著しく、著ければ則ち明かに、明かなれば則ち動かし、動かせば則ち變じ、變ずれば則ち化す。唯天下の至誠能く化することを爲す。

【通釋】前の第二十二章では天道をいつたのであるが、それを承けて、此の章は人道をいつたのである。

前章にいつたやうに、たゞ至誠の聖人はよく性を盡すことが出來るけれども、其の次、即ち聖人より一段下つた賢人以下の者は、天から受けた性が、事に臨み、物に處して、その善い一端、一隅があらはれるものについて、之を推し極める。即ち事に臨んで日常發見れる孝心とか、仁心とか、或は弟、或は義などを推し極める所から著手する。而してよく其の一端一隅を推し極めることが出來れば、遂に能く誠なることが出來る。此のやうに善心のあらはれる一端一隅を推して各々其の極點に至つて、

誠があつて中に充實するやうになれば、その德は自然に外に形はれる。その德が自然に外面にあらはれるやうになれば、愈々其の德は著しくなり、著しくなつてくれば、愈々明かになつて、其の光が輝き渡るやうになつてくる。誠の德の光が皎々と明かに輝くやうになれば、自然に人の心を動かすことになり、人の心を動かせば人の心は從つて變ずることになり、變ずることが久しければ、遂に化して、その然る所以を知らないで然るやうになる。このやうに賢人が修養する極致は、所謂たゞ天下の至誠の聖人で始めて能く物を化するの域に達し至ることが出來て、聖人と差異がないに至るものである。これは蓋し人の性は皆同じでない者はないが、氣稟の差によつて性の全體をよく盡してゐる聖人と、然らざる者との差はあつても、其の發現の一端一隅を推し極めれば、元來同じ性をうけてをる人間故、聖人と同樣になることが出來るのである。此の章は第二十一章の「明より誠なる」者のことをいつたのである。

語釋　其次（上章は、天下の至誠、即ち聖人のことを述べ、此の章は其の次といふ。即ち賢人以下、凡て誠の未だ完全に至らぬ者をいふ。）　○致曲（致は推し致すこと。推し極めることである。曲は、一偏、一隅である。鄭玄の注には、小小の事とある。曲を致すとは或は孝、或は弟、或は仁、或は義等、事に臨んでその發見する處の一端について之を推し極めることゝ孟子の所謂惻隱・羞惡・辭讓・是非の四端の心を擴充して、仁・義・禮・智に至らしめるやうなものである。）　○形（アラハルと讀む。中に誠があれば、外にあらはれること。）　○著（鄭玄の注に形の大なるものとある。）　○明（鄭玄の注に著の顯なるものとある。）　○動（鄭玄の注に人心を動かすなりとある。孟子の所謂至誠にして未だ動かざるものはあらずとは此の意を承けて發明したのである。）　○變（物が從つて變じ態

を改めて善となることである。）○化、鄭玄注に變の久しき則ち化すとある。全然之に化して、自身では化したといふ所以を知らないに至ることをいふのである。著、明、動、變、化は皆、誠が著、明、動、變、化することである。）

餘論 孟子の盡心の章に「君子の性とする所は、仁義禮智、心に根す。其の色に生ずるや、睟然として面に見はれ、背に盎れ、四體に施き、四體言はずして喩る。」とある「君子の性とする所」といふのは、即ち誠である。「其の色に生ずるや、睟然として面に見はれ、背に溢れ、四體に施く」ことといふのは、「誠なれば形はれ、形はるれば著しく、著しければ明かなり。」といふことと同意味である。「四體言はずして喩る。」といふのは、「明かなれば則ち動かし、動かせば則ち變じ、變ずれば、則ち化す。」と同様のことを言つたものである。孟子の言と參照したならば分り易からう。

右第二十三章

至誠之道、可以前知。國家將興、必有禎祥。國家將亡、必有妖孽。見乎蓍龜、動乎四體。禍福將至、善必先知之、不善必先知之。故至誠如神。

通釋 至誠の道は以て前知す可し。國家將に興らんとすれば、必ず禎祥あり。國家將に亡びんとすれば、必ず妖孽あり、蓍龜に見はれ、四體に動く。禍福將に至らんとすれば、善必ず之を知り、不善

必ず先づ之を知る。故に至誠は神の如し。

通釋 至誠の道は如何なる天下の事に於ても、前以て豫知することが出來るものである。しからばその豫知することは如何やうのことかといへば、例へば、國家が將に勃興しようとする時には、必ず勃興すべき兆候であるところの種々のめでたいしるしがあらはれるものであり、又、國家が將に衰へ亡びようとする時には、必ず衰亡すべき萠芽であるところの種々の不祥のきざしが有つて、或は蓍策、即ち筮竹や、龜甲、即ち龜の甲のうらなひにあらはれ、或は、其の人の動作や威儀の間に動きあらはれるものである。平凡人は欲心の爲に心眼が暗くなつてゐるから、此の先兆を察することが出來ないけれども、至誠の人は、公平無私にして、心眼が明かであるが故に、禍も福も、その將に至らうとするときには、其の幾微を察して、善も必ず之を豫知し、不善も亦必ず先づ之を豫知するものである。それ故に至誠は神のやうなもので、凡人には到底知ることが出來ないことをも知るものである。
此の章は豫言の可能なることを言つてゐるけれども、徒に術數を弄して豫言し、以て人を惑はすものとは全く別であることを知らねばならぬ。

語釋 禎祥　(瑞祥と同じ。福のきざしである。孔穎達は國にもと有つて、今は異るを禎といひ、もと無くて、今は有るのを祥といふ。譬へば文王の時、赤雀の瑞があり、國もと雀あり、今は赤雀が來る、是れ禎である。國もと鳳はないのに、今鳳が來るあり、是れ

祥であると說いてあるが、必ずしもこのやうに分けて說かなくともよからうと思ふ。）　○妖孽（禍のきざしである。說文に衣服や、歌謠や、草木の怪は之を妖といひ、禽獸や蟲蝗の怪は之を孽といふとある。周柯山は付ふ、禎祥は必ずしも甘露醴泉ばかりではない。濟々たる多士がこゝに輩出すれば、其の將に興らうとすることを知ることが出來る。妖孽は必ずしも怪物の言ひ、神が降るやうなことばかりではない。婦人に長舌があり、人才が缺亡すれば、其の將に亡びんとすることがわかると。最も要領を得た論であると思はれる。）　○蓍龜（蓍は蓍策卽ちメドギといつて筮する所のものである。今は普通に竹を用ひるから之を筮竹といふ。蓍は草の一種で、一根から數十の莖を叢生し、三千歲つて積もる。うらないに用ひる筮竹も、もとは蓍草の莖を用ひたものである。大戴禮の記す所によれば、天子の蓍は、長さ九尺。諸侯は七尺。大夫は五尺。士は三尺であるといふことである。龜は卜する所のものである。卜に用ひる龜は蔡の池から出るので、又之を蔡ともいふ。論語の公冶長篇に臧文仲が蔡をおくとあるのは、卜に用ひる大龜を藏しておいたのである。逸周書によれば、天子の龜は尺二寸、諸侯のは八寸であるといふことである。卜するには龜の甲を灼いて、其の兆を見て吉凶を判斷するのである。）　○動乎四體（四體とは二つの手と、二つの足のことで、卽ち四肢である。又身體をいふことにもなる。この文では身體にあらはれる威儀動作のことをいふ。春秋の定公十五の左傳に、邾の隱公が來朝し、玉を執ることが高くて、其の容儀は仰いであつた。定公は玉を受けることが卑く、其の容儀は俯してあつた。子貢が之を評して、禮を以て之を觀れば、二君とも皆死するであらうと豫言した。果して其の年に定公は薨し、後、哀公の七年に魯は邾を伐つて邾子を捕へたといふことが見えてゐる。これは魯公が衰へんとする兆が定公と隱公との威儀動作の間にあらはれたので、子貢は之を見て、其の亡びを前知したのである。鄭玄は四體は龜の四體をいふといつてゐるが從はれない。）

右第二十四章

誠者自成也。而道自道也。誠者物之終始。不誠無物。是故君子誠之爲貴。

誠者非自成己而已也。所以成物也。成己仁也。成物知也。性之德也。合內外之道也。故時措之宜也。

【通釋】誠は自ら成るなり。而して道は自ら道びくなり。誠は物の終始、誠ならざれば物無し。是の

故に君子は之を誠にするを貴しと爲す。誠は自ら己を成すのみに非ざるなり、物を成す所以なり。己を成すは仁なり。物を成すは知なり。性の德なり。內外を合するの道なり。故に時に之を措いて宜しきなり。

【通釋】誠はそれ自身根本であり、本體であり、完全なものであるから、他の物の力を借ることがなくて、誠自身で成就するものである。而して道は、又、それ自身が根本であり、本體であつて、他物の助を待たないで、自ら導びくものである。誠は卽ち道であり、道は卽ち誠であつて、誠と道とは二つのものではないのである。德からいへば、卽ち誠であり、萬物は皆之に由つてをるから道と名づけるので、その名は異つてゐるけれども、その實は一つである。そこで、萬事萬物は、皆、誠の道によつて生じたり滅したり、始まつたり、終つたりするものであつて、若しも一旦、誠の道の外に出たならば存在の意義を失ふものである。それ故に誠は物の終始であつて、誠でなければ物はないと云ふのである。要するに萬事萬物は、徹頭徹尾、誠の外に出ることは出來ぬものである。以上は誠の道を總論したのであつて、以下は專ら君子の誠であることを說くのである。さて人はもとより天賦の誠を以て我が性として居るものであるから、君子たるものは誠ならんことを求むるを貴しとなし、苟くも誠

に背くことがないのである。誠はこのやうに完全自足の道であるから、それ自ら自己を完成することは勿論であるが、自己を完全に成就するばかりでなく、仁徳が中に備はれば、自然にその徳が物に及んで、物をして又それぞれ完全に成就せしめるものである。自己を完全に成就せしめるのは仁であり、物を完全に成就せしめるのはその作用であつて、卽ち知といふべきものである。而して此の仁と知とは、吾人が天賦の本性に固より具つて居る所の徳である。凡そ性は萬物の一源であるから、この誠の德は萬物も亦皆之を具有して居るのであつて、物と我と、外と內とは本末は相違のあるべきものではないので、天賦の誠は卽ち是れ內外を合一し、物我を一體にすべき道である。それ故に誠の道は時に臨み、萬變の境遇に應接して之を用ひて萬事を措置して皆その宜しきを得るのである。例へば、中、實誠であれば、君に事へても、又人に交つても、人民を治めても皆その時その時の宜しきを得るものであつて、卽ち物を成す所以である。

【語釋】誠者自成也（誠はそれ自身、根本であり、本體であり、他の物の力を借りたり、助けを待つたりするものでない意である。道は自ら道びくなり」といふのも、亦同じ意味であつて、誠は卽ち道であり、道は卽ち誠であつて、誠と道とは二物ではない。他の方面から名づけて誠といふ、萬物皆これに由る方面から見て道と名づけたので、名は異つてゐても、其の實は一である。朱子の註にこれを分けて說いてゐるのはよくないと思ふ。）〇誠者物之終始、不誠無物。（萬事萬物皆誠によつて始まり、誠によつて成り、誠によつて生じ、誠によつて死し、凡て誠の外に出ることは出來ない。若し一旦誠の外に出たならば存在の意義はないのである。例へば日月が東に出て、西に沒し、寒暑が往つたり來たりし、草木が榮えたり枯れたりし、國家が盛になつたり、衰へたり、人事の作爲時變の如き一として

誠でないものはなく、若し誠でなければ、一切の秩序は破壞せられて了ふべきものである。卽ち上第十四章の物に體して遺す可からずといふのと同じ意味と見るべきである。讀書についていふならば、心が書上に在る間は始あり、終あり、心が書上に無ければ、書を讀まざるが如きである。程伊川は俗語の徹頭徹尾と云はんが如しといつて居るが、これも亦誠は中の終始の意をよく言ひ表はして居ると思ふ。）○君子誠之爲貴（第二十章の之を誠にするは、人の道なりと同じ意に解くがよいと思ふ。）○誠者非自成己而已也。所以成物也（中心に僞なく、自ら其の心を欺くことなければ内に於て既に己の心を成したものである。己の心を誠にすれば百事の行爲は皆中心の誠から出るから、虚僞がなくて、君に事へては忠、親に事へては孝、人と交つては信といふやうに百事誠を成就することになる。）○成己仁也（自己を完成すれば、完全なる仁德が自己に備はる。それ故に己を成すは仁であるといふ。朱子の註には體の存するなりとあるが、それは誠の體を仁とするので此の意である。）○成物知也（既に自己を完成して仁德が内に備はれば、自然に百行の上に及んで忠・孝・弟・信等のこともそれぞれ成就するやうになる。これ卽ち仁德の作用で、卽ち知である。故に朱子の註には知は用の發するなりとあるが誠の用を知となすといふので、此の意である。知識の明かなることは、萬變の境遇に應じて誤なからしめる所以であつて、卽ち物を成すことになるのである。）○合外内之道也（内とは心をいふので己を成すは仁なりの己を指し、外は百事百行をいふので、物を成すは知なりの物を指すのである。心と行とが一致し、卽ち外内が合一することを誠といふのである。）○時措之宜也（措は措置の措で、物事を處置することである。百事を處置し、萬事に接應して、時を以て之を用ひて宜しきを得ることである。）

餘論　此の章は天道から人道に言ひ及ぼしたものである。己を成せば誠の體、存して仁である。物を成せば誠の用發して知である。而して仁知は性の固有する所である。誠を己に得れば、事に見はるるもの必ず其の施す所に隨つて利ならざるはない。

右第二十五章

故至誠無息。不息則久、久則徵、徵則悠遠、悠遠則博厚、博厚則高明。博厚

所以載物也。高明所以覆物也。悠久所以成物也。博厚配地、高明配天、悠久無疆。如此者不見而章、不動而變、無爲而成。

【訓讀】故に至誠は息む無し。息まざれば則ち久しく、久しければ則ち徵あり、徵あれば則ち悠遠なり、悠遠なれば則ち博厚なり、博厚たれば則ち高明なり。博厚は物を載する所以なり。高明は物を覆ふ所以なり。悠久は物を成す所以なり。博厚は地に配し、高明は天に配し、悠久は疆り無し。此の如き者は、見さずして章はれ、動かさずして變じ、爲すこと無くして成る。

【通釋】第二十五章で誠は性の徳であることを述べ、性は天から得た所で、間斷はないものである。それであるから「故に」といつて上の文をうけて筆を起し、天道について述べようとするのである。

これ故に至誠は一刻の間斷もないものである。間斷が無ければ則ち中に於て久しきに亘つて行はれるもので、常住不滅なものである。たゞ一兩度や、一兩日ばかりでは、その效驗も覺束ないけれども、久しければ自然にその徵驗が外にあらはれるものである。既に効驗が外にあらはれるやうになれば、かゝる聖人の功業は愈〻悠遠に之を行ふやうになつて窮りが無くなる。既に悠遠に行ふやうになれば、

其の積り積むことが廣博にして深厚となり、既に廣博にして深厚となればその、外に發揚する事も自然に高大にして光明があるやうになる。さて積む所が、廣博で深厚であれば、萬物を載せても重しとはしない。即ち博厚は物を載せる所以である。發揚することが高大であつて光明があれば、萬物を覆うても狹いとはせぬ。即ち物を覆ふ所以である。この博厚と高明とは、至誠息まざるの久しきと、微驗の悠遠なるとの二つが合した結果であつて、いふまでもなく一時的のものではない。必ず悠久なるものである。悠久は即ち物を成就する所以である。至誠の徳をそなへた聖人が天地とその用を同うすることは此の通りである。さて博厚がよく物を載せるのは、地が萬物を載せるやうなものであるから、博厚の徳は地が博厚で物を載せるに配してならぶことが出來る。高明がよく物を覆ふのは、天が萬物を覆ふやうなものであるから高明の徳は天が高明で物を覆ふにならべ配することが出來る。而してその悠久の徳は天地が悠久で窮り無きとならべることが出來るものである。至誠の聖人が天地とその體を同うすることは此の通りである。此のやうに至誠の域に達した聖人は、其の徳、地と同じく、示さうとする意がなくして、その功用は自然にあらはれ、天下の人は仰いで之を見る。その徳は天と同じく、人が動かさうとする意がなくして、自ら天下の人を感動せしめ、萬物を變化せしめて、無爲

自然にして成就し、窮まることなきものである。是れ皆、至誠の德である。實に至誠は中庸の樞紐であつて、此の節に誠を論ずること尤も精細を極めてゐる。讀者之を再三して體得すべきである。

語釋 至誠無息（至誠の永遠であることを言うたので、一刻も間斷なく、永遠に存在することをいつたのである。）○久則徵（久は中に常あること。徵は效驗である。久しければ自然に效驗がある。たゞ一日兩日、又は一度二度のみでは其效驗が無いのは常である。）○徵則悠遠（事もし效驗があれば、愈々之を永遠に行ふことが出來る。それ故に徵があれば、則ち悠遠といつたのである。）○悠遠（中に存することが久しければ、外に效驗があらはれること、益々悠遠で窮りが無い。徵から以下悠遠、博厚、高明は皆、外に驗あることを以て言つたのである。）○博厚（廣厚で深高。）○高明（高大で光明。）○悠久（悠遠にして久しいことである。朱註には內外を兼ねて之を言ふとある。息まざれば久とある久は、即ち內に久しいことであり、徵あれば悠遠とある悠は外にあらはれて久しいことである。）○不見而章（示すことはないけれども、その功、自然に彰著である。たとへば、地は未だ物を生ずるに意がないけれども、百穀草木、禽獸蟲魚、皆、鬱然として觀るべきが如きをいうたのである。故に朱註に見さずして章は、地に配するを以ていふとある。）○不動而變（動かせば形迹がある。動かさざるは、天が萬物を變化して形迹がないやうなものである。故に朱註に天に配するを以ていふとある。）○無爲而成（此の一句は上の二句を總べてゐる。示さず動かさずは即ち無爲である。天地は共に悠久なるものであるから、朱註には此の句を無疆を以ていふと解してゐる。）

餘論 朱子曰く、久とは中に常あることであり、徵とは外に效驗のあらはれることである。悠遠、博厚、高明は聖人の功業が、著見すること此の如しと說いたので、進德の節次として解するは誤であると。これは聖人の功業を積み來れるを統說したのである。

天地之道、可二一言而盡一也。其爲レ物不レ貳、則其生レ物不レ測。天地之道、博也、厚也、高也、明也、悠也、久也。

訓讀 天地の道は、一言にして盡くす可きなり。其の物たる貳ならざれば、則ち其の物を生ずる測られず。天地の道は博なり、厚なり、高なり、明なり、悠なり、久なり。

通釋 これより以下は、天地を以て至誠息む無きの功用を明かにしたものである。夫れ天地の道は、至大であつて言語を以て形容することはできぬやうであるけれども、其の主宰の道は一言にして盡くすことが出來るそれは他ではない、卽ち誠である。天地の物たる至誠純一であつて、貳にはなれそむくことなく、雜駁でないからして、則ちよく萬物を生じて、其の多いことは神妙測り知ることが出來ぬのである。要するに天地の道は、誠一であつて、貳ならざるが故に、能く其の極盛を致して、地は廣博を極め、深厚を極め、天は高大を極め、光明を極め、天地は、悠遠を極め、長久を極めて、物を生ずるの功あることは、下文に言ふやうなものである。

語釋 一言（言は字といふ意。誠の一字といふ意である。）○不貳（貳は二つになり、はなれそむくこと。貳ならざるは卽ち一で ある。貳ならざるが故によく誠なることが出來るのである。）○博也厚也高也明也悠也久也（博と厚とは地についていひ、高と明とは天について いひ、悠と久とは天地をすべていつたのである。）

餘論 此の一節は聖人の誠は兆民を化成し、天地の誠は萬物を化成するもので、其の理は一である ことをいつたのである。

今夫天、斯昭昭之多。及其無窮也、日月星辰繫焉、萬物覆焉。今夫地、一撮土之多。及其廣厚、載華嶽而不重、振河海而不洩、萬物載焉。今夫山、一卷石之多。及其廣大、草木生之、禽獸居之、寶藏興焉。今夫水、一勺之多。及其不測、黿鼉蛟龍魚鼈生焉、貨財殖焉。

訓讀 今夫れ天は、斯れ昭昭の多きなり。其の窮り無きに及んでは、日月星辰繫り、萬物覆はる。今夫れ地は一撮土の多きなり。其の廣厚なるに及んでは、華嶽を載せて重しとせず、河海を振めて洩さず、萬物載せらる。今夫れ山は一卷石の多きなり。其の廣大なるに及んでは、草木之に生じ、禽獸之に居り、寶藏興る。今夫れ水は一勺の多きなり。其の測られざるに及んでは、黿鼉蛟龍魚鼈生じ、貨財殖す。

通釋 今夫れ天はその一部分を以ていへば、昭々として小しく明かなるものであつて、それが多く集まつたものに過ぎないのである。然しながら、其の高大にして窮まりない處の全體に就いていへば、

日や月は天に運行し、星辰は天に布列して、日月星辰は皆天につながりかゝつて居り、萬物は皆、天の爲めに覆はれて居る。これ天が物を生ずること神妙で測ることが出來ないのである。今夫れ地はその一部分を以ていへば、一と撮みの土であつて、それが多く集つたものに過ぎないのである。然しながら、その廣厚なる處の全體に就いていへば、地は太華山や嶽山のやうな大なる山を載せても重しともせず、黄河や大海を收めても、之を收めかねて外に洩らすやうなことはなく、一切の萬物を載せてゐる。地が物を生ずることの測るべからざることは此の通りである。天地が生ずる所の物の中では山と水とが最も大なるものであるから、試みに山と水とに就いて言ふならば、今夫れ山はその一と處をさしていふならば、小さい一塊の石に過ぎないが、それが多く集つて廣大なる山となれば、草木もこゝに生じ、禽獸もこゝに居り、玉石のやうな多くの寶物も山から出るのである。今夫れ水は、その一と處を指していふならば一すくひの水に過ぎないのであるが、それが多く集まつて、深く廣く測るべからざるに至れば、黿鼉や、蛟龍や、魚鼈のやうなものが、水中に生じて、魚や鹽のやうな多くの貨財も增殖するものである。山水が物を生ずることの測られないこと此のやうであつて、これが天地の物を生ずること測られないものである。

語釋 昭昭（鄭玄の註に「昭昭は猶ほ耿耿のごとし」とある。管を以て天を見るやうに、天の一部分を以ていへば、天は小しく明かなるものに過ぎない。）○及其無窮也（天の窮り無い全體を舉げていうたのである。）○星辰（星はホシ。辰は日月の會する所で、凡てこれを十二とする。漢書律暦志によれば十二次は星紀・玄枵・娵訾・降婁・大梁・實沈・鶉首・鶉火・鶉尾・壽星・大火・析木である。又日月星の總稱としていふ。）○撮土（撮はツマム。一とつまみの土。錐を以て地を指すやうに、地の一部分を以ていへば、地は一とつかみの土に過ぎない。）○及其廣厚（地の全體を舉げていふ。）○華嶽（河海と對文であるから二山の名と見るがよい。雍州の太華山と豫州の嶽山とをいふ。）○振（鄭玄の註に「振は收也」とある。朱註も之によつてゐる。）○卷石（鄭註は「卷は區である」とある。小さいことである。小石。）○一勺（一とすくひ。勺は水をくむ具。ひしやく。）○黿鼉蛟龍魚鼈（黿は大きなすつぽん。鼉は說文に「水蟲」とある。陸璣曰く、「鼉は形、蜥蜴に似て長さ丈餘あり、其の甲は鎧のやうな皮は堅厚にして鼓を冒ふべし」。蛟は龍の種類。ミツチといふ。）

餘論 朱子曰く、此の節の四條は皆その貳せず、息まざるに由つて盛大を致して能く物を生ずるの意を發明したものである。然れども天地山川は實に積累に由つて、而して後に大になつたのではない。讀む者は辭の爲に文の意を害せないがよいと。文意のある所をよーくみ取つて讀まねばならぬ。此の一節は天地が萬物を覆ひ、萬物を載せることを言うて、上文の不貳の聖人の覆載の德に應じ、又山川が物を生ずることを言うて、上文の物を生ずる測られないことを承けたのである。四條とは天地山川をいふのである。」

詩云、維天之命、於穆不已。蓋曰天之所以爲天也。於乎不顯、文王之德之

純。蓋曰文王之所以爲文也。純亦不レ已。

【訓讀】詩に云く、維れ天の命、於穆として已まずと。蓋し天の天たる所以を曰ふなり。於乎顯ならざらんや、文王の徳の純なると。蓋し文王の文たる所以を曰ふなり。純も亦已まざるなり。

【通釋】天が至誠で已まないことは、詩經の周頌の維天之命篇の首章に、「維れ天の命はあゝ穆々として深遠であつて、しばらくも息むことがない」とある。蓋し思ふに、天の天たる所以は、この息まない所にあることを言つたのである。又聖人が至誠で已まないことは、維天之命篇の次章に、「ああ周の文王の徳が純一であつて雜りがなく、隨つて終始變ぜぬから、どうして顯はれないことがあらうや、きつと顯はれる。」とあるのは、蓋し思ふに、文とは、道德の盛なるあやをいふのであるから、文王が盛なる道德があつて、文と諡せられたわけをいふのである。純一無雜であれば、亦必ず止まないものである。

此の詩を引いたのは、始めに天の天たる所以は已まざるにあり、文王の文と諡せられた所以は純にあることをのべ、最後に斷案を下して、「純亦不レ已」といひ、天地と聖人と共に至誠息むなきの意

を明かにしたのである。

【語釋】詩云（詩は詩經の周頌維天之命の篇。）○於（アアと讀む。感歎の詞。）○穆（深遠の貌。）○於乎（アアと讀む。感歎の詞。）○不顯（豈に顯ならざらんやと反語に讀む。顯はれないことがあらうや、あらはれる意。詩には此のやうな用例がある。無競維人の句を「競ふこと無からんや維れ人」と讀むも其の一例である。）○純（純一にして雜らないこと。上文の不已と同じ意。）○文（道德の盛なる者に對して文と謚した。純一にして已まぬは德の盛なものであるから、文王を文と謚した意である。）○文王之所以爲文（天の天たる所以、聖人の聖人たる所以と同格の文である。）

【餘論】第二十章以下誠を說くこと極めて詳細である。而して其の誠を反覆していふ所、天道は卽ち人の本性であつて、之を誠といつてゐる。今その概略を述べよう。

中庸の開卷第一に「天命之を性と謂ひ、性に率ふ、之を道と謂ふ。」といつてゐる。性は卽ち天賦であつて、之に率へば、卽ち道である。道はもとより至大至尊であるが、吾人の天性の外に道は無い。故に天道は卽ち人道、人道は卽ち天道である。換言すれば天地の法則は卽ち人の本性であつて、子思は之を名づけて誠と云うたのである。卽ち誠は天地の法則であつて、同時に人の本性である。第二十章に「誠は天の道なり。」とはその意味を云つたものである。隨つて、誠は完全自足のもので、人爲的に作つたものでない。萬物は皆この誠から出來ないものはない。故に第二十五章に「誠は自ら成るなり。而して道は自ら道びくなり。誠は物の終始、誠ならざれば物無し。是の故に君子は之を誠にする

を貴しとなす。誠は自ら己を成すのみに非ざるなり。物を成す所以なり。」といつてある。

誠が天地の間に行はれることは、吾人は之を直覺的に知ることが出來るが、之を見聞することは出來ない。誠は、吾人の知覺を超越したものである。故に最後の第三十三章に至つて、「上天の載は、聲も無く、臭も無し。至れり。」といつてある。誠は無聲無臭で、知覺を超越してゐるが、儼然として存在してゐる。子思は之を鬼神に譬へてその意を說いてゐる。第十四章の「鬼神の德たる其れ盛なるかな云々。」は即ちそれである。

誠は天道であり、宇宙の法則であるから、遍滿充塞して在らざる所がない。第十六章に「物に體して遺す可からず。」といひ、又第十二章に「君子の道は費にして隱なり云々。」といつたのである。

此のやうに誠は天地の法則であるから、無始無終であり、恒久不變である。第二十六章に「至誠は息む無し云々。」といつてあるのがそれである。誠は實に天と人と合一する契機であり、物と我と一體となる樞紐である。それ故、第二十二章に唯〻天下の至誠なる聖人にして能く其の性を盡し、人の性を盡し、物の性を盡し、遂には天地が萬物を生々發育せしめる事業を贊助することが出來るといつてゐるのである。

聖人とは實に誠を體驗し天地の德と合一した完全人である。それ故吾人修養の目的は誠に到達するにある。第二十章に「誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり。誠は勉めずして中り、思はずして得、從容として道に中る。聖人なり。」といつてある。

此の至誠の域を稱して、子思は之を中和といふ。第一章に「喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂ふ。發して皆節に中る之を和と謂ふ。中は天下の大本なり、和は天下の達道なり。中和を致して、天地位し、萬物育す。」といつてゐる。喜怒哀樂は感情である。その未だ發せざるは性である。人が未だ外物に接しないときは、その天性は渾然として偏る所がないから、之を中といふ。

天性が外物に感じて情となるとき、其の正を失はず、皆その程合に中るから、之を和といふ、體用からいへば、中は本體で、和は作用である。その體が中でなければ、發して和となることは出來ぬ。その用が和となるのは、その體が中であるからである。體用を兼ねて中和といひ、中和を致せば天地も位し、萬物も育するのである。然るに第二十二章に至誠であれば、よく天地の化育を贊け、以て天地と參することが出來るのであるから、中和を致した結果と、至誠の結果とは全然同一である。それ故、中和は卽ち至誠であるといつてよからう。換言すれば、その形式の方向から中と云ひ、內容の方

而から誠と云つたのである。

中とは儒家にあつては堯舜以來の教であつて、堯が位を舜に讓らうとするとき「允に其の中を執れ。」(論語の堯曰篇)と教へ、舜が禹に授けるにも亦此の語を以てした。其の他舜の四德、皐陶の九德、洪範の皇極や、易などは皆中を重んじないものはない。子思は古來の教を採り、孔子の說によつて中庸の學說を組織したものである。中は至誠であつて喜怒哀樂の未だ發しない狀態で、吾人修養の目的である。

右第二十六章

大哉聖人之道。洋洋乎、發育萬物、峻極于天。優優大哉、禮儀三百、威儀三千。待其人而行。故曰、苟不至德、至道不凝焉。

〔訓讀〕大なるかな聖人の道、洋洋乎として萬物を發育し、峻、天を極む。優優として大なるかな、禮儀三百、威儀三千。其の人を待つて行はる。故に曰く、苟も至德ならざれば、至道凝らず。

通釋 此の節は「之を誠にするは、人の道なり。」の意を說くので、聖道は人を待つて行はるゝをいふのである。

聖人の道は大いなるかな。聖人の道の效果は、洋洋として流動充滿し、陰陽は調和し、風雨は時を得て萬物を發育せしめ、其の高大なることは、天を極めて、その大なること外なく、又聖人の道は優優と充足すること餘りあつて、禮の大綱は三百もあり、禮の細目は三千もあつて、皆この道でないものはなく、その小なること內なきものであるが、此の洋洋たると優優たるとの兩方面は凡てその人、即ち至德の聖賢人を待つて後はじめて行はれるもので、苟くも其の人が無ければ道は行はれるものでない。それ故に曰く、苟くも至德の人でなければ、その大なること外なく、その小なること內なき至道は、成就せぬものである。

語釋 洋洋（流動して充滿する意。）○峻（鄭玄の註に高大なりとし、朱註はこれによつてゐる。）○優優（充足して餘ある意。）○禮儀三百（禮儀とは經禮で、禮の大綱をいふのである。聖人が天下を治め萬物を化育する尺度の大綱は凡そ三百條あるといふこと。）○威儀三千（威儀とは曲禮で、即ち禮の細目をいふ。大綱である禮儀は三百とあるが、其の節目は三千あるといふのである。）○凝（鄭註に「成なり」とあり。朱註には「聚なり成なり」とある。）○其人（至德の人をさす。）○至道（萬物を發育し、その高大なること天を極むると、禮儀三百、威儀三千とを包括していふ。）

【餘論】此の一節は聖人の道の大なるを賛嘆し、且つ此の道は必ずその人を待つて行はれることを述べ、徳を修め道を成さんことを望むこと切なるものがある。第二十章の「文武の政、布いて方策に在り。其の人存すれば則ち其の政擧がり、其の人亡すれば卽ち其の政息む。」と同意である。制度法令は如何に立派に整ふとも、人物がなければ道は行はれぬ。人の世のあらん限りは動かぬ格言である。

故君子尊徳性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸、溫故而知新、敦厚以崇禮。

【訓讀】故に君子は徳性を尊んで問學に道り、廣大を致して精微を盡くし、高明を極めて中庸に道り、故きを溫ねて新しきを知り、厚きを敦うして以て禮を崇ぶ。

【通釋】此の一節は徳を修め道を成すの法、換言すれば修養の方法を說いたのである。至徳でなければ至道は成らず。故に君子は徳を修め、道を成すの方法としては、天性の徳を尊敬捧持して之を失はぬやうにすると共に、一方に於ては學問に由つて知識を磨き、廣大を致して心胸を開拓し、彼れ此れの別なからしむると共に、一方に於ては精細微妙を盡くして寸毫の差なからしめ、高明を極めて心を

萬物の表に超然たらしむると共に、一方に於ては日用事物の間に處して中庸により過不及の謬なからしめ、故之を學んで既に熟してゐるものを、復時に之を習うて忘れないやうにすると共に、一方に於ては日にその未だ學ばざる新らしきことを知ることを務め、生得素質の淳厚なるものは愈〻之を敦うすると共に、一方に於ては禮儀を崇びて之を修飾するやうにし、決して一方に偏らず、兩々相待つて修養するのである。溫故と知新とはこれ兩面の工夫を說いたので、論語爲政篇の溫故知新とは自ら意を異にしてゐる。

朱子曰ふ、德性を尊ぶは、心を存して道體の大を極むる所以である。問學に道るは知を致して道體の細を盡す所以である。二者は德を修め道を凝すの大端である。一毫の私意を以て自ら蔽はず(廣大)・一毫の私欲を以て自ら累せず(高明)、其の已に知れる所を涵泳し(溫故)、其の已に能くする所を敦篤する(敦厚)は、此れ皆心を存するの屬である。理を析つときは則ち毫釐の差あらしめず(精微)、事に處しては則ち過不及の謬あらしめず(中庸)、理義は則ち日にその未だ知らざる所を知り(知新)、節文は則ち日にその未だ謹まざる所を謹しむ(崇禮)は、此れ皆知を致すの屬である。蓋し心を存するに非れば、以て知を致すなし、而して心を存する者は、又以て知を致さなければならぬ。故に此の五句

は大小相資け、首尾相應ず。聖賢示す所の德に入るの方、此より詳かなるは莫い。學者宜しく心を盡すがよいと。大體に於て極めて適切の說であるから、その煩を厭はずして之を引いた。

語釋 尊（恭敬捧持の意。） ○德性（我が天から受けた所の本性は卽ち至誠の美德がある。故に之を德性といふ。） ○道（由るである。） ○問學（今の所謂學問である。） ○溫故（鄭註に「溫は燖溫の溫の如し、もと之を學びて熟せるを、復、時に之を習ふを溫といふ」と解してゐる。朱註も亦之れによつてゐる。） ○敦（厚きを加へること。） ○而（四つの而の字は皆上下互に兩立し難いものを結ぶ語。龜井昭陽曰く「反し應ずる者、皆而の字を用ふ」と。） ○以（敦厚は實であつて崇禮は卽ち文である。そこで、以の字は而の字と同意に解さねばならぬ。）

餘論 道は吾人の本性である。然しながら不肖にして之を知らず。故に或は學んで後始めて之を知り、或は困んで後始めて之を知るのである。その修養法に就いて、中庸は二大綱を掲げてゐる。尊德性と道問學とが卽ちこれである。この二大綱はその一を缺いてはならぬ。道問學については第二十章の餘論に於て詳說した。

尊德性の方法としては中庸は愼獨の工夫を擧げてゐる。第一章に、

道也者不レ可ニ須臾離一也　可レ離非レ道也。是故君子戒ニ愼乎其所一レ不レ睹・恐ニ懼乎其所一レ不レ聞。莫レ見ニ乎隱一、莫レ顯ニ乎微一、故君子愼ニ其獨一也。

といひ、又第三十三章に、

知遠之近、知風之自、知微之顯、可與入德矣。詩云、潛雖伏矣、亦孔之昭。故君子內省不疚、無惡於志。君子之所不可及者、其唯人之所不見乎。詩云、相在爾室、尚不愧于屋漏。故君子不動而敬、不言而信。

といふ。愼獨の方法を說くこと極めて親切篤實と云はねばならぬ。即ち之を內外の二方面から說くならば、內は自ら省みて疚しからざること、外は屋漏に愧ぢざることである。此の點に就いては大學に誠意の工夫として愼獨をあげ、自ら欺く勿れ、自ら慊くすべしと說いたのと符節を合はせるがやうである。

是故居上不驕、爲下不倍。國有道、其言足以興、國無道、其默足以容。詩曰、既明且哲、以保其身、其此之謂與。

〔句解〕 是の故に上に居て驕らず、下と爲つて倍かず。國道有れば其の言以て興るに足り、國道無ければ、其の默以て容れらるゝに足る。詩に曰く、既に明且つ哲、以て其の身を保つと。其れ此を之れ

謂ふ與。

通釋 君子の世に於ける、智明かに德熟し施して可ならざるはないのである。故に上に居つては下に對して驕りたかぶる事なく、下となつては上に背く事がない。國に道が行はれてゐる時は、進んで國家の大計を論じ、その言は聽かれ、其の謀は用ひられて、興つて位に上るに十分であり、國に道が行はれて居ないときは、其の才德を韜みて默して言はず、以て吾が身を容れられて、害を受ける事がない事が出來る。詩經の大雅烝民篇に、既に理に明かにして、且つ事に明察であるので、その身を保全して危害を蒙るに及ばないといふのは、それ此れを謂ふのであらうか。

語釋 與（鄭註に興也して位に在るを謂ふとあり、朱註は之によつてゐる。）○詩（大雅烝民の篇。）○明哲（明は理に明かなること。哲は事に察なること。ものしりと讀む。）

餘論 此の一節は德を脩め道を成せる效果について言つたので、論語に、孔子が南容を評して「邦道有れば廢せられず、邦道無きも刑戮を免かれん」といひ、又、蘧伯玉を評して「邦道有れば則ち仕へ、邦道無ければ、則ち卷いて懷にすべし」と。皆此の章の意と同じ。保身は保守的にして禍患なき意ではない。能く吾が身を保護して其の用を善くすることである。たとへば、上として驕り、下と

して倍き、道あるも與す能はず、道なきも容れらるゝ能はざるが如きは聖賢のゆるさゞる所にして、又、吾が心に愧づべきことであつて、其の身は容れらるべきなし。若し禍を免るゝのみの意と解せば道となすことはできない。

右第二十七章

子曰、愚而好自用、賤而好自專、生乎今之世、反古之道。如此者、烖及其身者也。

【訓讀】子曰く、愚にして自ら用ふることを好み、賤にして自ら專にすることを好み、今の世に生れて、古の道に反る。此くの如き者は烖其の身に及ぶ者なり。

【通釋】子曰く、愚にして德がない者は當に己の分を守るべきである。然るに聰明ぶつて自ら用ふることを好み、賤しうして位がない者は當に己の分に安んずべきである。然るに權力をぬすんで自ら專らにすることを好めば、必ず人心に悖るものである。今の世に生れては、今の王の建てた法制風俗に

從はねばならぬ。若し強ひて古の道に反らうとすれば、必ず今の法制風俗に拂るものである。以上の三つの中、一つでも行ふ者は、必ず禍を其の身に受けるものである。

以上は孔子の言であつて、徳と位と時との三者を併せ擧げて、その重んずべきを云つたのである。

語釋 愚（徳なき者。）○賤（位なき者。）○反（復である。かへるである。）○道（法度制作の道。）○烖（禍である。ワザハヒと讀む。）

餘論 愚にして自ら用ふとは下文の位有りて徳無しを起し、賤しうして自ら專にすは下文の徳有り位無しを起し、今に生れ古に反るは下文の杞宋徵せず、吾れは周に從はんを起してゐる。三重を說かうとして先づ此の語を引いて之を起したのである。それ故、物徂徠が反を叛とし、古の道に叛くとして、朱註を反駁した說には從ふことは出來ぬ。これは太田錦城の中庸原解の說であるが、尤の解である。

非天子不議禮、不制度、不考文。今天下車同軌、書同文、行同倫。雖有其位、苟無其德、不敢作禮樂焉。雖有其德、苟無其位、亦不敢作禮樂焉。

訓讀 天子に非ざれば禮を議せず、度を制せず、文を考へず。今天下車、軌を同じうし、書、文を同じうし、行、倫を同じうす。其の位有りと雖も、苟も其の徳無ければ、敢て禮樂を作らず。其の徳有りと雖も、苟も其の位無ければ、亦敢て禮樂を作らず。

通釋 天子でなければ禮儀のことを議論して之を定め種々の制度を作り、文字の聲音點畫を考へ定めてはならぬ。今や天下の車の轍迹の度も同じく、天子制する所の度なほ在り、簡策にのする所の文字も同じく、天子考ふる所の文なほ在り、人々行ふ所の禮儀作法の次第順序も同じく、天子議する所の禮なほ在るのである。そこでたとひ其の位はあつても、其の徳なき者は、愚にして自ら用ひることをして禮樂を作つてはならぬ。又その徳ありとも其の位なきものは、賤にして自ら專にすることをして、敢て禮樂を作つてはならぬものである。

語釋 禮（鄭註に人の履行する所とあり。卽ち禮儀作法である。禮儀三百威儀三千をいふ。）○制度（鄭註に度は國家宮室及び車輿とあり、朱註には品制、くさぐさの制度、とある宮室、車輿等、皆な階限節がある。制は製作の意。動詞として讀むのである）○文（鄭註に書名とあり、朱註之による。文字の聲音のことで、ここでは點畫、卽ち形をも含めていふ。朱子曰く、考文とは古は人甚だ字を識らず、字ちがひ易し、故に毎年一回大行人の役人をして天下を巡行して文字の正と不正とを考へ正さしむと）○軌（車の兩轍迹の中間相去る闊狹の度。）○倫（次第順序。）

餘論 車が軌を同じくし、書が文を同じくし、行が倫を同じくすとは、此の三者は天下を治める

制度の中の大なるものである。車の兩輪の間の度が同じければ車の轍は同じ。國都の道塗や宮室の門庭などは皆、車を容れる多少を以て廣狹の度とするから、此等の制に統一のあることである。文字の聲音を同じくし體を同じくし、禮儀作法の順序を同じくすることは是れ亦天下統一の大なるものである。今とは子思の時であつて、三者同じとは天下一統をいふのである。

子曰、吾說夏禮。杞不足徵也。吾學殷禮。有宋存焉。吾學周禮。今用之。吾從周。

訓讀　子曰く、吾夏の禮を說く。杞、徵するに足らざるなり。吾殷の禮を學ぶ。宋の存する有り。吾周の禮を學ぶ。今之を用ふ。吾は周に從はん。

通釋　子曰く、吾れはよく夏の時の禮制を說くけれども、夏の子孫たる杞の國は存してゐても、より所とすべき確な書物や賢人がないから、之を徵證するに足らない。又、吾は殷の時の禮制を學んで之を知つてゐるけれども殷の子孫たる宋の國は存してゐても、より所とすべき確な書物や賢人がないから之を徵證するに十分でない。吾は周の禮制を學んで之を知る。是れ固より今の世に於て之を

用ひて居るのである。吾は周の禮制に從はう」

此の節は又孔子の言を引いて、孔子の如き德あれども位なく、敢て禮樂を作らずして、當時の禮制に從ふ意を述べたのである。

語釋　杞（國の名。夏の子孫。武王が殷に克つて禹の苗裔を求め東樓公を得て杞に封じ以て禹の祀を奉ぜしめた。）〇徵（證とすること。）〇宋（國の名。殷の子孫。武王、微子を封じて宋公とし、以て湯王の祀を奉ぜしめた。）

餘論　太田錦城の中庸原解には此の文を互文で古文の神妙なるものであるとし、次のやうに解いてゐる。

子曰、（吾說二夏禮一。（有）杞（存焉、）不レ足レ徵也。
吾學二殷禮一、有二宋存一焉、（不レ足レ徵也）。

右のやうに解釋すれば、論語の八佾篇の子曰、夏禮吾能言レ之、杞不レ足レ徵也。殷禮吾能言レ之、宋不レ足レ徵也。文獻不レ足故也。足則吾能徵レ之矣。と意義が一致するので、よい解釋といはねばならぬ。

此の章は上章の下と爲つて倍かずを承けて言うたので、亦、人道である。

右第二十八章

王天下有三重焉。其寡過乎。上焉者雖善無徵。無徵不信。不信民弗從。下焉者雖善不尊。不尊不信。不信民弗從。

訓讀 天下に王たるに三重あり。其れ過寡からん乎。上なる者は善なりと雖も徵なし。徵なければ信ぜず。信ぜざれば民從がはず。下なる者は善なりと雖も尊からず。尊からざれば信ぜず。信ぜざれば民從はず。

通釋 天下に王たるには三ケ條の重んずべきものがある。卽ち位と德と時とである。聖人の大寶を位といふ。位は王者の重んずべき一である。天下治平の本は德にある。德は勿論王者の重んずべき一である。王者の禮を制して民に臨むにその時の宜しきに適はねばならぬ。時も亦王者の重んずべき一である。此の三者を重んじたならば、天下の王としてその過は寡いであらう。上代の夏や殷の時の禮制は善いことは卽ち善いけれども、その子孫の國である杞や宋の國の書物や賢人が之を證するに足るものがない。既に徵證がないとすれば、民は之を疑うて信ぜず、信じなければ、民は之に從はないのである。卽ち昔のものでは今の世の役には立たぬのである。時の重んずべきはこれでも分るであ

らう。下たる者、即ち聖德あつて下位に在るものは、その德に善きものがあつても、其の位が尊くない。位が尊くなければ、民は輕んじて之を信じない。信じなければ、民は之に從はないのである。位の重んずべきは之れでも分るであらう。德と位と時との三重は相待つて功用をなすものである。

語釋　三重（三ケ條の頗重大の事。伊藤仁齋曰く、「德と位と時とをいふ」と。德あるものは貴、位あるものは尊、時に適するものは必ず徵あり、故に徂徠は三重を尊・貴・徵ともいつてゐる。三重には諸說がある。その重なるものをいへば、一、鄭註には三王の禮といふ。二、呂藍田は議禮・制度・考文の三とす。朱子は之によつてゐる。三、蔡氏は德と位と徵とを擧げてゐる。四、龜井昭陽は、位、德、制作といふ。諸說皆一理はあるが、今は前の文義を考へて仁齋の說に從うた。毛奇齡曰く、「三重を鄭註に三王の禮といふは固より誤れり。然れども議禮等の五事を以つて當れば、官府の制作（制度）と保氏の書教（考文）と、皆周禮の六官の中にあり。焉んぞ議禮と對して三たるを得ん。且つ禮の外に又樂あり、樂を加ふれば四重とならん。此の說も亦當らず。唐の陸德明の釋文によれば、德本、德・位・時を訓して三重となすものありと。此の說理に近きに似たり云々」。（大意をあぐ）　○寡過（天子自身の過少かるべきをいふ。呂氏の說に惟天子のみ禮を議し、度を制し、文を考ふれば、國は政を異にせず家々俗を殊にせず、天下の人民過寡からんと解するは誤である。）　○上焉者（朱註に時王以前をいふとし、夏殷時代を指すと解せり。鄭註には君をいふとあり。上なる者を君とすれば、下なる者を臣と見ることが出來るのでその點に於ては極めて都合がよいけれども、次の文の「雖善無徵」の句を解するのに無理が生ずるから、今之に從はぬ。）　○下焉者（朱註に聖人下に在るをいふとあり。）

故君子之道、本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不繆、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑。質諸鬼神而無疑、知天也。百世以俟聖人而不惑、知人也。

通釋　故に君子の道は諸を身に本づけ、諸を庶民に徵し、諸を三王に考へて繆らず、諸を天地に建

て、悖らず、諸を鬼神に質して疑ひ無く、百世以て聖人を俟つて惑はず。諸を鬼神に質して疑ひなきは天を知るなり。百世以て聖人を俟つて惑はざる人を知るなり。

通釋 故に天下に王たる君子の道は、之を君主の一身に本づけて其の德あり、之を庶民に施して、其の信じ從ふを徵驗し、其の時に適するを見る。位と德と時と兼ね備はりて亦遺憾なし。故に之を古の夏・殷・周三代の王に考ふるもその行ふ所、古の行事の迹に謬り差ふことなく、之を天地の間に立てゝ、天地に參するも、天地自然の道と悖戾ることがない。既に天地の道と悖らず、故に之を鬼神に質し考へてみても疑ひなく、既に夏・殷・周三代の先聖王に謬らず、故に百世の下、以て聖人の出現を待つも惑ふことがない。所謂聖人復た起るとも必ず吾が言を易へざるものである。之を鬼神に質して疑ひなきは天を知るといふべく、百世の下、以て後の聖人の出現を待つも惑ふことなく、吾が制作以外に別に建立すること能はず、これは人を知るといふべきである。

語釋 三王（夏・殷・周三代の聖王。）○繆（謬と同じアヤマリと讀む。）○建（朱註に立なり、此に立つて彼に參ずるなりとあり。天地と並び立つて、天地と參ずる意。徂徠曰く「三王は往時なり、故に考ふといひ、天地は現在なり、故に建つといふ」と。）○繆、悖、疑、惑（朱子曰く、三王は迹を以ていふものなり、故に謬らずといふ。其の已に行ふ者の差ふ所なきなり。天地は道を以て言ふ者なり、故に悖らずといふ。其の自然と拂る所なきなり。鬼神は無形にして知り難し、故に疑なしといふ、幽にして以て明に驗あるなり。後聖は未だ至らずして料り難し。故に惑はずといふ。遠にして以て近に驗あるなりと。）

餘論　朱子曰く、天を知り・人を知るを說くに、只後聖と鬼神とをあげて言へども、其の實は天地・鬼神・三王・後聖と總括したものであると、尤の說であると思ふ

是故君子動而世爲天下道、行而世爲天下法、言而世爲天下則。遠之則有望。近之則不厭。詩曰、在彼無惡、在此無射。庶幾夙夜、以永終譽。君子未有不如此而蚤有譽於天下者也。

訓讀　是の故に君子は動いて世〻天下の道と爲り、行つて世〻天下の法と爲り、言つて世〻天下の則と爲る。之に遠ければ則ち望むあり。之に近ければ則ち厭はず。詩に曰く、彼に在つて惡むなく、此に在つて射ふなし。庶幾はくは夙夜、以て永く譽を終へんと。君子は未だ此の如くならずして蚤く天下に譽有る者あらざるなり。

通釋　この故に在位の君子は動いては世〻天下の道となり、その行は世〻天下の法となり、其の言は世〻天下の則となる。若し民がかゝる君子に遠ければ、民之を望みて思慕愛敬すること深く、民がかゝる君子に近ければ、民之を厭はずして愛着して止むことが無い。詩經の周頌振鷺の篇に曰く、彼

方の遠きに在つては悪むことなくして思慕し、此方の近きに在つては射ひ厭ふことなし、庶幾はくは、夙に夜に勉めて怠らず．以て永く名譽を保つて以て終はらんと。凡そ君子未だ此の如く、思慕愛着されることなくして、早く譽を天下に博するものはないのである。

【語釋】斁（朱註に曰く、斁は言行を兼ねていふ。）○道（朱註に曰く、道は法則を兼ねていふ。）○詩（詩經の周頌振鷺の篇。）○射（厭ふである。）○如レ此（伊藤仁齋曰く、悪むなく、射ふなきを指して言ふと、朱註に諸を身に本づく以下の六事を指すといふは當らない。）

【餘論】此の章は上章の上に居て驕らざるを承けて言ふ。亦人道である。

右第二十九章

仲尼祖述堯舜、憲章文武。上律天時、下襲水土。辟如天地之無不持載、無不覆幬、辟如四時之錯行、如日月之代明。萬物並行而不相害、道並行而不相悖。小德川流、大德敦化。此天地之所以爲大也。

【通釋】仲尼、堯舜を祖述し、文武を憲章す。上天の時に律り、下水土に襲る。辟へば天地の持載せ

ざる無く、覆幬せざる無きが如し。辟へば四時の錯行するが如く、日月の代明するが如し。萬物並び行はれて相害せず。道並び行はれて相悖らず。小德は川流し、大德は敦化す。此れ天地の大なる所以なり。

通釋 仲尼は古の帝堯帝舜の道を祖として之をたつとび、之を述べて敷衍し、周の文王武王の法を憲とし仰いで、之を彰明し、上は天の自然の運行、四時の變化に則り、下は水土の一定の理に由り、卽ち天地の道を遵奉して居られるのである。其の道は古今を貫き、天地を該ねてゐる。そこで仲尼の德の偉大なることは、譬へば地が物を載せないことはなく、天が物を覆はないものはない如く、總てを遺すことなく、又譬へば春夏秋冬の四時が交る交る運行するが如く、又譬へば日と月とが代る代る晝夜を照らすが如く已むことがないのである。天は覆ひ、地は載せ、萬物は天と地との間に相並びて生々發育して互に相害はず、春夏秋冬の四時の運行、日と月との代る代る明かに照すこと、道並び行はれて互に相悖らない。その相害はず、相悖らない故は、小德燦然として川の流れて各〻流脈があつて分明なるが如くなる爲であり、並び育し並び行はれる故は、大德渾然として化育が遺憾なく行はれるが爲である。此れ天地の大なる所以で、卽ち仲尼の偉大なる所以である。

語釋 仲尼（孔子の字。）○祖述（祖として之を述修すること。遠く其の道を宗とすること。祖は祖尓の祖、述は遵行する意。）○堯舜（古の二聖帝の名。）○憲章（憲として之を章明する。近く其の法を守ること。憲は法である。）○文武（周の文王と武王父子。）○律（法である。）○襲（因である。龜井昭陽曰く、先考曰く、此れ其の天地の道を遵奉するをいふなり、武と土と詞を用ふ、詞を修めて是の如きのみ、千古の卓見と謂ふべしと。如何にも名説である。諸家の説紛々皆取るに足らぬ。）○覆幬（幬も亦覆ふである。）○錯行（錯はタガヒである。春夏秋冬の四時が、交る交る運行すること。）○代明（晝は日が之を照し、夜は月が之を照すこと。）○川流（川が流れて各流脈があつて分明なるが如きをいふ。）○敦化（敦く化する。全體として化育が遺憾なく行はれること。呂藍田曰く、禮儀三百、威儀三千、此れ小德の川流する所以であり、洋々乎として萬物を發育し大なること天を極める、此れ大德の敦化する所以であると。胡炳文曰く、小德川流は是れ其の燦然たるものなり、大德敦化は是れ其の渾然たるものなりと。）

餘論 第二十七章大哉聖人の道より以下、暗に其の意を含んで述べ來つたが、此の章に至つて明かに仲尼の二字を點じ、仲尼が堯舜文武の道を繼ぐの大聖人なることを論じ、之より以下篇末に至るまで備に夫子の德の盛なるを云つてゐる。その孔子を尊崇すること至れり盡せりであつて、殆んど孔子を呼んで神とせんとするものである。此の章は天道を言つたものである。

右第三十章

唯天下至聖、爲能聰明睿知、足以有臨也、寛裕溫柔、足以有容也、發强剛毅、足以有執也、齊莊中立、足以有敬也、文理密察、足以有別也。

訓讀　唯天下の至聖、能く聰明睿知にして、以て臨む有るに足り、寬裕溫柔にして以て容るゝに足り、發強剛毅にして以て執る有るに足り、齊莊中正にして以て敬する有るに足り、文理密察にして以て別つ有るに足ると爲す。

通釋　たゞ天下の至聖なる者のみが、能く聰明睿知の知德があつて、以て下人民に君として臨むに足り、寬裕溫柔の仁德があつて以て人民を包容するに足り、發強剛毅、屈すべからざる勇德があつて、以て執り守るところを奪ふ可からざるものあるに足り、齊莊中正の威儀ある禮德があつて以て敬するあるに足り、文理密察なる美德があつて以て事の宜しきを辨別するに足るのである。

語釋　聰明睿知（聰は耳さとし、明は目明かなり、睿はふかし、書經に思ふを睿と曰ひ、睿を聖と作すとある。聰明睿知は知德である。易に曰く、知臨す、大君の宜しきなり吉と。朱註に生知の質といふは當つてゐない。）○臨（朱註に上に居て下に臨むをいふとあり。）○寬裕溫柔（寬は寬大、裕はゆるし、溫はおだやか、柔はやさし、仁德である。）○發強剛毅（發は奮發の發、强るである。剛毅は强くして屈すべからざること、屈詘、大節に臨んで奪ふ可からざるもので、勇德である。朱註に義德とするは當つてゐない。）○齊莊中正（齊は齊戒の齊、莊は莊敬、樂記に中正無邪は禮の質なりとある。禮德である。）○文理密察（文は文章である、理は條理である、密は詳細、察は明辨、義德である。朱註に之を知るの德といふのは當つてゐない。）

餘論　文理密察は義德と解すべきである。禮記の禮器篇に義理は禮の文なりといひ、孔子家語には

水を論じて卑下傍拘必ず其の理に循ふ此れ義に似たりといひ、易經には精義神に入るといひ、書經には義を以て事を制すというてゐる。文理密察を義に配することは一々根據がある說である。朱註に知の德といふのは當つてゐない。文體を以て考へても、五德は同じやうに說いてあるのを、朱子のやうに聰明睿知を生知の質といひ、總論と見て他の四を四德に配して各論と見るは當らぬと思ふ。そこでこゝには伊藤仁齋、龜井昭陽の說に從つて說いたのである。

溥博淵泉而時出之。溥博如天、淵泉如淵。見而民莫不敬、言而民莫不信、行而民莫不說。

【訓讀】溥博淵泉にして時に之を出す。溥博は天の如く、淵泉は淵の如し。見はれて民敬せざるは莫く、言つて民信ぜざるは莫く、行つて民說ばざるは莫し。

【通釋】此の知仁勇禮義の五德が聖人の胸中に充實し、溥博にして周徧廣大を極め、淵の靜深にして測り知るべからず、泉の本ありて混々として盡きざるが如く、而して時に臨み折にふれて外に出現して阻塞なく窮盡するところがないのであるが、その溥博なることは恰も天が物として如何なる物をも

覆はざるなきが如く、その淵泉なることはさながら淵の水が流れて盡きざるが如くなるので、その現はるゝや民皆尊敬せざるはなく、言へば民之を信ぜざるはなく、卽ち天下の則となり、行へば民之を悅ばざるなく、卽ち天下の法となるのである

語釋　溥博（溥は普と同じ。孔穎達は溥は周徧ならざるなきをいひ、博は及ぶ所廣遠なるをいふと解し、朱註は之を約して周徧而廣濶といふ。）○淵泉（朱註に靜深にして本あるなりといひ、仁齋はこれを敷衍して、深うして測るべからざる之を淵といひ、本あつてやまざる之を泉といふと解してゐる。心に涵畜するところを以ていふ。）○時出之（朱註に出は發見なり、五つの德、中に充積して時を以て外に發見するなりとある。）

是以聲名洋溢乎中國、施及蠻貊、舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月所照、霜露所隊、凡有血氣者、莫不尊親。故曰配天。

訓讀　是を以て聲名中國に洋溢し、施いて蠻貊に及び、舟車の至る所、人力の通ずる所、天の覆ふ所、地の載する所、日月の照す所、霜露の墜つる所、凡そ血氣ある者、尊親せざるなし。故に曰く、天に配すと。

通釋　是を以てかゝる聖人の名聲は中國に滿ち溢れ、施いては四方の夷狄までにも及び、凡そ舟や車で行かれる所、人力の通ずべき所、天が覆うてゐる限り、地が萬物を載せてゐる所の限り、日と月

との照す所、霜や露の隊つる所、凡そ血あり肉ある者は皆此の聖人を尊び、親愛しない者はないのである。

それ故にかゝる聖人の德の廣大なることは天が宇宙間の一物をも覆はないことがないと同じであるから、天と並べ配して之を同樣に尊ぶといふのである。

語釋 聲名（名聲と同じ。聲は名である。）○中國（支那をいふ。四方の夷狄蠻貊に對して己が國を中國といふ。）○洋溢（洋々と流動して溢れる。）○蠻貊（四方の夷狄をいふ。）○隊（墜と同じおつる。）○血氣（血肉と同じ。）○尊親（尊んで之を親しむ。）○配天（配は匹偶の意。配天は天と並べて之を同樣に尊ぶこと。）

餘論 舟車の至る所より以下は思ふに之を極言したものであるが、孔子の至聖なる、その聲名の宇內に洋々として流れて溢れること、實に此の文に言ふ所の如きものがある。上章を承けて小德の川流することをいふ。亦天道である。

右第三十一章

唯天下至誠、爲能經綸天下之大經、立天下之大本、知天地之化育。夫焉

有レ所レ倚。肫肫其仁。淵淵其淵。浩浩其天。苟不下固聰明聖知達中天德上者、其孰能知レ之。

訓讀 唯ゝ天下の至誠、能く天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地の化育を知ると爲す。夫れ焉んぞ倚る所あらん。肫肫たる其の仁、淵淵たる其の淵、浩浩たる其の天。苟も固に聰明聖知にして天德に達する者にあらずんば、其れ孰か能く之を知らん。

通釋 たゞ天下の至誠なるものゝみ、能く天下の大經、卽ち五倫の道に於て其の當然の極致を盡し、之を經綸し治めて夫れ夫れ條理あり一定して亂れず、又、兩々相和合して戾らないやうにし、以て天下萬世の法と爲し、よく天下の大本、卽ち中の德を打立てゝ天下の千變萬化、皆これより出づる所の天下の表準となり、よく天地が萬物を生々化育するのを知つて之と默契するのである。夫れかくの如くなれば、いづくんぞ一方に偏倚しかたよつて公平を失ふことがあらうや。肫々と懇至なる其の仁德よく大經を經綸し、淵々と靜深なるその淵德よく大本を立て、浩々と廣大なるその天德よく化育を知りて之を助けるのである。苟も實に聰明聖知にして天德に達する聖人でなければ、それ誰かよく此の

至誠の域を知ることが出來よう。

語釋 經綸（朱註に經綸は皆絲を治むる事、經は逐條、糸の頭緒を理めて其の緒を分ち、綸は其の類を比して之を合はすこと縷を吖するごとしとあり。陳北日く、君は是れ君、臣は是れ臣、父は是れ父、子は是れ子、兄は是れ兄、弟は是れ弟、夫は是れ夫、婦は是れ婦なるが如き、各々條理あり、一定して亂れず、故に經といひ、君臣の相敬し、父子の相親しみ、夫婦の相倡和し兄弟の相友睦し、朋友の相切磋琢磨するが如き、その倫なるを縈比し、自然に相合す、故に綸といふと。）○大經（經は常である。大經は五倫卽ち君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友の五達道をさす。和也者天下之達道也を指すとしてもよい。說は上に述べた。）○大本（中をいふ。上文に中也者天下之大本也とある。至誠の人はよく中德があつて、天下の表準たる意である。朱子曰く、經綸は是れ用であり、立本は是れ體であり、大本を立つるは卽ち是れ此の中庸の道を盡すのであると。極めて明瞭である。鄭註に大經を春秋、大本を孝經とするは誤である。）○知（朱註に天下の化育に於て默契するあるをいふ。ただ聞見の知のみに非ざるなりとある。上章には天地の化育を贊くとあり、ここには化育を知るとあり、胡炳文曰く、贊とは至誠の功、造化に補あり、知とは至誠の心、天地と間なきなりと。）○焉有所倚（龜井昭陽曰く、卽ち中立して倚らずの謂、中庸の中たる此に在り、一語緊要である。朱云く豈に物に倚著する所あつて後能くせんやと。按ずるに殊に一句の氣象を失ふと。今龜井昭陽の說をとつた。）○肫々（鄭註には懇誠の貌といひ、朱註には一字を變じて懇至の貌、經綸を以ていふとあり。）○淵淵（朱註に靜深なる貌、立本を以ていふとあり。）○淵淵（朱註に廣大なる貌、化を知るを以ていふとある。上章に溥博天の如く、淵泉淵の如しとあり、此の章には直ちに其の淵其の天といふ、故に朱註には之を解し其の淵其の天は則ちたゞに之の如きのみにあらずといふ。肫肫、淵淵、浩浩は其の盛なるを形容したのである。）○固（マコトニと讀む。）○聰明聖知（上章には聰明睿知とあり意義は同じ。）

餘論 朱子曰く、此の章は上章を承けて大德の敦化を言つたので、亦天道である。前章には至聖の德を言ひ、此の章には至誠の道を言つてゐる。然しながら、至誠の道は至聖でなければ知ることが出來ず、至聖の德は至誠でなければ爲すことは出來ぬ。至聖卽ち至誠で、二物ではないのである。中庸に聖人天道の極致を言ふ。此に至つて加ふることは無いと。至聖は概して德の外に施すものに就いて言ひ、至誠は概して德の中に存するものについていふ。至聖と至誠とは表裏の分である。二物では

ない。

右第三十二章

詩曰、衣錦尚絅。惡其文之著也。故君子之道、闇然而日章、小人之道、的然而日亡。君子之道、淡而不厭、簡而文、溫而理。知遠之近、知風之自、知微之顯、可與入德矣。

【訓讀】詩に曰く、錦を衣て絅を尚ふと。其の文の著はるゝを惡むなり。故に君子の道は、闇然として日に章かに、小人の道は的然として日に亡ぶ。君子の道は淡にして厭はず、簡にして文、溫にして理なり。遠きの近きを知り、風の自るを知り、微の顯なるを知らば、與に德に入る可し。

【通釋】詩經の衞風碩人の篇にいふやう、錦の衣を著て、其の上に麻の粗布の打掛けを加へると。其の意味は錦のきらびやかなる文采が外に著はるゝを惡むから打掛けを錦の衣の上に加へるのである。故に君子の道もこれと同じく、絅を加へるやうに謙遜であるから、表面から見れば、闇然として暗い

けれども、たとへば錦を衣るがやうに、德が內に充實してゐるので、日に日に章明となる。小人は之に反して、務めてそれ程でもない德を外に暴露せんとするが故に、始めは的然と明かであるが、根柢がないので日に日にその消がはげてなくなる。君子の道は淡泊であるが、いつまでも厭かない、簡單であるが、却つてその文采の見るべきものがあり、溫和であるが、その條理あつて亂れないものである。遠き彼方に見はるゝは近き此方に本づく所があることを知り、外に流風の傳はるのは、內その身に出ることを知り、微なるより顯はるゝはなく、中に誠があれば必ず外に形はるゝことを知るものは則ち愼しむべき所を知つて、與に共に相携へて德に入ることが出來るものである。

語釋　詩（詩經衞風碩人の篇、及び鄭風丰の篇。）○衣錦尙絅（詩經には錦を衣て褧衣すとあるが、此には文を變じて絅を尙ぶとしたのである。尙は加へること。絅も褧も同じく單衣（ヒトヘギヌ）である。所謂打掛である。麻の粗布にて作つたものである。）○的然（分明なること。）○淡而不厭（淡白にして而も厭はれない。濃厚なるものは味大に美なるが如くにして而も飽き易いものである。）○簡而文（簡易にして而も文采があること。複雜なるは反つて目まぐるしいものである。）○溫而理（溫和にして而も條理があること。朱註に曰く淡・簡・溫は絅が外に加はつたのである。不厭・文・理は錦の美が中に在るのであると。）○遠之近（彼方の遠きに見はるるは此方の近きに本づくこと。朱子曰く、己を以て物に對していふ。彼れ他人に在るの是非は我れに在るの得失に由るを知る。）○風之自（朱註には外に著るる者は內に本づくなりとある。其の身の得失は心の邪正に由るを知る。風の字は一身に就いていふ。風度、風采の風の意である。仁齋曰く、流風の傳その身によるなりと。）○微之顯（朱註には諸を內に有るものは諸を外に形はるるなりとある。仁齋曰く、事の微小なる必ず、顯然に至るなりと。上の文に隱れたるより見はるるは莫く、微なるより顯なるはなしと同意である。）

餘論　葉知道曰く、上三章は孔子天を體するの德と至聖至誠の功用とを極言す。中庸の道至れり。

盡せり。子思、又、學者高遠に馳せて下學の功夫を忘れ、或は其の指歸を失はんことを慮り、故に此の章、復た下學心を立つるの始、内を務め至つて親切なるものより之を言ひて以て漸く上達高妙至精至微の地に進むと。

詩云、潛雖伏矣、亦孔之昭。故君子內省不疚、無惡於志。君子之所不可及者、其唯人之所不見乎。

訓讀 詩に云く、潛りて伏すと雖も、亦孔だ之れ昭かなりと。故に君子は内に省みて疚からず、志に惡むなし。君子の及ぶ可からざる所の者は、其れ唯〻人の見ざる所か。

通釋 詩經の小雅正月の篇に云く、潛りて伏してゐても、亦甚だ明かであると。詩の意味は隱れたるより見はるるはなく、微なるより顯なるはなきを述べたものである。それ故に君子たる者は内心に自省して疚しいことがなく、良心に愧づることがないだけの修養をするのである。さうすれば其の心泰然として自得し心に愧づるところなし。君子たる者のすぐれてゐて他人が及び難い所は、それたゞ人の見もせず知つてもゐない所に於て、よく獨を愼み敢て怠らない點であらう。

此の一節は上文を承けて君子愼獨のことを云つたのである。

語釋 詩（詩經小雅正月の篇。）○孔（甚と同じ）○昭（明である。）○疚（心がなやむ。氣がとがめる。）○無惡於志（心に愧づることがないといふ意。）

詩云、相在爾室、尙不愧于屋漏。故君子不動而敬、不言而信。

訓讀 詩に云く、爾の室に在るを相るに尙はくは屋漏に愧ぢざらんと。故に君子は動かずして敬し、言はずして信なり。

通釋 詩經の大雅抑の篇に曰く、汝が室に在り獨り居るのを見るに、庶幾はくは、屋漏即ち室の西北の隅で他人の見ぬ所に於ても惡事を爲さぬ故、良心に愧づる樣なことはないやうにありたいと戒めてゐる。此の詩の意はその睹ざる所を戒愼し、その聞かざる所を恐懼することを述べたものである。それ故に君子たる者は、動いて事に應じ、物に接するを待つて始めて敬せず、その未だ應接せざるの前に於て既に敬し、言を發するを待つて後信ならず、その未だ言を發せざるの前に於て既に信である。此の一節は君子たる者が己を爲むるの功夫愈〻密なるを言つたのである。以下詩を引いて論ずる所は皆その效能を言つたものである。

【語釋】詩（詩經大雅抑の篇。）○相（視るである。）○屋漏（室の西北隅で中霤（チユウリウ）の神を祀る所。家の内で尤も奥深い所、轉じて人の見ぬ所。）

詩曰、奏假無言、時靡有爭。是故君子不賞而民勸、不怒而民威於鈇鉞。

【訓讀】詩に曰く、假を奏して言ふ無し、時に爭ふこと有る靡しと。是の故に君子は賞せずして民勸み、怒らずして民鈇鉞より威る。

【通釋】詩經の商頌烈祖の篇に曰く、太樂を宗廟の中に奏して神をまつるとき、人皆神明に感格し肅しみ敬ひて、一言を發するものは無いけれども、人皆感化して相爭ふ者がないと。詩の意は、誠敬の極は言はずして人自ら化することを言つたものである。是の故に獨を愼しみ誠を致した君子の德は自ら民を感化して、賞せずとも民は勸みはげみて善を爲し、怒らずとも、民は鈇鉞の罪を受くるよりも恐れて惡を爲すことはない。敬信によつて中和の德を致し、之を漸熟して成德の域に至れば、民は賞せずして勸み、怒らずして威るゝに至るのである。

此の一節は誠の國家に及ぼす效果を言つたものである。

【語釋】詩（詩經の商頌烈祖の篇。）○奏假無言（鄭註に曰く、假は大である。大樂を宗廟の中に奏して人皆肅敬し、金聲玉色、言ふものあるなしと。朱註には奏は進で、假は格と同じ、進んで神明に感格するの際、その誠敬を極めて言說あるなしと解

してゐるが、鄭註に従ふがよい。）　○鈇鉞（朱註には鈇は莝斫刀（マグサキリ）で、鉞は斧であると。禮記の王制篇に諸侯鈇鉞を賜ひて然る後に殺すとあり。）

詩曰、不顯惟德、百辟其刑之。是故君子篤恭而天下平。

【訓讀】詩に曰く、顯はれざらんや惟れ德、百辟其れ之に刑ると、是の故に君子は篤恭にして天下平かなり。

【通釋】詩經の周頌烈文の篇に曰く、深遠なる德は遂には顯はれないことがあらうや。その德が外に表はれて諸侯が之れに法ると。是の故に天下に王たるの君子（天子）は篤恭にして、之を振りまはさないけれども民自らその德に化して天下も平かとなる。此の一節は誠の天下に及ぶことを云つたのである。

【語釋】詩（詩經周頌烈文の篇）　○不顯（豈に顯はれざらんやの意。反語である。既に第二十六章に見えてゐる。）　○百辟（辟は君である。百君、即ち諸侯。）　○刑（法と る。）　○篤恭（篤は厚、篤恭は眞の恭敬であつて、之を振りまはして恭敬らしくせぬこと。）

詩云、予懷明德、不大聲以色。子曰、聲色之於以化民、末也。詩云、德輶如毛。毛猶有倫。上天之載、無聲無臭。至矣。

訓讀 詩に云く、予明徳を懐ひ、聲と色とを大にせずと。子曰く、聲色の以て民を化するに於けるは末なりと。詩に云く、徳の輶きことは毛の如しと。毛は猶ほ倫あり。上天の載は聲もなく臭も無し、至れり。

通釋 詩經の大雅皇矣の篇に曰く。予は明徳を懐うて民を化するのみであつて、聲を大にし、色を厲しくすることはないと。いかにもその通りである。それ故に孔子も聲を大にし、色を厲しくするのは、民を化するに就ては抑も末である。徳を以て感化せしめねばならぬとのべられたのである。又、詩經の大雅烝民の篇に曰く、徳の輕きことは毛のやうであると。その意は徳を以て民を化することは甚だ容易であつて、譬へば輕い毛を舉げるやうなものであると。然し毛は輕いけれども・なほ物に比べることができる。大雅文王の詩に言ふ所の、上天のことは聲もなく臭も無しといふこそ、實に聖人が徳を以て民を化するに、音聲もなく臭氣もなくして、民自ら化することを形容して至れり盡せりといふべきである。

語釋 詩（此の一節には詩を引くこと凡そ三ケ所あり。第一の詩は大雅皇矣の篇。第二の詩は大雅烝民の篇。第三は詩云の語はないが、上天之載云々の一句は大雅文王の篇である。）○大聲以色（聲を大にし、色を厲しくすること。厲の字は略してあるのである。以は與と同じ。）○輶（輕である。）○倫（比である。）○載（事である。）

【餘論】此の一節は至誠天に配するを説いたのである。上天の載は聲も無く臭も無しは正しく論語の「天何をか言はんや、四時行はれ、百物生ず、天何をか言はんや。」とその意を一にするものである。學者の宜しく熟讀體驗すべき所である。

此の一節には第一に詩を引き、孔子の言を借りて之を論じ、第二に詩を引いて、作者自ら「毛猶有レ倫」の一句を置いて之を評論し、次に又詩の句を借り、遂に「至矣」の句を以て斷定した。此の一節中では作者自身の文は「毛猶有レ倫」と「至矣」との文字のみである。

右第三十三章。子思因前章極致之言、反求其本、復自下學爲己謹獨之事、推而言之、以馴致乎篤恭而天下平之盛。又贊其妙、至於無聲無臭而後已焉。蓋擧一篇之要、而約言之。其反復丁寧示人之意、至深切矣。學者其可不盡心乎。

【通釋】右第三十三章。子思前章極致の言に因つて、其の本を反求し、復た下學己が爲にし獨を

謹むの事より、推して之を言ひ、以て篤恭にして天下平かなるの盛を馴致す。又其の妙を賛して無聲無臭に至つて、後已む。蓋し一篇の要を擧げて之を約言す。其の反復丁寧人に示すの意至つて深切なり。學者其れ心を盡さざる可けんや。

【通釋】右第三十三章である。子思が前章の極致の言によつて其の本を反求し、また下學己が爲めにし獨を愼しむのことから、之を推して之を言ひ、以て篤恭にして天下が平かになるといふ盛事にまで自然遷り及んだのである。その妙用を贊美して遂に無聲無臭に至つて後をはつてゐる。蓋し此の章は中庸全篇の要旨を擧げて之を約言したものである。その反覆丁寧に人に示すの意、至つて深く且つ切なるものである。之を學ぶ者はそれ心を盡さないでをられようや。

中庸新釋　終

昭和四年四月十七日印刷
昭和四年四月二十日發行

第三回配本

【非賣品】

昭和漢文叢書

孝經新釋
大學新釋
中庸新釋

不許複製

著作者　鹽谷溫
著作者　諸橋轍次
著作者　宇野哲人

東京市神田區北神保町十一番地
發行者　辻本卯藏

東京市神田區今川小路二丁目二番地
印刷者　森輝

發行所
東京市神田區北神保町十一番地
弘道館
振替東京八一五番　電話九段一三六八番

印刷所　山縣製本印刷株式會社

山石田浩
藏書


為漢文叢
書劉生仿

